兵庫県文化財調査報告　第 480 冊

豊岡市

上佐野 1 号墳

－一般国道 483 号北近畿豊岡自動車道八鹿豊岡南道路に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成 28(2016) 年 3 月

兵庫県教育委員会

上佐野1号墳

兵庫県文化財調査報告　第480冊　平成28年3月

兵庫県教育委員会

27教Ⓣ1－014A4

豊岡市

かみさのいちごうふん

上佐野１号墳

－　一般国道 483 号北近畿豊岡自動車道八鹿豊岡南道路に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　－

平成 28（2016）年３月

兵庫県教育委員会

上佐野１号墳全景　南から

上佐野１号墳全景　北から

巻首図版 2

石室全景　南から

石室東壁　北西から

墳丘横断面　南から

墳丘西側断面　南から

墳丘東側断面　南から

巻首図版 4

線刻 1

線刻 6

線刻 2

線刻 3

線刻 5

巻首図版 6

出土土器集合

例　言

1　本書は、豊岡市上佐野に所在する上佐野１号墳の発掘調査報告書である。

2　本調査は、一般国道４８３号北近畿豊岡自動車道八鹿豊岡南道路に伴うもので、国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。

3　調査の推移

（発掘作業）

確認調査　　平成 23 年７月４日～平成 23 年８月 12 日

実施機関：兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部

本発掘調査　平成 24 年６月 13 日～平成 24 年 12 月 25 日

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

工事請負：有限会社スサノ

（出土品整理作業）

平成 26 年５月 20 日～平成 27 年３月 20 日

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

平成 27 年６月１日～平成 28 年３月 22 日

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

4　本書の編集・執筆は、仁尾一人による発案、宮田麻子の補助のもと、第４章を除いて、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部　山田清朝が担当した。

第４章は、上佐野１号墳出土須恵器・土師器の蛍光Ｘ線分析を三辻利一に、上佐野１号墳出土石材付着赤色顔料の蛍光Ｘ線分析を公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部岡本一秀に依頼し、玉稿をいただいたものである。

5　本調査において出土した遺物や作成した写真･図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。

6　空中写真測量は、株式会社　パスコに委託して行った。

7　調査成果の測量は、電子基準点兵庫日高・久美浜・香住の３点を基に、調査地に３級基準点を設置して行った。座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第Ｖ系に属する。

8　本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準（Ｔ．Ｐ．）を基準とした。

9　遺物写真撮影は、地域文化財研究所に委託して行った。

発掘調査及び報告書の作成にあたっては、以下の方々から御教示・御指導をいただいた。記して感謝の意を表するものである。

潮崎　誠・加賀見省一・前岡孝彰・松井敬代・戸田真美子・櫃本誠一・春成秀爾・瀬戸谷晧・仁尾一人・山根壬生子

目　次

第１章　上佐野１号墳
　第１節　地理的環境 …… 1
　第２節　歴史的環境…… 4
第２章　調査の経緯
　第１節　確認調査…… 8
　第２節　本発掘調査…… 11
　第３節　整理作業…… 14
第３章　調査の成果
　第１節　概要…… 15
　第２節　墳丘・埋葬施設…… 17
　第３節　遺物…… 34
　第４節　線刻…… 70
第４章　分析・鑑定
　第１節　上佐野１号墳出土須恵器、土師器の蛍光Ｘ線分析 …… 77
　第２節　上佐野１号墳出土石材付着赤色顔料の蛍光Ｘ線分析 …… 86
第５章　遺物のまとめ
　第１節　土器 …… 89
　第２節　金属製品・玉類 …… 98
第６章　上佐野１号墳のまとめ
　第１節　石室 …… 99
　第２節　総括 …… 105

報告書抄録 …… 106

巻首図版目次

巻首図版１
　上佐野1号墳全景　南から
　上佐野1号墳全景　北から
巻首図版２
　石室全景　南から
　石室東壁　北西から
巻首図版３
　墳丘横断面　南から
　墳丘西側断面　南から
　墳丘東側断面　南から
巻首図版４
　線刻１　　線刻６
巻首図版５
　線刻２　　線刻３　　線刻５
巻首図版６
　出土土器集合

挿 図 目 次

第１図　豊岡市の位置…… vii
第２図　豊岡盆地全景　南西から…… 1
第３図　豊岡市の地理的位置…… 1
第４図　旧豊岡市の地理的位置…… 2
第５図　上佐野付近の円山川…… 3
第６図　上佐野の谷と但馬空港　東上空から… 3
第７図　上佐野の谷近景　東から…… 3
第８図　主要周辺遺跡…… 4
第９図　確認調査位置…… 8
第10図　調査前の上佐野1号墳　南東から …… 9
第11図　調査前の上佐野1号墳　北から …… 9
第12図　墳丘北側平坦地…… 9
第13図　工事と調査範囲…… 10
第14図　上佐野1号墳付近の工事 …… 11
第15図　上佐野1号墳周辺縦断面 …… 11
第16図　北近畿自動車道…… 12
第17図　櫃本誠一氏による調査指導…… 13
第18図　春成秀爾氏による現地指導…… 13
第19図　現地説明会…… 13
第20図　拓本の採拓…… 14
第21図　遺物実測図のトレース…… 14
第22図　調査前のカット面　東から…… 15
第23図　天井石露出状況　北から…… 15
第24図　上佐野1号墳調査前現況 …… 16
第25図　表土掘削作業　東から…… 17
第26図　表土掘削作業　南から…… 17
第27図　表土掘削作業　北から…… 17
第28図　墳丘測量図…… 18
第29図　墳丘縦断面…… 19
第30図　墳丘盛土の撤去　北から…… 19
第31図　墓壙の検出　北から…… 19
第32図　上佐野1号墳築造前造成状況 …… 20
第33図　墳丘北側縦断面…… 21
第34図　墳丘西側横断面…… 22
第35図　墳丘東側横断面…… 23
第36図　列石検出位置…… 24
第37図　周溝の検出…… 25
第38図　列石…… 25
第39図　開口部と周溝の検出…… 25
第40図　周溝横断面…… 26
第41図　南西側周溝の検出…… 27
第42図　周溝内閉塞石転石状況…… 27
第43図　上佐野1号墳と平坦地 …… 28
第44図　天井石の撤去…… 28
第45図　石室内の検出…… 28
第46図　西側壁の検出…… 29

第47図　東側壁の実測…… 29
第48図　石室平面図(天井石) …… 30
第49図　石室平面図・立面図…… 31
第50図　袖部の検出…… 32
第51図　羨道の検出…… 32
第52図　羨道内の石…… 32
第53図　開口部の実測…… 33
第54図　開口部側壁…… 33
第55図　開口部横断面…… 33
第56図　玄室内土器の検出…… 34
第57図　石室内遺物出土位置…… 35
第58図　玄室内出土土器(1)　…… 36
第59図　玄室内出土土器(2)　…… 37
第60図　羨道部出土土器(1)　…… 38
第61図　開口部・周溝　土器出土位置…… 39
第62図　開口部付近土器出土状況…… 40
第63図　開口部付近周溝内出土土器(1)　…… 41
第64図　開口部付近周溝内出土土器(2)　…… 42
第65図　周溝南西部土器出土状況…… 44
第66図　周溝内南西部出土土器(1)　…… 46
第67図　周溝内南西部出土土器(2)　…… 47
第68図　墳丘東側出土土器…… 48
第69図　出土金属製品(1)　…… 53
第70図　出土金属製品(2)　…… 54
第71図　出土金属製品(3)　…… 55
第72図　出土金属製品(4)　…… 58
第73図　出土金属製品(5)　…… 59
第74図　玄室内出土丸玉(1)　…… 60
第75図　玄室内出土丸玉(2)　…… 61
第76図　玄室内出土丸玉(3)　…… 62
第77図　玄室内出土丸玉(4)　…… 63
第78図　玄室内出土丸玉(5)　…… 64
第79図　線刻確認石材…… 70
第80図　線刻１・３　拓影…… 71
第81図　線刻２・４・５　拓影…… 72
第82図　線刻６・７　拓影…… 73
第83図　線刻８　拓影…… 74
第84図　線刻９・10　拓影…… 75
第85図　線刻１…… 76
第86図　上佐野1号墳出土須恵器の
K-Ca、Rb-Sr分布図　… 81
第87図　岡田１、３号窯出土須恵器の
K-Ca、Rb-Sr分布図　… 82
第88図　在地産と推定される須恵器の
K-Ca、Rb-Sr相関図　… 83
第89図　在地産ではないと推定される
須恵器のK-Ca、Rb-Sr相関図　… 84
第90図　岡田１、３号窯出土須恵器の
K-Ca、Rb-Sr相関図　… 85
第91図　天井石１…… 87
第92図　サンプル採取状況…… 87
第93図　天井石２…… 87
第94図　サンプル採取状況…… 87
第95図　スペクトル図…… 88
第96図　上佐野1号墳出土須恵器の分類(1) …… 90
第97図　上佐野1号墳出土須恵器の分類(2) …… 91
第98図　地区別出土土器(1)　…… 92・93
第99図　地区別出土土器(2)　…… 94・95
第100図　但馬における竪穴系横口式石室の分布
…… 99
第101図　築造過程の復元(1) …… 103
第102図　築造過程の復元(2) …… 104

表　目　次

第１表　主要周辺遺跡…… 5
第２表　出土土器観察表(1) …… 48・49
第３表　出土土器観察表(2) …… 50・51
第４表　出土丸玉一覧(1) …… 65
第５表　出土丸玉一覧(2) …… 66
第６表　出土丸玉一覧(3) …… 67
第７表　出土丸玉一覧(4) …… 68
第８表　出土丸玉一覧(5) …… 69
第９表　上佐野１号墳出土土器の分析データ… 80
第 10 表　分析試料 …… 87
第 11 表　分析値 …… 87
第 12 表　但馬における竪穴系横口式石室
…… 100・101

写真図版目次

写真図版１　上佐野１号墳
　墳丘　調査前(南から)
　墳丘　調査前(南東から)
　墳丘　調査前(北から)
写真図版２　上佐野１号墳
　天井石確認状況(西から)
　天井石確認状況(南東から)
　天井石確認状況(北東から)
写真図版３　上佐野１号墳
　墳丘検出状況(北から)
　墳丘検出状況(南から)
　墳丘検出状況(南西から)
写真図版４　上佐野１号墳
　天井石検出状況(南から)
　天井石検出状況(西から)
　天井石検出状況(北東から)
　天井石検出状況(南東から)
写真図版５　上佐野１号墳
　石室上部　天井石除去後(南から)
　石室上部　天井石除去後(北西から)
写真図版６　上佐野１号墳
　羨道部天井石検出状況(南から)
　羨道部天井石検出状況(南東から)
写真図版７　上佐野１号墳
　羨道部天井石検出状況(西から)
　羨道部天井石検出状況(南から)
写真図版８　上佐野１号墳
　周溝内　閉塞石検出状況(南から)
　周溝内　閉塞石検出状況(北から)
写真図版９　上佐野１号墳
　周溝内　閉塞石検出状況(東から)
　周溝内　閉塞石検出状況(西から)
写真図版 10　上佐野１号墳
　墳丘南西部周溝土器出土状況(南西から)
　墳丘南西部周溝土器出土状況(西から)
写真図版 11　上佐野１号墳
　墳丘南西部周溝土器出土状況(南東から)
　墳丘南西部周溝土器出土状況(南西から)
写真図版 12　上佐野１号墳
　墳丘全景(南から)
　墳丘全景(北から)
　墳丘全景(東から)
写真図版 13　上佐野１号墳
　石室検出状況(南から)
　石室検出状況(北から)
写真図版 14　上佐野１号墳
　天井石検出状況(南から)
　天井石下面(北から)
　天井石と右側壁(北西から)
　天井石と左側壁(北東から)

写真図版15　上佐野1号墳
奥壁全景(南から)
石室北西隅(南東から)
石室北東隅(南西から)
写真図版16　上佐野1号墳
西側壁全景(南東から)
西側壁全景(北東から)
写真図版17　上佐野1号墳
西側壁全景(西から)
西側壁北半(南東から)
西側壁南半(北から)
西側壁中央部下側(東から)
写真図版18　上佐野1号墳
東側壁全景(西から)
東側壁全景(南西から)
東側壁近景(南西から)
東側壁南半(北西から)
写真図版19　上佐野1号墳
開口部全景(南から)
開口部近景(南から)
開口部近景(北から)
写真図版20　上佐野1号墳
開口部全景(南東から)
玄室側から見た開口部(北から)
開口部付近土器出土状況（南から)
写真図版21　上佐野1号墳
開口部西側壁全景(南東から)
開口部東側壁全景(南西から)
写真図版22　上佐野1号墳
開口部と閉塞石(南から)
玄室側からみた閉塞石(北から)
閉塞石俯瞰(西から)
写真図版23　上佐野1号墳
東側壁袖部(西から)
東側壁袖部　立柱石(北西から)
写真図版24　上佐野1号墳
玄室内遺物出土状況(南から)
写真図版25　上佐野1号墳
玄室内遺物出土状況(西から)
玄室内遺物出土状況(東から)
玄室内奥壁付近遺物出土状況(東から)
写真図版26　上佐野1号墳
玄室内北東隅遺物出土状況(南から)
玄室内北東隅遺物出土状況(西から)
玄室内中央部東側壁付近隅遺物出土状況
(西から)
写真図版27　上佐野1号墳
玄室内鉄刀出土状況(西から)
玄室内鉄刀出土状況(北から)
玄室内耳環出土状況(南から)
写真図版28　上佐野1号墳
羨道内土器出土状況(北から)
羨道内土器出土状況(南から)
玄室内18・19・23・25・27～29出土状況
(東から)
玄室内20～22・24・26出土状況(北西から)
写真図版29　上佐野1号墳
墳内列石検出状況(南東から)
南側列石(東から)
北側列石(北東から)
写真図版30　上佐野1号墳
墳丘断割り状況(北から)
墳丘南北断面(西から)
墳丘北側断面(西から)
写真図版31　上佐野1号墳
基底石検出状況(南から)
開口部・羨道部基底石検出状況(西から)
写真図版32　上佐野1号墳
石室掘り方検出状況(南から)
石室掘り方基底部横断面(西から)
写真図版33　出土遺物
石室内出土土器(1～9)
写真図版34　出土遺物
石室内出土土器(10～14・16・17)
写真図版35　出土遺物
羨道内出土土器(18～23・25～28)
写真図版36　出土遺物
羨道部出土土器(29～31)

開口部出土土器(32・34 ～ 37・39)
写真図版37　出土遺物
開口部出土土器(40 ～ 51)
写真図版38　出土遺物
開口部出土土器(52 ～ 61)
写真図版39　出土遺物
開口部出土土器(62 ～ 64・66)
写真図版40　出土遺物
開口部出土土器(67 ～ 69)
墳丘南西部出土土器(70 ～ 74)
写真図版41　出土遺物
墳丘南西部出土土器(75 ～ 83・85)
写真図版42　出土遺物
墳丘南西部出土土器
(84・86・88・90・91・93・94)
写真図版43　出土遺物
墳丘南西部出土土器(95 ～ 97・99)
石室上層出土土器(102)
写真図版44　出土遺物
玄室内出土金属製品(Ｍ１)
写真図版45　出土遺物
玄室内出土金属製品(Ｍ２～Ｍ６)
写真図版46　出土遺物
玄室内出土金属製品(Ｍ７～Ｍ28)
写真図版47　出土遺物
玄室内出土金属製品(Ｍ29 ～Ｍ38)
写真図版48　出土遺物
玄室内出土土製丸玉(Ｊ１～Ｊ72)
写真図版49　出土遺物
玄室内出土土製丸玉(Ｊ73 ～Ｊ144)
写真図版50　出土遺物
玄室内出土土製丸玉(Ｊ145 ～Ｊ221)
写真図版51　出土遺物
玄室内出土土製丸玉(Ｊ222 ～Ｊ298)
写真図版52　出土遺物
玄室内出土土製丸玉(Ｊ299 ～Ｊ370)

第１図　豊岡市の位置

第１章　上佐野1号墳

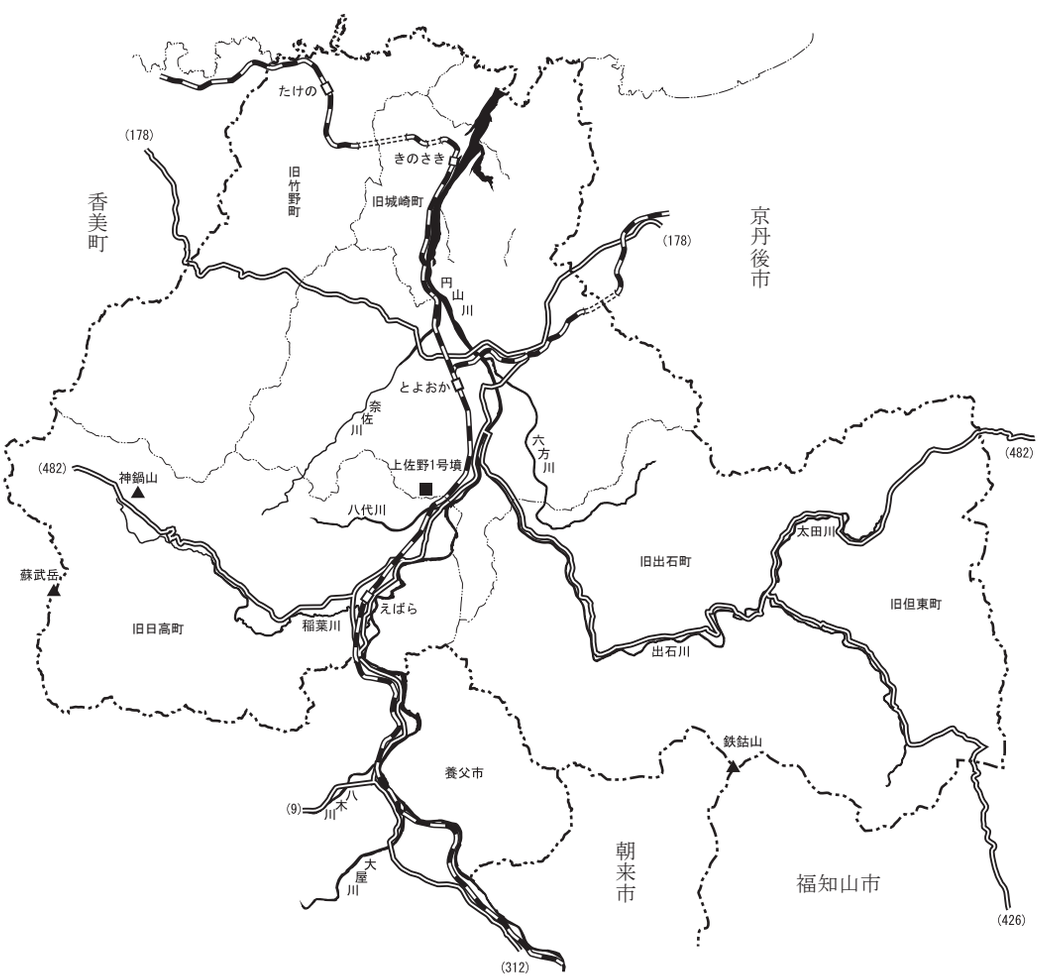
第１節　地理的環境

１．上佐野1号墳の地理的位置

上佐野１号墳は、豊岡市上佐野に所在する。豊岡市は、兵庫県の北部、いわゆる但馬地域にあたり、この但馬地域のなかでも北部にあたる地域である(第１図)。南側は養父市と、西側は美方郡香美町と、東側を京都府京丹後市と、それぞれ境をなしている(第３図)。また、北側は日本海に面している。市域は、南北で約28.5㎞、東西で約36㎞と東西に長く、その面積は697.66㎢と、兵庫県下では最大規模をほこる。

現在の豊岡市は、平成17年４月１日に、いわゆる平成の大合併により、旧豊岡市と出石郡出

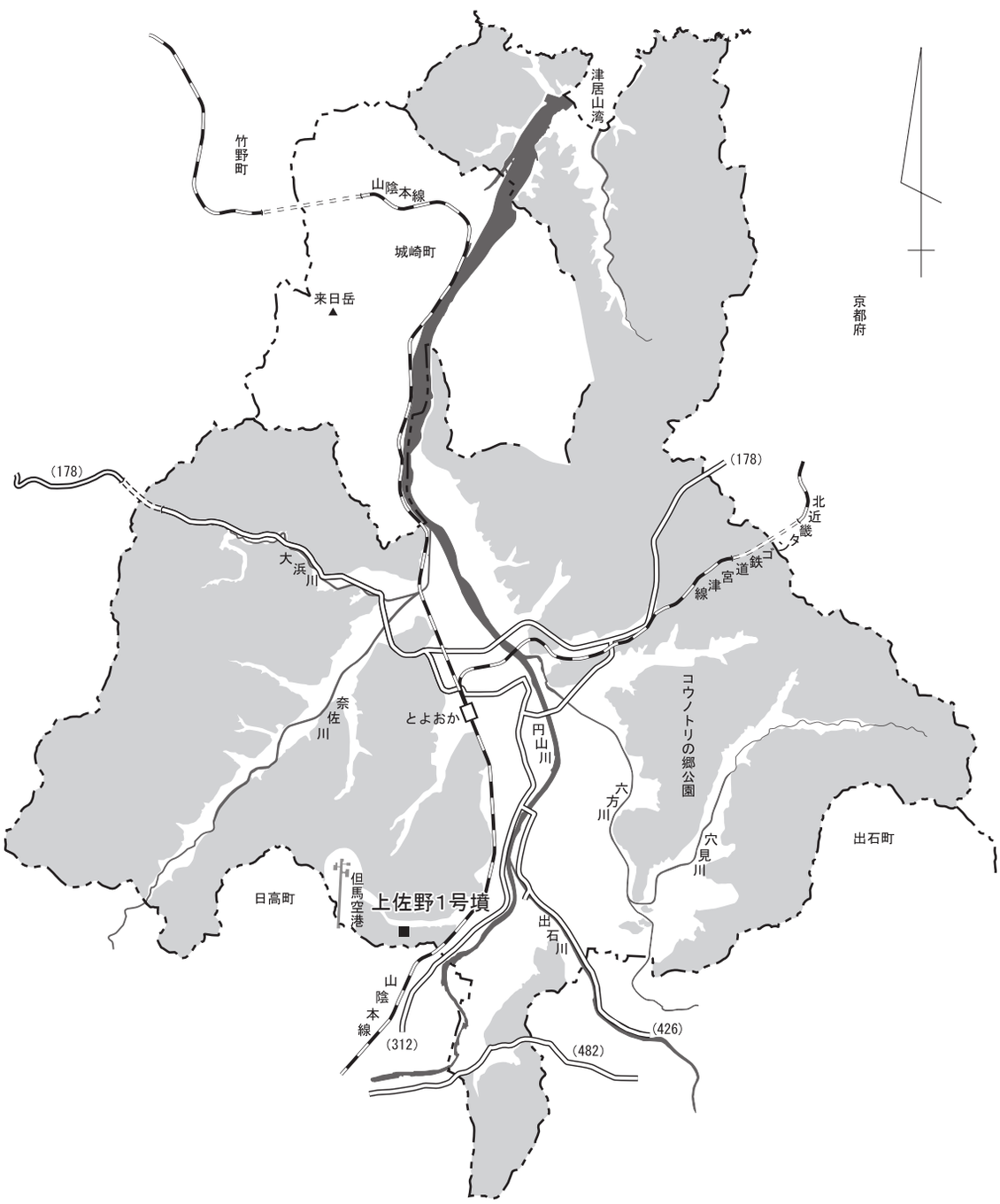
第２図　豊岡盆地全景　南西から



第３図　豊岡市の地理的位置

石町・同但東町・城崎郡城崎町・同日高町、同竹野町が合併し、新たに形成された市である(第３図)。このなかで、上佐野１号墳の所在地は、旧の豊岡市にあたる（第４図）。旧の豊岡市のなかでは、南端部にあたる。合併後の豊岡市の人口は、平成27年４月末現在85000人である。

豊岡市は、現在においては但馬地域における最大の都市で、当該地域の中核をなしている。平成６年には、コウノトリ但馬空港が開港し、空路における但馬地域への玄関口となっている。また、京都と山陰を結ぶJR山陰本線が通り、近畿地方から山陰地方への入り口となっている。さらに、山陰から丹後と日本海沿岸を横断する国道178号線がとおり、豊岡と宮津・西舞鶴を結ぶ京都丹後鉄道の西側の起点となっており、日本海沿岸における交通の要衝となっている(第４図)。



第４図　旧豊岡市の地理的位置

２．上佐野1号墳の地形的位置

豊岡市は、山地と盆地からなり、北側は日本海に面している。山地が地域の大半を占めるが、市域の中央部を円山川が流れている(第５図)。円山川は、朝来市生野町円山を源とし、養父市を経て、豊岡市津居山で日本海へと注いでいる。上流域では与布土川・糸井川・大屋川・八木川と、中流域では田路川・神子畑川と、下流域では稲葉川・八代川・出石川・六方川・奈佐川・大浜川と合流している(第４図)。全長67㎞を測り、流域面積は1300㎢におよぶ。また、但馬地域では唯一の一級河川である。

豊岡市は円山川の下流域にあたり、三日月形をなす盆地が形成されている(第２図)。南北で約12㎞、東西で約２㎞を測る。この盆地を中心に形成されたのが、旧豊岡市である。旧豊岡市の東部は、円山川を中心に盆地が開けている。この盆地を中心に、いくつかの小谷が開けている。その一つが、上佐野地域に開けた谷である(第７図)。盆地南半の西側に位置し、円山川左岸に開けた東西方向にのびる谷である。谷奥までの距離が円山川から約２㎞と、わずかである。ちなみに、この谷の西端の丘陵頂部に但馬空港が所在する(第６図)。

この谷の南北両側には山塊があるが、この山塊から谷に向かっていくつかの、小尾根がのびている。この小尾根の１つに、上佐野１号墳が立地している。谷の南側に位置する尾根で、円山川から約1.5㎞西側の地点である。

第５図　上佐野付近の円山川

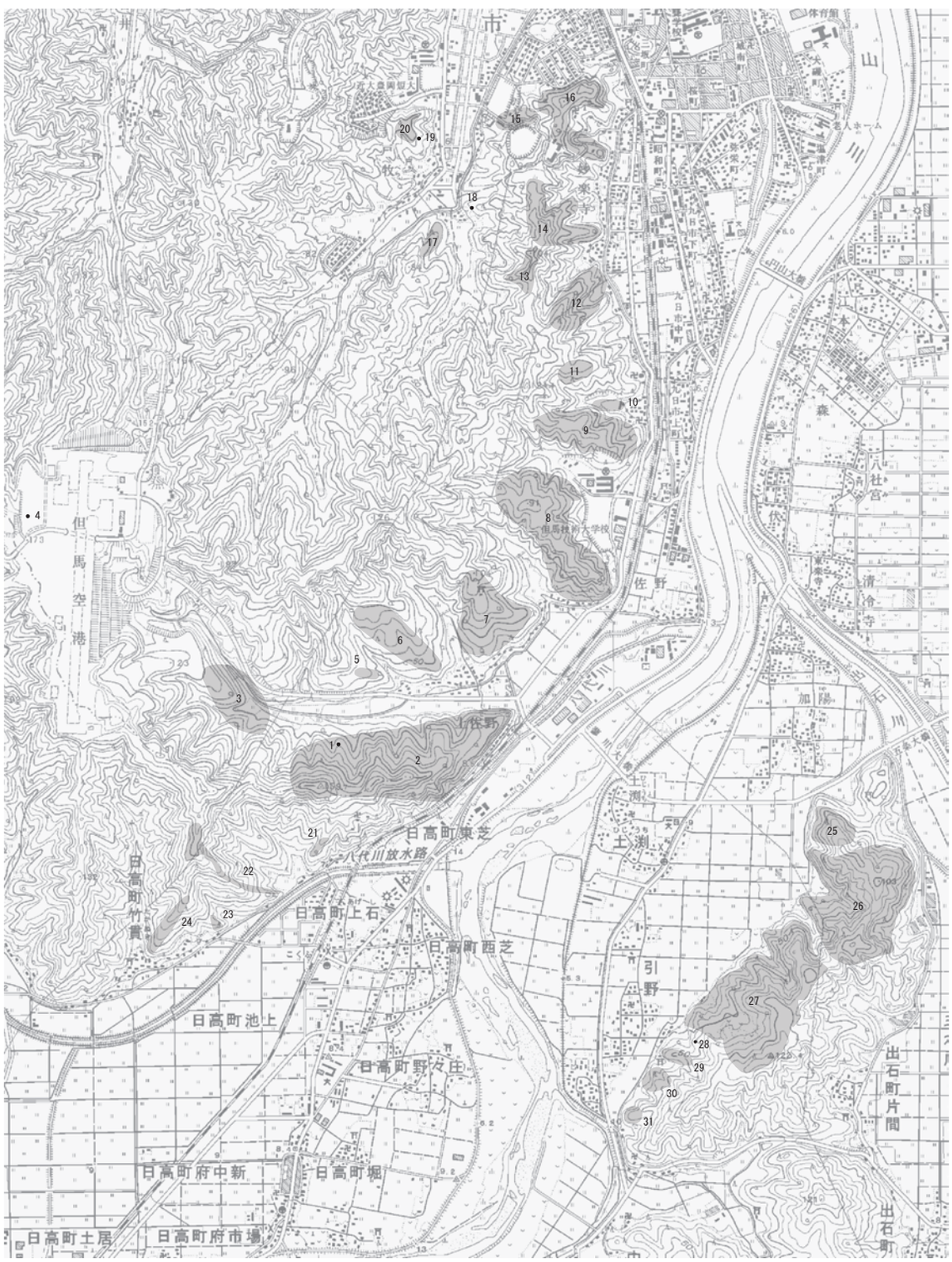
第６図　上佐野の谷と但馬空港　東上空から

第７図　上佐野の谷近景　東から

第２節　歴史的環境

１．はじめに

本節では、上佐野1号墳を中心とした地域の古墳を対象にまとめていくことにする(第８図・第１表)。豊岡盆地南西部を縁どる丘陵一帯が主な対象地である。当該地域は、豊岡市のなかでも最も密度の高い古墳集中地帯と言われている。ここでは、調査が行われた古墳を中心にまとめていくことにする。



第８図　主要周辺遺跡

第１表　主要周辺遺跡

No.	遺　跡　名	兵庫県遺跡番号	所　在　地	備　考
1	上佐野１号墳		豊岡市上佐野	埋葬施設は石室
2	ホーキ古墳群	102695 ～ 102793・ 102824 ～ 102891	豊岡市上佐野～日高町上石	ホーキ古墳（前方後円墳）を含む
3	上佐野古墳群	102794 ～ 102821	豊岡市上佐野	石室墳
4	岩井城下層古墳	100191	豊岡市岩井	
5	長尾谷古墳群	102689 ～ 102691	豊岡市上佐野	低平な墳丘
6	広峰古墳群	102158・102159・ 102692 ～ 102694	豊岡市上佐野	1 号墳・2 号墳：不明瞭な墳丘
7	雷神社古墳群	102358 ～ 102418	豊岡市佐野	
8	勝妙寺谷古墳群	101858 ～ 101878・ 102165 ～ 102355	豊岡市九日市上町	
9	西光寺谷古墳群	101796 ～ 101857	豊岡市九日市上町	
10	西光寺谷横穴墓群	101879 ～ 101881	豊岡市九日市上町	
11	乞食谷古墳群	101793 ～ 101795	豊岡市九日市中町	
12	耕地谷古墳群	101661 ～ 101667・ 101791	豊岡市九日市下町	
13	大谷山頂古墳群	101649 ～ 101660	豊岡市妙楽寺	
14	見手山古墳群 妙楽寺・大谷古墳群	101550 ～ 101554・ 101636 ～ 101648	豊岡市妙楽寺	見手山古墳（前方後円墳）を含む
15	七ツ塚址古墳群	101445 ～ 101454	豊岡市正法寺	
16	文教府裏古墳	101458	豊岡市妙楽寺	
17	マムシ谷古墳群	101545 ～ 101548	豊岡市戸牧	
18	百町古墳	101549	豊岡市戸牧	
19	高塚古墳	101444	豊岡市戸牧	
20	上大深古墳群	101441 ～ 101443	豊岡市戸牧	
21	コズ古墳群	611052 ～ 611052	豊岡市日高町上石	
22	森谷古墳群	611027 ～ 611049	豊岡市日高町上石	
23	森谷西古墳群	611093 ～ 611096	豊岡市日高町竹貫	
24	イカイ谷古墳群	611016 ～ 611026	豊岡市日高町竹貫	
25	清水古墳群	102944 ～ 102965・ 103242 ～ 103253	豊岡市加陽	
26	草山古墳群	103295 ～ 103303	豊岡市加陽	
27	宮谷古墳群・大師山古墳群	103341 ～ 103506・ 103601 ～ 103689	豊岡市加陽・引野	
28	山田古墳	103562	豊岡市引野	
29	梅佐伎神社古墳群	103563 ～ 103565	豊岡市引野	
30	梅ヶ坂古墳群	103566 ～ 103573	豊岡市引野	
31	須賀神社古墳群	103574 ～ 103576	豊岡市中郷	

２．上佐野1号墳について

まず、上佐野1号墳(１)と上佐野古墳群(３)とに関係について明らかにしておきたい。今回報告する上佐野1号墳はホーキ古墳群内に位置する。ところが、兵庫県遺跡地図においては、上佐野古墳群は、ホーキ古墳群(２)の北西側に位置付けられている。そして、上佐野古墳群内に上佐野1号墳(兵庫県遺跡番号：102794)が周知されている。しかし、今回報告する上佐野1号墳はこれとは明らかに位置が異なる。今後、整理が必要と考えられる。

３．前期の古墳

当該期の古墳としては、耕地谷古墳群で２基、調査で明らかとなっている[1]。複数の木棺墓を埋葬主体とするいわゆる台状墓である。出土土器から、古墳時代前期に位置付けられるものである。

４．中期の古墳

岩井城下層古墳(４)・戸牧上大深古墳群(20)・七ツ塚址古墳群(15)が明らかとなっている。

岩井城下層古墳は木棺直葬墳で、土師器の短頸壺が出土している。５世紀前半に位置付けられている[2]。上佐野1号墳が所在する谷の奥の山頂部にあたり、当地の古墳を考えるうえで注目される。

戸牧上大深古墳群については、１号墳について調査が行われ、５世紀前半の木棺を埋葬主体とする古墳であることが明らかとなっている[3]。

七ツ塚址古墳群は、約10基からなる古墳群である。木棺直葬を主体とし、５世紀代が主体と位置付けられている[4]。

５．後期の古墳

まず、上佐野１号墳が所在する一帯は、ホーキ古墳群として周知されている。前方後円墳であるホーキ古墳の他、166基からなる古墳群として周知されている。ちなみに、この数に上佐野１号墳は含まれていない。

上佐野１号墳と同じ谷に面し、同じ山塊に位置するのが上佐野古墳群である。28基からなる古墳群である。調査は行われていないが、石室を埋葬施設としている。

見手山古墳群(14)は、横穴式石室を埋葬施設とする前方後円墳である見手山古墳と、４基の円墳(見手山１号墳～４号墳)からなる。いずれも発掘調査が行われ、見手山古墳の石室内からは須恵器や鉄鉾・鉄製刀子・鉄鏃・滑石製紡錘車・土玉・碧玉製管玉などが出土している[5]。石室内から出土した土器から、６世紀後半と考えられる。また、６号墳は、木棺直葬を埋葬主体とするもので、須恵器(甕・瓶・杯・壺・瓿)や鉄鏃が出土している。６世紀中頃と考えられる[6]。

また、見手山１号墳は竪穴系横口式石室を埋葬施設とし、６世紀中頃に位置付けられている[7]。上佐野1号墳との関連で注目される古墳である。

大師山古墳群(27)は、88基からなる古墳群であるが、部分的な調査を含めて８基について調査が行われている。1基が竪穴式石室を埋葬施設としていたが、５基(９号墳～11号墳・13号墳・15号墳)については竪穴系横口式石室を埋葬施設としていた[8]。時期は、15号墳を除いては６世紀後半に位置付けられている。この他、５号墳については、６世紀前半～中頃と位置付けられている[9]。上佐野1号墳との関連で大変注目される古墳群である。

西光寺谷古墳群は、62基からなる古墳群である。このうち、３基について調査が行われ、木棺直葬墳であることが明らかとなっている。出土土器から６世紀前半に位置付けられている[10]。

〔註〕

⑴ 上田健太郎『耕地谷古墳群・耕地谷城跡－国道426号交通円滑化事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－』兵庫県教育委員会　2010

⑵ 藤田　淳『岩井城跡－但馬空港建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』兵庫県教育委員会　1994

⑶ 谷本由美・宮村良雄・瀬戸谷晧「戸牧上大深１号墳発掘調査概要報告－1997年度民間開発事業にかかる埋蔵文化財発掘調査－」『とよおか発掘情報　第３号』豊岡市出土文化財管理センター　1997

⑷ 瀬戸谷晧『見手山古墳群発掘調査概要－再調査の記録－』豊岡市教育委員会　1983

⑸ 瀬戸谷晧「付載Ⅰ　見手山古墳発掘調査概要」『但馬・妙楽寺遺跡群』豊岡市教育委員会　1975

⑹ 櫃本誠一他『但馬・妙楽寺遺跡群』豊岡市教育委員会　1975

⑺ 前掲⑷

⑻ 潮崎　誠「豊岡市引野・大師山古墳群発掘調査概要」『豊岡市文化財調査概報集　1985年度』豊岡市教育委員会　1986

潮崎　誠「特異な構造の石室群－大師山古墳群の調査から－」『歴史と神戸』144　神戸史学会 1987

⑼ 潮崎　誠「竪穴系横口式石室」『古代但馬の地域間交流』豊岡公民館・郷土資料館　1990

⑽ 前掲⑷

第２章　調査の経緯

第１節　確認調査

１．はじめに

上佐野1号墳については、残存状況が大変良好であった(第10図～第12図)。このため、確認調査を要することなく、墳丘の存在を確認することができた。ただし、同じ尾根筋に、埋没した墳丘が存在する可能性も考えられたため、上佐野1号墳周囲を対象とした確認調査を実施した。確認調査は、平成23年度に行われた。

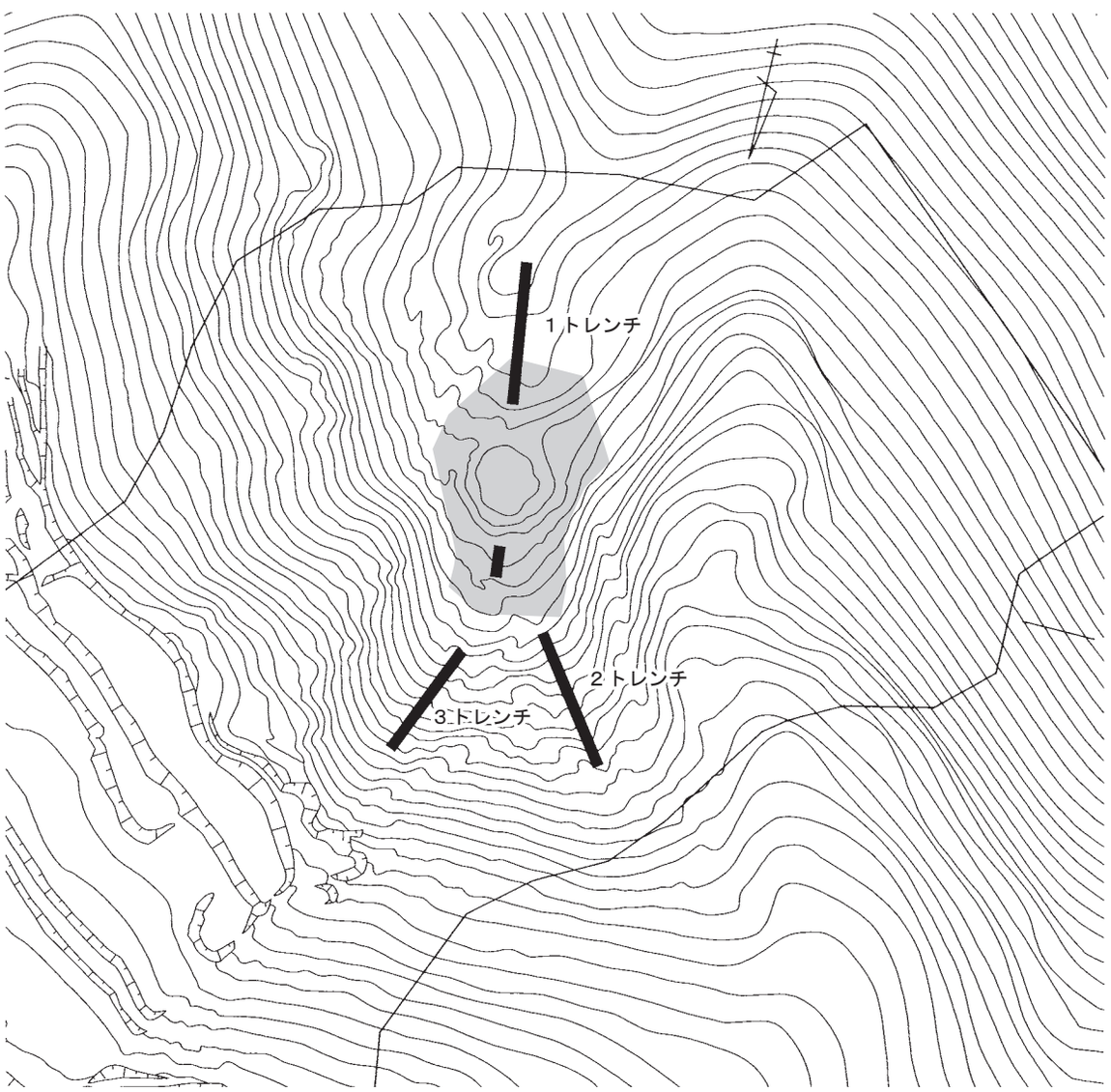
２．調査の概要

各年度の調査内容・体制等は以下の通りである。

調査番号　2011246

調査期間　平成23年７月４日～平成23年８月12日

調査面積　51㎡



第９図　確認調査位置

調査体制　調　査　員　兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部　山田清朝

調査概要　幅１ｍのトレンチを３箇所(１トレンチ～３トレンチ)に設定し、確認調査を行った(第９図)。調査地は、いずれも尾根上にあたるため、すべて人力により進めていった。

１トレンチは、上佐野1号墳を中心に、その上側から墳丘北側の平坦地にかけて、40ｍの長さを設定した。当初、１トレンチは、墳丘自体についても掘削を予定するものであった。しかし、墳丘が明らかであることから、掘削は行わなかった。このため、上佐野1号墳の山側(南側)と墳丘北側の平坦地を対象に調査を行った。

結果として、14m分調査を行った。特に、墳丘北側の平坦地については、古墳と関連する平坦面であるのかどうかについての確認を行った。

２トレンチは、上佐野1号墳の北西側の尾根状地形をなす地点に設定したトレンチである。20ｍの長さを掘削した。３トレンチは、２トレンチの東側に設定したトレンチである。２トレンチ同様、尾根状をなす地点に17ｍの長さを設定し、調査を行った。

調査の結果、いずれのトレンチにおいても、遺物を確認することはできず、古墳の存在も確認することはできなかった。

また、上佐野1号墳北側の平坦地についても、上佐野1号墳との直接的な関係を見出すことはできなかった。

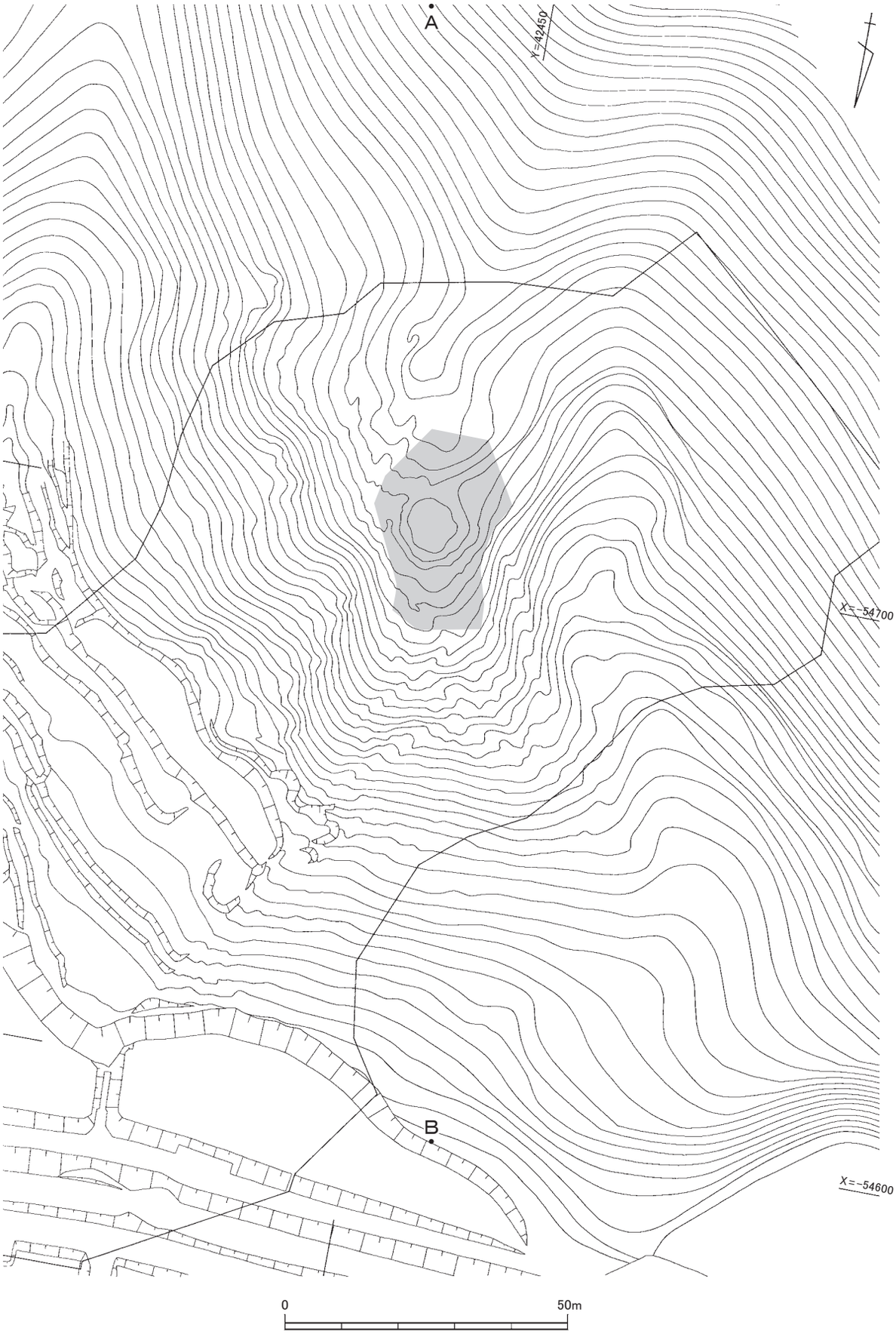
第 10 図　調査前の上佐野１号墳　南東から

第 11 図　調査前の上佐野１号墳　北から

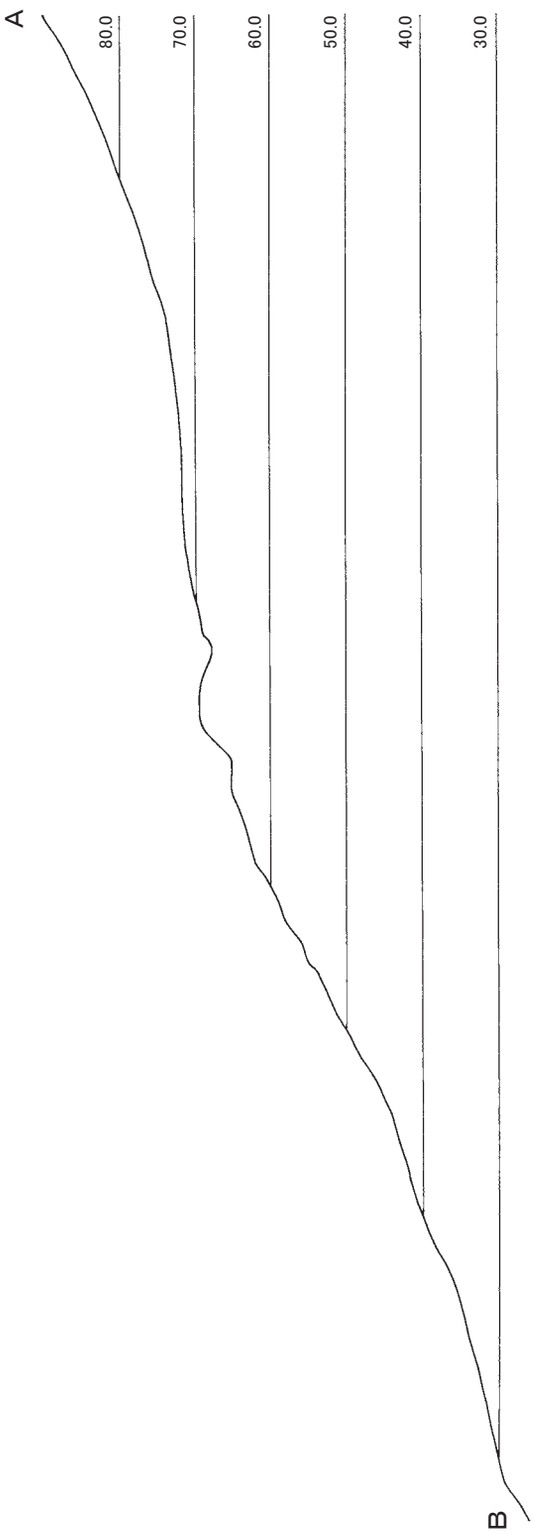
第 12 図　墳丘北側平坦地

３．調査の結果

以上の確認調査の結果、当地における工事範囲内に所在する埋蔵文化財は上佐野1号墳の1基に限られることが明らかとなった。この結果、上佐野1号墳について本発掘調査を行うこととなった。



第 13 図　工事と調査範囲



第 15 図　上佐野 1 号墳周辺縦断面

第２節　本発掘調査

１．はじめに

上佐野1号墳の調査は、一般国道４８３号北近畿豊岡自動車道八鹿豊岡南道路に伴うものである。北近畿豊岡自動車道は、丹波市と豊岡市を結ぶ自動車専用道で、平成27年度現在、八鹿氷ノ山ＩＣまでは開通している。以北の豊岡南ＩＣ(仮称)までの・八鹿日高道路(9.7㎞)・日高豊岡南道路(6.1㎞)については、工事中である(第16図)。

これらの工事区間の最北端にあたる豊岡南ＩＣ(仮称)の工事に先立ち行ったのが、上佐野1号墳の調査である。調査地は、豊岡南ＩＣ(仮称)の南側、トンネル出入口付近にあたる(第14図)。現地は、南北方向にのびる尾根筋となっていた(第13図・第15図)。

本発掘調査は、平成24年度の１箇年で行われている。

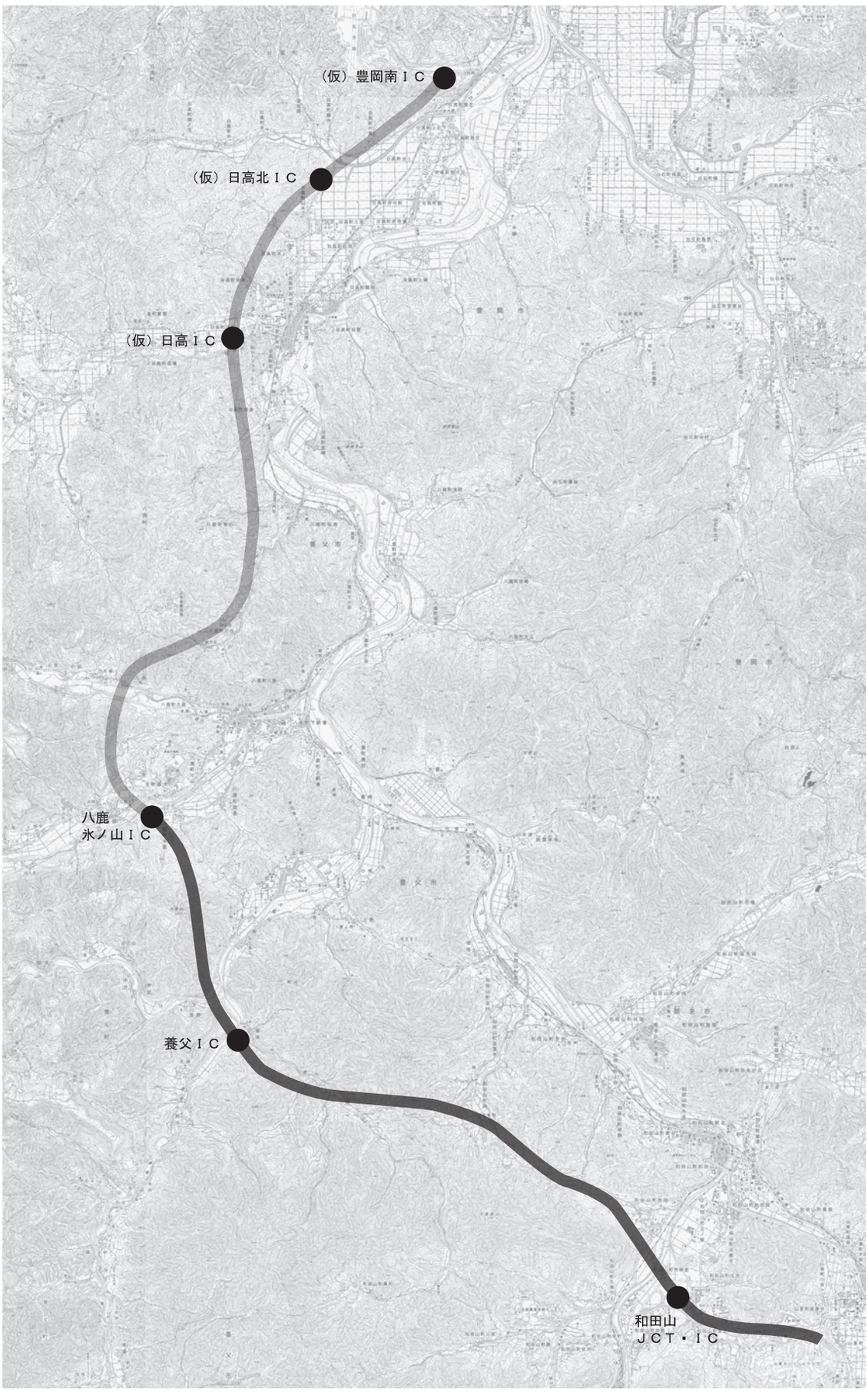
第 14 図　上佐野 1 号墳付近の工事

２．調査の概要

各年度の調査内容・体制等は以下の通りである。

調査番号　2012101

調査期間　平成24年６月13日～平成24年12月25日



第 16 図　北近畿自動車道

調査面積　553㎡

調査体制　調　査　員　兵庫県まちづくり技術センター

埋蔵文化財調査部　山田清朝・仁尾一人

現場事務員　原　英美・日下部信子

調査補助員　田村清一郎・有馬雄太

第 17 図　櫃本誠一氏による調査指導

調査概要　上佐野1号墳の1基を対象として調査を行った。調査は、全て人力により進めていった。調査成果の図化にあたっては、11月１日にヘリコプターによる空中写真撮影を行い、この成果をもとに行った。ただし、石室の図化については、すべて手実測により行った(第47図)。調査は、盛土の撤去・石室の解体まで行った。調査終了後、石室に用いられた石材については、線刻が認められたものに限り、持ち帰った。

なお、地形測量については、掘削前と墳丘除去後については、現地にて平板測量にて実施した。墳丘検出後の地形図については、写真測量の成果に基づくものである。

石室の評価については、10月12日に櫃本誠一大手前大学史学研究所長(当時)に実見していただき、竪穴系横口式石室であるとの評価をいただいている(第17図)。また線刻については、11月21日に春成秀爾国立歴史民俗博物館名誉教授により現地で実見していただき、御指導いただいた(第18図)。

なお、石室内の調査が一段落した11月３日には、一般県民を対象とした現地説明会を実施した(第19図)。約100名の参加が得られた。また、現地説明会当日は地元の秋祭りであったため、10月27日に地元住民を対象とした地元説明会を開催し、約20名の参加が得られた。

第 18 図　春成秀爾氏による現地指導

第 19 図　現地説明会

第３節　整理作業

１．はじめに

基本的な整理作業は、平成26年度と平成27年度の２箇年で行われた。ただし、出土土器の水洗については、発掘調査と並行して、現場事務所にて行った。また、石室内からは玉類が出土したことから、石室内床面付近の埋土については、土嚢袋に入れ現場から持ち帰り、篩による選別を行った。この結果、玉類の大半がこの過程で見つかっている。この作業についても、現場事務所にて行った。

他の整理作業については、兵庫県立考古博物館内にある(公財)兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部にて行った。

２．調査の概要

各年度の調査内容・体制等は以下の通りである。

⑴平成26年度

整理期間　平成26年５月20日～平成27年３月20日

整理体制　(公財)兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

整理保存課　菱田淳子・長濱誠司・岡本一秀

調 査 １ 課　山田清朝

嘱　託　員　森本貴子・池田悦子・河合たみ・寺西梨紗・山口陽太・桂昭子・佐々木愛・梶原奈津子・荻野麻衣・島村順子・嶺岡美見・上田沙耶香・小野潤子・平宮加奈子・藤池かづさ・上西淳子・沼田眞奈美・今村直子・藤尾裕子・吉村あけみ・前谷幸次

第 20 図　拓本の採拓

整理概要　出土土器の水洗・ネーミング・接合・補強・実測、金属器保存処理・玉類の実測を行った。また、石材の線刻について、拓本の採拓をおこなった(第20図)。

⑵平成27年度

整理期間　平成27年６月１日～平成28年３月22日

整理体制　(公財)兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

整理保存課　菱田淳子・長濱誠司・岡本一秀

調　査　課　山田清朝

嘱　託　員　宮田麻子・寺西梨紗・島村順子・上西淳子・小野潤子・藤池かづさ

第 21 図　遺物実測図のトレース

整理概要　遺構図の図面補正・トレース(第21図)・レイアウト、出土遺物の復元・写真撮影・原稿執筆・編集を行い、本書の刊行にいたった。また、須恵器の胎土分析を三辻利一先生に依頼した。分析結果は、第４章第１節に掲載している。

第３章　調査の成果

第１節　概要

１．立地

上佐野1号墳は、南側から北側にのびる尾根上に造られている(第13図)。尾根筋との関係をみると、西側斜面に寄って立地する傾向が認められる。尾根筋からややずれた位置に立地している。上佐野1号墳が立地する尾根筋は、28°～30°の傾斜が認められる(第15図)。尾根筋の中腹に築かれ、その標高は、北側基底部で66ｍを測る。尾根先端部、北側水田面との比高は約38ｍである。

２．残存状況

古墳の残存状況は極めて良好で、一見したところ、明らかに古墳と認識できる状況であった(第10～12図)。実際に、調査前(写真図版１)と調査後(写真図版３)では、墳丘の規模に大きな差は認められず、表土を除去した段階がそのまま当時の墳丘であった。つまり、当初の姿をとどめていない箇所は、頂部を中心とした部分的なものであったと考えられる。このため、墳丘の南側から東側・北側にかけては、墳裾を明確に確認することができる状態であった(第24図)。南側については、古墳を構築した際の山側(南側)のカット面さらには周濠状の落ち込みも明らかであった。東側については、墳裾に沿うように里道がのびており、そのラインが明瞭であった。北側については、後述するように、墳丘に隣接した平坦地があり、墳裾が明瞭であった。

一方、墳丘の西側については、墳丘斜面が谷にかけて連続しており、墳丘の範囲を明確にすることはできなかった。

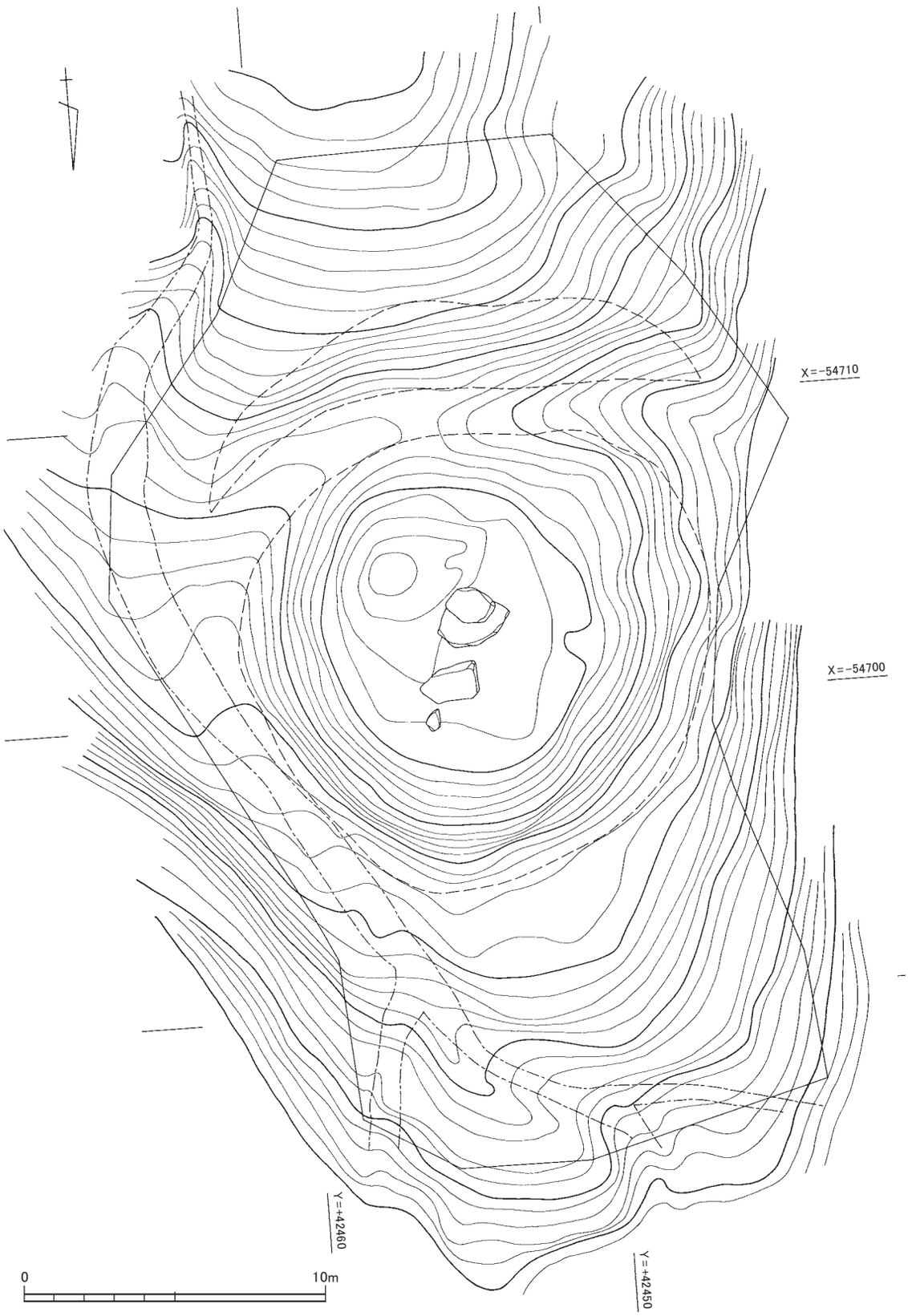
ところで、墳丘の北側には４ｍ×６ｍほどの平坦地が認められた(第24図)。造り出しもしくは祭祀の場の可能性が考えられた。しかし、調査の結果、遺物は全く出土せず、顕著な遺構も明らかにすることはできなかった。

第 22 図　調査前のカット面　東から

墳頂部に関しては盛土が流れ落ちており、石室もしくは天井石が露出した状態であった(第23図写真図版２)。ただし、石室に関しては、一部天井石まで残存していた。掘削前には、天井石が３石露出していた。しかし、その３石に関しては、現位置は保たれてはいなかった。ただし、表土除去後、原位置が保たれた天井石が２石明らかとなっている。

第 23 図　天井石露出状況　北から

最後に、本報告では、厳密な方位表現を除いては、尾根筋を南北方向として報告していく。つまり、山側を南、谷側を北とする。



第 24 図　上佐野 1 号墳調査前現況

第２節　墳丘・埋葬施設

１．概　要

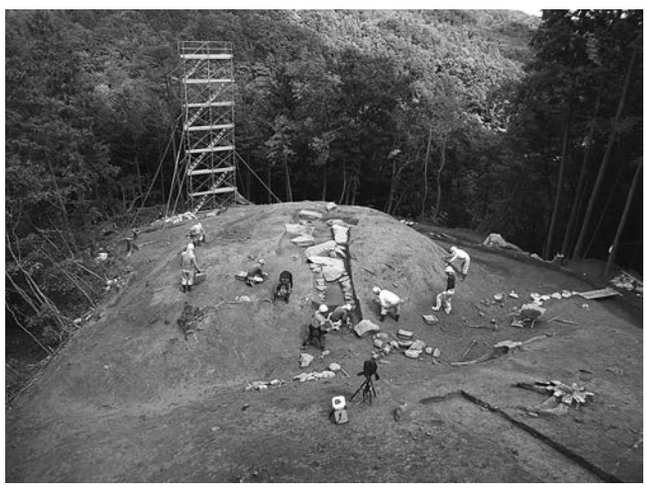
上佐野１号墳は、墳丘が良好に残存していた。さらに、墳丘の南側には尾根のカット面が良好に残存していた。また、カット面と墳丘の間は、東側・南側・西側にかけて連続する周溝からなる。これらの状況は、調査前の段階でも明確に観察できる状況であった。また、調査前の地形観察では、墳丘の北側に平坦地が認められた（第24図）。

第 25 図　表土掘削作業　東から

２．墳丘

⑴規模

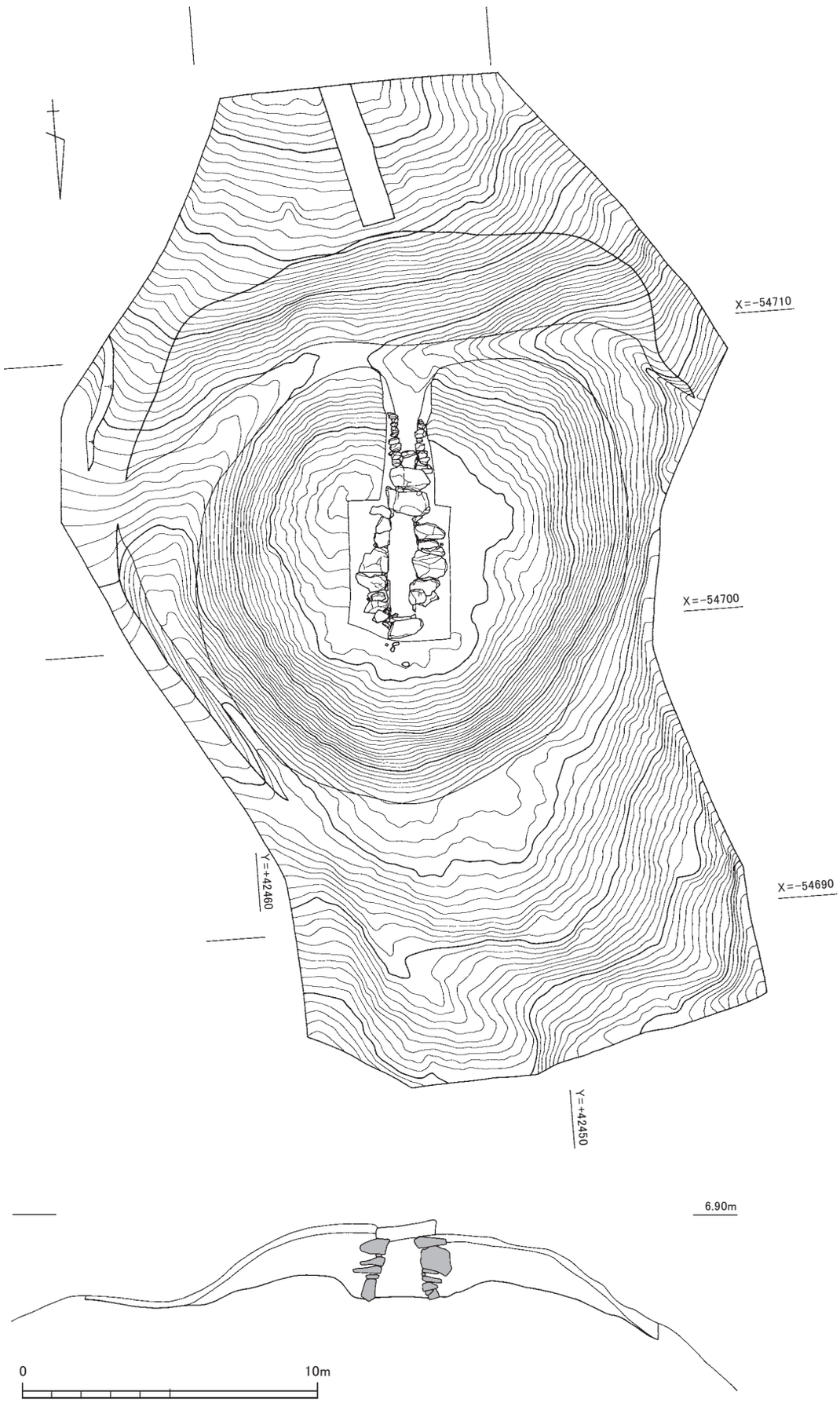
裾部における規模は、石室主軸ライン（南北方向）で15ｍ、その直交方向で14.50ｍを測る（第28図）。墳丘西側斜面が西側谷部へ連続し、西側裾部がやや不明確なことから、径15ｍの円墳と理解することができる。なお、第28図では平面的には南西方向へやや膨らんでおり、南西－北東方向に長い楕円形傾向にある。しかし、墳丘盛土を掘り下げていく段階で、この箇所から須恵器が多く出土し、墳丘盛土の２次堆積であることが明らかとなった。したがって、上記の北西側の膨らんだ箇所は、当初の墳丘面が十分検出されていなかった状態が反映された結果と考えられる。このため、上佐野１号墳は比較的整った円墳であったものと考えられる。



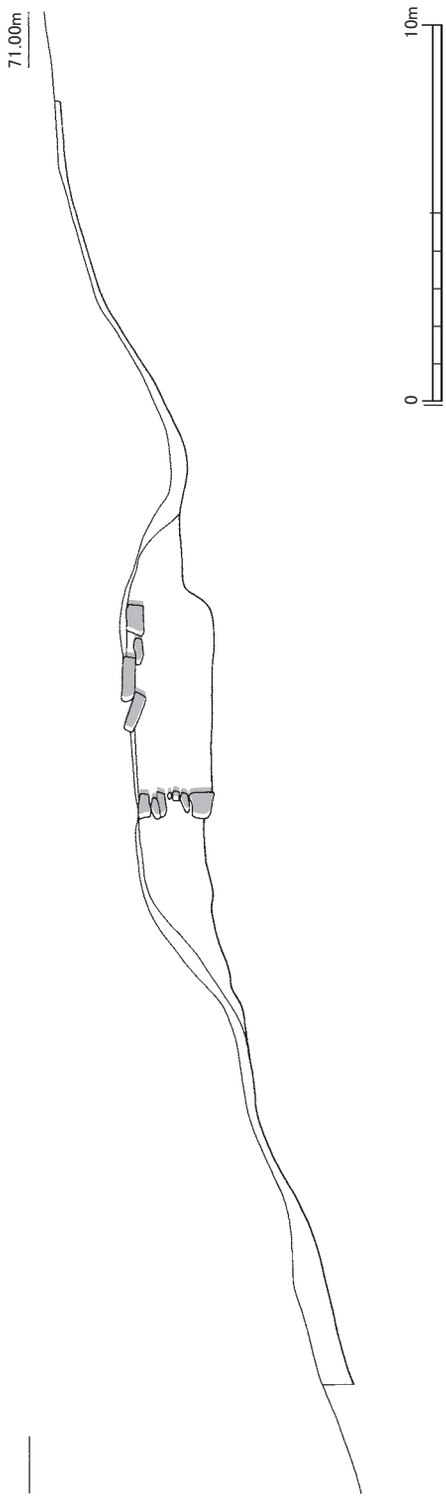
第 26 図　表土掘削作業　南から

第 27 図　表土掘削作業　北から

墳裾の標高は、南側で66.80ｍ、東側で67.00ｍ、北側で65.40ｍ、西側で65.50ｍである。また、検出した墳丘の最高所の標高は、68.70ｍである。以上から、残存する墳丘の高さは、南側裾部とでは1.90ｍ、東側裾部とでは1.70ｍ、北側裾部とでは3.30ｍ、西側裾部とでは3.20ｍの比高となる（第28図・第29図）。



第 28 図　墳丘測量図



第 29 図　墳丘縦断面

⑵墳丘の構築

墳丘は全て盛土からなる。墳丘を除去していったが、その過程において、墳丘の構築法を復元することが可能となった。以下、その構築法について報告する。その工程は、造成と盛土の大きく２工程からなる。

さらに、各工程においてより細かな工程を確認することができた。

①造成(写真図版30・32)

墳丘盛土の除去後、造成面の地形測量を行った(第32図)。この結果、尾根に対して約２ｍ掘り下げ、標高67ｍのレベルでほぼ平坦な面が造成されている。この平坦面は、墳丘の範囲と完全に一致するものではない。北側に

第 30 図　墳丘盛土の撤去　北から

第 31 図　墓壙の検出　北から

ついては、旧地形の尾根筋にあたる。したがって、北側については、一部旧地形のままの状態で盛土がなされていることが理解できる。そして、造成された平坦面のレベルは、後に山側(南側)に形成される周溝の底部とほぼ一致する。また、墓壙は、平坦部の中央部ではなく、やや北側に掘られている。掘削量を最小限にするためではないかと考えられる。

墓壙の規模は、主軸方向で6.5ｍ、その直交方向で5.5ｍを測る。また、造成面からの深さは、南側で80㎝、北側で30㎝である。

第 32 図　上佐野 1 号墳築造前造成状況

②盛土(写真図版30)

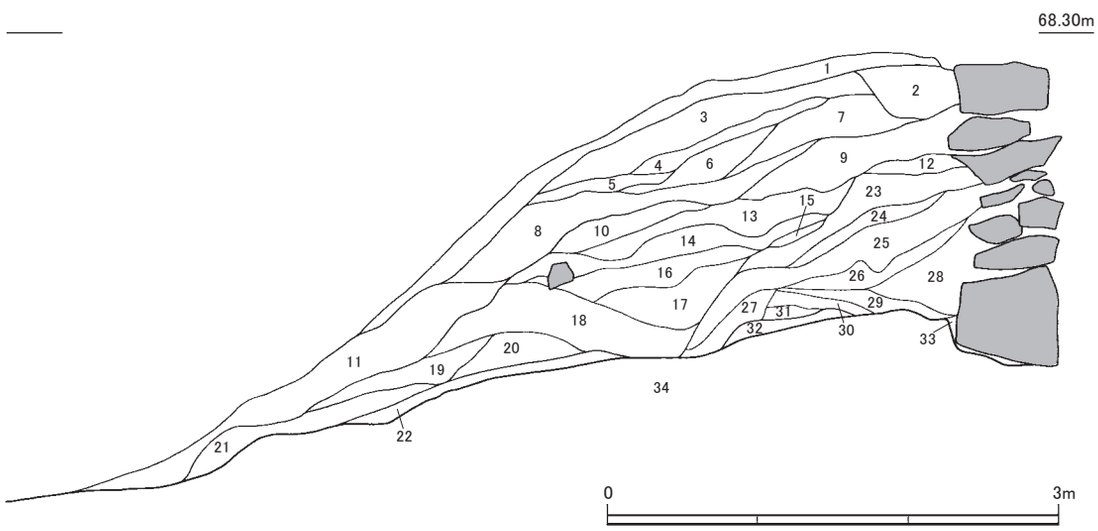
石室を中心に、東西方向と南北方向の墳丘断面の観察を行った（第33図～第35図）。この結果、墳丘は全て盛土によって造られていることが明らかとなった。後述するように、この盛土作業は、石室の構築と並行するものである。以下、各断面単位でみていく。

墳丘北側(写真図版30)　後述する墳丘の西側・東側とは、その構築方法とは特徴を異にする。まず、盛土の工程が、大きく４工程(第１工程～第４工程)からなる(第33図)。

第１工程は、後述する墳丘西側・東側で認められた第１工程に対応するものである。12層・23層～32層が該当する。石材の積上げと対応させて盛り上げられたものと考えられる。このなかで、25層・29層・32層が旧表土に由来する盛土層で、他は地山に由来する盛土層である。墳丘西側・東側同様、両者を積み分け、版築的工法を伺うことができる。

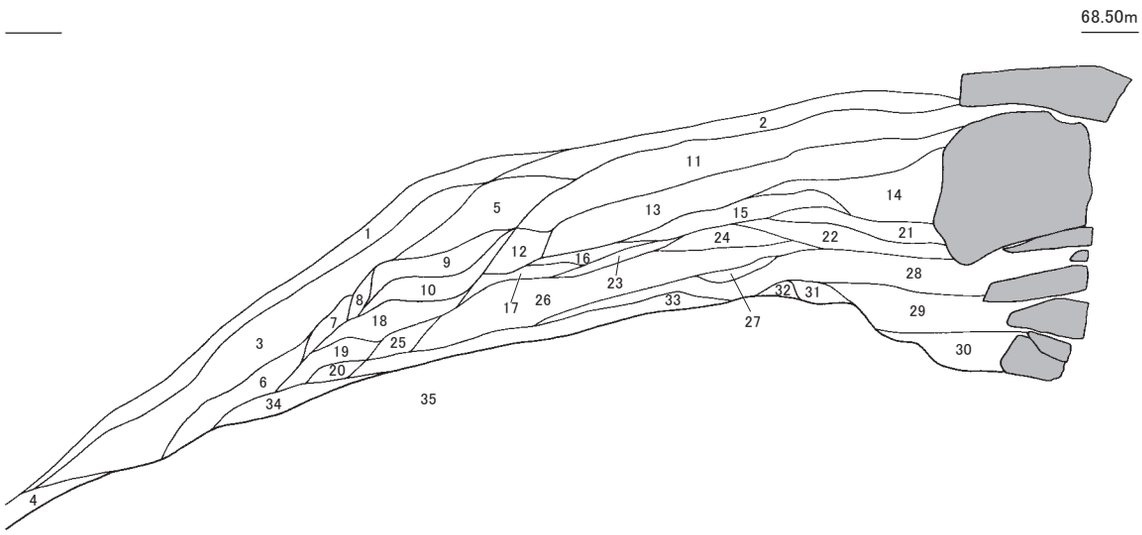
第２工程は、18層～22層が該当する。第１工程で積み上げられた盛土の外側に積まれた盛土である。第１工程の盛土とは明確に連続せず、別の小山となっている。石材の積上げとは直接的な関連は認められない。20層を除いては、旧表土に由来する盛土層である。

第３工程は、第１工程で盛り上げられた山と第２工程で盛り上げられた山の間を埋めるようにして盛



1．にぶい赤褐色極細砂～細砂混じりシルト
2．赤褐色細砂
3．にぶい赤褐色極細砂～細砂混じりシルト
4．赤褐色極細砂混じりシルト
5．暗灰色極細砂～細砂混じりシルト
6．褐色極細砂～細砂混じりシルト
7．赤褐色極細砂～細砂混じりシルト
8．明赤褐色極細砂混じりシルト
9．赤褐色極細砂～細砂混じりシルト
10．暗灰色極細砂～細砂混じりシルト
11．暗灰色極細砂～細砂混じりシルト
12．明赤褐色細砂混じりシルト
13．赤褐色極細砂～細砂混じりシルト
14．黄褐色シルト混じり暗灰色極細砂～細砂混じりシルト
15．明赤褐色細砂混じりシルト
16．明赤褐色細砂混じりシルト
17．灰色シルト混じり黄褐色極細砂～細砂混じりシルト
18．暗灰色極細砂～細砂混じりシルト
19．暗灰色極細砂～細砂混じりシルト
20．赤褐色極細砂～細砂混じりシルト
21．暗灰色極細砂～細砂混じりシルト
22．暗灰色極細砂～細砂混じりシルト
23．赤褐色極細砂～細砂混じりシルト
24．明褐色極細砂～細砂混じりシルト
25．暗灰色極細砂～細砂混じりシルト
26．赤褐色極細砂～細砂混じりシルト
27．褐色細砂混じりシルト
28．褐色極細砂～細砂混じりシルト
29．暗灰色細砂混じりシルト
30．明赤褐色極細砂混じりシルト
31．褐色細砂混じりシルト
32．暗灰色極細砂～細砂混じりシルト
33．赤褐色極細砂～細砂混じりシルト
34．明赤褐色シルト（地山）

第 33 図　墳丘北側縦断面



1．にぶい赤褐色極細砂～細砂混じりシルト（土壌層）
2．にぶい赤褐色極細砂～細砂混じりシルト（土壌層）
3．にぶい赤褐色極細砂～細砂混じりシルト
4．褐色極細砂～細砂混じりシルト（地山構成礫多く含む）
5．褐色極細砂～細砂混じりシルト
6．赤褐色極細砂～細砂混じりシルト
7．にぶい赤褐色極細砂～粗砂
8．暗灰色極細砂～細砂混じりシルト
9．褐色極細砂～細砂
10. 褐色極細砂～細砂
11. にぶい赤褐色極細砂～細砂混じりシルト
12. 暗灰色極細砂混じりシルト
13. 赤褐色極細砂～細砂混じりシルト
14. 赤褐色細砂混じりシルト
15. 赤褐色極細砂～細砂混じりシルト
16. 赤褐色細砂混じりシルト
17. 明褐色極細砂～細砂混じりシルト
18. 暗灰色極細砂～細砂
19. 褐色極細砂～細砂混じりシルト
20. 褐色極細砂～細砂混じりシルト
21. 赤褐色極細砂～細砂混じりシルト
22. 赤褐色細砂混じりシルト
23. 褐色極細砂～細砂混じりシルト
24. 暗灰色極細砂混じり赤褐色細砂混じりシルト
25. 暗灰色極細砂混じり褐色極細砂～細砂混じりシルト
26. 暗灰色極細砂～細砂混じりシルト
27. 褐色極細砂～細砂混じりシルト
28. 赤褐色細砂混じりシルト
29. にぶい赤褐色細砂混じりシルト
30. 赤褐色極細砂～細砂混じりシルト
31. 暗灰色極細砂～細砂混じりシルト
32. 暗灰色極細砂混じりシルト
33. 褐色極細砂～細砂混じりシルト
34. 褐色極細砂～細砂混じりシルト
35. 明赤褐色シルト（地山）

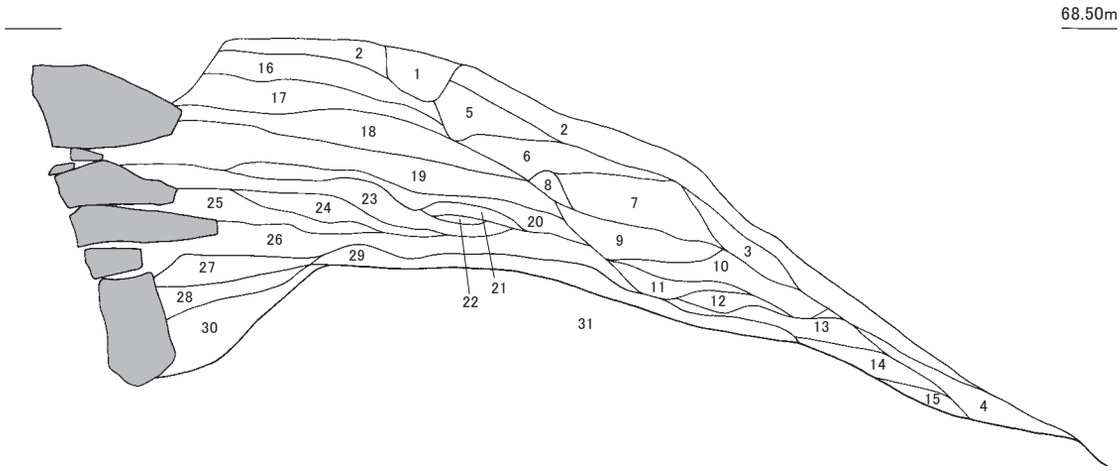
0　3m

第 34 図　墳丘西側横断面

られた層である。10層・13層～16層が該当する。このなかで10層が旧表土に由来する盛土層である。当工程についても、石材の積上げとは直接的な関連は認められない。

最後の第４工程は、第１工程から第３工程にかけて積み上げられた盛土全体を覆うように盛られた層である。１層～９層が該当する。第１工程同様、石材の積上げと対応して盛り上げられている。５層が旧表土層に由来する盛土である。

墳丘西側(巻首図版３）　大きく３工程(第１工程～第３工程)を確認することができる(第34図)。第１工程は、石室構築のために掘り込まれた墓壙内を埋める作業である。29層と30層が該当する。30層は基底石の設置に対応するもので、29層はより上段の石材の積上げと対応して埋め込まれている。



1．根株
2．褐色極細砂～細砂混じりシルト
3．褐色極細砂～細砂混じりシルト
4．褐色極細砂～細砂混じりシルト（墳丘流失土）
5．褐色極細砂～細砂混じりシルト
6．赤褐色極細砂～細砂混じりシルト
7．暗灰色極細砂～細砂混じり赤褐色極細砂～細砂混じりシルト
8．暗灰色極細砂～細砂混じりシルト
9．褐色極細砂～細砂
10．暗灰色極細砂～細砂
11．赤褐色極細砂～細砂
12．暗灰色極細砂～細砂
13．赤褐色極細砂～細砂混じりシルト
14．明赤褐色極細砂混じりシルト
15．赤褐色極細砂～細砂混じりシルト
16．赤褐色細砂混じりシルト
17．褐色極細砂～細砂混じりシルト
18．赤褐色極細砂～細砂混じりシルト
19．赤褐色細砂混じりシルト
20．暗灰色極細砂～細砂混じりシルト
21．にぶい赤褐色極細砂～細砂混じりシルト
22．暗灰色極細砂～細砂混じりシルト
23．暗灰色極細砂混じり赤褐色細砂混じりシルト
24．暗灰色極細砂混じり
褐色極細砂～細砂混じりシルト
25．暗灰色極細砂混じり赤褐色細砂混じりシルト
26．赤褐色細砂混じりシルト
27．赤褐色極細砂～細砂混じりシルト
28．赤褐色極細砂～細砂混じりシルト
29．暗灰色極細砂～細砂混じりシルト
30．赤褐色極細砂～細砂混じりシルト
31．明赤褐色シルト（地山）

0　3m

第 35 図　墳丘東側横断面

第２工程は、石室上部の構築に対応した盛土である。11層～17層と21層～28層が対応する。これらの層の盛り上げについても、石室の石材の積上げに対応したものである。このなかで、12層・24層～26層については旧表土層に由来する層と、他は地山に由来する層と考えられ、これらの層が交互に積み上げられている。ある種の版築的工法に近いものと考えられる。

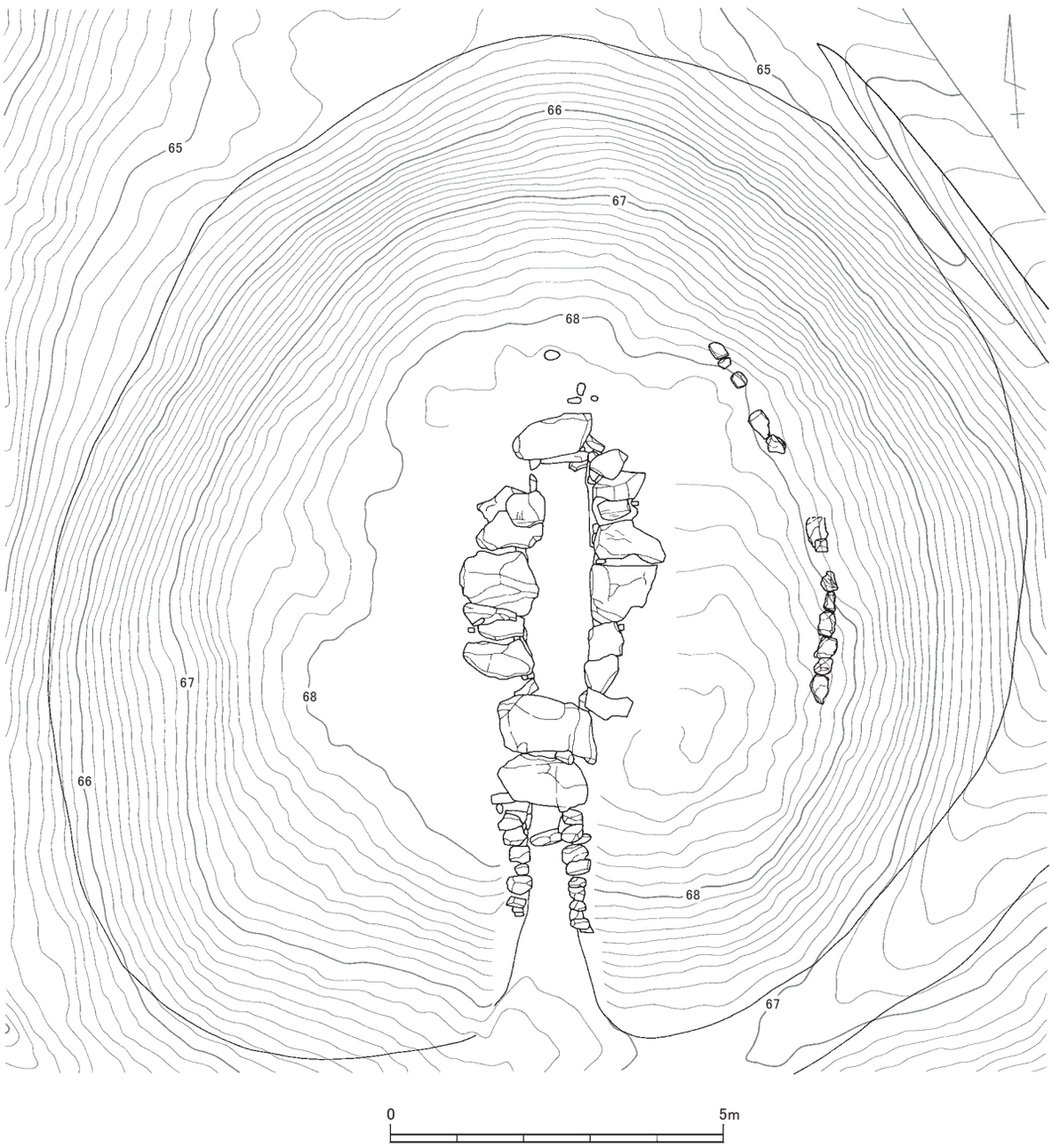
第３工程は、２層・５層～10層と18層～20層が対応する。これらの層の盛土は、石室の構築とは直接関連するものではないが、天井石を墳丘上へ運び込むため、墳丘下部からの傾斜を整える機能を果たしていたものと考えられる。一方で、墳丘全体の形態を整えるための盛土であったものと考えられる。８層と18層が旧表土層に由来する層と考えられ、第１工程同様、版築的工法が想定される。

墳丘東側(巻首図版３）　墳丘西側同様、大きく３工程を復元することができる(第35図)。第１工程は、28層と30層が対応する。いずれも地山に由来する層である。第２工程は、16層～27層が該当する。墳丘西側、石室上部の石材積上げに対応して盛り上げられていったものと考えられる。このなかで、20層・

22層～25層が旧表土に由来する層で、他の地山由来の層とともに版築的工法が想定される。第３工程は、５層～15層が対応する。天井石の積上げに対応した盛土と考えられる。このなかで、７層・８層・12層が旧表土に由来する層と考えられる。

この他、２層と４層については、墳丘本来の盛土層ではなく、上部の盛土層が流れ込んだ二次堆積層と考えている。

なお、上記断面観察の結果、盛土層下で築造時の表土層（旧表土層）を確認することはできなかった。墳丘構築にあたり、地山全体にわたる削平が行われたものと考えられる。



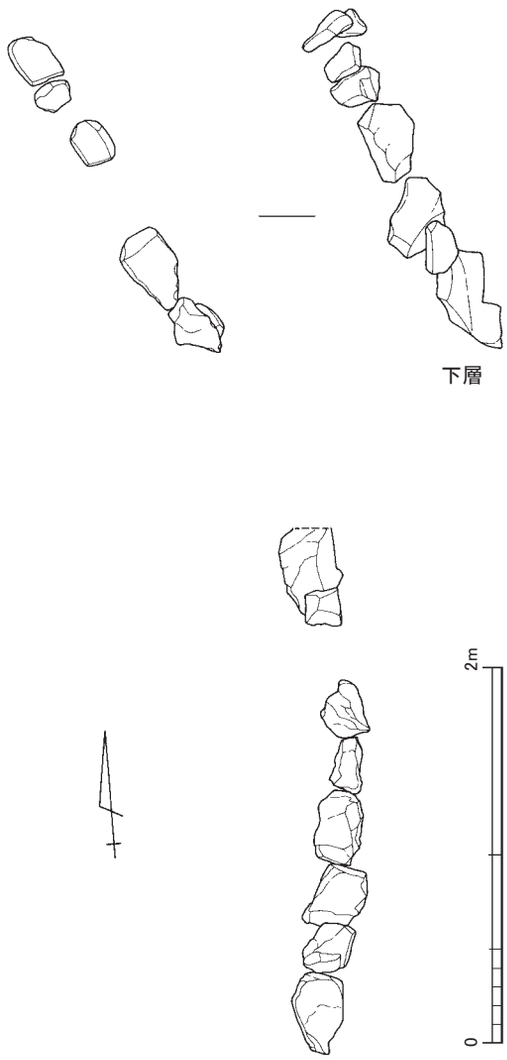
第 36 図　列石検出位置

⑶列石(写真図版29)

墳丘の断割りにおいて、墳丘盛土内で列石を確認した(第38図)。19層東端上面(第35図)に相当する。第１工程終了後に並べられたものと考えられる。その位置は、石室の東側に限られる(第36図)。石室東壁の東3.5ｍにあたる。検出した長さも約5ｍに限られる。並べられた石材は、30㎝～50㎝大の亜角礫もしくは亜円礫からなる。各石材に明確な面は認められず、外観を意識した様子を伺うことはできない。

この列石は、墳丘の盛土と平行して、並べられたものと考えられる。このため、これらの石材が、墳丘の平面形に対応するよう、わずかに弧状をなして１列に並べられていた。ただし、全て連続するものではなく、部分的に隙間が認められた。

第 37 図　周溝の検出



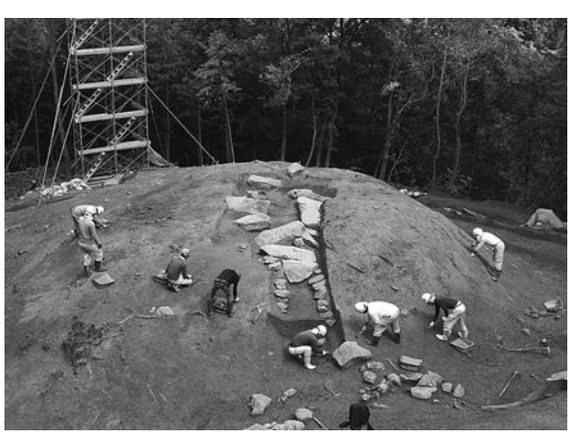
第 38 図　列石

並べられた石は、ほぼ同一レベルであるが、北部においては、その下層約30㎝の面で、別の列石が検出されている(第38図)。検出された長さは２ｍに限られ、ほぼ直線的である。なお、下層の石列が検出された層位は、ほぼ地山直上にあたる。

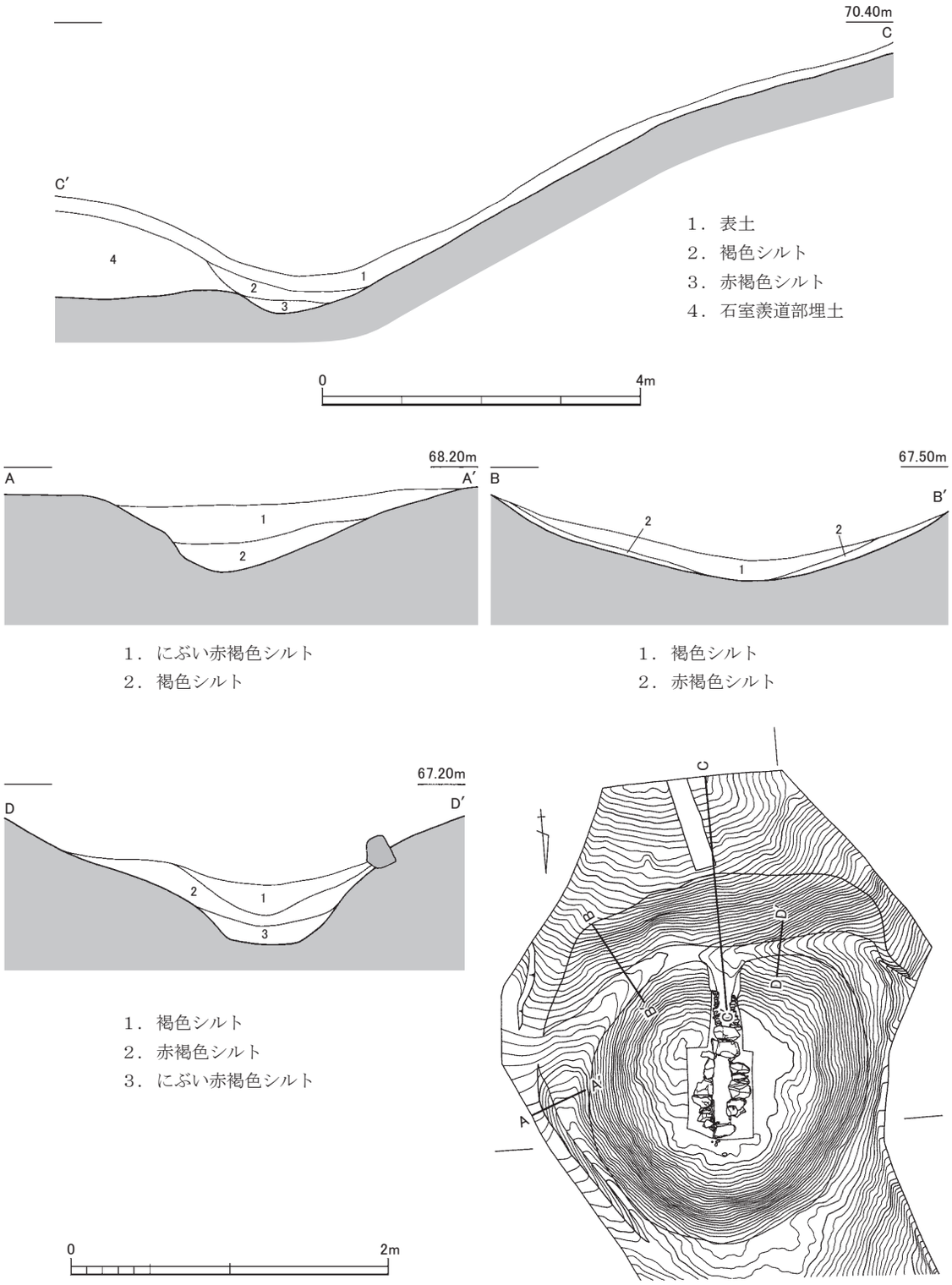
⑷周　溝

墳丘の南側から東側にかけて、溝状をなしていた(第37図・第39図)。周濠は、主軸ライン上の南側が最も高く、西側・東側にいくにつれ、標高を徐々に減じていく。その標高は、開口部(Ｃライン)で66.80ｍ、西側(Ｄライン)で65.50ｍ、東側(Ａライン)で65.60ｍを測る。以上から、約6°～10°の傾斜が認められる。

墳丘南側　墳丘を構築するための平坦地を造成するため、尾根筋が大きくカットされている(Ｃラ



第 39 図　開口部と周溝の検出



第 40 図　周溝横断面

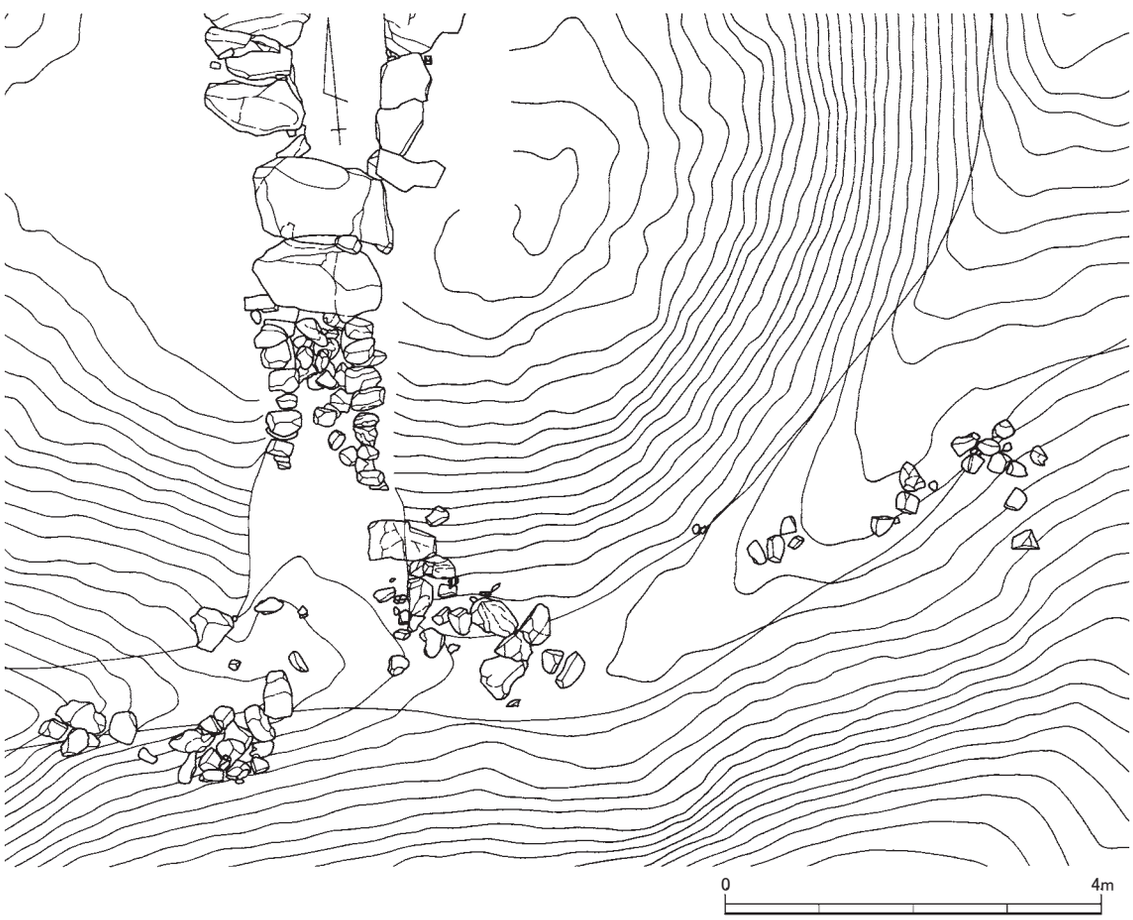
イン：第40図)。その規模は、カットの起点から南側墳裾までの水平距離が、尾根筋上で５ｍを測る。周濠底とカットの起点との比高は2.30ｍを測り、その間の傾斜は28°を測る。周濠内には、その底部付近にわずかに土砂の堆積が認められた(第40図)。その堆積状況から判断して、墳丘側からの流れ込みによるものと考えられる。その厚さは、開口部付近で約30㎝を測る。Ｃライン付近の２層を中心に、土器が多く出土している(第61図・第62図)。

墳丘東側　幅4.50ｍから5.5ｍの幅の溝状をなしていた(Ａライン・Ｂライン：第40図)。横断面は浅い皿形もしくはＵ字形をなし、Ａラインでは45㎝、Ｂラインでは13㎝の堆積が認められた。特にＢラインに関しては、築造当初と大きな変化が認められないことが明らかとなった。Ａラインについては、Ｂライン側からの流れ込みも考えられる。

第 41 図　南西側周溝の検出

墳丘西側　幅2.5ｍの溝状をなしていた(Ｄライン：第40図)。横断面は逆台形をなし、深さ40㎝を測る。周濠のなかでは堆積が最も顕著であった。西側への傾斜が急であることから、Ｃライン側からの堆積と、墳丘側からの堆積が考えられる。２層から３層を中心に、土器が多く出土している(第61図・第65図　写真図版10・11)。

なお、開口部と周溝の交点を中心に、西側へ３ｍ、東側へ８ｍの範囲にわたり、巨礫が転石していた(第42図)。周溝がある程度埋没した層の上面から出土している(写真図版９・10)。開口部を中心に、周溝部へ掻き出され、西側・東側へ廃棄したものと考えられる。20㎝から50㎝大の角礫もしくは亜角礫からなり、最大で70㎝×40㎝である。これらの石は、開口部側壁に積まれていた石材とほぼ同規模である。出土状況から判断して、閉塞に使用されていた石材ではないかと考えられる。



第 42 図　周溝内閉塞石転石状況

⑸北側平坦地

墳丘北側に隣接して調査前から認識されていた平坦地である。調査の結果、平坦地であったことは間違いないが、遺物は全く出土しなかった。さらに、平坦地の平面形も不定形であり、境も明瞭ではなかった。また、古墳と関連する遺構も認められなかった(第43図)。このため、この平坦地を積極的に評価することはできない。

第 43 図　上佐野 1 号墳と平坦地

３．埋葬施設

⑴概　要

横穴系の石室１基からなり、墳丘のほぼ中央に位置する。石室は、玄室と羨道部からなり、両者の境は、石室右側の袖により区画されている(第49図)。奥壁から、羨道部外側までの距離は、７ｍである。

第 44 図　天井石の撤去

⑵天井石(写真図版４・13)

部分的には天井石まで残存していた(第48図)。調査前の段階で天井石が３石露出していた。しかし、この３石については、後世に動かされており、原位置は保たれていなかった。これらの３石は、その検出状況から、石材の主軸を石室主軸に直交させるように置かれていたものと考えられる。奥壁側(北側)ほど大きい傾向にあり、最も北側の天井石は、長さ２ｍ、幅1.2ｍ、厚さ50㎝の板状の石材である。北側から２石目の石は、長さ1.80ｍ、幅１ｍ、厚さ35㎝を測る。最も南側の石材は、長さ1.7ｍ、幅1.1ｍ、厚さ45㎝である。

第 45 図　石室内の検出

その後、表土を除いた段階で、羨道部で２石の天井石が明らかとなった(第48図)。この２石については、原位置が保たれていた。玄室上の石材同様、石室主軸に対して直交するように石材が置かれていた。玄室側の石材の規模は、長さ1.4ｍ、幅80㎝、厚さ50㎝を測る。開口部側の石材の規模は、長さ1.3ｍ、幅70㎝、厚さ25㎝である。いずれも玄室上部で認められた石材より小型である。

なお、玄室上に置かれていた３石の天井石裏面(石室側)には、赤色顔料の付着が顕著であった。

⑶玄　室

平面プラン　平面形は長方形をなす(第49図)。ただし、厳密には奥壁のラインと側壁のラインは直交せず、わずかに平行四辺形傾向にある。玄室の規模は、主軸方向で3.55ｍを測る。玄室幅は、奥壁側・袖部ともに1.55ｍを測る。両者を基準とした玄室面積は5.50㎡である。

第 46 図　西側壁の検出

奥　壁　残存していた天井石から判断して、最上段まで残存しているものと考えられる(第49図)。基底部から上部まで直立する面をなしている。基底部は３石からなる。その規模は不揃いで、中央の石材が65㎝×60㎝で最大である。右側の石材が幅60㎝、高さ35㎝を測り、前者の石材と合わせて奥壁の2/3以上を占めている。基底石より上側の石材は、板状の石材を基本とし、その長側部が石室側に揃えられている。最大幅70㎝を測る。さらに、これらの石材の隙間には10～20㎝大の角礫が噛まされている。基底石を除いて、最大で６段積み上げられている。基底石底部から、奥壁上端までの高さは、1.90ｍを測る。

第 47 図　東側壁の実測

東側壁　奥壁同様、奥壁付近を除き、ほぼ全体が残存しているものと考えられる(第49図　写真図版18)。側壁全体は、全体的に５段から６段積まれており、全体的に内側へ持ち送られている。その規模は、玄室中央部最上段で、50㎝を測る。基底部から上部までの最大の残存高は、玄室中央部で２ｍである。

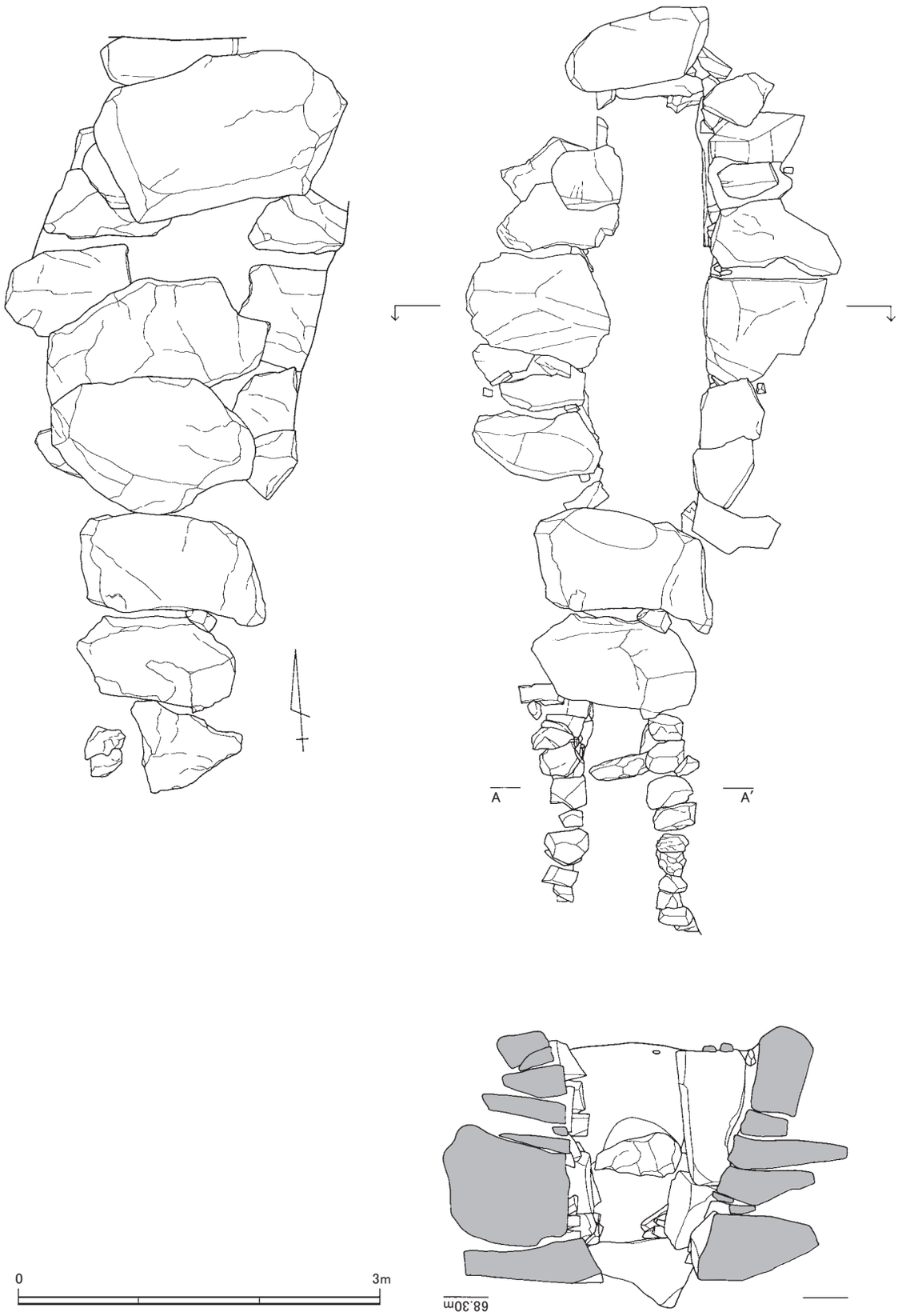
基底石は５石からなり、奥壁側の１石のみ横長の石材が用いられている。幅１ｍ、高さ40㎝を測り、東側壁基底部では最大の石材である。他の３石は、方形を基本とした石材が用いられている。これらの３石は、幅が50㎝～65㎝、高さが45㎝～55㎝とほぼ同規模である。

これら基底石の上部は、板状の石材の長側面が石室側に揃えられている。幅は、70㎝～1.2ｍを測る。高さは、25㎝～35㎝である。ただし、袖付近の基底石上部は、30㎝～40㎝大の栗石が積まれている。その箇所の高さは約70㎝で、より上部は、他と同様横長の石材が積まれている。

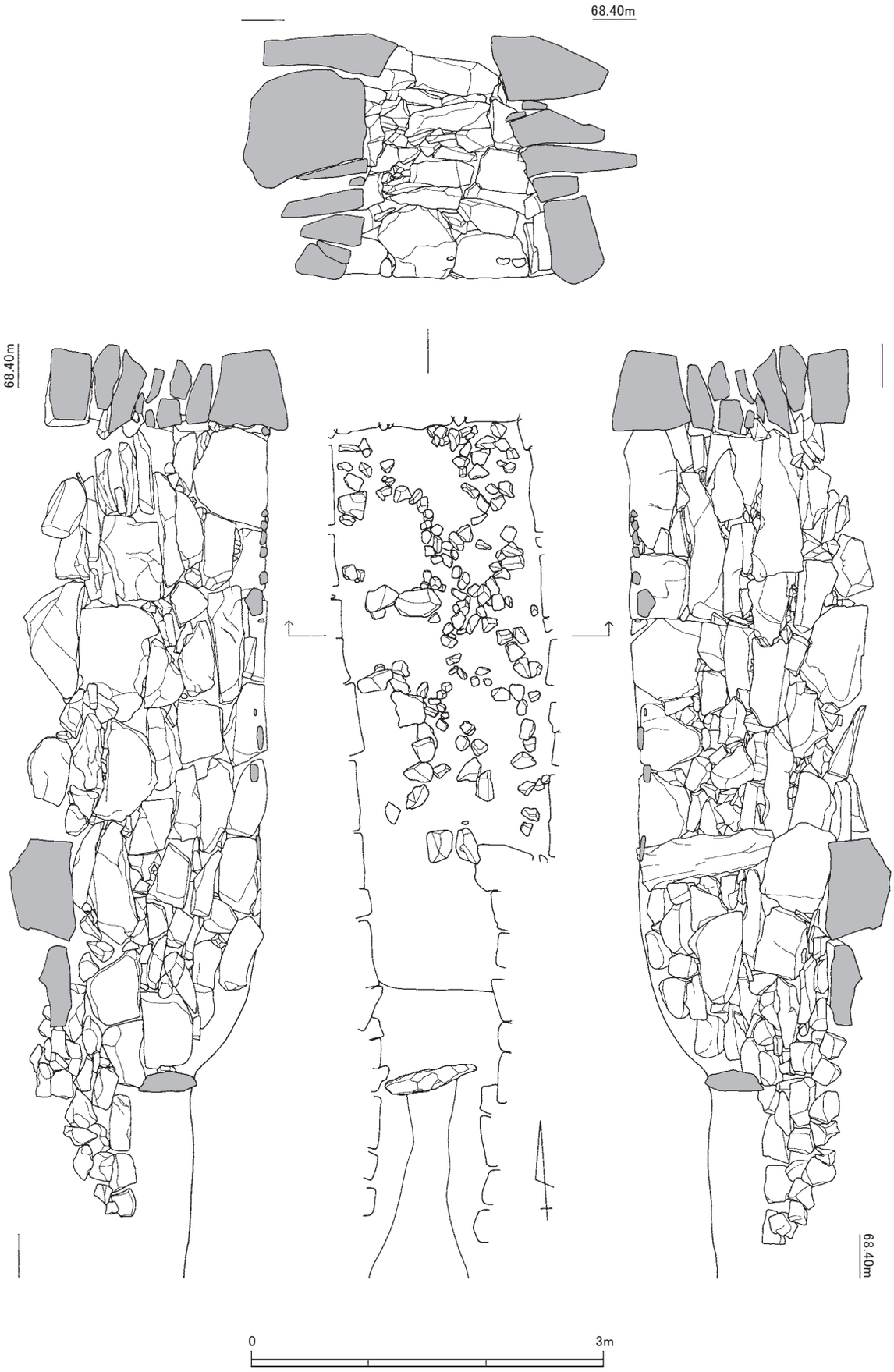
西側壁　右側壁同様、奥壁付近を除き、ほぼ全体が残存しているものと考えられる(第49図)。全体的に６段積まれ、持ち送りが認められる。その規模は、玄室中央部で40㎝を測る。基底部から上部までの最大の残存高は、玄室中央部で２ｍである。

基底石は５石からなり、奥壁側の１石が最大規模を測る。その規模は、幅80㎝、高さ60㎝である。他の基底石は、幅が50㎝～70㎝、高さが20㎝～30㎝と、前者より明らかに小規模であるが、ほぼ同規模である。

基底石より上部の石材は、横長の石材も認められるが、東側壁と比べて方形傾向の石材が目立つ。特に、奥壁側を除く上部の大半は方形傾向の石材である。最大で60㎝×70㎝を測る。横長の石材では、幅１ｍにおよぶ石材も認められる。

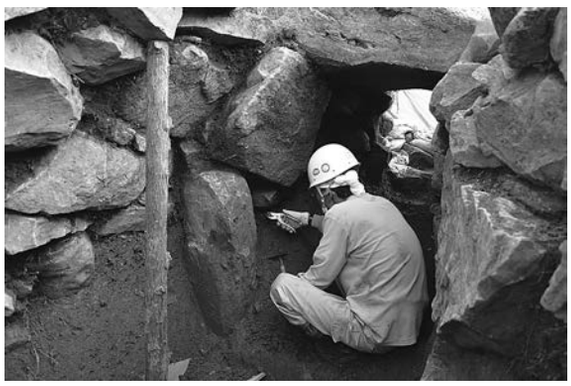


第 48 図　石室平面図（天井石）



第 49 図　石室平面図・立面図

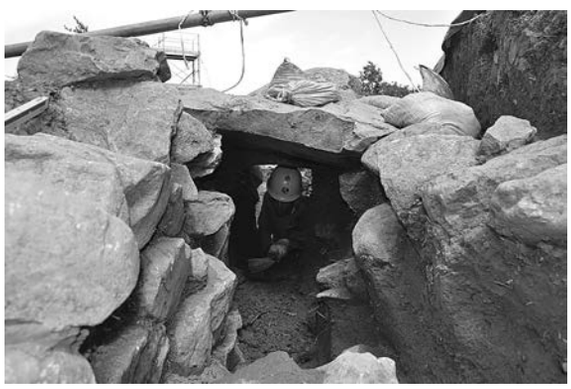
袖　部　玄室右側壁南端において、１石の立柱石により、袖が形成されている(第50図　写真図版23)。底部付近で、40㎝×45㎝の柱状の石で、高さ1.15ｍを測る。袖幅は60㎝を測る。立柱石は、１石で天井石まで達してはおらず、この立柱石の上側には、50㎝×60㎝の石材(楣石)が載せられ、その上部は天井石となっている(写真図版23下)。



第 50 図　袖部の検出

⑷羨道部

段　差　羨道部の中間において段差が認められ、その玄室側と開口部側とに大きく２分される(第49図　写真図版18上・31下)。墳丘南裾部から玄室南端までの距離は５ｍを測る。また、玄室南端から3.4ｍまで、側壁の石積みが残存していた。底部のレベルは、南側墳丘裾部で66.80ｍを測るのに対して、玄室南端では66.34ｍと、大きく異なる。この間、玄室南端から２ｍ南側の地点において大きな段差が認められる。開口部側で66.90ｍ玄室側で66.30ｍと、60㎝の段差となっている。なお、この段は地山を削り込む形で造成されている。



第 51 図　羨道の検出

底　部　段より玄室側の底部はほぼ平坦で、玄室とほぼ同レベルである。その幅は、袖部で１ｍ、段下端で90㎝と、ほぼ一定している。一方、段より開口部側は、底部の横断面は弧状をなし、側壁自体も全体的に内側に持ち送られる傾向が認められた(第51図)。その規模は、右側で25㎝、左側で23㎝である。この結果、残存する限りにおいて、横断面全体がトンネル状をなしている(第55図)。横断面の最大幅は、石積み下端で1.02ｍを測る。また、下端における幅は35㎝～40㎝である。

また、段の上端側には、閉塞石と考えられる板状の石材が認められた(写真図版22)。石室の主軸に対して、わずかに斜行しており、厳密には原位置は保たれていない。閉塞石の位置としては、ほぼ確実な位置と考えられる。石材の規模は、幅70㎝、高さ45㎝、厚さ20㎝である。石材を羨道底部に直立させる形で検出されている。なお、この箇所における、底部から側壁上端までの高さは1.08ｍである。

なお、原位置が保たれた状態で検出された閉塞石は上記の１石であるが、玄室側に同様の石材が倒れ込んでいた(写真図版22下)。底部から明らかに離れたレベルで出土していることから、原位置は保たれていないものと考えられる。ただし、その出土位置・石材の形態等から、閉塞石として使用されていた可能性は極めて高いものと考えられる。

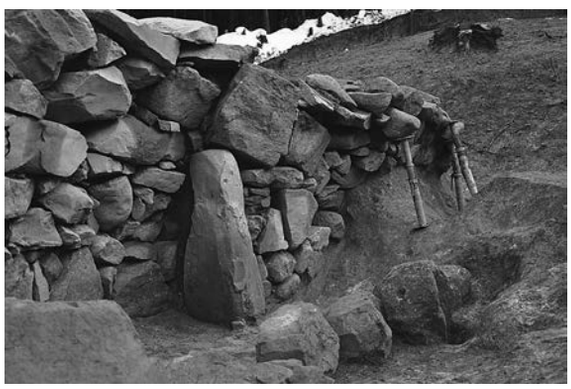
他に、羨道部内には、45㎝四方の立方体をなす石が検出された(第52図)。底部直上に位置する。この石については、原位置が保たれているのかについては明らかにできなかった。

第 52 図　羨道内の石

この他、開口部を中心とした周濠内には、閉塞石として使用されたと考えられる30㎝～40㎝大の栗石が散乱した状態で検出されている(写真図版８・９)。ただし、これらの栗石は、開口部側の羨道側壁に使用されていた石材と規模・形態とも類似することから、一部については羨道側壁の可能性も考えられる。

第 53 図　開口部の実測

側　壁　上記の段を境に大きく異なる(第49図)。西側・東側とも、段より玄室側は長側辺を内側にして石材が主に積まれている。特に、西側が顕著である。一方、段より開口部側は、20㎝～40㎝大の栗石が主として積まれている。玄室と比べて明らかに小型の石材である。石材は、玄室側から開口部側の順に積まれており、両者の境は明確ではない。特に開口部側においては、基底石が認められず、側壁中位から上側に限り、石材が積まれている。石材下端のレベルは、両側とも底部から45㎝を測る。

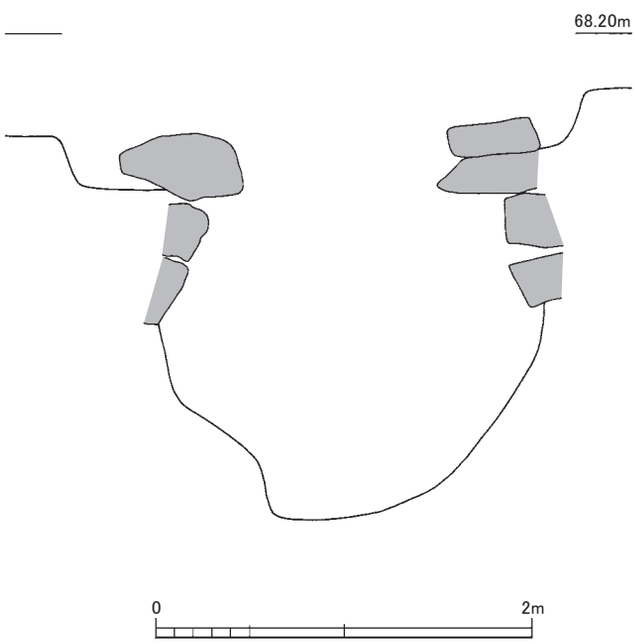


第 54 図　開口部側壁

天井石　また、段より玄室側には、天井石が２石残存していた(第48図　写真図版13・14)。玄室側の天井石の北端は、袖部をなす立柱石とほぼ一致する。その規模は、玄室側が1.4ｍ×80㎝、開口部側が1.3ｍ×70㎝と、ほぼ同規模である。ただし、前者の厚さが50㎝であるのに対して、後者の厚さは20㎝と、明らかに異なる。ただし、２石の底面のレベルはほぼ同じで、底部からの高さは1.6ｍを測る。また、２石とも、その主軸を石室主軸に直交させている。

羨道部の高さ1.60ｍについては、玄室の側壁高(２ｍ)より明らかに低い数値である。したがって、玄室の天井石は原位置が保たれていなかったが、羨道部より高かったものと判断される。また、羨道部側の天井石の上面と玄室側壁の最も良好に残存する箇所の高さがほぼ同じであることから、羨道部側の天井石の上側に、玄室の天井石が置かれていた可能性が考えられる。

なお、開口部側においては、底部の高さから判断して、天井石は架構されていなかったものと考えられる。



第 55 図　開口部横断面

第３節　遺物

１．概要

上佐野１号墳に伴う遺物は、土器と金属製品・玉類からなる。土器については、後述するように、石室の内外から出土しているが、金属製品と玉類については、石室内のみから出土している。この他、石室の構築に利用された石材の一部に線刻が認められた。これについても、本節で触れることにする。

２．土器（第２表・３表）

土器の出土地点は、大きく、⑴石室内（第57図）、⑵開口部付近から周濠西側（第61図・第62図）、⑶墳丘南西部周濠（第65図）、⑷その他、に分けることができる。

⑴石室内出土土器（写真図版24 ～ 28）

玄室内から出土した一群（第58図・第59図）と羨道内から出土した一群（第60図）に分けることができる。玄室内から出土した土器については、床面上から出土した土器に限定する。いずれも、最終的に副葬された土器群と理解しているものである。

玄室内出土土器　奥壁際（１～４・６～10）と東側壁際（５・11・12）に出土地点がわけられる（第57図）。前者においては、７～９が奥壁際西側から一群で出土している（写真図版25）。後者については、６が奥壁際中央部から、１～３と10が奥壁東隅付近から出土している。このなかで２と３が、重ねられた状態で出土している。また、４が上記よりやや南側から単独で出土している。

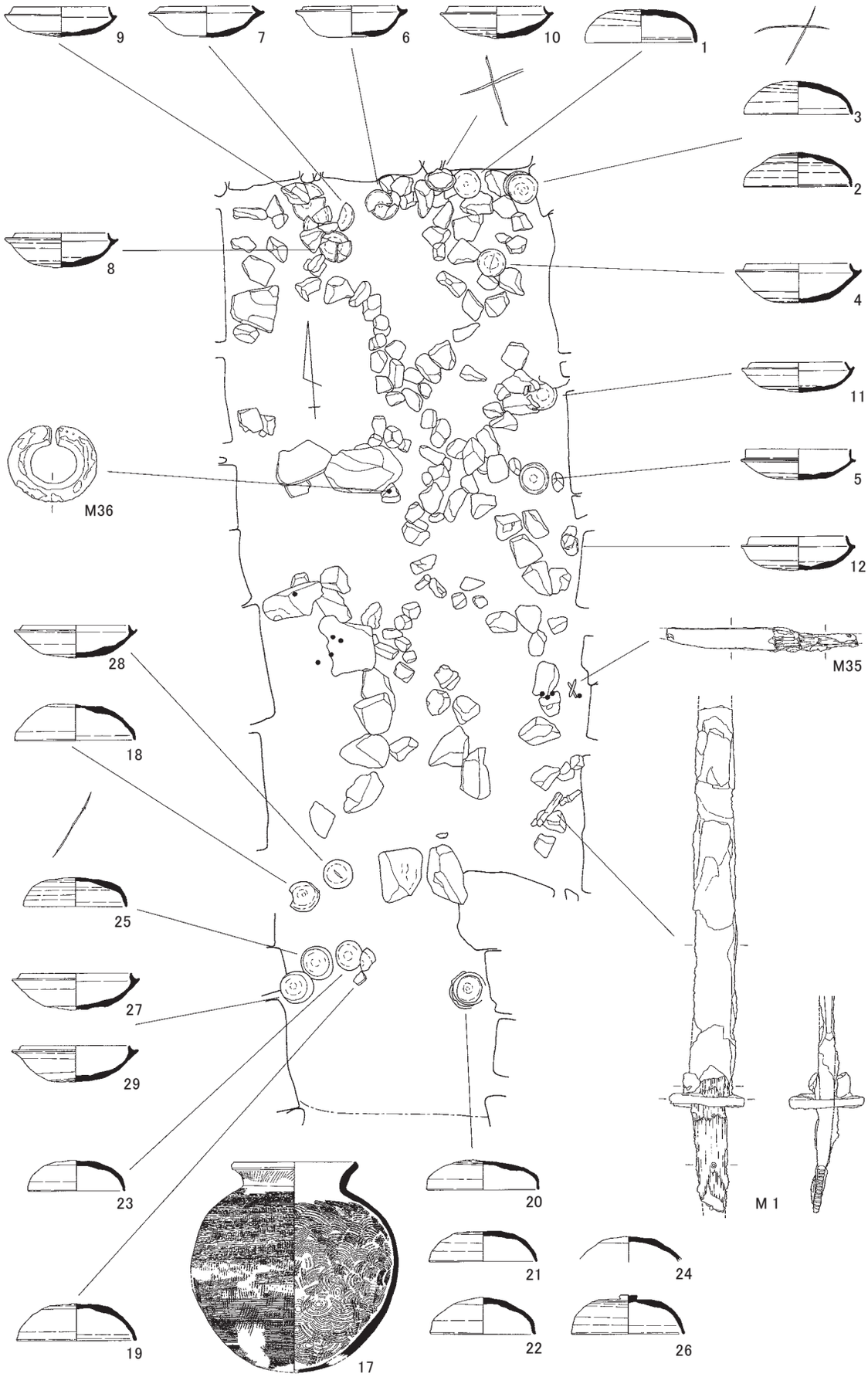
後者については、３点の土器がそれぞれ単独で出土している（写真図版26）。玄室中央部よりやや北側である。

これらの土器については、多くが完形もしくはこれに近い状態で出土している。しかし、その出土状況（写真図版26）から判断して、厳密には原位置が保たれているとは言い難い状況である。また、土器枕として置かれていた状況を示す土器は認められなかった。

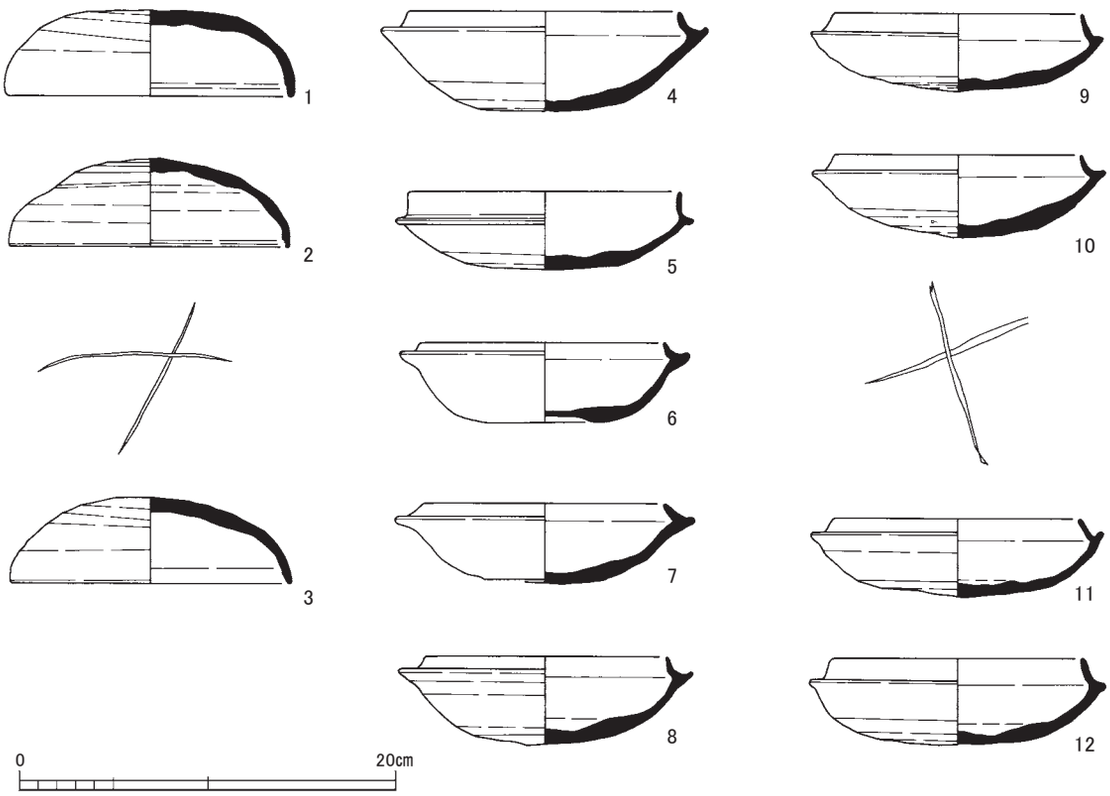
玄室内から出土した土器は、杯Ｈ（４～12）と杯Ｈ蓋（１～３）の２器種からなる（第58図・第59図）。しかし、両者がセットとなって出土したものは認められない。後世に、蓋が開けられた可能性が考えられる。

杯Ｈ　形態的には類似する。しかし、口縁部の立ち上がりの角度、受部の形態に差が認められる。また、底部には、４・５・９～12は1/2強の範囲に、８は1/2弱の範囲に回転ヘラ削りが施されている。なお、６と７については、磨滅が著しく、回転ヘラ削りを含めた調整痕を観察することは困難である。

第 56 図　玄室内土器の検出



第 57 図　石室内遺物出土位置



第 58 図　玄室内出土土器(1)

この他、４の底部内面には同心円状の当具痕が、10の底部外面にはＸ字状のヘラ描きが、それぞれ認められる。

杯Ｈ蓋　基本的形態は同じで、１と３は天井部外面2/3の範囲に、２は1/2の範囲に回転ヘラ削りが施されている。このなかで、１と２の口縁部内面は、強い回転ナデにより段が認められる。また、３の天井部外面には、Ｘ字形のヘラ描きが認められる。

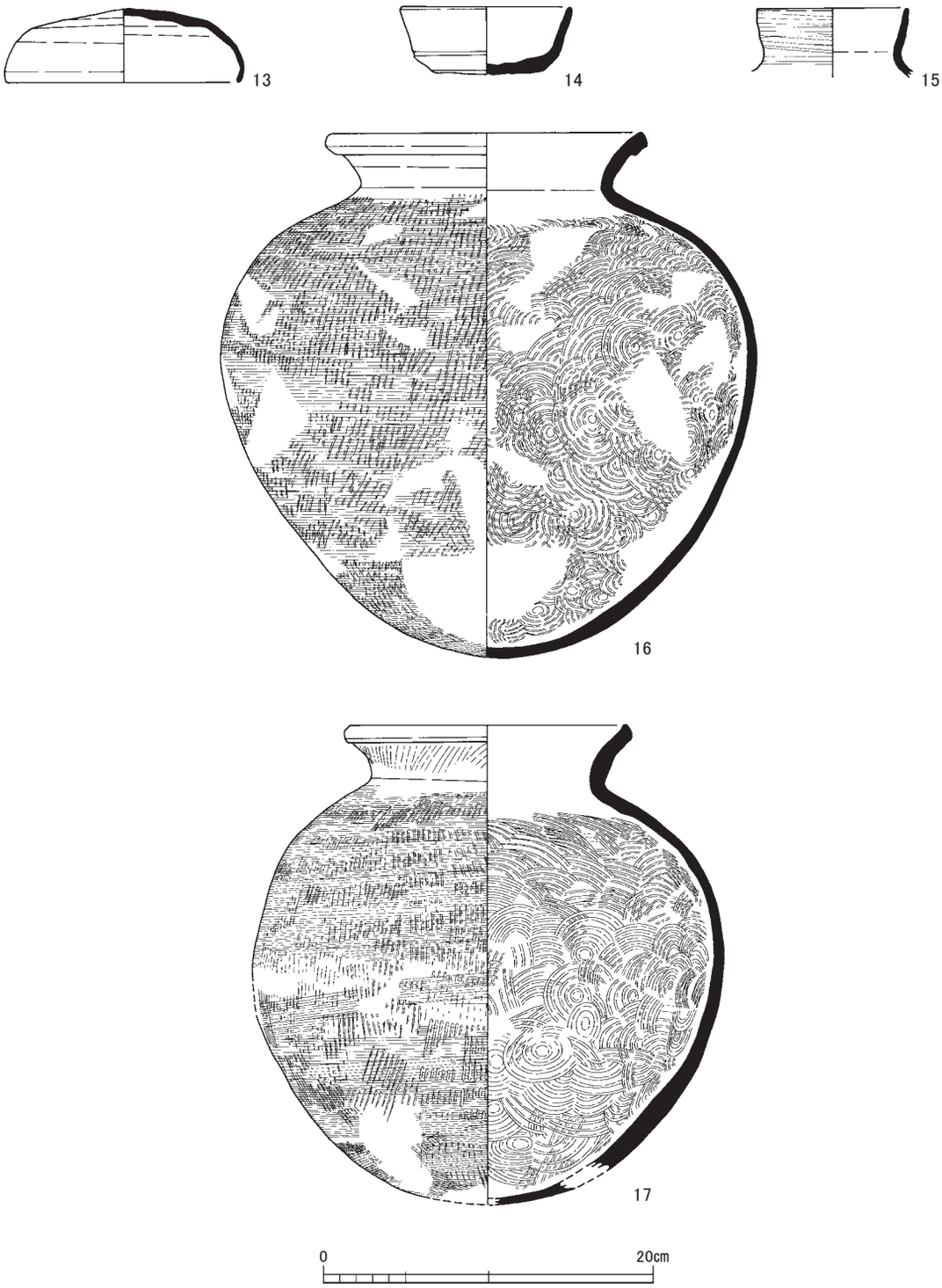
この他、13 ～ 17についても石室内から出土した土器である（第59図）。しかし、これらの土器については、床面で出土したものではなく、床面より遊離した状態で出土したものである。したがって、床面直上から出土した一群とは同等に扱うことはできなく、別扱いで報告する。器種としては、杯Ｈ蓋・杯Ｇ・壺・甕が出土している。

杯Ｈ蓋　13の１個体が出土している。天井部の1/2の範囲に回転ヘラ削りが施されている。石室の羨道側から出土しているが、開口部西側の墳丘斜面から出土した破片と接合関係にある。

杯Ｇ　14の１個体が出土している。深い杯形をなす個体である。底部は、回転ヘラ切りにより切り離されている。また、底部から体部にかけての変換点付近の外面には、1条の沈線が認められる。

壺　15の１個体が出土している。直立する口縁部のみが残存する。内外面とも回転ナデにより仕上げられているが、外面にはカキメが認められる。墳丘南西側斜面および同周溝内から出土した破片との接合関係も認められる。

甕　16と17の２個体が出土している。２個体とも、外面は平行叩きの後カキメが施され、内面は当て具痕が顕著である。また、口縁部は、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。一方、16は、口縁部端部は帯状に肥厚する。また、体部最大径が中位より上にある。また、17は、口縁部内端部を中心とした回転ナデが施され、体部中位に最大径を有する。

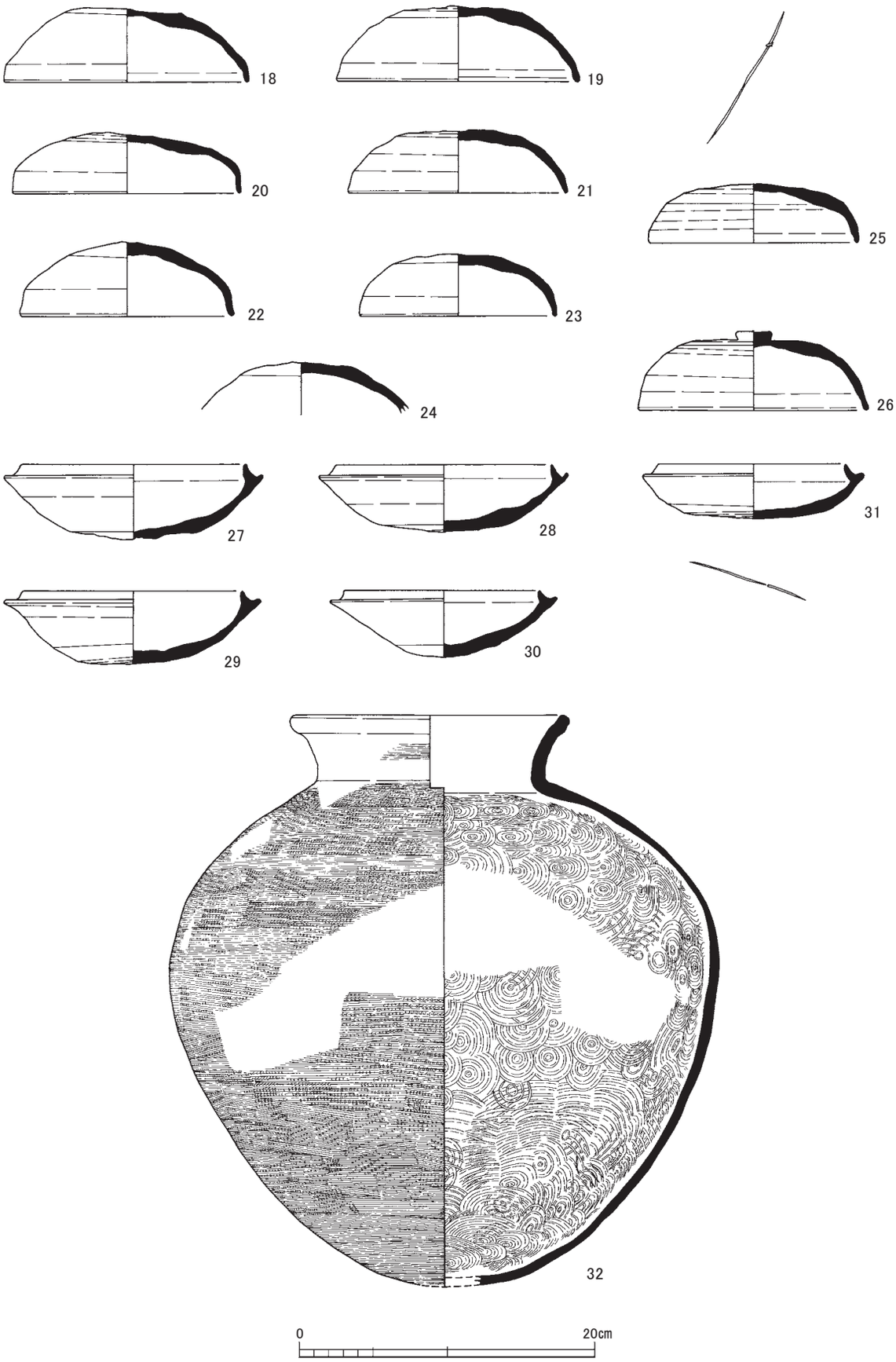


第 59 図　玄室内出土土器(2)

羨道部出土土器　杯Ｈ蓋・杯Ｈ・甕が出土している（第60図）。

杯Ｈ蓋　18 ～ 26の９個体が出土している。18 ～ 25と26とに大きく大別できる。前者は、天井部につまみを有さないタイプで、後者は天井部に釦状のつまみが貼り付けられている。

前者は、基本的な形態は同じである。ただし、天井部の回転ヘラ削りは、18 ～ 20が1/3、21・22が1/2弱、25が2/3に及ぶ範囲に施されている。また、23と24の天井部にはヘラ削り痕は認められず、ユビオサエ痕が認められる。この他、24の内面には同心円文が認められる。25の天井部には、１本のヘラ



第 60 図　羨道部出土土器(1)

描きが認められる。

後者は、天井部の1/3をヘラ削り後、釦状のつまみが貼り付けられている。法量的に深い傾向があるが、つまみを除く形態的特徴は、前者と同じである。

また、21は墳丘南西側周濠内出土土器との接合関係が認められる。

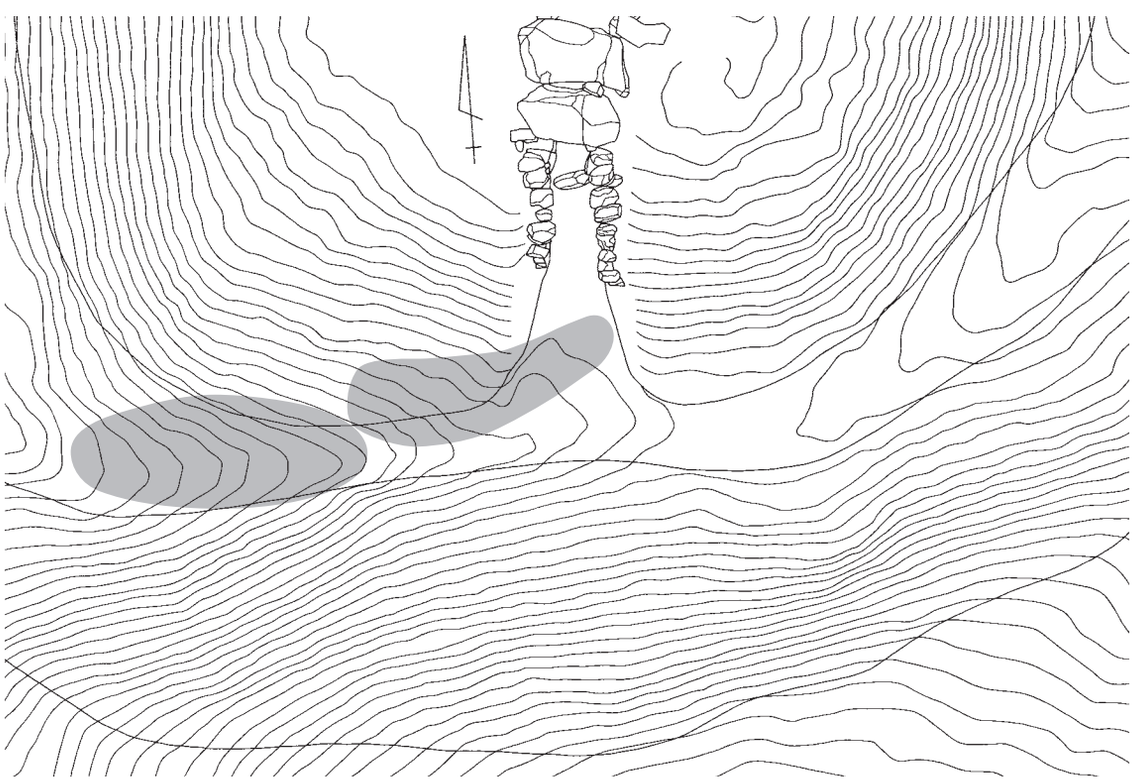
杯Ｈ　27 ～ 31の５個体が出土している。いずれも同タイプに分類されるもので、底部外面はいずれも回転ヘラ切り後未調整である。また、口縁部の立ち上がりが全体的に短い傾向にある。この他、31の底部には、直線状のヘラ描きが認められる。

甕　32の１個体が出土している。外面は平行叩きの後カキメが施され、内面は当て具痕が顕著である。また、口縁部は、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。口縁端部がわずかに帯状に肥厚している。墳丘南西側斜面および南西側周溝内との接合関係も顕著に認められる。

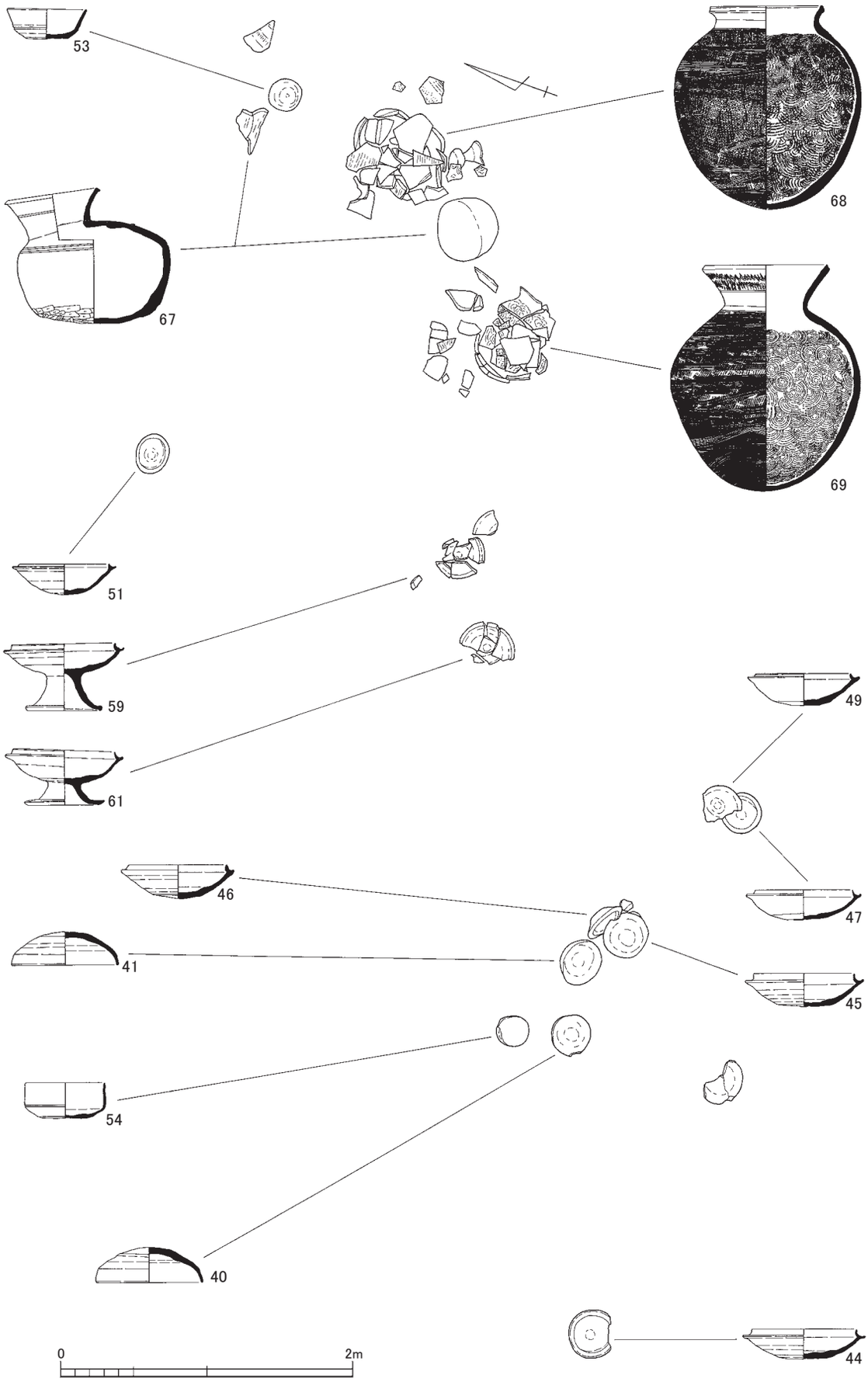
⑶開口部付近出土土器

開口部からその南側周溝、さらにはその西側周溝内から出土した一群である（第61図・第62図）。土師器と須恵器が出土している（第63図・第64図）。特に、開口部付近から出土した土器については、形をとどめた状態で出土している（第62図）。なかでも、68と69の須恵器甕については、その場で押し潰された状態での出土である。また、両者の中間では、平瓶の67が口縁部を下側にした状態で出土している。これらの甕の西側、周溝底からは、須恵器高杯が２点（59・61）まとまって出土している。より西側では、杯Ｈ（44 ～ 47・49）と杯Ｈ蓋（40・41）が出土している。特に杯Ｈが目立つ傾向にある。

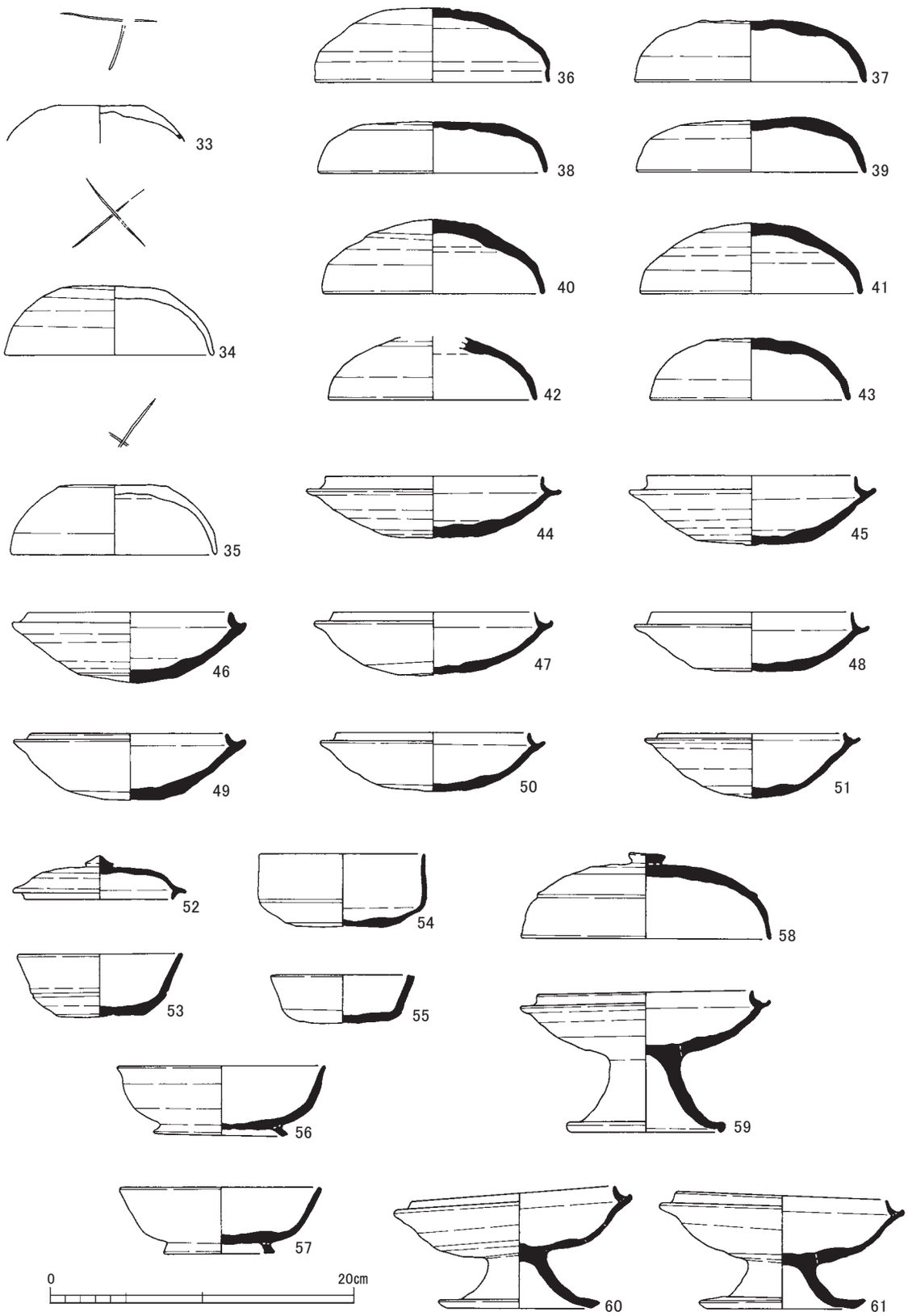
なお、51の杯Ｈのみ、開口部付近の墳丘斜面上から出土しており、その解釈については注意が必要である。



第61図　開口部・周溝　土器出土位置

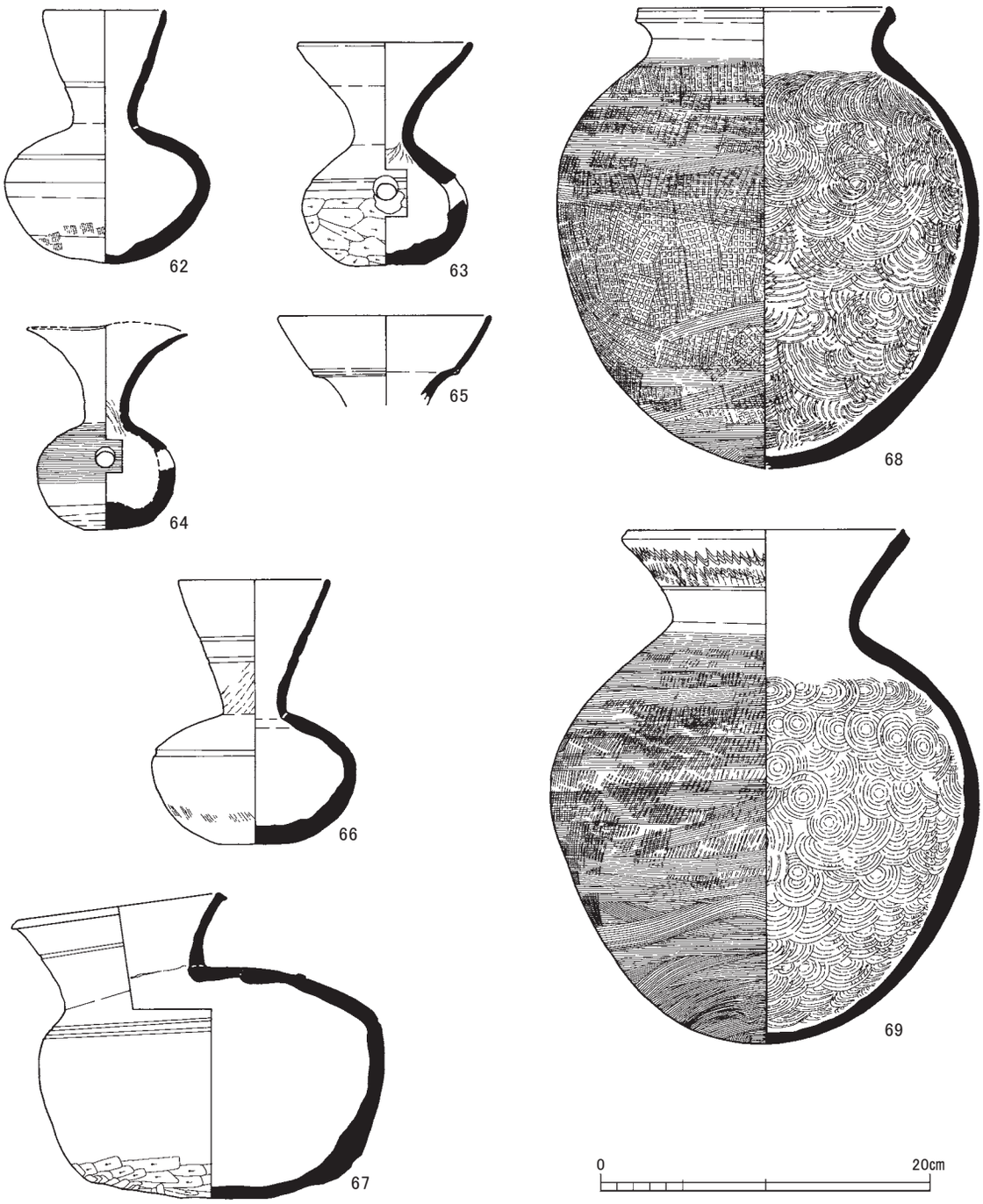


第 62 図　開口部付近土器出土状況



第 63 図　開口部付近周溝内出土土器 (1)

土師器は33 ～ 35の３個体に限られる。33は、口縁部を欠くため、杯もしくは杯蓋の可能性が考えられる。口縁部付近の端部の薄さから判断して、杯蓋に分類した。内外面とも磨滅が著しいため、調整の詳細は観察できないが、天井部外面はヘラナデ、体部内外面は回転ナデにより仕上げられているものと考えられる。天井部外面には、X字形のヘラ描きが認められる。



第 64 図　開口部付近周溝内出土土器 (2)

34の天井部外面には、Ｘ字形のヘラ描きが認められる。35についても、天井部外面に、Ｘ字形と考えられるヘラ描きの一部が認められる。

須恵器は、杯Ｈ蓋・杯Ｈ・杯Ｇ蓋・杯Ｇ・杯Ｂ・高坏蓋・高杯・甕・長頸壺・平瓶・甕の各器種が出土している。

杯Ｈ蓋　36 ～ 43の８個体が出土している。このなかで、42と43は口径が他より明らかに小型である。しかし、これらの口径に対応する杯蓋が出土していないため、杯Ｈ蓋に分類した。天井部外面は、34 ～ 37・40・41・43が回転ヘラ切り、38・39・42が回転ヘラ削りにより仕上げられている。いずれも、体部～口縁部内外面は回転ナデにより仕上げられている。

杯Ｈ　44 ～ 51の８個体が出土している。44 ～ 46・48 ～ 51の底部はヘラ切りより切り離され、47の底部外面は回転ヘラ削りにより仕上げられている。なお、48と49の底部外面には灰被りが認められる。

杯Ｇ蓋　52の１個体が出土している。口縁部の返りは明瞭である。天井部外面は回転ヘラ削り、他は回転ナデにより仕上げられ、宝珠形のつまみが貼り付けられている。

杯Ｇ　53 ～ 55の３個体が出土している。53は、底部外面以外、回転ナデにより仕上げられている。また、体部と口縁部境外面には１条の沈線が認められる。底部は、回転ヘラ切りにより切り離されている。54と55は、底部外面が回転ヘラ削りにより、他は回転ナデにより仕上げられている。また、55の口縁端部は強い回転ナデにより、明確な端面が形成されている。

杯Ｂ　56と57の２個体が出土している。底部には、回転ヘラ切りの後、高台が貼り付けられている。高台の貼り付け位置は、底部から体部への変換部より内側である。他は、回転ナデにより仕上げられている。なお、57の口縁部から体部外面には灰被りが認められる。

高杯蓋　58の１個体が出土している。天井部外面は回転ヘラ削り、他は回転ナデにより仕上げられ、釦形のつまみが貼り付けられている。天井部と口縁部の境外面には、緩やかな段が形成されている。

高杯　59 ～ 61の３個体が出土している。いずれも同タイプに分類されるもので、短脚の上に杯が組み合わされた形態である。脚部には透かし穴は認められない。杯底部付近が回転ヘラ削りにより仕上げられている以外は、回転ナデにより仕上げられている。59の脚部外面、60の口縁部外面、61の口縁部～脚部外面には、灰被りが認められる。

瓻　62 ～ 65の４個体が出土している。62は、体部の穿孔を欠く。外面は、口縁部から体部上半が回転ナデにより、底部がヘラ削りにより、底部と体部の境は板ナデにより、それぞれ仕上げられている。また、底部と体部の境外面には、ハケ状の痕跡が認められる。内面は、全て回転ナデにより仕上げられている。また、口縁部と体部上半の外面には、凹線状の沈線が各１条認められる。

63は、外面が口縁部から体部上半を回転ナデにより、底部を静止ヘラ削りにより、それぞれ仕上げられている。内面は、口縁部から底部にかけて回転ナデにより仕上げられている。体部中位には、径９㎜～２㎝の穿孔が認められる。全体的に器壁が厚い点が特徴的である。

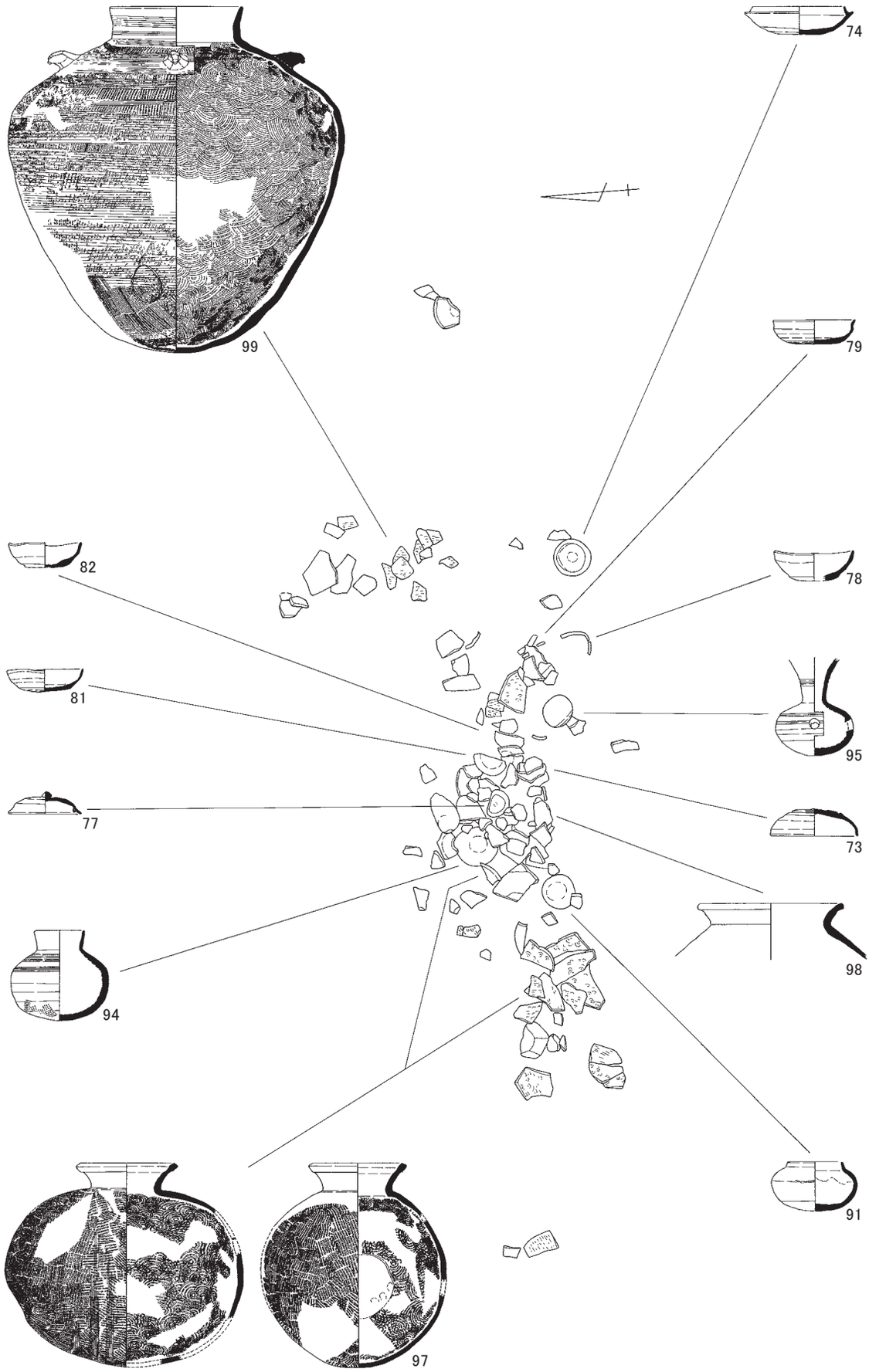
64は、底部外面の回転ヘラ削り以外、回転ナデにより仕上げられている。体部上半にはカキメが施されている。また、体部中位には径1.25㎝の穿孔が認められる。なお、体部中には、穿孔した際に落ち込んだと考えられる粘土塊が残存している。

65は、口縁部のみ残存する。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

長頸壺　66の１個体が出土している。形態的には、瓻と類似するが、体部に穿孔が認められないため、長頸壺として報告する。底部外面が回転ヘラ切り後ナデにより仕上げられている以外は、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。頸部外面には２条の、体部上半には１条の凹線状の沈線が認められる。この他、頸部外面には絞り痕が、体部下半には当て具痕が認められる。

平瓶　67の１個体が出土している。体部上半に把手は貼り付けられず、その痕跡として釦状の浮文が貼り付けられている。口縁部から体部の内外面は回転ナデにより仕上げられ、底部外面は静止ヘラ削りにより仕上げられている。なお、底部内面の調整については、灰被りのため観察できない。この他、外面には、頸部に１条、肩部に２条の凹線状の沈線が認められる。また、体部と口縁部の接合部付近には充填痕が顕著に認められる。

甕　68と69の２個体が出土している。68は体部外面を格子目の叩き整形後カキメを施し、最後に口縁



第 65 図　周溝南西部土器出土状況

部内外面が回転ナデにより仕上げられている。体部内面には当て具痕が顕著に残存する。69は、68と比較して、口縁部が直線的にのび、外面には波状文が施されている。また、体部外面は平行叩きにより成形され、最後にカキメが施されている。なお、口縁部の波状文については、単位は明瞭ではないが、３ないし４条とみられる。

⑷墳丘南西部出土土器

墳丘の南西部裾付近の斜面およびその周囲の周溝内から出土した（第65図）一群である。多くが破片となり、石室内のような形をとどめて出土した個体は杯・杯蓋・小型壺に限られる（写真図版10・11）。これらの土器のなかには、先に報告した開口部付近出土土器と接合関係にある土器(88・97・99)も含まれる。開口部側から流れ込んだものも含まれるものと考えられる。また、第65図以外の土器については、この周溝より北側、墳丘斜面から出土したものである。杯Ｈ蓋・杯Ｈ・杯Ｇ蓋・杯・鉢・高杯・壺蓋・壺・甕・甕の各器種が出土している（第66図・第67図）。

杯Ｈ蓋　70 ～ 73の４個体が出土している。天井部外面は、70 ～ 72が回転ヘラ切り、73が回転ヘラ削りにより仕上げられている。いずれも、体部～口縁部内外面は回転ナデにより仕上げられている。

杯Ｈ　74 ～ 76の３個体が出土している。75と76の底部はヘラ切りより切り離され、74の底部外面は回転ヘラ削りにより仕上げられている。また､75の体部外面には回転ヘラ削り痕がわずかに認められる。なお、74の底部外面には灰被りが認められる。

杯Ｇ蓋　77の１個体が出土している。口縁部の返りは52と比べてわずかで、突帯状をなす。天井部外面は回転ヘラ削り、他は回転ナデにより仕上げられ、宝珠形のつまみが貼り付けられている。

杯Ｇ　78 ～ 83の６個体が出土している。77に対応する器種として報告する。先に報告した杯Ｈ蓋(70 ～ 73)に対して、①口径が小さい、②体部と口縁部の境に変換点が認められる、の２点をもとに、杯Ｇ蓋と区別している。

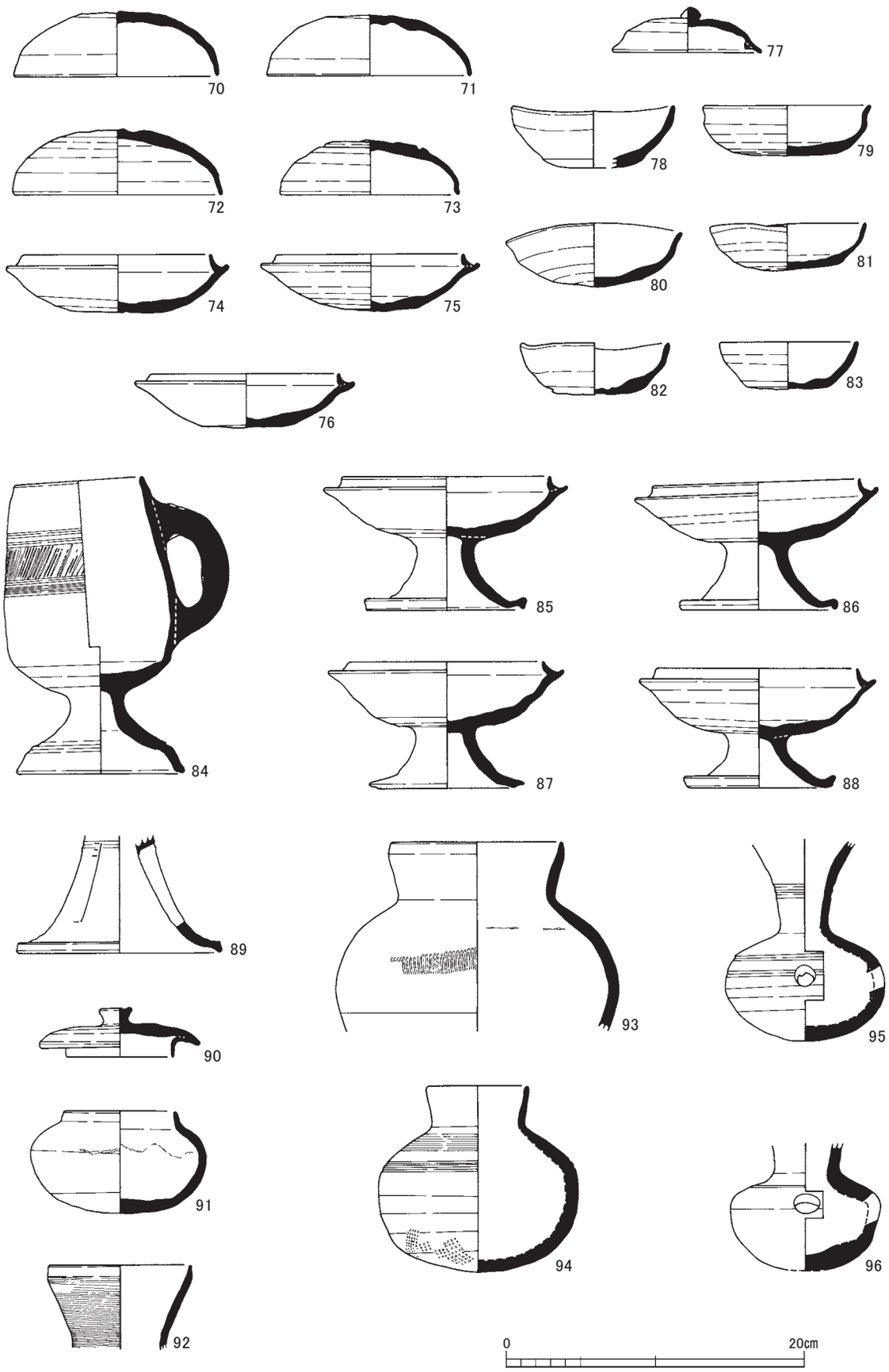
内外面とも回転ナデを基調とし、78の底部外面はヘラ切り後ナデにより仕上げられている。また、79は、回転ヘラ切りにより切り離されている。この他80 ～ 82も、回転ヘラ切りにより切り離されている。80は、全体的にひずみが顕著である。82は、内面全面に灰被りが認められる。83についても、回転ヘラ切りにより切り離されているが、体部との境外面にヘラ削り痕も認められる。

把手付鉢　84の１個体が出土している。短脚にジョッキ形の鉢が付くタイプである。鉢部は回転ナデを基調とし、底部内面のみナデにより仕上げられている。外面中位には、２条（上側）と３条（下側）の沈線に区画された中に斜行する刻み目が施されている。また、取手が１箇所、従位に貼り付けられている。把手は、ナデにより仕上げられている。脚部は、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。外面に灰被りが認められる。

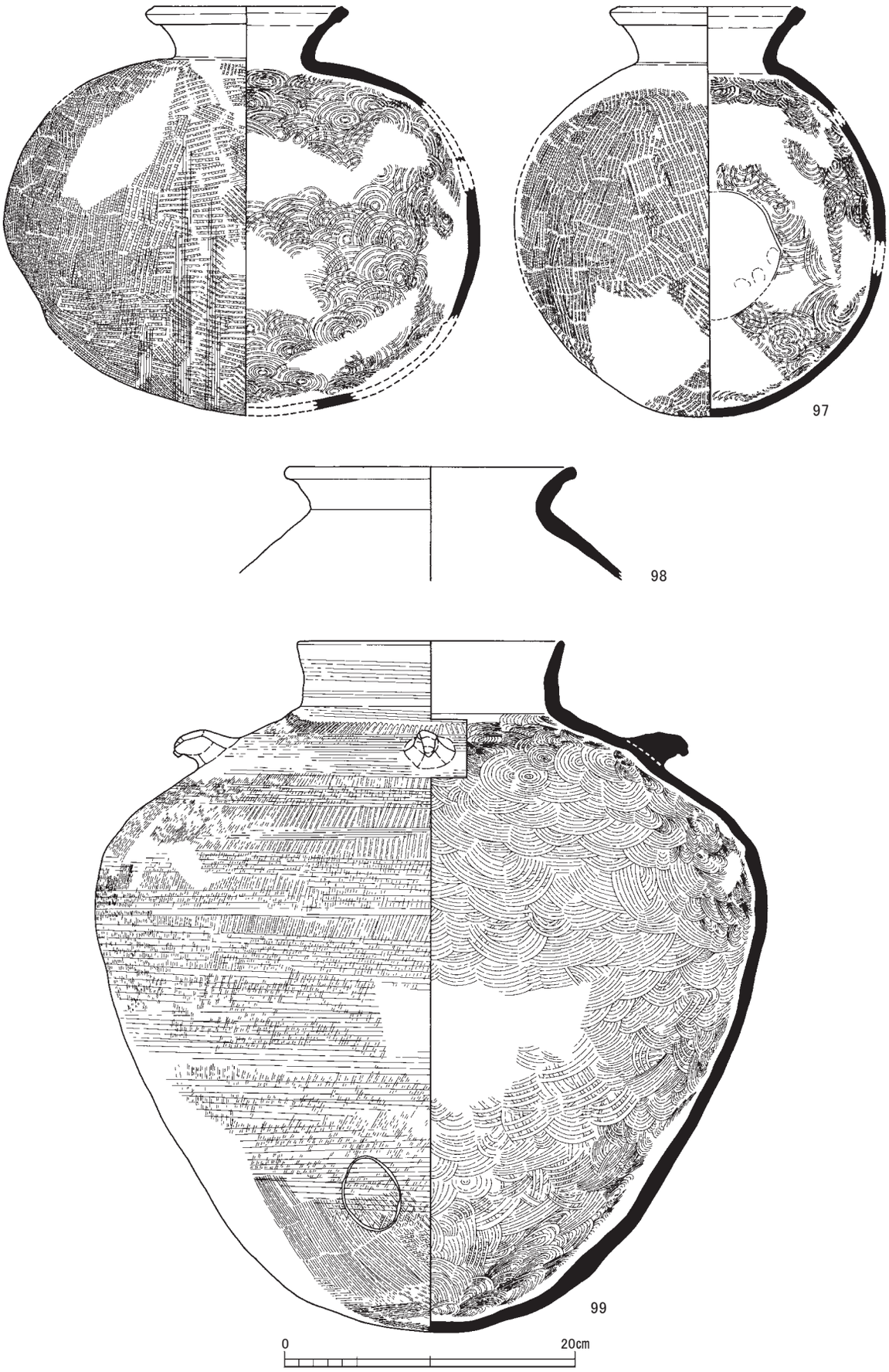
高杯　短脚の有蓋高杯と長脚の高杯が出土している。

有蓋高杯は85 ～ 88の４個体が出土している。いずれも、短脚に杯身が付くタイプである。内外面とも回転ナデが基本であるが、杯底部外面、脚部との接合部付近は、回転ヘラ削りが施されている。また、86の外面片側には灰被りが認められる。

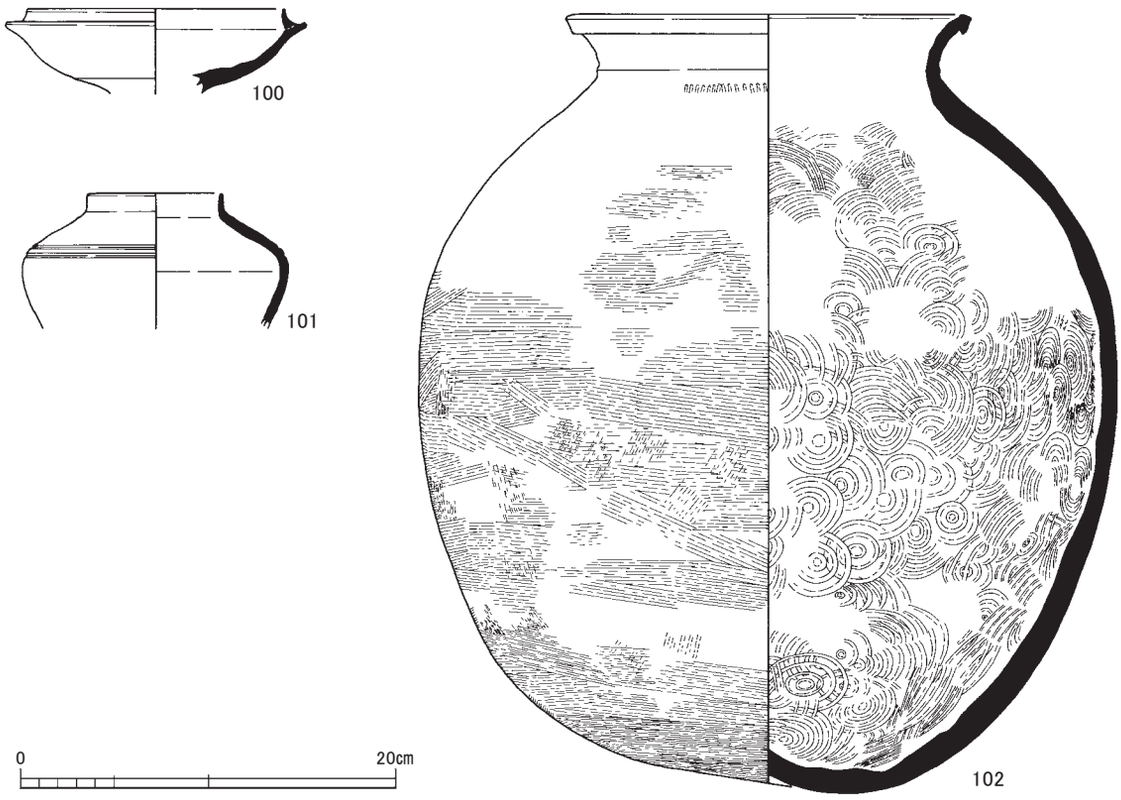
長脚の高杯は89の１個体が出土している。脚下半のみの残存である。長方形透かしが２箇所残存する。その位置関係から、当初は３箇所に開けられていたものと考えられる。透かしの上側には、凹線状の沈



第 66 図　周溝内南西部出土土器 (1)



第 67 図　周溝内南西部出土土器 (2)



第 68 図　墳丘東側出土土器

第２表　出土土器観察表(1)

報告番号	種　別	器　種	出　土　地　区	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	焼　成
1	須恵器	杯H蓋	玄室	15.05	4.55		普通
2	須恵器	杯H蓋	玄室	14.70	4.70		普通
3	須恵器	杯H蓋	玄室	14.80	4.60		普通
4	須恵器	杯H	玄室	14.40	5.35	11.90	不良
5	須恵器	杯H	玄室	(14.40)	4.20	10.55	普通
6	須恵器	杯H	玄室	12.90	4.30		不良
7	須恵器	杯H	玄室	(12.70)	4.35	6.40	不良
8	須恵器	杯H	玄室	12.80	4.80	7.40	普通
9	須恵器	杯H	玄室	13.10	4.20	10.60	普通
10	須恵器	杯H	玄室	13.10	4.40	11.40	普通
11	須恵器	杯H	玄室	13.05	4.20	10.65	普通
12	須恵器	杯H	玄室	13.25	4.65	12.50	普通
13	須恵器	杯H蓋	玄室	14.10	4.50		普通
14	須恵器	杯G	玄室	(10.30)	4.10	6.90	普通
15	須恵器	壺	玄室	(9.00)	(4.20)		普通
16	須恵器	甕	玄室	18.80	31.90		普通
17	須恵器	甕	玄室	16.90	29.20		普通
18	須恵器	杯H蓋	羨道部	16.50	5.00		普通
19	須恵器	杯H蓋	羨道部	16.30	5.10		普通
20	須恵器	杯H蓋	羨道部	15.30	4.00		普通
21	須恵器	杯H蓋	羨道部	14.70	4.30		普通
22	須恵器	杯H蓋	羨道部	14.30	5.10		普通
23	須恵器	杯H蓋	羨道部	13.20	4.20		普通
24	須恵器	杯H蓋	羨道部		(3.60)		普通
25	須恵器	杯H蓋	羨道部	14.10	4.00		普通
26	須恵器	杯H蓋	羨道部	15.40	5.40		普通
27	須恵器	杯H	羨道部	15.20	5.10	8.80	普通
28	須恵器	杯H	羨道部	14.60	4.80	8.70	普通
29	須恵器	杯H	羨道部	14.80	5.00		普通
30	須恵器	杯H	羨道部	13.20	4.50	7.10	普通
31	須恵器	杯H	羨道部	12.60	3.70	11.20	普通
32	須恵器	甕	開口部	(18.10)	38.90		普通
33	土師器	杯H蓋	開口部周辺周溝		(2.40)	7.00	不良
34	土師器	杯H蓋	開口部周辺周溝	(13.60)	4.60	6.90	不良

線が１条認められる。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

壺蓋　90の１個体が出土している。口縁部の返りが長く直立することから、壺の蓋と判断したものである。天井部外面は回転ヘラ削り、他は回転ナデにより仕上げられ、宝珠形のつまみが貼り付けられている。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、天井部外面のみヘラ削りが加えられている。その後、釦状をなすつまみが貼り付けられている。

壺　短頸壺・提瓶・横瓶が出土している。

短頸壺は、91と93・94の３個体出土している。91は、ほぼ完存する個体で、底部外面を除いて回転ナデにより仕上げられている。底部外面は、静止ヘラ削りにより仕上げられている。93は、やや大型の短頸壺である。回転ナデを基本とするが、体部下端はヘラ削りの後ナデにより仕上げられている。また、体部は叩き整形後に回転ナデが加えられているが、肩部外面には平行叩きが残存している。94は完存する短頸壺である。体部は、格子叩きによる整形後、肩部から口縁部にかけてが回転ナデ、体部中位が回転ヘラ切り、底部がナデにより仕上げられている。また、肩部外面には凹線状の沈線が２条認められる。内面全面と体部上半以上の外面には灰被りが認められる。

提瓶は92の１個体が出土している。口縁部のみの残存で、内外面とも回転ナデにより仕上げられ、外面にはカキメが施されている。

横瓶は97の１個体が出土している。部分的に欠くが、全体が復元できた個体である。体部は、格子状に平行叩き整形後、縦方向のカキメが部分的に加えられている。また、体部中位の最大径部には充填痕が認められる。口縁部は、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

残　　存	備　　考	挿図№	図版番号	報告番号
ほぼ完存		58	33	1
完存		58	33	2
ほぼ完存	ヘラ描きあり	58	33	3
口縁部 3/4・底部完存	内面車輪文	58	33	4
口縁部 1/4・底部完存		58	33	5
口縁部～底部 1/2		58	33	6
口縁部わずか・底部完存		58	33	7
ほぼ完存		58	33	8
ほぼ完存		58	33	9
ほぼ完存	ヘラ描きあり	58	34	10
ほぼ完存		58	34	11
口縁部 2/3・底部完存		58	34	12
口縁部 5/6	胎土分析	59	34	13
口縁部 1/2・底部完存	胎土分析	59	34	14
口縁部 5/8	胎土分析	59	－	15
口縁部 1/2 強・体部 3/4		59	34	16
口縁部 2/3・体部 5/6	胎土分析	59	34	17
完存		60	35	18
ほぼ完存	胎土分析	60	35	19
天井部完存・口縁部 3/4	胎土分析	60	35	20
天井部完存・口縁部 3/4	胎土分析	60	35	21
完存		60	35	22
ほぼ完存		60	35	23
天井部 4/5		60	－	24
完存	ヘラ描きあり	60	35	25
天井部完存・口縁部 4/7	胎土分析	60	35	26
ほぼ完存		60	35	27
ほぼ完存		60	35	28
ほぼ完存		60	36	29
ほぼ完存		60	36	30
口縁部 5/6	胎土分析　ヘラ描きあり	60	36	31
口縁部 3/4	胎土分析	60	36	32
底部完存	ヘラ描きあり	63	－	33
口縁部 5/9	胎土分析　ヘラ描きあり　黒斑有	63	36	34

第３表　出土土器観察表(2)

報告番号	種　別	器　種	出　土　地　区	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	焼　成
35	土師器	杯H蓋	開口部周辺周溝	(13.40)	4.70	(7.20)	不良
36	須恵器	杯H蓋	開口部周辺周溝	(15.30)	4.90		普通
37	須恵器	杯H蓋	開口部周辺周溝	15.20	4.10		普通
38	須恵器	杯H蓋	開口部周辺周溝	(14.90)	3.40		普通
39	須恵器	杯H蓋	開口部周辺周溝	15.00	3.50		普通
40	須恵器	杯H蓋	開口部周辺周溝	14.40	4.90		普通
41	須恵器	杯H蓋	開口部周辺周溝	14.40	4.70		普通
42	須恵器	杯H蓋	開口部周辺周溝	(13.50)	(4.10)	(7.50)	普通
43	須恵器	杯H蓋	開口部周辺周溝	13.00	4.10		普通
44	須恵器	杯H	開口部周辺周溝	14.30	4.60	7.10	普通
45	須恵器	杯H	開口部周辺周溝	13.80	4.60	7.40	普通
46	須恵器	杯H	開口部周辺周溝	13.30	4.70	6.60	普通
47	須恵器	杯H	開口部周辺周溝	13.30	4.20	9.90	普通
48	須恵器	杯H	開口部周辺周溝	13.20	3.90	7.20	普通
49	須恵器	杯H	開口部周辺周溝	12.90	4.40	7.70	普通
50	須恵器	杯H	開口部周辺周溝	12.70	3.90	7.10	普通
51	須恵器	杯H	開口部周辺周溝	12.30	4.30		普通
52	須恵器	杯G蓋	開口部周辺周溝	9.70	2.90		普通
53	須恵器	杯G	開口部周辺周溝	10.80	4.20	6.00	普通
54	須恵器	杯G	開口部周辺周溝	(10.80)	4.80	7.50	普通
55	須恵器	杯G	開口部周辺周溝	8.70	3.20	7.90	普通
56	須恵器	杯B	開口部周辺周溝	13.50	4.70	8.90	普通
57	須恵器	杯B	開口部周辺周溝	(13.10)	4.40	7.30	普通
58	須恵器	高杯蓋	開口部周辺周溝	16.40	5.60		普通
59	須恵器	高杯	開口部周辺周溝	(14.10)	(9.40)	(10.50)	普通
60	須恵器	高杯	開口部周辺周溝	13.45	6.10	11.15	普通
61	須恵器	高杯	開口部周辺周溝	13.80	7.70	11.00	普通
62	須恵器	瓏	開口部周辺周溝	7.30	15.40		普通
63	須恵器	瓏	開口部周辺周溝	10.35	13.60		普通
64	須恵器	瓏	開口部周辺周溝	(9.75)	(12.60)		普通
65	須恵器	瓏	開口部周辺周溝	12.80	(5.50)		普通
66	須恵器	長頸壺	開口部周辺周溝	8.90	16.00	4.90	普通
67	須恵器	平瓶	開口部周辺周溝	(12.30)	18.55		普通
68	須恵器	甕	開口部周辺周溝	15.05	27.90		普通
69	須恵器	甕	開口部周辺周溝	16.75	31.10		普通
70	須恵器	杯H蓋	墳丘南西部	13.60	4.40		普通
71	須恵器	杯H蓋	墳丘南西部	13.60	4.10		普通
72	須恵器	杯H蓋	墳丘南西部	13.90	4.50		普通
73	須恵器	杯H蓋	墳丘南西部	11.90	3.70		普通
74	須恵器	杯H	墳丘南西部	12.55	3.95	10.20	普通
75	須恵器	杯H	墳丘南西部	12.50	3.90	6.90	普通
76	須恵器	杯H	墳丘南西部	12.50	3.70	6.40	普通
77	須恵器	杯G蓋	墳丘南西部	9.70	3.10		普通
78	須恵器	杯G	墳丘南西部	(10.75)	4.15	(6.75)	不良
79	須恵器	杯G	墳丘南西部	11.00	3.40	7.90	普通
80	須恵器	杯G	墳丘南西部	11.70	4.30	7.90	普通
81	須恵器	杯G	墳丘南西部	10.40	3.10	7.30	普通
82	須恵器	杯G	墳丘南西部	9.85	3.50	6.65	普通
83	須恵器	杯G	墳丘南西部	9.10	3.20	5.50	普通
84	須恵器	把手付鉢	墳丘南西部	8.45	19.95	11.30	普通
85	須恵器	有蓋高杯	墳丘南西部	14.00	9.00	10.50	普通
86	須恵器	有蓋高杯	墳丘南西部	13.95	8.80	10.70	普通
87	須恵器	有蓋高杯	墳丘南西部	(13.00)	(8.50)	9.10	普通
88	須恵器	有蓋高杯	墳丘南西部	(13.50)	8.10	8.90	普通
89	須恵器	高杯	墳丘南西部		(7.90)	(13.50)	普通
90	須恵器	壺蓋	墳丘南西部	7.10	3.30		普通
91	須恵器	短頸壺	墳丘南西部	7.40	6.90	9.70	普通
92	須恵器	提瓶	墳丘南西部	(9.50)	(5.70)		普通
93	須恵器	短頸壺	墳丘南西部	(11.40)	(12.75)		普通
94	須恵器	短頸壺	墳丘南西部	6.10	12.60		普通
95	須恵器	瓏	墳丘南西部		(13.40)		普通
96	土師器	瓏	墳丘南西部		(8.50)		普通
97	須恵器	横瓶	墳丘南西部	(12.95)(12.3)	28.30		普通
98	須恵器	甕	墳丘南西部	(19.60)	(7.80)		普通
99	須恵器	四耳壺	墳丘南西部	(18.10)	47.70		普通
100	須恵器	有蓋高杯	墳丘北東部	(13.60)	(4.50)		普通
101	須恵器	短頸壺	墳丘南東部	(7.00)	(7.20)		普通
102	須恵器	甕	石室上層	(20.70)	41.55		普通

残　　存	備　　考	挿図№	図版番号	報告番号
口縁部 1/5	ヘラ描きあり	63	36	35
天井部 3/4	胎土分析	63	36	36
天井部 5/6・口縁部 4/5	胎土分析	63	36	37
天井部 1/2 弱・口縁部 1/4	胎土分析	63	―	38
天井部ほぼ完存・口縁部 2/3	胎土分析	63	36	39
ほぼ完存		63	37	40
ほぼ完存		63	37	41
口縁部 1/4		63	37	42
天井部ほぼ完存・口縁部 2/3	胎土分析	63	37	43
口縁部 2/3	胎土分析	63	37	44
口縁部 7/8		63	37	45
完存		63	37	46
口縁部 7/8	胎土分析	63	37	47
口縁部 4/5		63	37	48
ほぼ完存		63	37	49
口縁部 7/8		63	37	50
完存		63	37	51
ほぼ完存		63	38	52
ほぼ完存		63	38	53
ほぼ完存		63	38	54
口縁部 1/4	胎土分析	63	38	55
口縁部 2/3	胎土分析	63	38	56
口縁部 1/4 弱	胎土分析	63	38	57
口縁部 2/3		63	38	58
口縁部 2/3	胎土分析	63	38	59
口縁部 5/6	胎土分析	63	38	60
口縁部 1/2	胎土分析	63	38	61
口縁部 4/5		64	39	62
口縁部 2/3・体部完存		64	39	63
口縁部 1/2・底部完存	胎土分析	64	39	64
口縁部 5/6	胎土分析	64	―	65
ほぼ完存		64	39	66
口縁部 1/6	胎土分析	64	40	67
口縁部 3/5	胎土分析	64	40	68
底部ほぼ完存	胎土分析	64	40	69
口縁部 1/2		66	40	70
口縁部 2/3	胎土分析	66	40	71
ほぼ完存		66	40	72
口縁部 3/5		66	40	73
ほぼ完存		66	40	74
口縁部 2/5		66	41	75
口縁部 2/3		66	41	76
ほぼ完存		66	41	77
口縁部 1/2		66	41	78
口縁部 4/5		66	41	79
ほぼ完存	9.40（口径最小値）	66	41	80
ほぼ完存		66	41	81
ほぼ完存		66	41	82
ほぼ完存		66	41	83
口縁部 7/8		66	42	84
口縁部 1/2・脚部 3/4		66	41	85
口縁部 3/4・底部完存		66	42	86
口縁部 1/4・脚部 5/6	胎土分析	66	―	87
杯部完 脚部 4/7		66	42	88
脚部 1/6	胎土分析	66	―	89
ほぼ完存		66	42	90
ほぼ完存		66	42	91
口頸部 3/4	胎土分析	66	―	92
口縁部 1/2		66	42	93
完存		66	42	94
頸部 1/3・底部完存		66	43	95
体部のみ完		66	43	96
口縁部 3/5・体部 3/4		67	43	97
口縁部 1/7	胎土分析	67	―	98
口縁部 1/4	胎土分析	67	43	99
口縁部 1/8		68	―	100
口縁部 1/4	胎土分析	68	―	101
口縁部 3/4	胎土分析	68	43	102

瓿　95と96の２個体が出土している。95は、体部上半外面と口頸部内外面が回転ナデにより、体部中位外面が回転ヘラ削り後ナデにより、底部外面がユビオサエ後ナデにより仕上げられている。体部内面については、残存状況が良好なため、観察できない。体部中位には径1.4㎝の穿孔が認められる。また、頸部には凹線状の沈線が２条認められる。体部中位には径1.8㎝の円孔が穿たれている。

96は、体部を中心に残存する。全体的に磨滅傾向が顕著で、詳細な調整を観察することは困難である。

甕　98の１個体が出土している。98は、磨滅が著しく、内外面の調整は観察できない。

壺　99は、倒卵形の体部に口縁部が直立する。肩部口縁部付近には耳が貼り付けられている。３箇所残存するが、その位置関係から、当初は４箇所に貼り付けられていたものと考えられる。体部は、平行叩きによる整形後、横位のカキメが加えられている。また、底部付近の外面には楕円形をなすヘラ描きが認められる。口縁部は内外面とも回転ナデにより仕上げられ、最後に外面にカキメが施されている。

⑸墳丘東側出土土器

高杯(100)・短頸壺(101)・甕(102)の３点が出土している。

高杯　有蓋高杯の杯部片が出土している。杯部下端に脚部との接合痕がわずかに認められる。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

短頸壺　体部下半から口縁部にかけて残存する。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。頸部外側には重ね焼き痕が認められる。また、肩部には凹線状の沈線が２条認められる。

甕　倒卵形の体部に外反する口縁部が付く。口縁端部は、内端部を内側水平方向、外端部を下方向へつまみだされ、顕著に肥厚している。内外面とも、回転ナデにより仕上げられている。体部は、平行叩きによる整形後、ナデが加えられ、最後に横位のカキメが加えられている。

２．金属製品

武器類・工具類・装飾具が出土している。いずれも玄室内から出土している。出土位置を記録できたものはわずかであるが、直刀のＭ１は、立柱石の北側東壁際から出土している(第57図・写真図版27上)。副葬当初の状態は保たれていないと考えられるが、刃先が羨道部方向を向いた状態で出土している。この他、刀子のＭ35がＭ１の北側から出土している。さらに、Ｍ１と重なるようにして鉄鏃の茎が出土している。また、耳環のＭ36については、玄室のほぼ中央部から出土している(第57図・写真図版27下)。

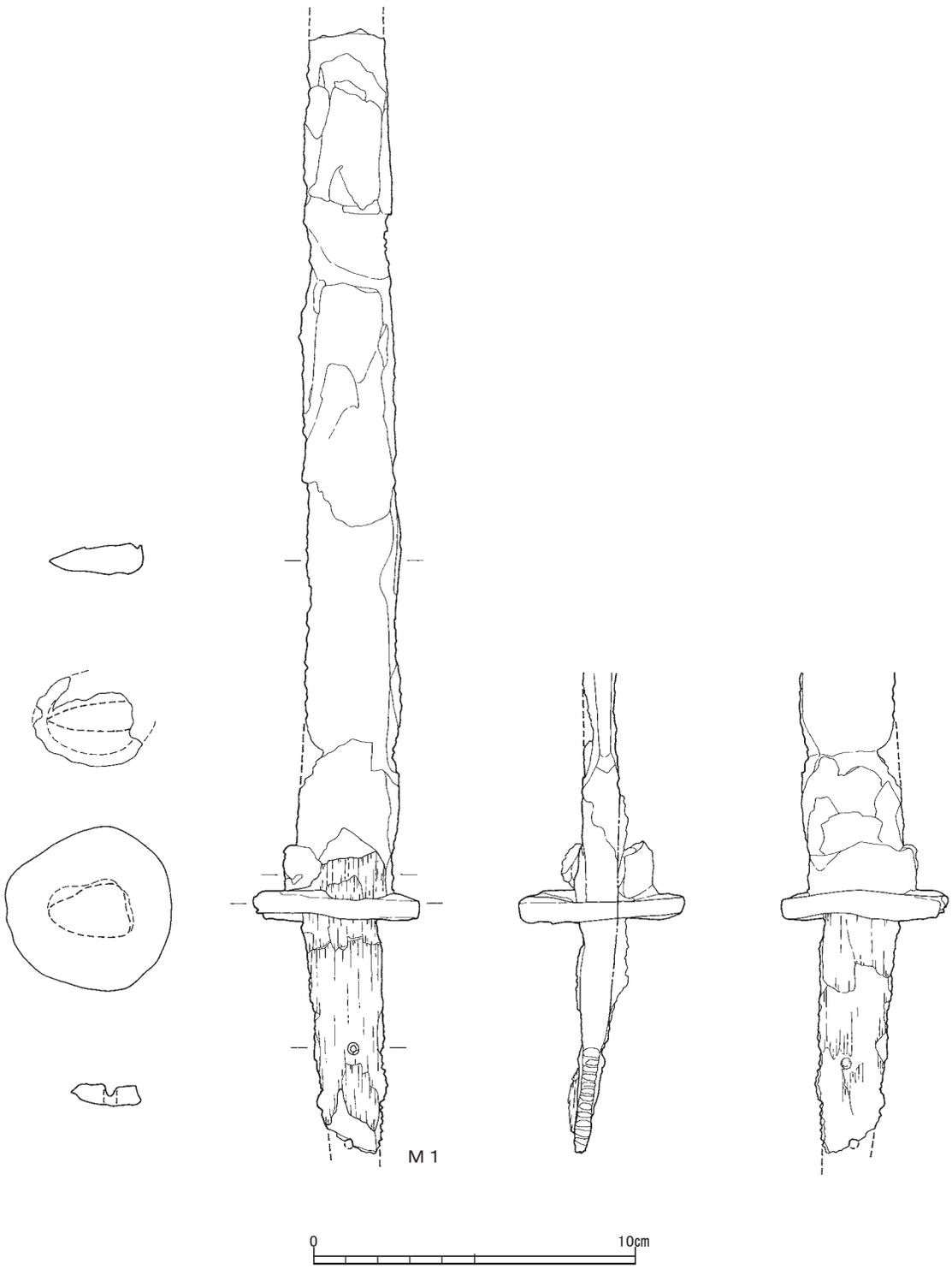
⑴武器類

直刀と鉄鏃が出土している。

直刀　６点(Ｍ１～Ｍ６)出土している(第69図・第70図)。

Ｍ１(写真図版44)は、最も良好に残存する直刀で、鍔が付着した状態で刃部と茎部が残存する。全長35.05㎝残存する。刃部は26.85㎝残存し、棟幅は9.5㎜を測る。断面は片刃部分のみ鋭角な三角形をなす。茎部は8.20㎝残存し、全面に木質が残存する。また、棟部には紐痕が認められる。鍔付近における幅2.50㎝、厚さ７㎜を測る。また、目釘穴が２穴認められる。その径は７㎝を測るが、１穴は貫通していない。鍔は、茎部に装着されており、平面形は無花果形をなす。最大幅5.10㎝、高さ5.15㎝、厚さ9.5㎜を測る。細工は認められない。

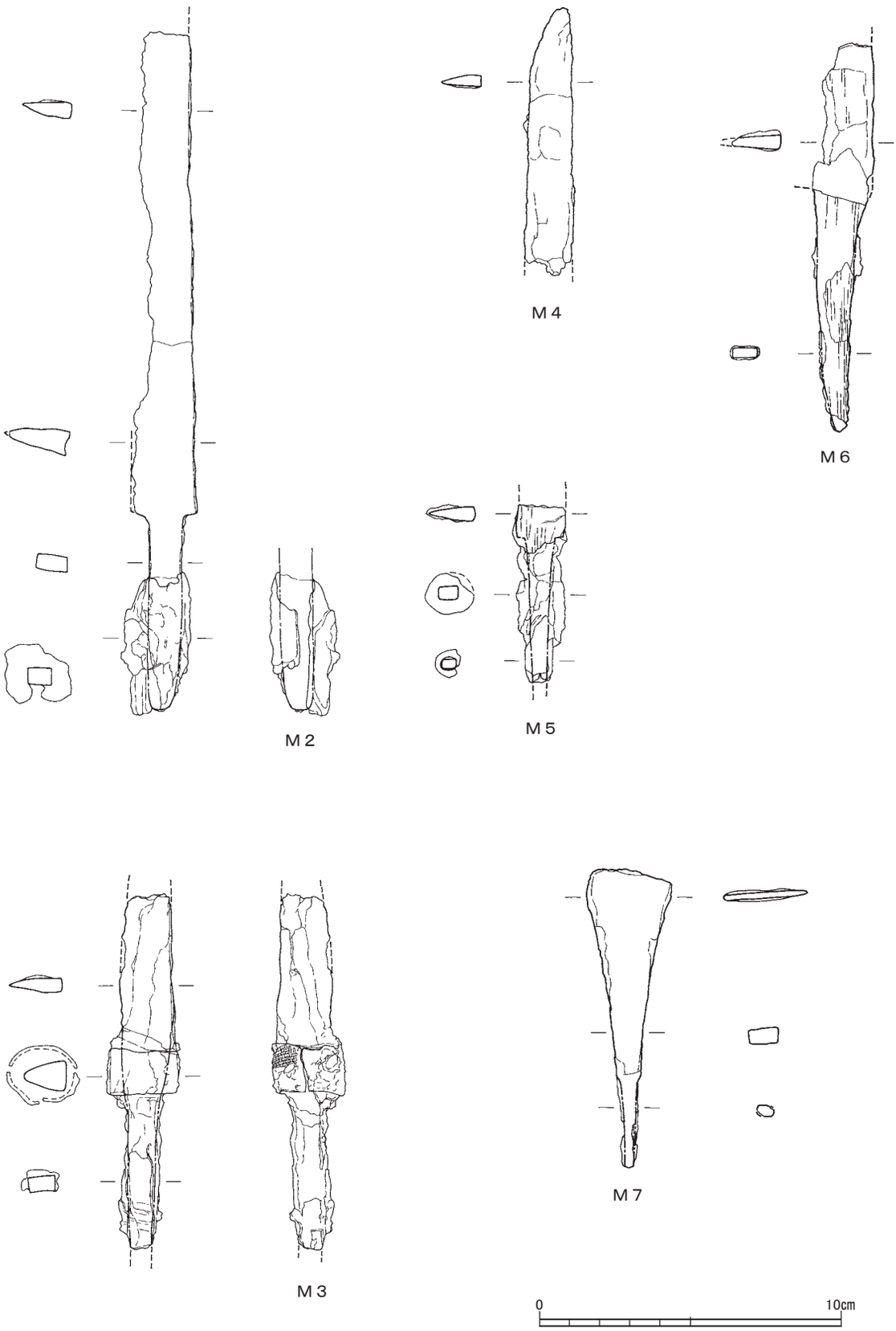
Ｍ２(写真図版45)は、刃部と茎部が残存する。刃部は16.0㎝残存し、片刃をなす。断面形は鋭角な



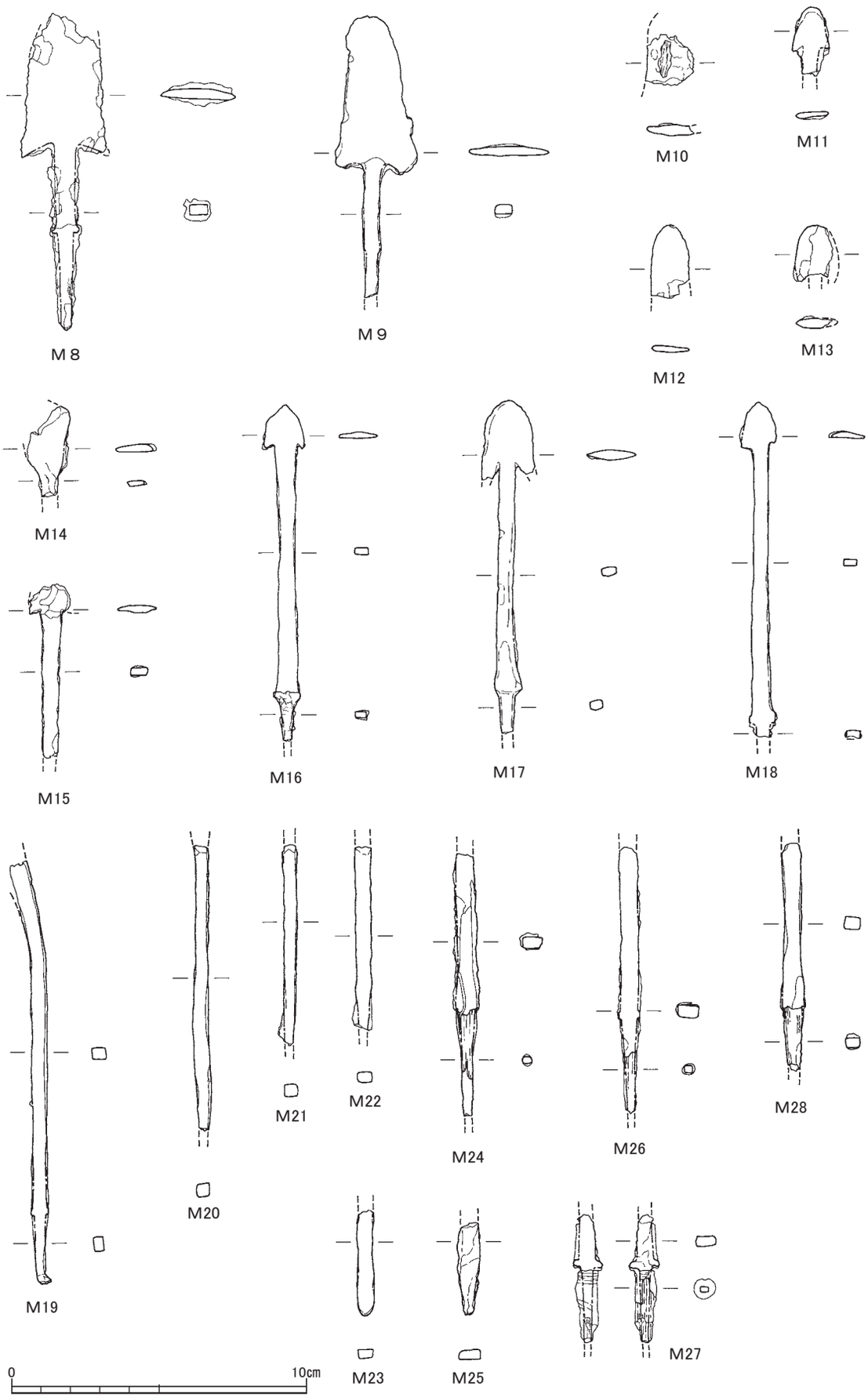
第 69 図　出土金属製品 (1)

三角形をなす。刃幅は、関部付近で2.15 ㎝、刃先側で1.60 ㎝を測り、棟幅は関部側で9.5 ㎜、刃先側で６㎜である。刃部と茎部の境には、棟側に４㎜、刃側に５㎜の関がついている。茎部は6.5 ㎝残存し、鹿角の装着が認められる。最大で７㎜の厚さが認められる。断面は、1.05 ㎝×７㎜の長方形をなす。

Ｍ３(写真図版45)は、刃部と茎部が残存する。刃部は6.70 ㎝残存し、片刃をなす。断面は鋭角な三角形をなし、刃幅1.75 ㎝、棟幅５㎜を測る。関には幅1.50 ㎝におよぶはばきが認められ、外面に布目



第 70 図　出土金属製品 (2)



第 71 図　出土金属製品 (3)

の付着が認められる。茎部は5.10 ㎝残存する。断面は６㎜×９㎜の長方形をなす。

Ｍ４(写真図版45)は、刃部の一部が残存する。8.9 ㎝残存する。断面は鋭角三角形をなし、刃幅は1.6 ㎝、棟幅は４㎜を測る。

Ｍ５(写真図版45)は、刃部から茎部にかけて5.9 ㎝残存する。刃部は一部のみの残存で、残存長は1.1 ㎝である。横断面は鋭角三角形をなし、棟幅は4.5 ㎜を測る。わずかに木質の残存が認められる。茎部は4.8 ㎝残存する。全面に鹿角の装着が認められる。鹿角の最大厚は4.5 ㎜を測る。茎部の横断面は、関部付近で4.5 ㎜×6.5 ㎜、先端付近で4.5 ㎜×３㎜の長方形をなす。

Ｍ６(写真図版45)は、刃部と茎部の一部が12.9 ㎝残存する。刃部は5.4 ㎝残存する。断面形は鋭角三角形をなすと考えられるが、刃先を欠く。刃幅は最大で1.7 ㎝残存し、棟幅は５㎜を測る。茎部はほぼ完存し、7.5 ㎝を測る。ほぼ全面に木質の付着が認められる。断面は、8.5 ㎜×3.5 ㎜の長方形をなす。

鉄鏃　22点(Ｍ７～Ｍ28)出土している(第70図・第71図)。

Ｍ７(写真図版46)は、茎部の先端を除いてほぼ完存する。残存長は9.9 ㎝を測る。鏃身部は方頭形をなすが、先端は軸に対して直交せず、斜行している。使用による結果と考えられる。先端部の幅は2.8 ㎝である。横断面は平造で、中央部における厚さは3.5 ㎜を測る。鎬は認められない。茎部付近は５㎜×１㎝の長方形をなす。茎部は3.0 ㎝残存し、わずかに木質の付着が認められる。横断面は、3.5 ㎜×６㎜の長方形をなす。

Ｍ８(写真図版46)は、有茎鏃に分類されるものである。切先の一部を除きほぼ完存し、残存長は10.80 ㎝を測る。鏃身部は長三角形をなし、鏃身長は4.6 ㎝残存する。横断面は平造で、最大幅2.9 ㎝を測る。中央部における厚さは８㎜で、鎬は認められない。茎部はほぼ完存し、6.20 ㎝を測る。木質が残存する。横断面は、7.5 ㎜×９㎜の長方形をなす。

Ｍ９(写真図版46)は、有茎鏃である。茎部端を除きほぼ完存する。残存長は9.55 ㎝を測る。鏃身部はほぼ完存し、長三角形をなす。全長5.35 ㎝を測り、最大幅は2.80 ㎝である。横断面は平造で、中央部に鎬は認められない。中央部における厚さは4.5 ㎜である。茎部は4.2 ㎝残存する。横断面は５㎜×６㎜の方形に近い長方形をなす。

Ｍ10(写真図版46)は、鏃身部の一部がわずかに残存する。残存長は1.8 ㎝である。柳葉形の一部の可能性も考えられる。横断面は平造で、残存幅は1.55 ㎝、最大厚は4.5 ㎜である。表面に木質の付着が認められる。

Ｍ11(写真図版46)は、有頸鏃の鏃身部から茎部にかけて残存し、2.35 ㎝残存する。鏃身部は完存し、平面三角形をなす。長さは1.35 ㎝、最大幅は1.2 ㎝を測る。横断面は平造で、中央部における厚さは2.5 ㎜を測る。鎬は認められない。

Ｍ12(写真図版46)は、有頸鏃の鏃身部が残存する。完存せず、残存長は2.5 ㎝を測る。横断面は平造で、中央部における幅は1.3 ㎝、厚さは2.5 ㎜を測る。鎬は認められない。

Ｍ13(写真図版46)は、三角形をなす鏃身部の一部が残存する。有頸鏃の一部と考えられる。全長1.9 ㎝を測る。横断面は平造で、中央部における厚さは3.5 ㎜を測る。鎬は認められない。残存する幅は1.35 ㎝である。

Ｍ14(写真図版46)は、鏃身部と茎部の一部が残存する。柳葉形鏃の一部と考えられる。鏃身部は切先付近を欠き、2.5 ㎝残存する。横断面は平造で、厚さは2.5 ㎜を測る。鎬は認められない。残存する幅は1.25 ㎝である。茎部は６㎜残存する。横断面は５㎜×2.5 ㎜の長方形をなす。

Ｍ15(写真図版46)は、鏃身部から茎部にかけて残存する。残存長は5.9 ㎝である。鏃身部は三角形をなすものと考えられ、基部付近がわずかに１㎝残存する。横断面は平造で、中央部の厚さはわずか2.5 ㎜である。鎬は認められない。茎部は4.9 ㎝残存する。横断面は3.5 ㎜×５㎜の長方形をなす。

Ｍ16(写真図版46)は、根部の一部を除いてほぼ完存する長頸鏃である。残存長は11.4 ㎝である。鏃身部は完存し、三角形をなす。全長1.3 ㎝を測る。横断面は平造で、最大幅は1.35 ㎝、中央部における厚さは2.5 ㎜を測る。鎬は認められない。頸部は、8.5 ㎝を測る。横断面は2.5 ㎜×５㎜の長方形をなす。茎部は1.6 ㎝残存し、木質の付着が認められる。横断面は２㎜～ 3.5 ㎜×3.5 ㎜の長方形をなす。

Ｍ17(写真図版46)は、茎部の一部まで残存する長頸鏃である。刃部はほぼ完存するが、腸抉の一部を欠く。全長2.7 ㎝を測り、最大幅は1.8 ㎝を測る。横断面は平造で、中央部における厚さは3.5 ㎜を測る。頸部は7.75 ㎝を測る。横断面は３㎜×5.5 ㎜の長方形をなす。茎部との境は台形関をなし、幅９㎜を測る。茎部は1.45 ㎝残存する。横断面は３㎜×4.5 ㎜を測るが、全体的に丸味を帯びている。

Ｍ18(写真図版46)は、鏃身部と頸部が完存し、茎部がわずかに残存する長頸鏃である。残存長は11.45 ㎝である。鏃身部は小型で、三角形をなす。ただし、基部のラインは直線をなさない。全長1.5 ㎝を測り、最大幅は1.15 ㎝である。横断面は平造で、中央部における厚さは2.5 ㎜を測る。鎬は認められない。茎部は9.5 ㎝を測り、茎部との境は棘状の関をなす。横断面は2.5 ㎜×５㎜の長方形をなす。茎部は4.5 ㎜残存する。横断面は３㎜×5.5 ㎜の長方形をなす。

Ｍ19(写真図版46)は、頸部から茎部にかけて残存する。残存長は14.4 ㎝を測る。頸部は12.1 ㎝残存し、一箇所で屈曲している。横断面は４㎜×５㎜の長方形をなす。茎部との境は、わずかに台形状の関をなす。頸部は2.3 ㎝を測る。下端は鍵形に屈折している。横断面は4.5 ㎜×3.5 ㎜の長方形をなす。

Ｍ20 ～Ｍ23(写真図版46)は、頸部が残存する。横断面はいずれも長方形をなす。残存長・断面規模は、Ｍ20が9.7 ㎝・6.5 ㎜×4.5 ㎜、Ｍ21が6.8 ㎝・４㎜×４㎜、Ｍ22が6.25 ㎝・５㎜×3.5 ㎜、Ｍ23が3.55 ㎝・５㎜×３㎜を測る。

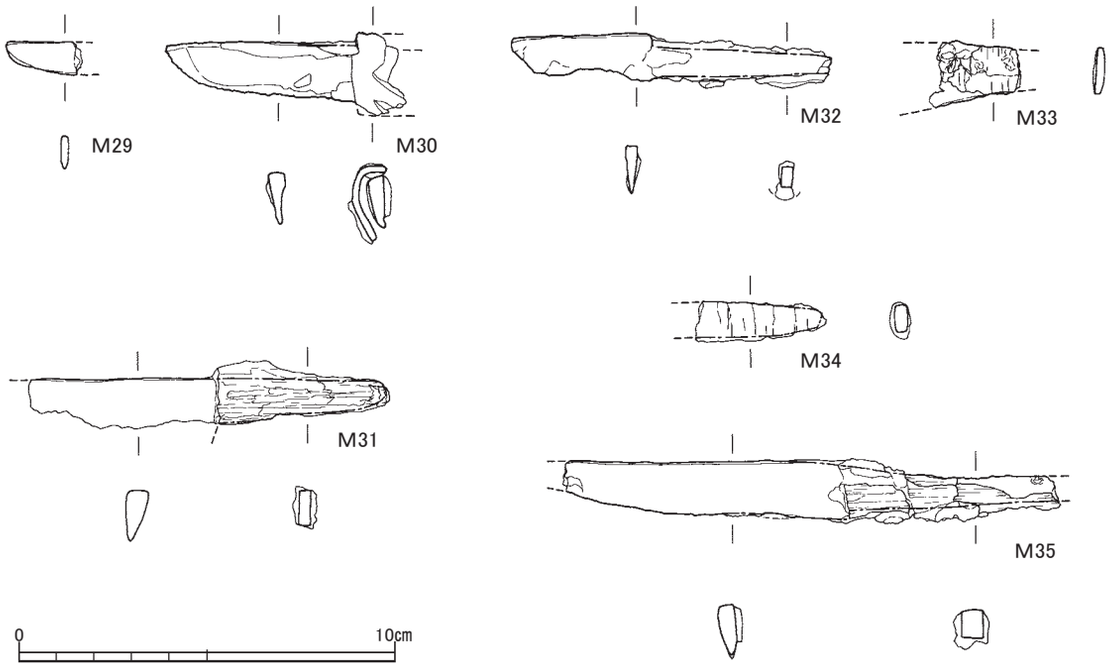
Ｍ24(写真図版46)は、頸部から頸部にかけて残存する。残存長は8.95 ㎝である。頸部は5.25 ㎝残存し、横断面は６㎜×９㎜の長方形をなす。茎部は3.7 ㎝残存し、木質が残存する。横断面は径3.5 ㎜の円形をなす。

Ｍ25(写真図版46)は、茎部の一部と考えられる。3.15 ㎝残存し、横断面は7.5 ㎜×3.5 ㎜を測る。

Ｍ26(写真図版46)は、茎部から頸部にかけて残存する。残存長は9.05 ㎝である。頸部は5.85 ㎝残存し、横断面は4.5 ㎜×７㎜の長方形をなす。茎部は3.2 ㎝残存し、木質が付着している。横断面は径3.5 ㎜の円形をなす。頸部と茎部との境は台形状の関をなしている。

Ｍ27(写真図版46)は、頸部から茎部にかけて残存する。残存長は4.4 ㎝である。茎部は1.95 ㎝残存し、横断面は3.5 ㎜×１㎝の長方形をなす。根部は2.45 ㎝残存し、木質が顕著に残存する。木質を除く横断面は４㎜×２㎜の長方形をなす。頸部と茎部の境は、棘状の関をなしている。

Ｍ28(写真図版46)は、頸部から茎部にかけて残存する。残存長は7.75 ㎝である。頸部は5.6 ㎝残存し、横断面は4.5 ㎜×8.5 ㎜の長方形をなす。茎部は2.15 ㎝残存し、木質が付着している。横断面は5.5 ㎜×５㎜の長方形をなす。頸部と茎部の境は、わずかに台形状の関をなしている。



第 72 図　出土金属製品 (4)

⑵工具類

刀子が７点（Ｍ29 ～Ｍ35）出土している（第72図）。

Ｍ29（写真図版47）は、刃部の刃先が出土している。残存長は2.0 ㎝を測り、残存する最大幅は９㎜を測る。棟部は丸味を帯び、その幅は２㎜を測る。刃の部分のみ鋭角をなしている。

Ｍ30（写真図版47）は、刃部と茎部の一部が残存する。残存長は6.4 ㎝を測る。刃部は完存し、4.95 ㎝を測る。横断面は鋭角な三角形をなし、棟幅は５㎜を測る。茎部は1.45 ㎝残存し、はばきが残存する。茎部のはばきを除いた横断面は、棟幅４㎜、幅1.4 ㎝の鋭角三角形をなす。はばきを含めた幅は2.25 ㎝である。

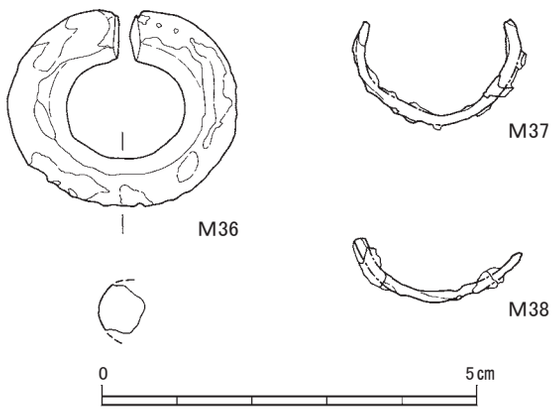
Ｍ31（写真図版47）は、刃部から茎部にかけて残存する。残存長は9.65 ㎝を測る。刃部は５㎝残存し、部分的に刃部が残存する。横断面は鋭角三角形をなし、幅1.35 ㎝、棟幅6.5 ㎜を測る。茎部はほぼ完存し、4.65 ㎝を測る。茎部には木質が全面に残存する。横断面は３㎜×1.15 ㎝の長方形をなす。

Ｍ32（写真図版47）は、鹿角装の刀子である。刃部の一部と茎部が残存する。刃部は3.7 ㎝残存し、関部付近でわずかに刃部が残存する。当該箇所における横断面は鋭角三角形をなし、棟幅3.5 ㎜、幅1.25 ㎝を測る。関部は、棟部側に３㎜の段差が認められる。握部は完存し、4.8 ㎝を測る。部分的に鹿角が残存する。横断面は３㎜×5.5 ㎜の長方形をなす。

Ｍ33（写真図版47）は、関部を中心にわずかに残存する。平面的な規模からみて刀の可能性も考えられるが、茎部の横断面から刀子として報告する。残存長2.35 ㎝を測り、全面に刃部に直交する木質が認められる。樹皮が巻かれていたものと考えられる。横断面は2.5 ㎜×1.25 ㎝の長方形をなすが、全体的に丸味を帯びている。

Ｍ34（写真図版47）は、端部を中心に、茎部のみ残存する。残存長は3.45 ㎝である。全面に刃部に対して直交する木質が認められる。樹皮が巻かれていたものと考えられる。横断面は3.5 ㎜×７㎜の長方形をなす。

Ｍ35(写真図版47)は、刃部から握部にかけて残存し、両者の一部を欠くのみで、ほぼ全体の規模の推測が可能である。残存長は13.25 ㎝を測る。刃部は7.6 ㎝残存し、切先を欠く。横断面は鋭角三角形をなし、棟幅6.5 ㎜、刃幅1.75 ㎝を測る。握部は5.65 ㎝残存し、全面に木質の付着が認められる。木質は、刃部と平行方向である。横断面は6 ㎜×7.5 ㎜の長方形をなす。



第 73 図　出土金属製品 ⑸

⑶ 装飾具

銅製の耳輪が３点(Ｍ36 ～Ｍ38)出土している(第73図　写真図版47)。

Ｍ36は、全周するが、断面の多くを欠く。外側の規模は、３㎝×2.65 ㎝を測り、上端で２㎜を欠く。横断面は径6.5 ㎜と復元される。一部で金色の鍍金が残存している。

Ｍ37は、全体の約3/4残存する。断面についても一部のみ残存する。幅2.2 ㎝を測り、断面は1.6 ㎜×1.2 ㎜の楕円形をなす。表面の一部に緑青が認められる。Ｍ38は、全体の約1/3残存する。断面についても一部のみ残存する。残存幅は2.2 ㎝を測る。表面の一部に緑青が認められる。

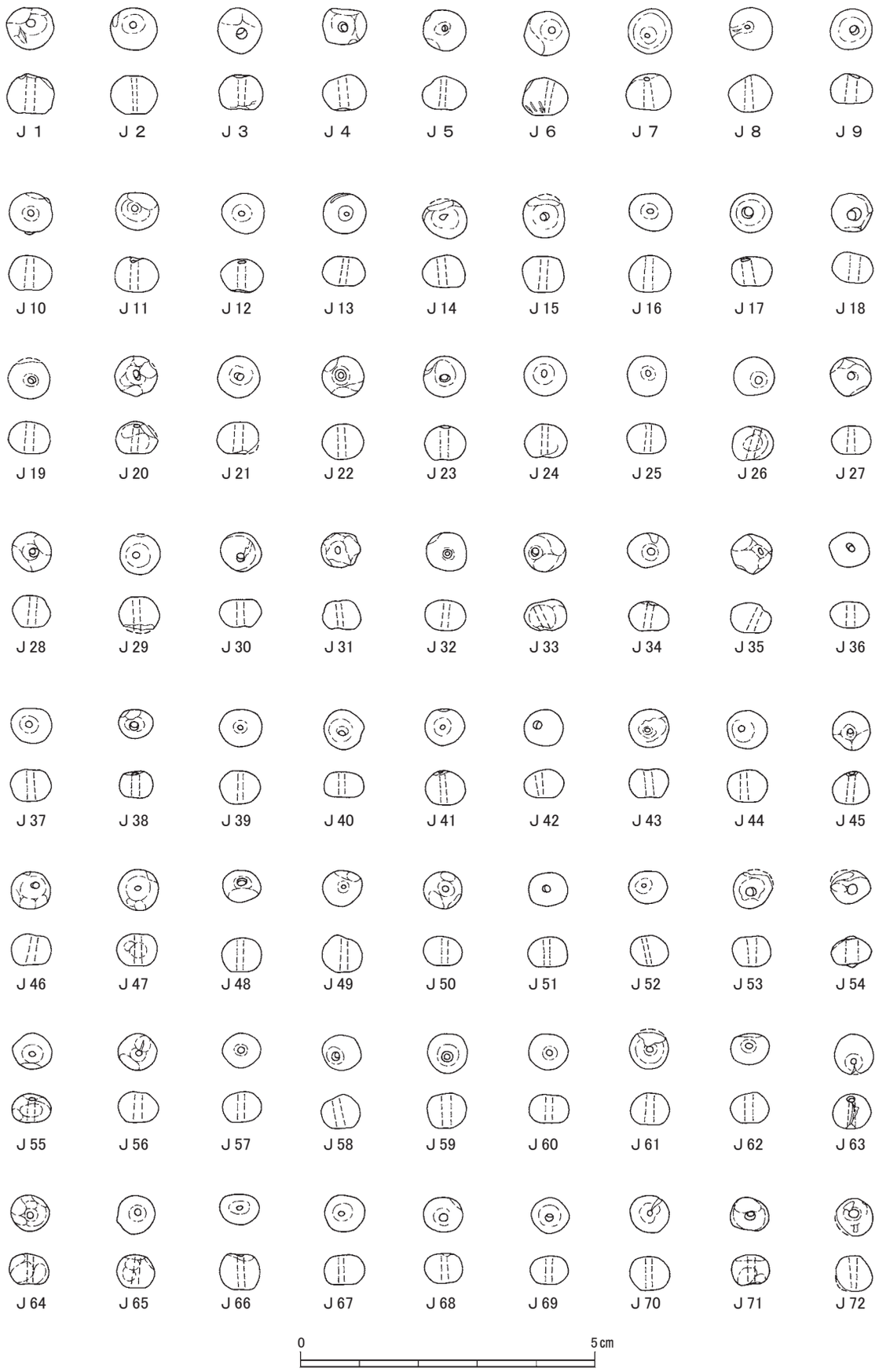
３．玉類(写真図版48 ～写真図版52)

丸玉が計370点(Ｊ１～Ｊ370)出土している(第74図～第78図)。いずれも土製である。全て石室内から出土したもので、大きく玄室内出土のものと、羨道部出土のものとに分類できる。玄室内出土のものがほとんどで、354点(Ｊ１～Ｊ354)を数える。羨道部から出土したものは、16点(Ｊ355 ～Ｊ370)に限られる。

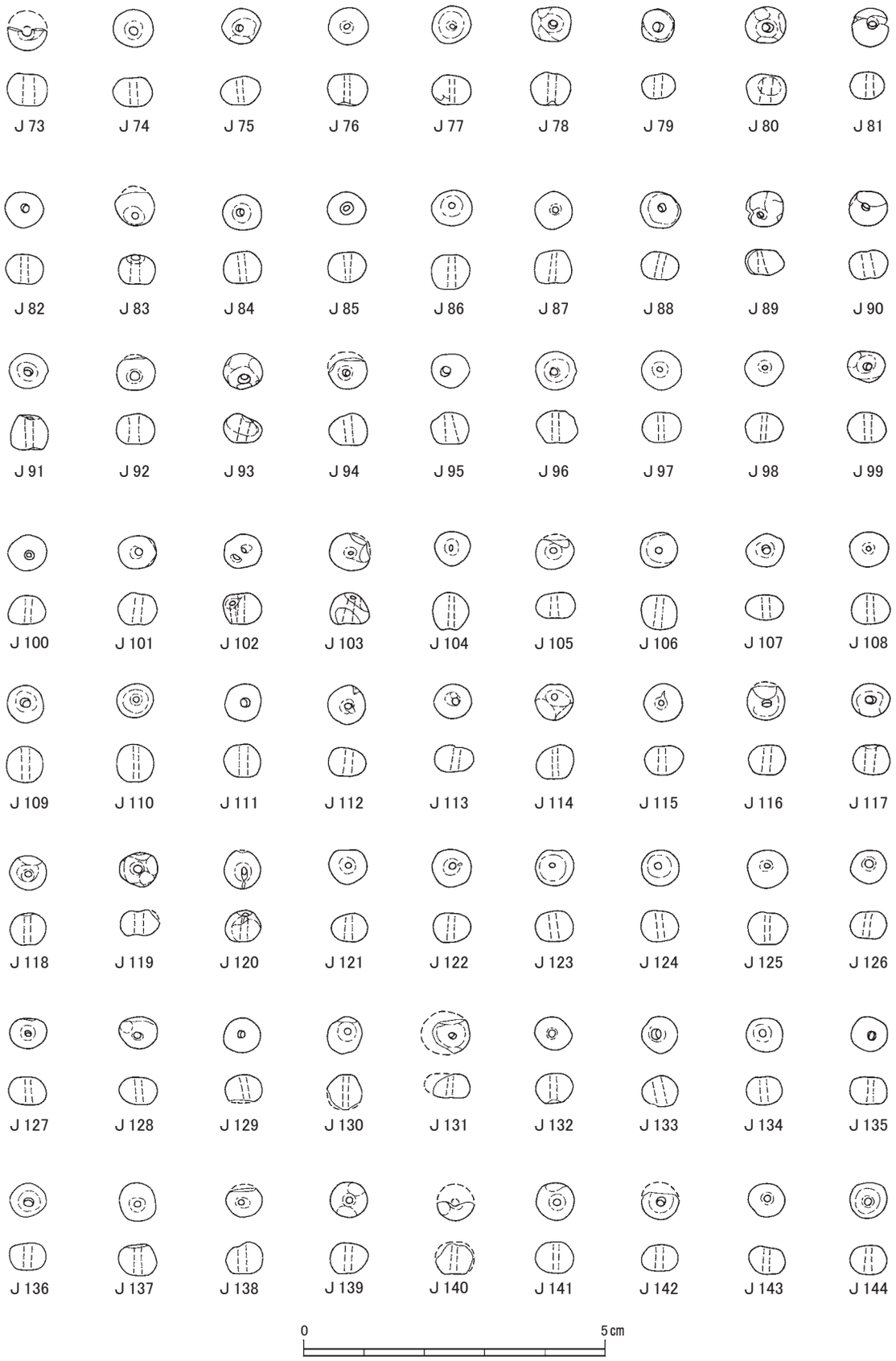
これらの丸玉については、出土位置を記録できたのは数点で(第57図)、大半が石室内の埋土を篩にかけた結果明らかとなったものである。ただし、石室内の埋土を取り上げるにあたっては、ある程度出土位置が復元できるよう、平面的に分割して取り上げていった。この結果、大まかではあるが、副葬位置の復元が可能となった。出土位置を記録できたものについては、玄室内でも袖部側から出土している。さらに、大きく東壁際と西壁際の２群に分類できる。

出土した丸玉は、大半が完存するが、一部を欠損するものも認められる。また、表面が磨滅状態にあるものも認められる。完存するものを中心に観察すると、基本的形態に大きな差は認められない。

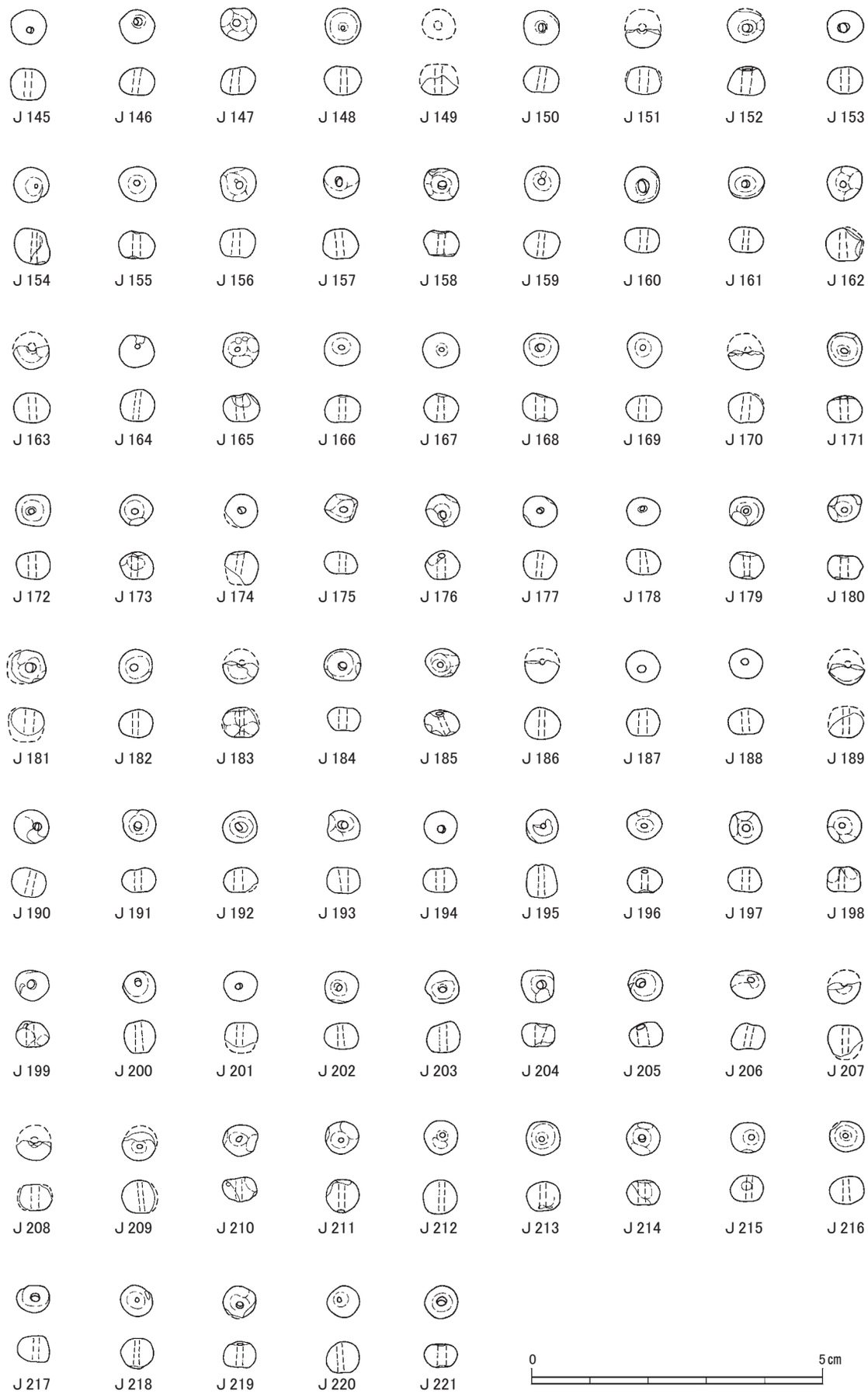
法量についても、一定の規模で造られている(第４表～第８表)。完存する製品を対象とした規模は、長さが最大で6.8 ㎜(Ｊ253・Ｊ322)、最少で2.6 ㎜(Ｊ342)を測る。平均値は4.1 ㎜である。また、幅については、最大で7.9 ㎜(Ｊ１)、最少で3.5 ㎜(Ｊ342)を測る。平均値は5.5 ㎜である。この結果、Ｊ342が長さ・幅ともに最少である。また、玉の中央には紐孔が開けられているが、その径は最大で2.3 ㎜(Ｊ95・Ｊ268)、最少で0.7 ㎜(Ｊ52・Ｊ314)である。平均値は1.3 ㎜である。



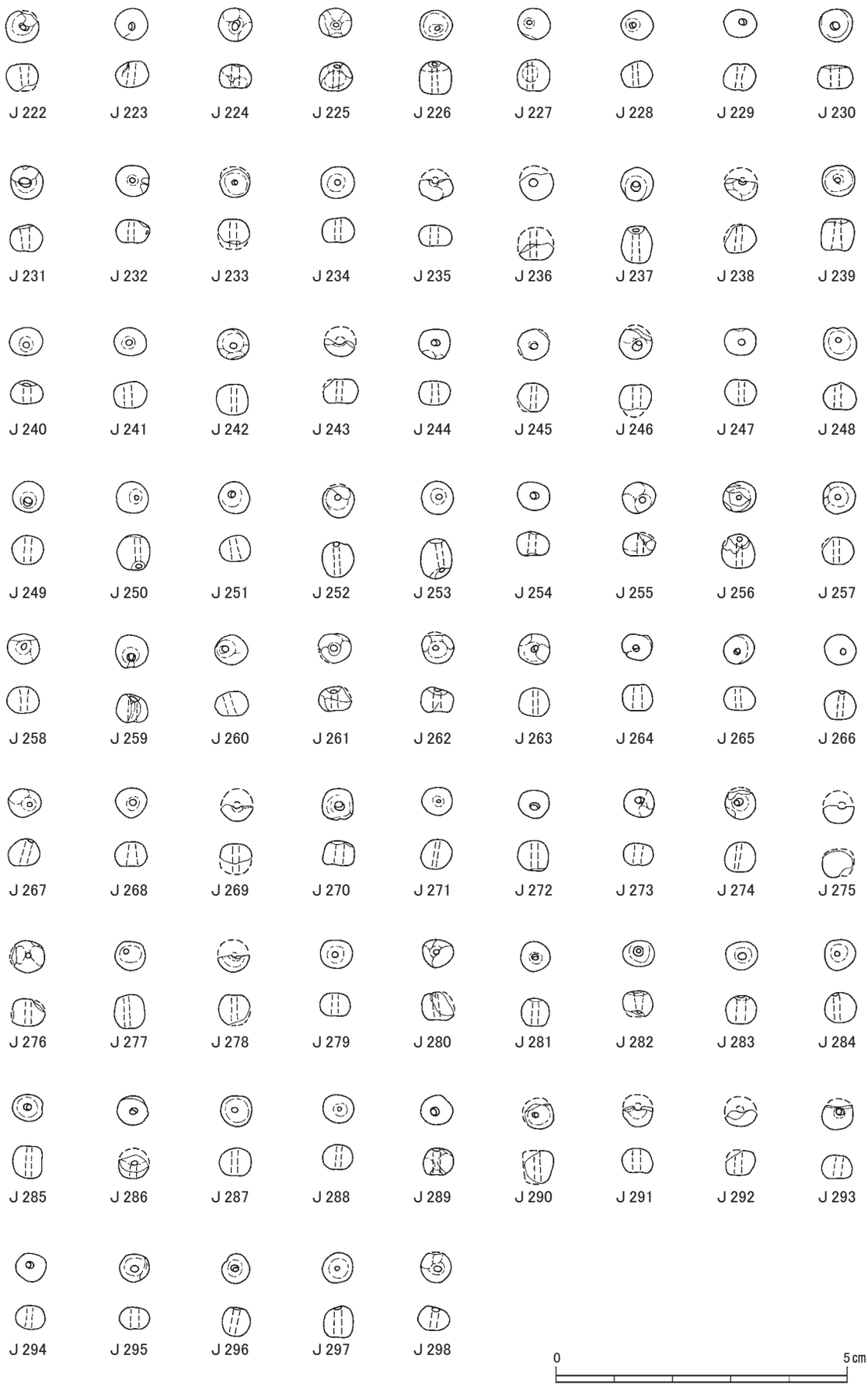
第 74 図　玄室内出土丸玉 (1)



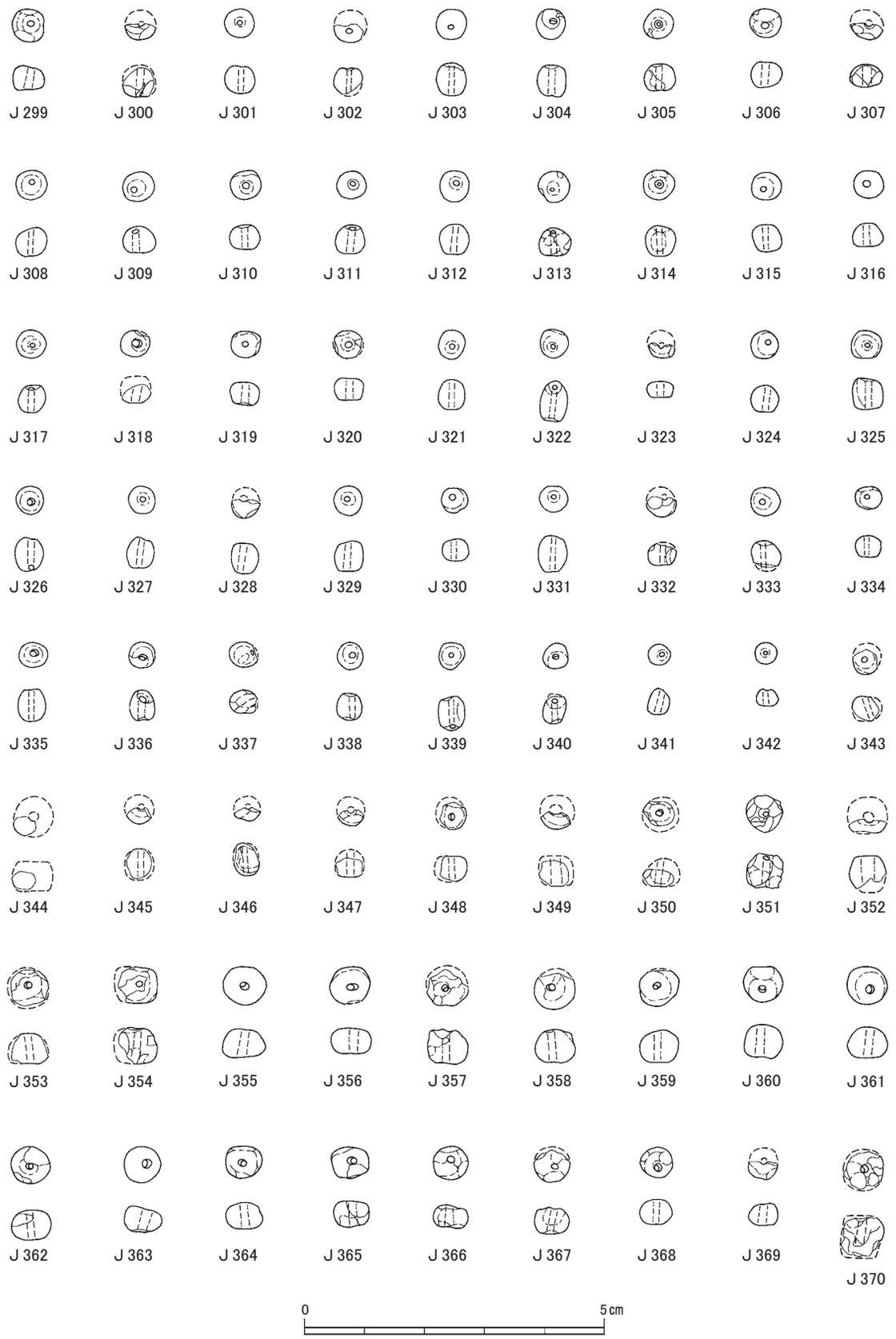
第 75 図　玄室内出土丸玉 (2)



第 76 図　玄室内出土丸玉 (3)



第 77 図　玄室内出土丸玉 (4)



第 78 図　玄室内出土丸玉 (5)

第４表　出土丸玉一覧(1)

No.	長さ(mm)	幅(mm)	孔径(mm)	重量(g)	残存状況	出土位置	出土地点	挿図	写真図版
J 001	6.50	7.90	1.90	(0.30)	ほぼ完存	玄室	奥壁側	74	48
J 002	6.60	7.70	1.30	0.35	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 003	5.80	7.70	1.90	0.27	完存	玄室	玄門側	74	48
J 004	5.90	7.50	1.50	0.22	完存	玄室	土玉No.10	74	48
J 005	5.50	7.50	1.30	0.25	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 006	6.40	7.40	1.30	0.31	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 007	6.10	7.40		0.29	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 008	6.30	7.30		0.28	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 009	5.00	7.20		0.23	完存	玄室	玄門側	74	48
J 010	6.00	7.20		0.28	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 011	5.90	7.10	1.20	0.25	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 012	5.50	7.10	1.10	0.22	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 013	5.00	7.10		0.22	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 014	5.40	7.10	1.30	(0.23)	ほぼ完存	玄室	奥壁側	74	48
J 015	6.20	7.10	1.30	(0.30)	ほぼ完存	玄室	奥壁側	74	48
J 016	6.10	7.10		0.25	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 017	4.90	7.00		0.19	完存	玄室	西側中央部	74	48
J 018	5.20	7.00	2.00	0.19	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 019	5.40	7.00	1.40	0.23	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 020	5.30	7.00	1.20	(0.20)	ほぼ完存	玄室	奥壁側	74	48
J 021	(5.00)	7.00	1.50	(0.20)	ほぼ完存	玄室	奥壁側	74	48
J 022	6.10	7.00		0.30	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 023	5.70	6.90	1.50	0.25	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 024	5.70	6.90	1.20	0.23	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 025	5.30	6.90	1.70	0.23	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 026	5.60	6.90	1.50	0.21	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 027	5.00	6.90	1.70	0.20	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 028	5.40	6.80	1.80	0.21	完存	玄室	玄門側	74	48
J 029	(5.30)	6.80	1.20	(0.20)	ほぼ完存	玄室	奥壁側	74	48
J 030	4.80	6.80	1.40	0.20	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 031	5.00	6.80	0.80	0.16	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 032	5.40	6.80	1.40	0.22	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 033	5.20	6.80	1.70	0.21	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 034	4.90	6.80		0.18	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 035	5.20	6.80	1.50	0.18	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 036	4.50	6.80	1.50	0.17	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 037	5.10	6.80	1.50	0.19	完存	玄室	奥壁際	74	48
J 038	4.70	6.70	1.50	0.12	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 039	5.40	6.70	1.20	0.22	完存	玄室	東側奥壁部	74	48
J 040	4.50	6.70	1.20	0.18	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 041	5.60	6.70		0.22	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 042	4.80	6.70	1.50	0.18	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 043	5.10	6.70	1.60	0.21	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 044	5.40	6.70	1.70	0.21	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 045	5.40	6.70	1.30	0.18	完存	玄室	玄門側	74	48
J 046	5.30	6.70	1.90	0.22	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 047	5.20	6.60		(0.20)	ほぼ完存	玄室	奥壁側	74	48
J 048	5.70	6.60	1.30	0.20	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 049	6.30	6.60		(0.20)	3/4	玄室	奥壁側	74	48
J 050	5.00	6.60	1.20	0.20	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 051	5.10	6.60	1.30	0.19	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 052	5.40	6.60	0.70	0.20	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 053	5.00	6.60	1.80	0.20	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 054	5.00	6.50	2.00	(0.13)	ほぼ完存	玄室	土玉No.5	74	48
J 055	4.60	6.50		0.15	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 056	5.10	6.50		0.17	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 057	5.00	6.50	1.30	0.18	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 058	5.60	6.50	1.40	0.17	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 059	5.80	6.50	1.80	0.23	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 060	4.70	6.50	1.20	0.19	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 061	5.30	6.50		(0.18)	3/4	玄室	奥壁側	74	48
J 062	5.20	6.50	1.30	0.15	完存	玄室	東側袖部	74	48
J 063	5.70	6.50		(0.22)	割れあり	玄室	奥壁側	74	48
J 064	5.10	6.50	1.30	0.17	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 065	5.60	6.50		0.20	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 066	5.90	6.50	1.00	0.20	完存	玄室	東側奥壁部	74	48
J 067	4.90	6.50		0.19	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 068	5.30	6.50	1.30	0.21	完存	玄室	イブツNo.2	74	48
J 069	4.80	6.50	1.60	0.17	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 070	5.30	6.50	1.10	0.20	完存	玄室	東側奥壁部	74	48
J 071	4.90	6.40	1.80	0.17	完存	玄室	奥壁側	74	48
J 072	6.10	6.40	1.60	(0.16)	5/6	玄室	奥壁側	74	48
J 073	5.30	6.40	2.00	(0.10)	1/2	玄室	奥壁側	75	49
J 074	4.80	6.40	1.50	0.17	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 075	4.60	6.40	1.30	0.15	完存	玄室	奥壁側	75	49

第５表　出土丸玉一覧(2)

No.	長さ(mm)	幅(mm)	孔径(mm)	重量(g)	残存状況	出土位置	出土地点	挿図	写真図版
J 076	5.00	6.40	1.20	0.18	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 077	4.70	6.40	1.00	0.17	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 078	5.30	6.40	1.30	0.16	完存	玄室	東側袖部	75	49
J 079	4.00	6.40	1.70	0.11	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 080	5.00	6.40		0.17	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 081	4.60	6.40	1.20	(0.13)	ほぼ完存	玄室	土玉No.7	75	49
J 082	4.90	6.40	1.60	0.16	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 083	4.90	6.40	2.00	0.16	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 084	5.20	6.40	1.50	0.19	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 085	5.00	6.40	1.80	0.16	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 086	5.60	6.30		0.19	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 087	5.40	6.30	1.00	0.21	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 088	4.70	6.30	1.20	0.16	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 089	4.10	6.30	1.50	(0.14)	ほぼ完存	玄室	奥壁側	75	49
J 090	4.80	6.30	2.00	(0.15)	一部剥離有	玄室	玄門側	75	49
J 091	5.60	6.30	1.60	0.20	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 092	5.00	6.30	2.00	(0.18)	ほぼ完存	玄室	奥壁側	75	49
J 093	4.90	6.30	1.50	0.17	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 094	5.40	6.30	1.20	(0.16)	2/3	玄室	奥壁側	75	49
J 095	5.10	6.30	2.30	0.17	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 096	5.30	6.30		0.22	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 097	4.90	6.30	1.00	0.19	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 098	5.00	6.30	1.00	0.16	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 099	5.00	6.30	1.40	0.14	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 100	4.80	6.30	1.70	0.16	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 101	5.30	6.30	1.50	0.17	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 102	5.00	6.30		(0.16)	ほぼ完存	玄室	奥壁側	75	49
J 103	5.30	6.30		(0.17)	3/4	玄室	奥壁側	75	49
J 104	6.20	6.20	0.60～1.10	0.18	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 105	4.30	6.20		(0.11)	5/6	玄室	奥壁側	75	49
J 106	5.70	6.20	1.40	0.20	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 107	4.30	6.20	1.40	0.12	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 108	5.10	6.20		0.16	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 109	6.00	6.20	1.50	0.20	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 110	6.40	6.20	0.90	0.21	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 111	5.50	6.20	1.80	0.18	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 112	4.60	6.20	1.80	0.16	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 113	4.50	6.20	1.90	0.13	完存	玄室	玄門側	75	49
J 114	5.50	6.20	0.90	0.17	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 115	4.80	6.20		0.17	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 116	5.10	6.20	1.40	(0.16)	ほぼ完存	玄室	玄門側	75	49
J 117	4.90	6.20	1.90	(0.13)	ほぼ完存	玄室	玄門側	75	49
J 118	5.10	6.20	1.20	0.16	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 119	4.20	6.20	1.80	0.11	完存	玄室	玄門側	75	49
J 120	5.10	6.20		0.16	完存	玄室	東側中央部	75	49
J 121	4.80	6.20		0.17	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 122	4.90	6.10		0.17	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 123	5.00	6.10		0.17	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 124	5.10	6.10	1.20	0.15	完存	玄室	奥壁際	75	49
J 125	5.30	6.10	1.20	0.20	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 126	4.80	6.10	1.20	0.13	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 127	4.70	6.10	1.40	0.13	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 128	4.60	6.10	1.30	0.15	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 129	4.60	6.10	1.10	(0.16)	ほぼ完存	玄室	奥壁側	75	49
J 130	5.80	6.10	0.90	0.19	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 131	3.80	6.10	1.20	0.11	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 132	4.70	6.10	1.20	0.14	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 133	5.10	6.10	1.80	0.15	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 134	4.50	6.10	1.10	(0.16)	ほぼ完存	玄室	奥壁側	75	49
J 135	5.60	6.10	1.50	0.16	完存	玄室	イブツNo.2	75	49
J 136	4.40	6.10	2.10	0.12	完存	玄室	土玉No.6	75	49
J 137	4.00	6.10	1.30	0.19	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 138	5.00	6.10		(0.11)	3/4	玄室	玄門側	75	49
J 139	4.90	6.10		0.15	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 140	4.90	6.10		(0.08)	1/2 弱	玄室	玄門側	75	49
J 141	5.30	6.10	1.00	0.18	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 142	4.10	6.10	1.20	(0.09)	3/4	玄室	奥壁側	75	49
J 143	4.70	6.00		0.13	完存	玄室	玄門側	75	49
J 144	4.60	6.00		0.17	完存	玄室	奥壁側	75	49
J 145	5.30	6.00	1.10	0.17	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 146	4.40	6.00	1.70	0.15	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 147	4.60	6.00		0.14	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 148	4.70	6.00		0.16	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 149	(3.10)	6.00	1.30	(0.04)	1/2	玄室	玄門側	76	50

第６表　出土丸玉一覧(3)

No.	長さ(mm)	幅(mm)	孔径(mm)	重量(g)	残存状況	出土位置	出土地点	挿図	写真図版
J 150	4.50	6.00	1.40	0.16	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 151	(4.60)	6.00	1.20	(0.07)	1/2	玄室	土玉No.8	76	50
J 152	4.80	6.00	2.20	(0.12)	ほぼ完存	玄室	玄門側	76	50
J 153	4.60	6.00	1.70	0.15	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 154	6.10	6.00	1.50	(0.20)	ほぼ完存	玄室	奥壁側	76	50
J 155	4.40	6.00	1.40	0.14	完存	玄室	奥壁側西側壁	76	50
J 156	5.00	6.00	1.50	0.17	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 157	5.00	6.00	1.50	0.14	完存	玄室	玄門側	76	50
J 158	4.20	6.00	1.30	0.12	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 159	4.70	6.00		0.15	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 160	4.20	6.00	1.80	0.13	完存	玄室	玄門側	76	50
J 161	4.20	5.90	1.00	0.12	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 162	5.40	5.90		(0.15)	ほぼ完存	玄室	奥壁側	76	50
J 163	4.90	5.90	1.20	(0.10)	1/2	玄室	奥壁側	76	50
J 164	5.80	5.90	1.00	0.18	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 165	4.50	5.90		(0.15)	ほぼ完存	玄室	奥壁側	76	50
J 166	4.60	5.90	1.10	0.14	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 167	4.60	5.90		0.15	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 168	4.70	5.90	1.50	0.12	完存	玄室	土玉No.3	76	50
J 169	4.30	5.90		0.14	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 170	5.10	5.90		(0.08)	1/2	玄室	玄門側	76	50
J 171	4.40	5.80	1.80	0.14	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 172	4.80	5.80	1.80	0.15	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 173	4.50	5.80	1.00	0.11	完存	玄室	玄門側	76	50
J 174	5.70	5.80	1.20	(0.14)	5/6	玄室	奥壁側	76	50
J 175	3.70	5.80	1.40	0.07	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 176	4.80	5.80	1.50	0.12	完存	玄室	東側袖部	76	50
J 177	4.90	5.80	1.10	0.12	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 178	4.20	5.80	1.40	0.13	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 179	4.50	5.80	1.50	0.12	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 180	3.80	5.80		(0.09)	磨滅	玄室	玄門側	76	50
J 181	(4.80)	5.80	2.00	(0.11)	1/2 強	玄室	奥壁側	76	50
J 182	4.70	5.80	1.00	0.13	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 183	4.90	5.80	0.90	(0.09)	1/2	玄室	奥壁側	76	50
J 184	4.10	5.80	1.50	0.11	完存	玄室	東側袖部	76	50
J 185	4.60	5.80	1.50	(0.10)	ほぼ完存	玄室	奥壁側	76	50
J 186	5.30	5.80		(0.10)	1/2	玄室	奥壁側	76	50
J 187	4.70	5.80	1.20	0.14	完存	玄室	イブツNo.2	76	50
J 188	4.40	5.80	1.30	0.12	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 189	(4.10)	5.80	1.20	(0.06)	ほぼ完存	玄室	奥壁側	76	50
J 190	5.00	5.80	1.80	0.14	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 191	4.10	5.70	1.20	0.10	完存	玄室	玄門側	76	50
J 192	4.20	5.70		0.12	完存	玄室	玄門側	76	50
J 193	4.50	5.70	1.80	0.11	完存	玄室	玄門側	76	50
J 194	4.10	5.70	1.80	0.11	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 195	5.50	5.70	1.10	(0.16)	ほぼ完存	玄室	奥壁側	76	50
J 196	3.90	5.70	1.30	0.09	完存	玄室	玄門側	76	50
J 197	4.30	5.70	1.60	0.13	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 198	4.40	5.70	1.20	0.11	完存	玄室	玄門側	76	50
J 199	4.20	5.70		0.09	完存	玄室	玄門側	76	50
J 200	5.40	5.70	1.80	0.16	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 201	(4.10)	5.70	1.50	(0.11)	2/3	玄室	奥壁側	76	50
J 202	4.60	5.70	1.20	0.15	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 203	5.20	5.70	1.40	0.16	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 204	4.00	5.70	1.70	0.11	完存	玄室	玄門側	76	50
J 205	4.30	5.70		0.11	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 206	4.50	5.70	1.10	0.12	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 207	(5.10)	5.70	1.20	(0.07)	1/2	玄室	奥壁側	76	50
J 208	4.20	5.70	(1.40)	(0.06)	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 209	5.40	5.70	0.80	(0.12)	2/3	玄室	奥壁側	76	50
J 210	3.80	5.70	1.20	0.09	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 211	5.40	5.70	1.10	0.14	完存	玄室	奥壁際	76	50
J 212	5.60	5.70	1.00	0.17	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 213	4.70	5.70		0.14	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 214	4.20	5.70	1.20	(0.10)	ほぼ完存	玄室	奥壁側	76	50
J 215	4.40	5.70		0.12	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 216	4.50	5.70		0.12	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 217	4.50	5.60	1.20	0.11	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 218	5.00	5.60		0.13	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 219	4.20	5.60	1.00	(0.11)	磨滅か欠損	玄室	奥壁側	76	50
J 220	5.30	5.60	1.20	0.15	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 221	4.00	5.60	1.80	0.12	完存	玄室	奥壁側	76	50
J 222	4.30	5.60	1.50	0.10	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 223	4.30	5.60	1.00	0.11	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 224	4.20	5.60		(0.11)	ほぼ完存	玄室	奥壁側	77	51

第７表　出土丸玉一覧(4)

No.	長さ(mm)	幅(mm)	孔径(mm)	重量(g)	残存状況	出土位置	出土地点	挿図	写真図版
J 225	4.70	5.60	0.90	0.11	完存	玄室	西壁際玄門付近	77	51
J 226	5.50	5.60	0.90	0.14	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 227	5.20	5.60		0.14	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 228	4.60	5.60	1.20	0.12	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 229	4.80	5.60	1.60	0.13	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 230	4.00	5.60	1.60	0.11	完存	玄室	土玉No.2	77	51
J 231	4.40	5.60		0.12	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 232	3.90	5.60		0.10	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 233	(4.10)	5.60	1.10	(0.08)	2/3	玄室	奥壁側	77	51
J 234	4.30	5.60		0.13	完存	玄室	玄門側	77	51
J 235	3.40	5.50	1.50	(0.05)	1/2	玄室	西壁際玄門付近	77	51
J 236	(3.00)	5.50	1.20	(0.04)	1/4	玄室	玄門側	77	51
J 237	6.40	5.50	1.10	0.17	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 238	4.60	5.50	1.10	(0.06)	1/2	玄室	玄門側	77	51
J 239	5.30	5.50	1.70	0.15	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 240	3.80	5.50	1.20	0.08	完存	玄室	玄門側	77	51
J 241	4.70	5.50	1.50	0.10	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 242	5.10	5.50	1.10	(0.13)	ほぼ完存	玄室	奥壁側	77	51
J 243	4.00	5.50	1.30	(0.05)	1/2	玄室	玄門側	77	51
J 244	4.20	5.50	1.60	0.11	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 245	4.90	5.50	1.00	(0.12)	ほぼ完存	玄室	奥壁側	77	51
J 246	(4.10)	5.50	1.60	(0.10)	1/3	玄室	奥壁側	77	51
J 247	4.30	5.50	1.10	0.11	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 248	4.70	5.40		(0.12)	表面損傷有	玄室	奥壁側	77	51
J 249	4.80	5.40	1.30	0.13	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 250	6.00	5.40	1.00	0.16	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 251	4.40	5.40	1.30	0.12	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 252	5.50	5.40	1.00	0.14	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 253	6.80	5.40	1.10	0.17	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 254	4.20	5.40	1.40	0.11	完存	玄室	イブツNo.2	77	51
J 255	3.80	5.40	1.20	(0.09)	ほぼ完存	玄室	奥壁側	77	51
J 256	5.60	5.40	1.00	(0.14)	5/6	玄室	奥壁側	77	51
J 257	4.40	5.40	1.10	0.11	完存	玄室	玄門側	77	51
J 258	4.40	5.40	1.70	0.12	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 259	4.70	5.40	1.40	0.11	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 260	4.00	5.40	1.20	0.08	完存	玄室	土玉No.1	77	51
J 261	4.10	5.30	1.20	(0.09)	3/4	玄室	玄門側	77	51
J 262	4.10	5.30		(0.09)	ほぼ完存	玄室	玄門側	77	51
J 263	4.80	5.30	1.10	(0.12)	一部欠損	玄室	玄門側	77	51
J 264	4.40	5.30	1.80	0.09	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 265	4.00	5.30	1.10	0.10	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 266	4.80	5.30	1.10	0.13	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 267	4.40	5.30		(0.09)	若干磨滅	玄室	奥壁側	77	51
J 268	4.20	5.30	2.30	0.10	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 269	(3.00)	5.30	1.20	(0.04)	1/3	玄室	奥壁側	77	51
J 270	4.20	5.30	1.90	0.10	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 271	5.10	5.20		0.11	完存	玄室	玄門側	77	51
J 272	5.20	5.20	1.20	0.12	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 273	3.80	5.20	1.50	0.09	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 274	4.90	5.20	1.10	(0.11)	5/6	玄室	奥壁側	77	51
J 275	(4.50)	5.20		(0.05)	2/5	玄室	奥壁側	77	51
J 276	4.80	5.20	1.20	(0.12)	4/5	玄室	奥壁側	77	51
J 277	5.90	5.20	1.30	0.15	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 278	4.80	5.20		(0.06)	1/2	玄室	奥壁側	77	51
J 279	3.90	5.20	1.20	0.09	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 280	4.60	5.20	1.20	(0.08)	1/2 強	玄室	玄門側	77	51
J 281	4.80	5.20	1.50	0.11	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 282	4.10	5.20	1.70	0.08	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 283	4.80	5.20	1.80	0.12	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 284	4.90	5.10	0.80	0.11	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 285	5.50	5.10		0.12	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 286	(3.80)	5.10	1.50	(0.07)	1/2	玄室	奥壁側	77	51
J 287	4.40	5.10	1.10	0.10	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 288	4.00	5.10		0.08	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 289	4.50	5.10	1.30	(0.10)	一部欠	玄室	奥壁側	77	51
J 290	5.70	5.10	1.00	(0.08)	1/2 強	玄室	奥壁側	77	51
J 291	4.20	5.10	1.50	(0.05)	1/2	玄室	玄門側	77	51
J 292	4.10	5.10	1.20	(0.04)	1/2	玄室	玄門側	77	51
J 293	4.10	5.10	1.60	(0.08)	3/5	玄室	玄門側	77	51
J 294	4.00	5.10	1.30	0.09	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 295	3.80	5.10	1.40	0.08	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 296	4.90	5.00	1.20	0.10	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 297	5.10	5.00		0.11	完存	玄室	奥壁側	77	51
J 298	4.20	5.00	1.30	0.08	完存	玄室	東側袖部	77	51
J 299	4.00	5.00		0.09	完存	玄室	玄門側	78	52

第８表　出土丸玉一覧(5)

No.	長さ(mm)	幅(mm)	孔径(mm)	重量(g)	残存状況	出土位置	出土地点	挿図	写真図版
J 300	(4.60)	5.00	1.20	(0.05)	1/2 弱	玄室	東側袖部	78	52
J 301	4.50	5.00	1.00	0.10	完存	玄室	奥壁側	78	52
J 302	(4.20)	5.00	0.90	(0.04)	1/2 弱	玄室	奥壁側	78	52
J 303	5.60	5.00	0.90	0.13	完存	玄室	奥壁側	78	52
J 304	5.10	5.00	1.10	0.11	完存	玄室	奥壁側	78	52
J 305	4.30	5.00	1.00	0.09	完存	玄室	奥壁側	78	52
J 306	4.40	5.00	1.50	0.09	完存	玄室	奥壁側	78	52
J 307	4.00	5.00	1.50	(0.04)	1/2	玄室	玄門側	78	52
J 308	4.60	5.00		0.10	完存	玄室	奥壁側	78	52
J 309	4.50	5.00	1.10	0.10	完存	玄室	奥壁側	78	52
J 310	4.20	5.00	1.50	0.09	完存	玄室	奥壁側	78	52
J 311	4.80	5.00	1.50	0.10	完存	玄室	奥壁側	78	52
J 312	5.00	5.00	1.00	0.11	完存	玄室	奥壁側	78	52
J 313	4.40	5.00		0.09	完存	玄室	奥壁側	78	52
J 314	4.90	4.90	0.70	0.11	完存	玄室	奥壁側	78	52
J 315	4.50	4.90	0.90	0.08	完存	玄室	奥壁側	78	52
J 316	3.90	4.90	1.40	0.07	完存	玄室	奥壁側	78	52
J 317	4.30	4.80		0.09	完存	玄室	棺台下一括	78	52
J 318	(3.10)	4.80	1.80	(0.05)	3/5	玄室	奥壁側	78	52
J 319	3.80	4.80	1.80	0.08	完存	玄室	奥壁側	78	52
J 320	3.60	4.80	1.60	(0.07)	ほぼ完存	玄室	奥壁側	78	52
J 321	4.90	4.80	1.20	0.09	完存	玄室	奥壁側	78	52
J 322	6.80	4.80	1.00	0.13	完存	玄室	奥壁側	78	52
J 323	2.70	4.70	1.20	(0.02)	1/2	玄室	西壁際玄門付近	78	52
J 324	4.60	4.70	1.00	0.09	完存	玄室	奥壁側	78	52
J 325	5.00	4.70	1.20	0.10	完存	玄室	東側奥壁部	78	52
J 326	5.40	4.60	1.00	0.09	完存	玄室	奥壁側	78	52
J 327	5.00	4.60	1.00	0.09	完存	玄室	奥壁側	78	52
J 328	5.00	4.60	1.10	(0.06)	1/2	玄室	奥壁側	78	52
J 329	4.80	4.60		0.10	完存	玄室	奥壁側	78	52
J 330	3.80	4.50	1.10	0.06	完存	玄室	奥壁側	78	52
J 331	5.60	4.50	1.00	(0.12)	ほぼ完存	玄室	奥壁側	78	52
J 332	3.20	4.50	1.00	(0.03)	1/2	玄室	西壁際玄門付近	78	52
J 333	(4.20)	4.40	1.00	(0.07)	3/4	玄室	棺台下一括	78	52
J 334	4.40	4.30	1.00	0.05	完存	玄室	奥壁側	78	52
J 335	5.00	4.30	1.00	0.09	完存	玄室	奥壁側	78	52
J 336	5.00	4.30	1.40	0.08	完存	玄室	奥壁側	78	52
J 337	3.70	4.20	1.20	(0.06)	一部欠	玄室	奥壁側	78	52
J 338	4.30	4.20	1.00	0.06	完存	玄室	奥壁側	78	52
J 339	5.30	4.00	1.20	(0.09)	ほぼ完存	玄室	奥壁側西側壁	78	52
J 340	4.70	3.90	1.20	0.05	完存	玄室	奥壁側	78	52
J 341	4.20	3.70	1.30	0.04	完存	玄室	奥壁側	78	52
J 342	2.60	3.50		(0.01)	全体的に磨滅	玄室	玄門側	78	52
J 343	(3.90)	(3.80)	(1.00)	(0.05)	2/5	玄室	奥壁側	78	52
J 344	(3.30)	(3.80)		(0.03)	1/4	玄室	土玉No.9	78	52
J 345	(4.90)	(4.00)	1.00	(0.04)	1/3	玄室	奥壁側	78	52
J 346	5.20	(4.00)	1.00	(0.04)	1/2	玄室	奥壁側西側壁	78	52
J 347	(3.00)	(4.20)	1.20	(0.03)	1/3	玄室	玄門側	78	52
J 348	(4.40)	(4.50)	1.20	(0.05)	2/3	玄室	奥壁側	78	52
J 349	(4.10)	(4.70)	1.50	(0.04)	1/3	玄室	土玉No.4	78	52
J 350	(2.70)	(5.10)	1.10	(0.04)	1/3	玄室	玄門側	78	52
J 351	(5.60)	(5.80)	1.20	(0.14)	全表面欠	玄室	奥壁側	78	52
J 352	(5.10)	(6.20)	2.10	(0.05)	1/3	玄室	奥壁側	78	52
J 353	5.00	(6.30)	1.20	(0.15)	若干剥離・欠損	玄室	玄門側	78	52
J 354	6.10	(6.50)	1.90	(0.21)	3/4	玄室	奥壁側	78	52
J 355	4.80	7.20	1.90	0.18	完存	羨道部	玄門付近	78	52
J 356	4.20	6.70	1.70	(0.14)	ほぼ完存	羨道部	玄門付近	78	52
J 357	(5.70)	6.70	1.00	(0.15)	2/3	羨道部	玄門付近	78	52
J 358	5.60	6.60	1.40	(0.12)	1/2	羨道部	玄門付近	78	52
J 359	5.70	6.50	1.30	(0.17)	若干磨滅・欠損	羨道部	玄門付近	78	52
J 360	5.20	6.50	1.80	0.18	完存	羨道部	玄門付近	78	52
J 361	5.00	6.40	1.40	0.17	完存	羨道部	玄門付近	78	52
J 362	4.80	6.30	1.20	(0.15)	一部欠損	羨道部	玄門付近	78	52
J 363	4.30	6.20	1.80	0.13	完存	羨道部	玄門付近	78	52
J 364	4.30	5.90	1.70	0.11	完存	羨道部	玄門付近	78	52
J 365	4.30	5.90	1.70	0.11	完存	羨道部	玄門付近	78	52
J 366	3.70	5.70	1.70	0.09	完存	羨道部	玄門付近	78	52
J 367	4.50	5.60	1.70	(0.09)	一部欠損	羨道部		78	52
J 368	4.20	5.20	1.30	0.09	完存	羨道部	玄門付近	78	52
J 369	(3.50)	4.80	(1.60)	(0.04)	1/2 弱	羨道部	玄門付近	78	52
J 370	(6.90)	(7.10)	1.40	(0.18)	2/3	羨道部	玄門付近	78	52

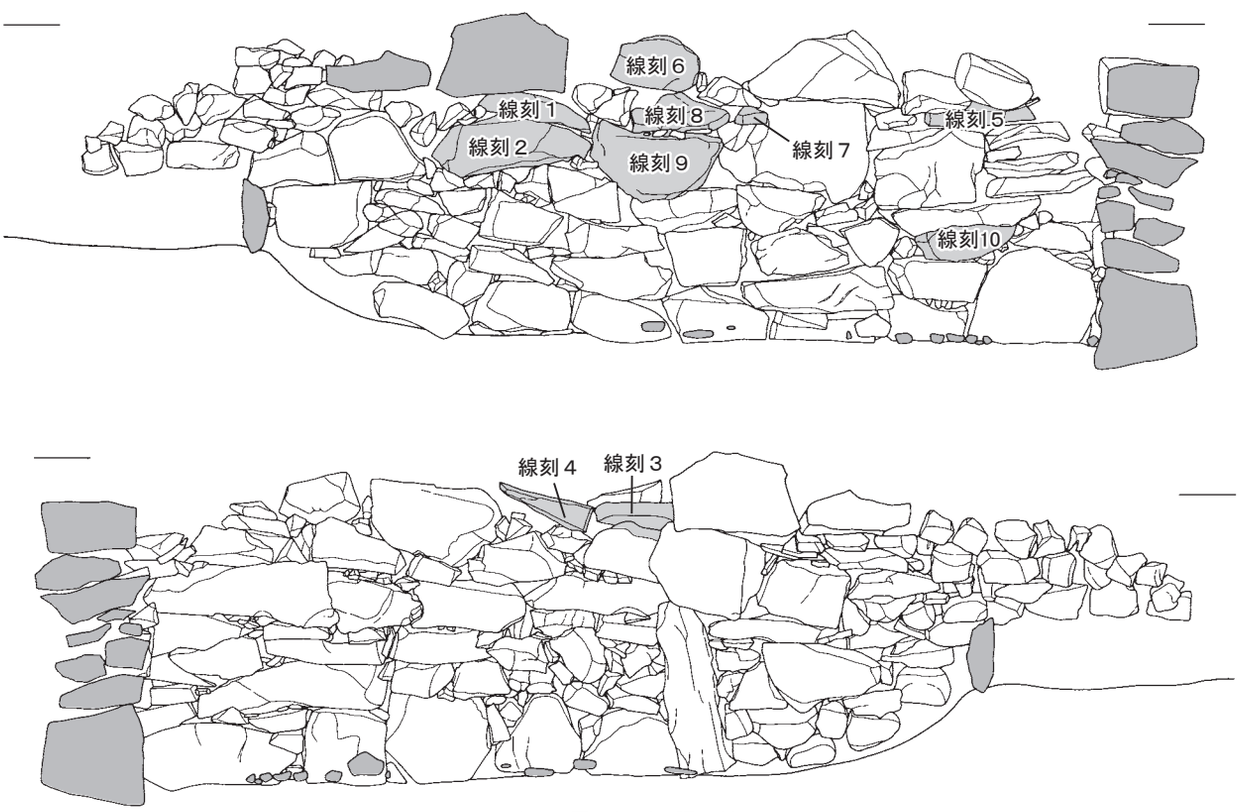
第４節　線刻

１．概　要

石室に用いられた石材のなかで、10石で線刻が認められた(第80図～第84図)。本節では、この線刻について報告する。

線刻が明らかとなった石材は、側壁に用いられた石材に限られ、奥壁からは見つかっていない(第79図)。さらに、側壁についても、玄室に限られる。このなかで、西側壁側が多く認められ、10石中８石において線刻が認められた。東側壁は２石に限られる。

当初は、玄室内から観察できる面で線刻が認められた。線刻１～線刻５が該当する。ところが、石室の石材を解体していく過程で、線刻が認められる面は、玄室内からは確認できる面とは限られないことが明らかとなった。具体的には、線刻６～線刻８は石材の上面で、線刻９は石材の背面で、線刻10は石材の下面で、それぞれ認められた。



第 79 図　線刻確認石材

２．線　刻(第80図～第84図)

各石材に認められた線刻の概要は以下のとおりである。線刻自体は認められるが、その内容を理解することは困難な状況である。

線刻１　中央部を中心に、やや複雑な線刻が認められる(第80図)。

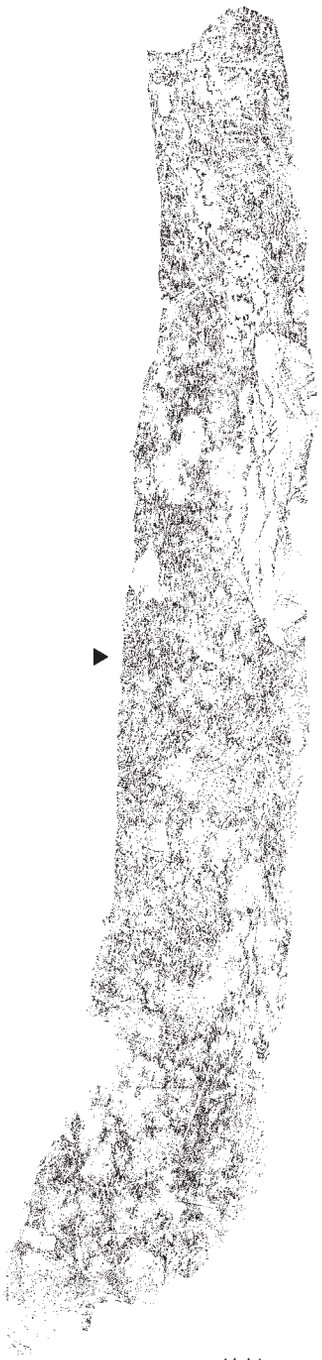
線刻２　全体的に短い線刻からなる(第81図)。

線刻３　比較的多くの線刻が認められる(第80図)。

線刻４　短い線刻が周辺部を中心に認められる(第81図)。

線刻５　短い線刻が数本認められる(第81図)。

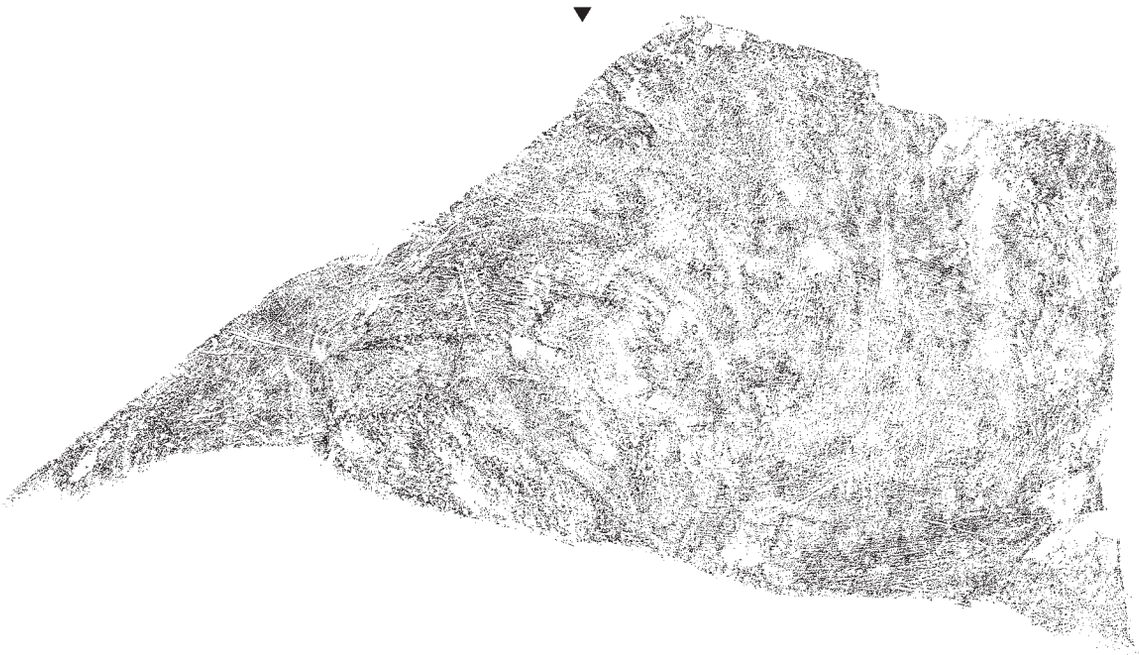
線刻１



線刻３

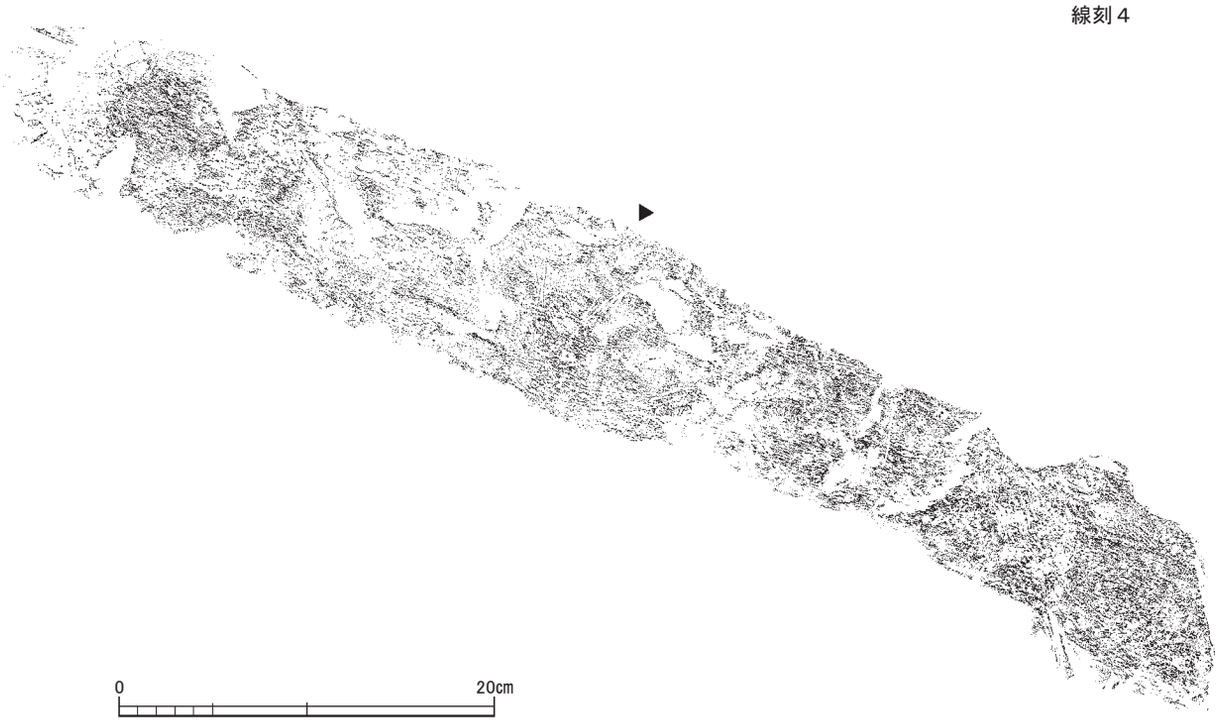
0　20cm

第 80 図　線刻１・３　拓影



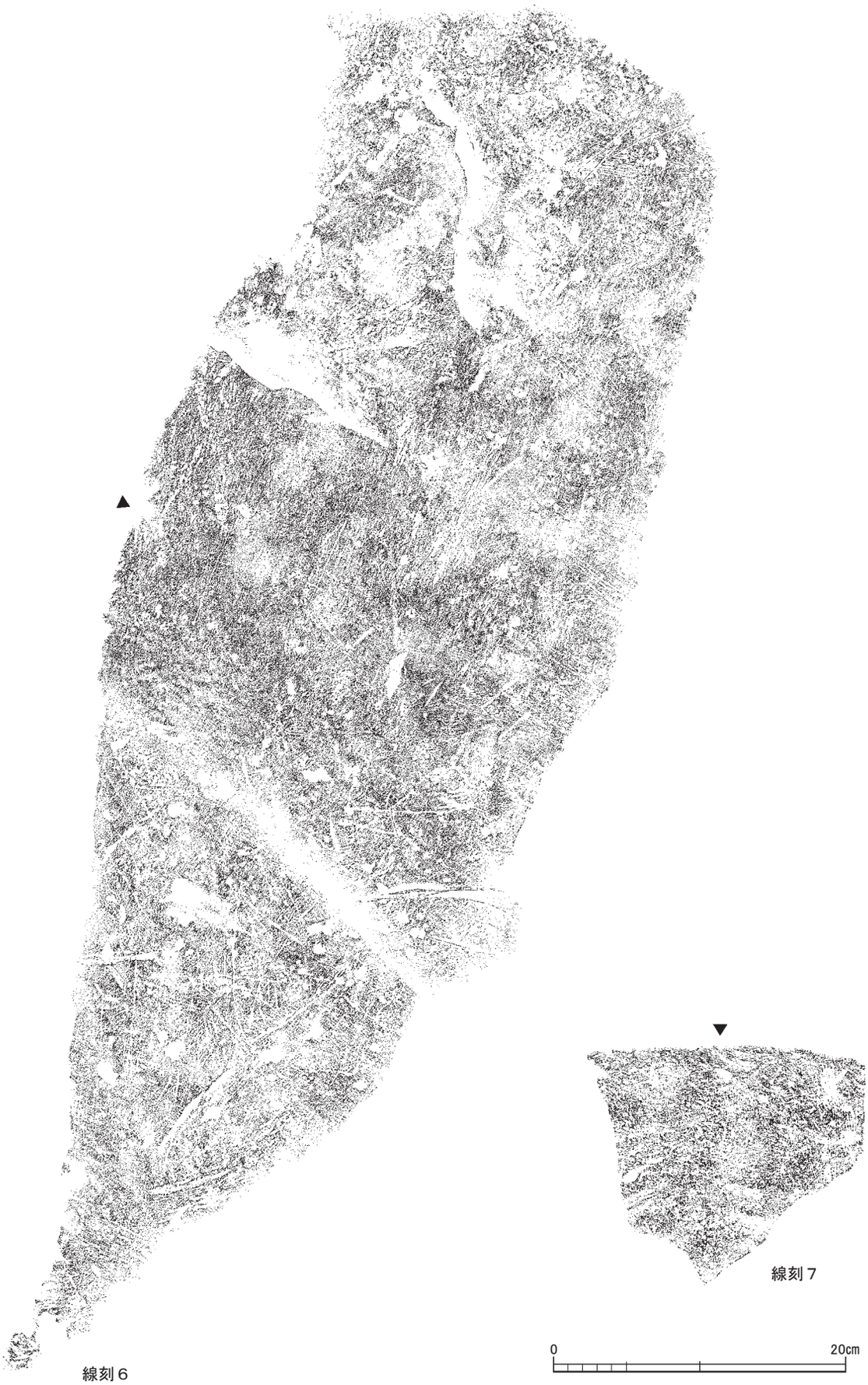
線刻２

線刻４

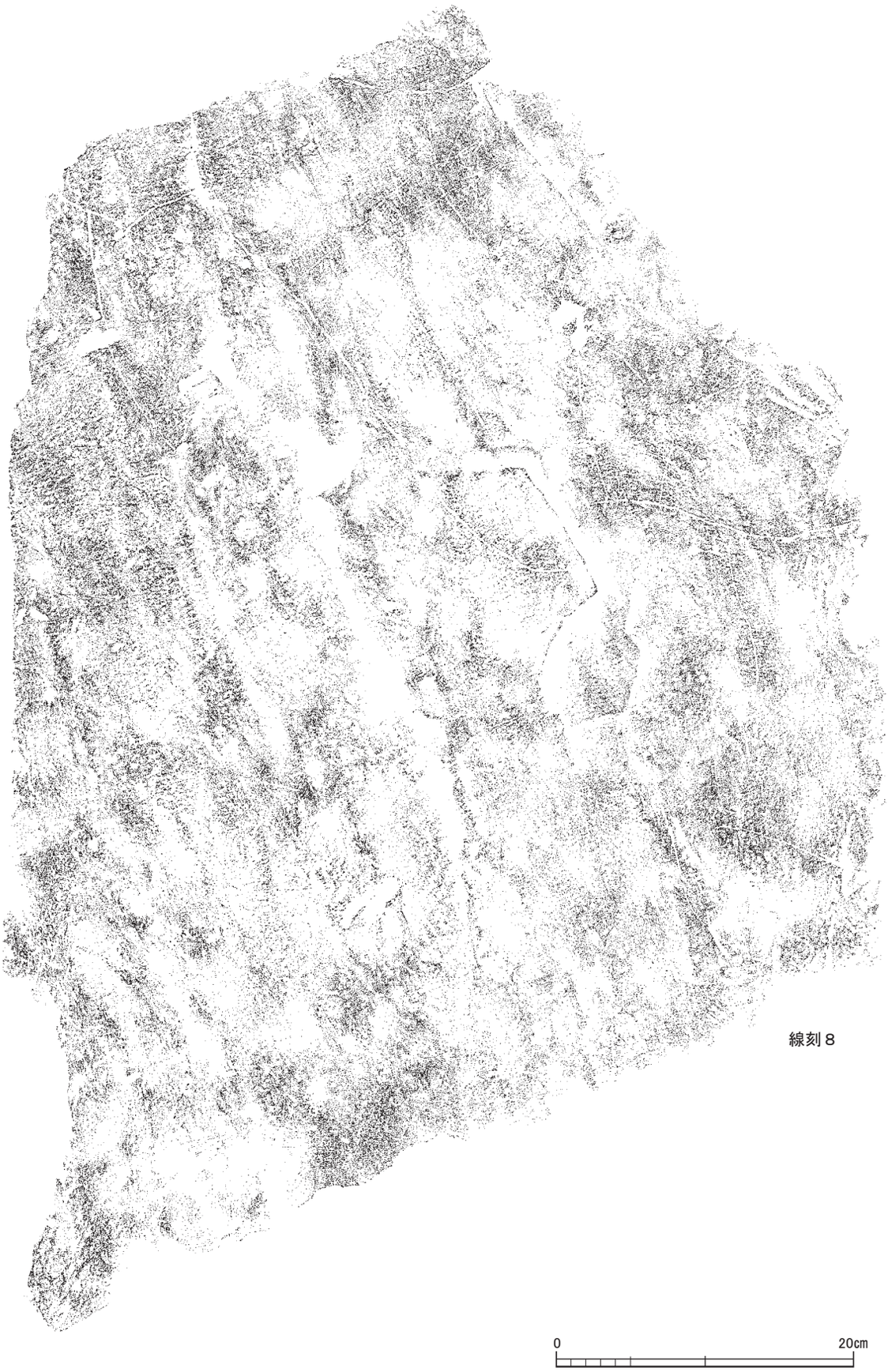


線刻５

第 81 図　線刻２・４・５　拓影

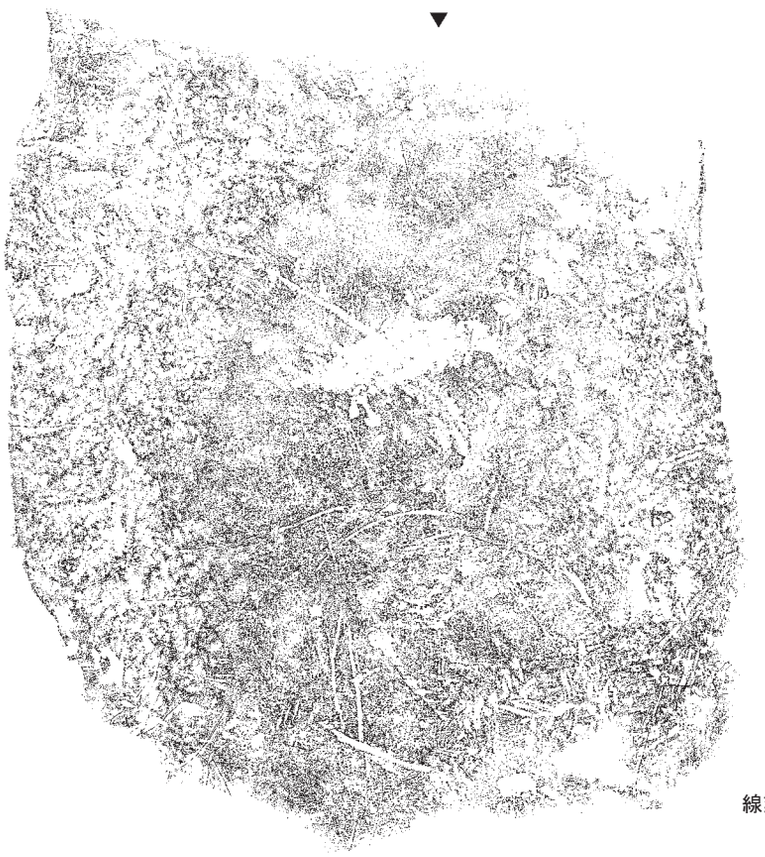


第 82 図　線刻６・７　拓影



第 83 図　線刻８　拓影

線刻９



線刻10

0　20cm

第 84 図　線刻９・10　拓影

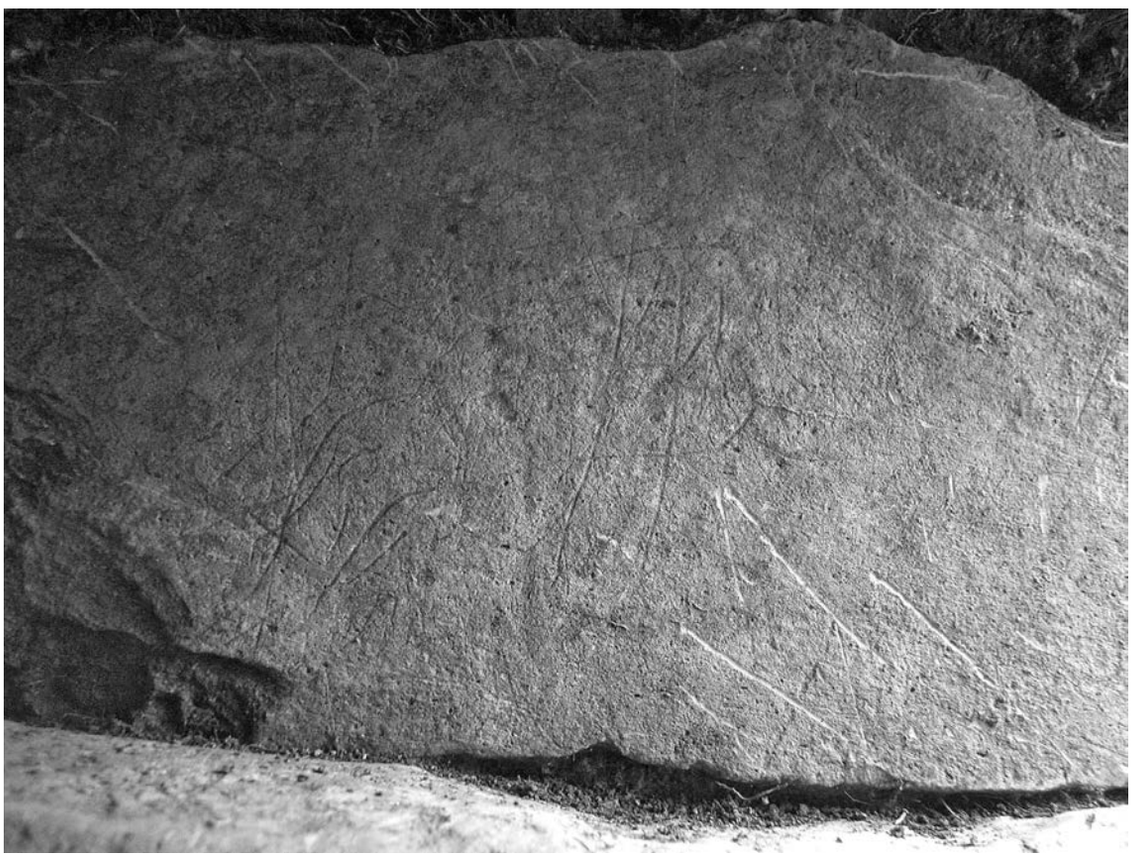
線刻６　石面の1/3の範囲に集中して認められる。比較的短い線刻が複雑に刻まれている(第82図)。

線刻７　石材が小型であることもあり、中央部にわずかに数本の線刻が認められる(第82図)。

線刻８　比較的長い先刻が数本認められる(第83図)。

線刻９　数本の線刻が認められる。いずれの線刻も絡み合っていない(第84図)。

線刻10　石面の1/2の範囲に認められる。直線と弧線からなる(第84図)。



第 85 図　線刻 1

第４章　分析・鑑定

第１節　上佐野1号墳出土須恵器、土師器の蛍光Ｘ線分析

三辻　利一

土器の素材は粘土である。粘土は岩石が風化して生成したものである。岩石は種々の鉱物（化合物）の集合体である。火成岩を構成する主成分鉱物は石英、長石類のほか、雲母、角閃石、輝石、かんらん石などの鉄化合物である。これらの鉱物を構成する主成分元素はSi、Al、K、Ca、Fe、Na、Ti、Mg、Mnなどである。岩石は構成鉱物種によって、玄武岩、安山岩、デイサイト、流紋岩（花崗岩類）などに分類される。鉄化合物を比較的多く含む玄武岩にはFe、Mg、Ti、Mnが多く含まれており、花崗岩類は主成分鉱物が長石類、石英であり、鉄化合物が少ない白色系の岩石であるが、カリ長石（K）を比較的多く含む花崗岩と斜長石（Ca）を比較的多く含む花崗閃緑岩がある。したがって、これらの岩石から風化して生成した粘土にも元素組成からみて違いがあることが予想される。実際、粘土の理論化学式は（SiO2・mAl2O3・nH2O）で示されるが、自然界に産出する粘土には岩石同様、種々の元素が含まれることは粘土の蛍光X線スペクトルやガンマ線スペクトルで実証されている。つまり、自然界に広く分布する粘土には母岩の残渣鉱物が残っている訳である。そうであれば、玄武岩に由来する粘土と花崗岩類に由来する粘土には元素からみて違いがあることが予想され、また、花崗岩類でも花崗岩に由来する粘土と花崗閃緑岩に由来する粘土にも元素からみて違いがあることが予想される。しかし、自然界に分布する粘土の地域差に関する研究はこれまで報告されていない。その理由は全国各地に広く分布する粘土試料を採取することは困難であるからである。粘土の地域差に関する情報が得られない限り、元素分析によって、土器遺物の産地問題の研究を推進することは不可能にちかい。

他方、日本では行政発掘によって、全国各地に数1000基の須恵器窯跡が発掘調査されていた。膨大な量の窯跡出土須恵器破片は各地の教育委員会が保管していた。全国各地の粘土を分析する代わりに、これらの窯跡出土須恵器を大量に分析すれば、元素からみて粘土の地域差がわかるかもしれない。このことに気がついた筆者は各地の教育委員会に依頼して、大量の須恵器片試料を集め蛍光Ｘ線分析法で分析した。丁度、これと軌を一にして、優れた機能をもつ完全自動式の蛍光Ｘ線分析装置が市販された。筆者は30年間にわたり、３台の蛍光Ｘ線分析装置（Kevex社製のエネルギー分散型、理学電機製3270、RIX2100、波長分散型）を駆使し、全国各地の窯跡出土須恵器を大量に分析した。その結果、K、Ca、Rb、Srの４元素が有効に地域差を示すことを実証した。通常、地域差はK-Ca、Rb-Srの両分布図上で表示される。粘土の地域差は粘土の母岩に由来する残渣鉱物が原因であるから、当然、日本列島の地質の基盤を構成する花崗岩類も全国的に分析してみる必要がある。全国各地の花崗岩類の岩片試料を大量に分析した結果、花崗岩類もK-Ca、Rb-Srの両分布図上で地域差を示すことも実証された。しかも、「花崗岩類のベルト帯」を形成するともわかった。このベルト帯は久野理論によって説明される。このベルト帯の中で花崗岩と花崗閃緑岩はわかれて分布した。その原因はカリ長石と斜長石にあることも久野理論で理解できた。こうして、花崗岩類に含まれている長石類が地域差の原因であることがわかった。その結果、それぞれの岩石に由来する粘土（窯跡出土須恵器）にも、K-Ca、Rb-Srの両分布図上で地域差があることも理解された。このことを

理解せずして、元素分析による土器遺物の産地問題の研究を推進することは不可能に近い。一方、岩石学研究によって、各地の岩石の分布図が地質図として公表されている。岩体上に分布する粘土（窯跡出土須恵器）の化学特性は母岩に支配されているから、窯跡出土須恵器は地理的情報をもつことになる。産地推定をする上に土器遺物の年代観とともに、土器胎土の持つ地理的情報も必要である。結局、土器遺物の産地問題の研究の基礎データは窯跡出土須恵器が握っていたのである。全国各地の窯跡出土須恵器の分析データがあってはじめて、元素分析による土器遺物の産地問題の研究が成り立つ訳である。

こうした研究背景から、筆者は土器遺物の分析結果からまず、K-Ca、Rb-Srの両分布図を作成することから始めることにしている。本報告では、上佐野1号墳から出土した須恵器と土師器の蛍光Ｘ線分析の結果を報告する。使用した分析装置は理学電機製RIX2100（波長分散型）の完全自動式の分析装置である。この装置には50試料が同時に搭載できる試料交換器が連結されている。

第９表には、今回分析した試料の分析値を示す。全分析値は同じ日に測定した岩石標準試料JG-1による標準化値で示されている。風化過程で流出するNa、K、Ca、Rb、Srなどの元素の分析値は１以下であるのに対して、風化して残留する元素であるFeは1以上の値をもつことは容易に理解できる。

まず、第86図には、今回分析した試料の両分布図を示す。この分布図での試料集団の分布から、まとまって分布する試料集団を見つけ出すことが重要である。両分布図で土師器を含んで、まとまって分布する試料集団があることがわかる。土師器は在地産であると仮定すると、この試料集団は在地産の須恵器と考えられる。これらの試料を包含するようにして、在地領域を描いてある。過半数の試料が両分布図で在地領域に分布することがわかる。これに対して、在地領域をずれて分布する試料はかなりばらついて分布する。とくに、両分布図で他の須恵器から大きく離れて分布したNo.39（杯蓋）、87（有蓋高杯）は同じところで作られた外部地域からの搬入品と推定される。この２点の須恵器はNaの分析値も他の須恵器の分析値よりも大きく、Na因子でも他の須恵器胎土とは異なることを示している。別産地の製品と推定される、この須恵器の型式は他の須恵器とは異なることが予想される。他の、番号を付した須恵器もかなりばらついて分布する。1ヵ所で作られた須恵器ではない可能性もある。そこで、朝来市和田山町の古墳時代の須恵器窯跡である岡田3号窯出土須恵器の両分布図を第87図に示す。１基の窯跡出土須恵器としてまとまって分布することがわかる。これらの試料を包含するようにして、岡田領域を描いた。この領域は第86図にも転写してある。そうすると、No.31、56、64、65、67、98の６点の須恵器は両分布図でほぼ岡田領域に分布し、岡田窯跡の製品である可能性があることを示している。土器型式でも検討すべき点である。また、No.13、21、32、38、92、99、102の７点の須恵器も両分布図でほぼ同じ位置に分布しており、同じ生産地の製品である可能性があるが、Rb-Sr分布図では岡田領域には対応しない。したがって、岡田窯跡の製品ではない。別産地を考えなければならない。これらの須恵器は土器型式でも比較検討すべきである。考古学的にも胎土分析の結果をチェックすることは必要である。そうすることによって、考古学者も胎土分析の結果を共有することが出来るであろう。

ここで、K-Ca、Rb-Srの両分布図上で定性的な分類をこころみた結果が妥当であるかどうかをみるため、K-Rb、Ca-Srの両相関図を描いてみた。微量元素RbとSrは鉱物の結晶中でそれぞれ、主成分元素KとCaと共存したと考えられる。正の相関性があることが示されているからである。鉱物の結晶格子で主成分元素K、Caが配置される位置に微量元素Rb、Srが配置されたと考えられる。RbとSrは主成分元素KとCaにそれぞれ、化学的性質が類似している上に、イオン半径も同じであるからである。したがって、岩石中に含まれる鉱物種が同じであれば、同じ勾配をもつ相関直線上に試料群は分布することになる。第

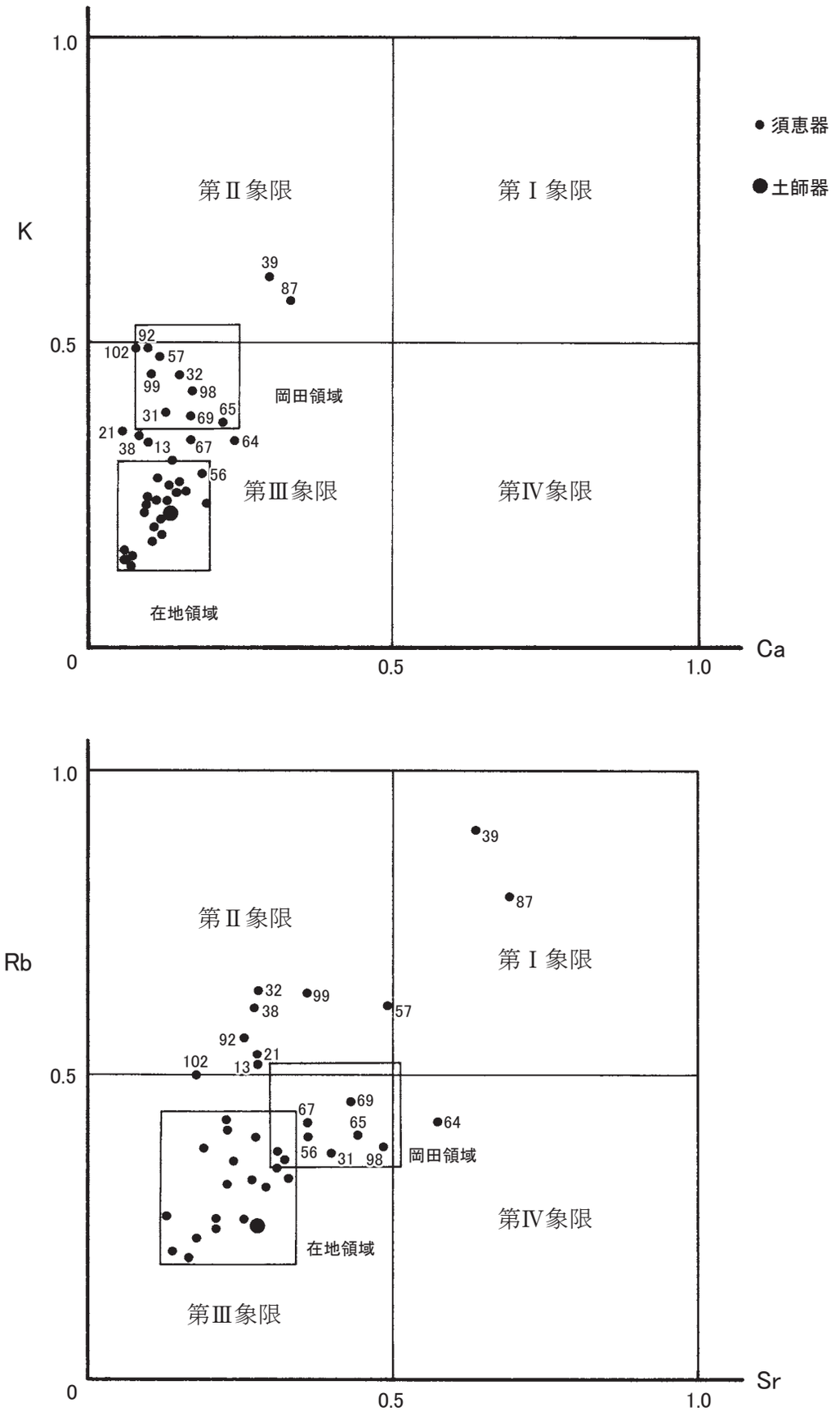
88図には、在地産と推定された須恵器、土師器のK-Rb、Ca-Srの両相関図を示す。K-Rb相関図では勾配（１：１）の直線の下側に正の相関性を持って分布し、Ca-Sr相関図では勾配（１：３）の直線の上側に正の相関性をもって分布することがわかる。したがって、在地産と推定された、これらの須恵器、土師器は同じ岩石に由来する粘土を素材としたと考えられる。すなわち、同じ生産地の製品であると推定できる。一方、在地産と推定されなかった他の須恵器の両相関図を第89図に示す。K-Rb相関図では勾配（１：１）の直線の下側に、また、Ca-Sr相関図では勾配（１：３）の直線の上側に正の相関性をもって分布することがわかる。分布の仕方は在地産と推定された須恵器と同じであり、同じ系統の岩石に由来する粘土が素材となっていることがわかる。しかし、含有量が異なっており、K-Rb相関図では在地領域をずれて分布した。その結果、両相関図でも、在地領域をずれて分布することになったと考えられる。すなわち、同じ地域内の別場所で採取された粘土が素材となっていると考えられる。第90図には、岡田窯跡出土須恵器の両相関図を示す。両相関図での相関性も類似していることは第88図・第89図と比較すればわかる。岡田窯跡の須恵器も同じ系統の岩石に由来する粘土が素材となっていると考えられる。したがって、今回分析した須恵器はすべて、同じ岩体上に分布する粘土が素材となったと推定できる。ただし、含有量は異なるので、分布位置はずれている。当然、粘土の採取場所も異なると考えられる。

以上の結果、土師器を含めて在地領域に分布した須恵器は在地産であり、古墳の周辺で焼成された須恵器である可能性がある。岡田窯産と推定される須恵器も、他の須恵器もNo.39、87を除いて、同じ地域で作られた須恵器である可能性が高い。No.39、87は産地不明としておく。外部地域から搬入された須恵器である可能性があるが、後から追葬された、製作時期の異なる須恵器である可能性もある。土器型式から考古学的にも検証することが必要である。産地推定した結果は分析データとともに、第９表にまとめてある。

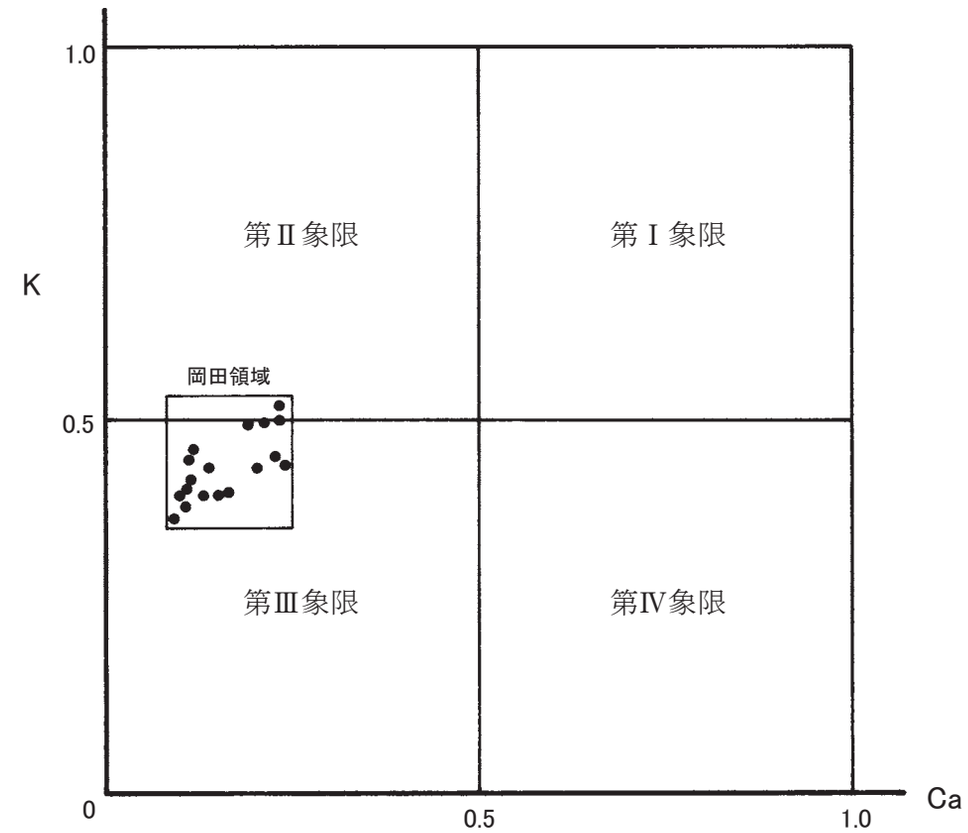
以上に述べたように、長石系因子を中核とした、胎土分析のデータから、上佐野1号墳出土須恵器の生産地に関する情報を得ることができた。この結果は土器型式などの考古学情報を入れて検証されるべきである。そうすることによって、胎土分析のデータを考古学側と自然科学側で共有できるからである。このようなデータを多くの古墳出土須恵器について集積することによって、須恵器を通して文字がなかった時代の過去を再現する歴史研究への道が開かれる。これが「新しい土器の考古学」であり、行政発掘によって、膨大な量の土器遺物を発掘した日本においてはじめてできる考古学研究である。この認識をもたないと、発掘した膨大な量の土器遺物は保管庫のなかで、意味のないまま放置され、最終的には廃棄されるであろう。日本考古学のためには大変残念なことになる。そうならないことを望む。

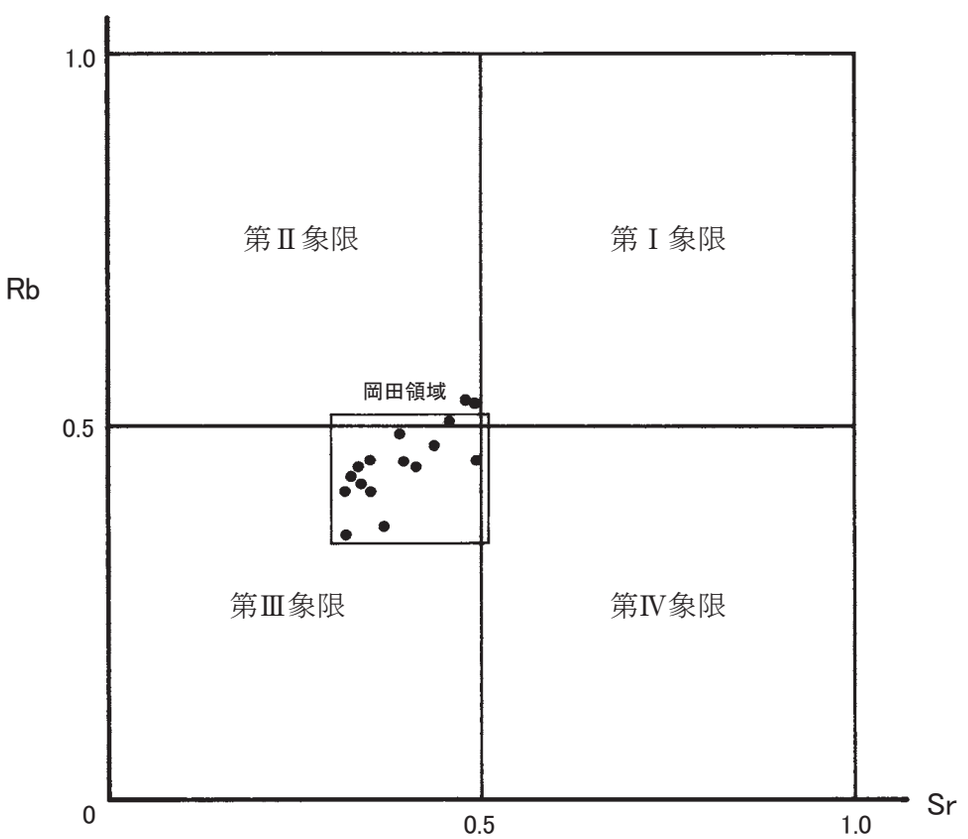
第９表　上佐野1号墳出土土器の分析データ

報告No.	試料No.	種別	器種	K	Ｃａ	Ｆｅ	Ｒｂ	Ｓｒ	Ｎａ	産地推定結果
13	27-99	須恵器	杯蓋	0.336	0.101	3.580	0.518	0.279	0.054	在地産
14	27-100	須恵器	杯身	0.252	0.100	2.780	0.334	0.273	0.105	在地産
15	27-101	須恵器	壺	0.245	0.110	2.510	0.425	0.227	0.068	在地産
17	27-102	須恵器	甕	0.267	0.146	2.750	0.366	0.314	0.098	在地産
19	27-103	須恵器	杯蓋	0.229	0.100	2.170	0.378	0.193	0.051	在地産
20	27-104	須恵器	杯蓋	0.307	0.138	2.490	0.415	0.329	0.096	別産地
21	27-105	須恵器	杯蓋	0.361	0.060	1.960	0.532	0.280	0.103	別産地
26	27-106	須恵器	杯蓋	0.162	0.060	2.230	0.267	0.130	0.030	在地産
31	27-107	須恵器	杯身	0.390	0.129	2.190	0.372	0.400	0.070	岡田窯
32	27-108	須恵器	甕	0.451	0.148	2.420	0.635	0.278	0.059	別産地
34	27-109	土師器	杯蓋	0.216	0.143	4.670	0.254	0.277	0.154	在地産
36	27-110	須恵器	杯蓋	0.281	0.115	2.750	0.401	0.279	0.083	在地産
37	27-111	須恵器	杯蓋	0.204	0.110	3.050	0.259	0.258	0.071	在地産
38	27-112	須恵器	杯蓋	0.353	0.092	2.380	0.608	0.275	0.060	別産地
39	27-113	須恵器	杯蓋	0.611	0.298	1.550	0.896	0.638	0.337	不明
43	27-114	須恵器	杯蓋	0.189	0.116	4.280	0.228	0.183	0.064	在地産
44	27-115	須恵器	杯身	0.235	0.129	3.020	0.315	0.294	0.079	在地産
47	27-116	須恵器	杯身	0.242	0.200	4.360	0.318	0.233	0.100	在地産
55	27-117	須恵器	杯身	0.268	0.141	2.270	0.326	0.328	0.101	在地産
56	27-118	須恵器	杯Ｂ	0.294	0.194	2.790	0.395	0.360	0.152	岡田窯
57	27-119	須恵器	杯Ｂ	0.477	0.122	2.590	0.610	0.490	0.046	岡田窯
59	27-120	須恵器	高杯	0.240	0.097	2.810	0.361	0.235	0.077	在地産
60	27-121	須恵器	高杯	0.263	0.160	2.770	0.346	0.315	0.095	在地産
61	27-122	須恵器	高杯	0.262	0.159	2.710	0.356	0.321	0.095	在地産
64	27-123	須恵器	甕	0.344	0.239	2.150	0.424	0.571	0.120	岡田窯
65	27-124	須恵器	甕	0.367	0.222	2.150	0.403	0.440	0.135	岡田窯
67	27-125	須恵器	平瓶	0.334	0.166	3.240	0.416	0.357	0.185	岡田窯
68	27-126	須恵器	甕	0.148	0.067	1.620	0.245	0.209	0.064	在地産
69	27-127	須恵器	甕	0.381	0.173	1.740	0.455	0.434	0.178	別産地
71	27-128	須恵器	杯蓋	0.214	0.128	3.720	0.255	0.211	0.067	在地産
87	27-129	須恵器	高杯	0.573	0.330	1.570	0.794	0.686	0.352	不明
89	27-130	須恵器	高杯	0.150	0.067	3.400	0.203	0.166	0.036	在地産
92	27-131	須恵器	平瓶	0.489	0.103	2.010	0.556	0.255	0.045	別産地
98	27-132	須恵器	甕	0.417	0.174	2.010	0.385	0.476	0.156	岡田窯
99	27-133	須恵器	壺	0.445	0.112	2.480	0.629	0.359	0.150	別産地
101	27-134	須恵器	壺	0.149	0.070	2.930	0.206	0.138	0.039	在地産
102	27-135	須恵器	甕	0.486	0.077	3.550	0.503	0.179	0.127	別産地
	27-136			0.182	0.114	3.940	0.218	0.193	0.055	在地産

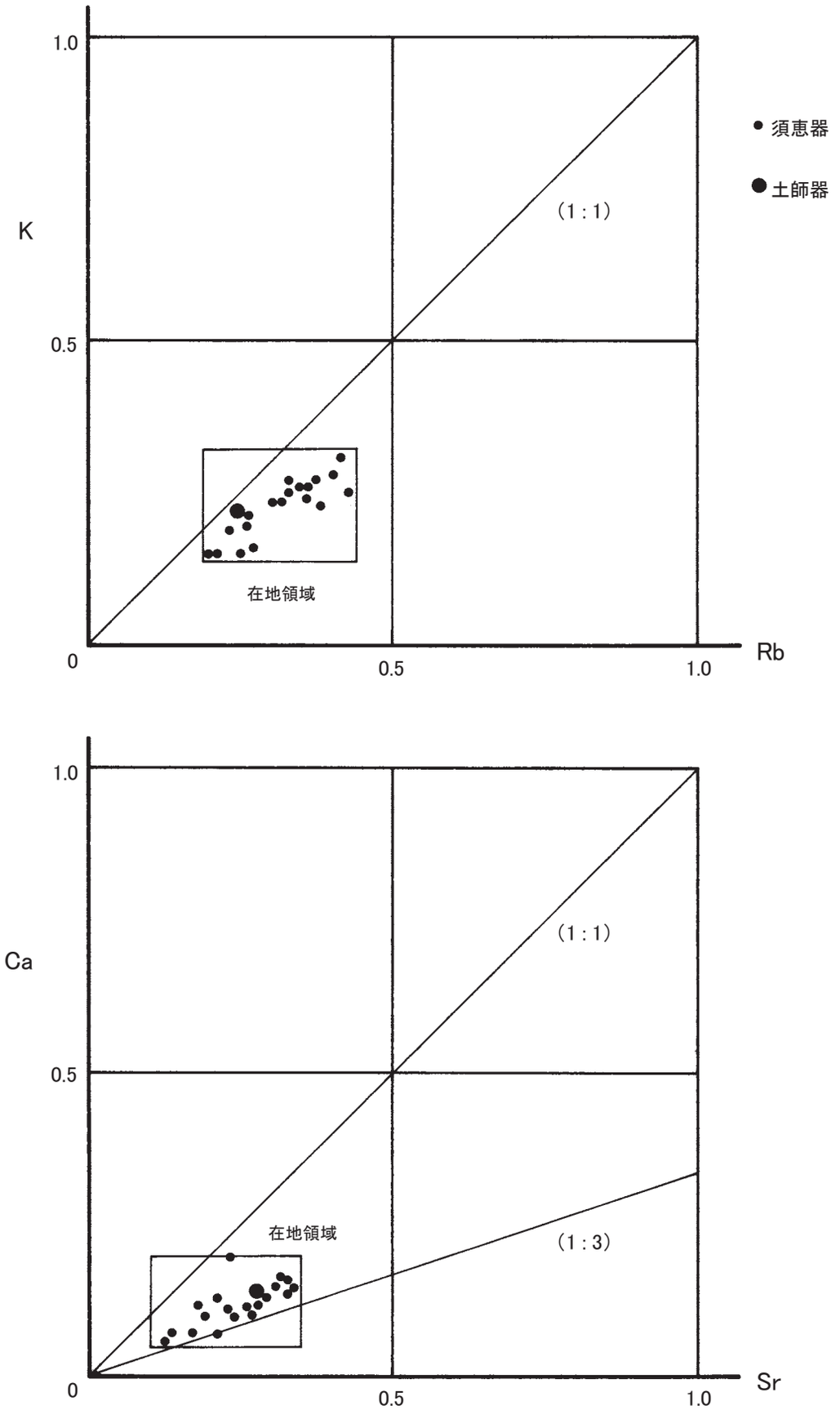


第86図　上佐野1号墳出土須恵器のＫ−Ca、Ｒb−Ｓr分布図

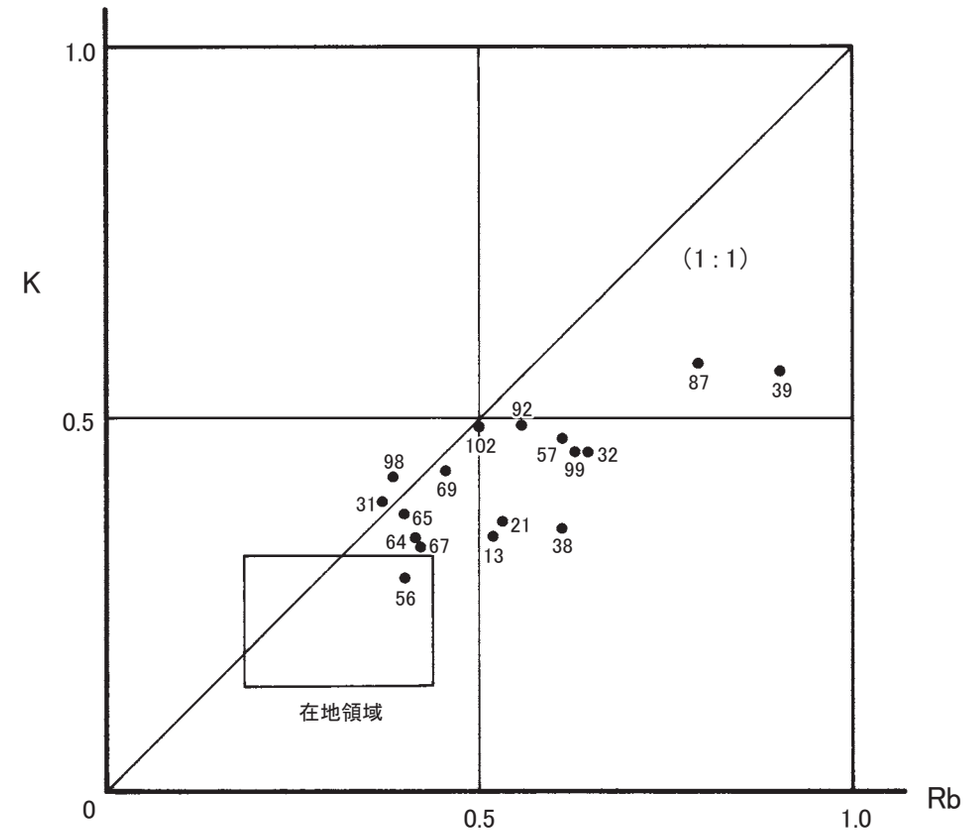


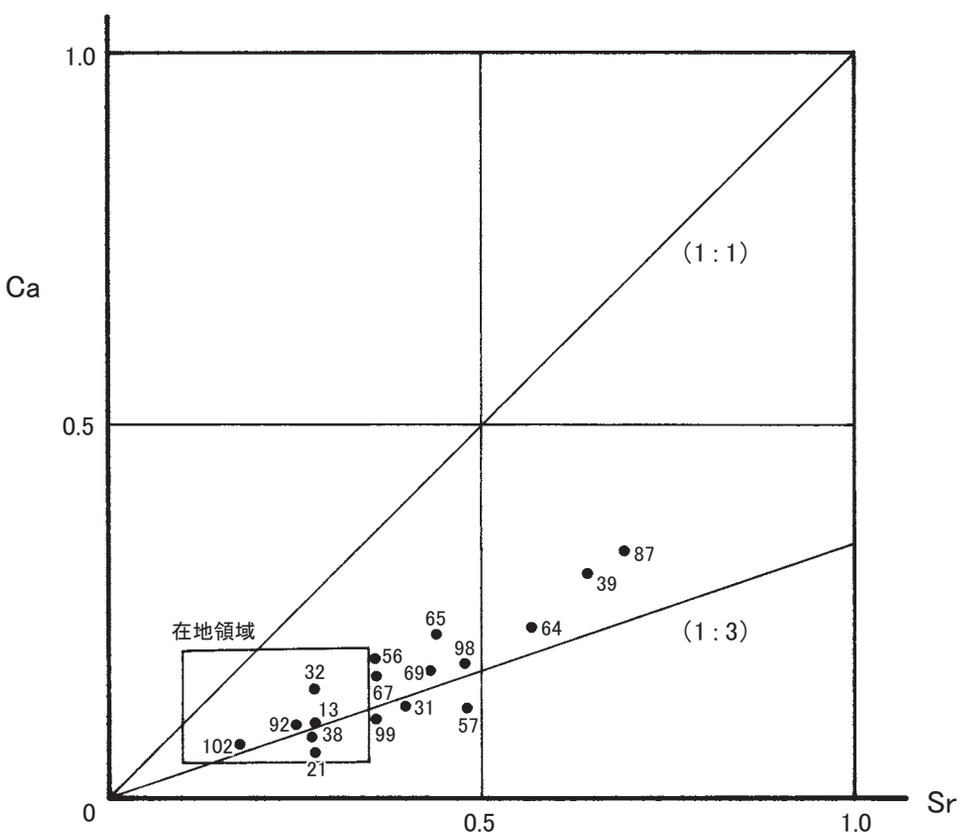


第87図　岡田１、３号窯出土須恵器のＫ−Ca、Ｒb−Ｓr分布図

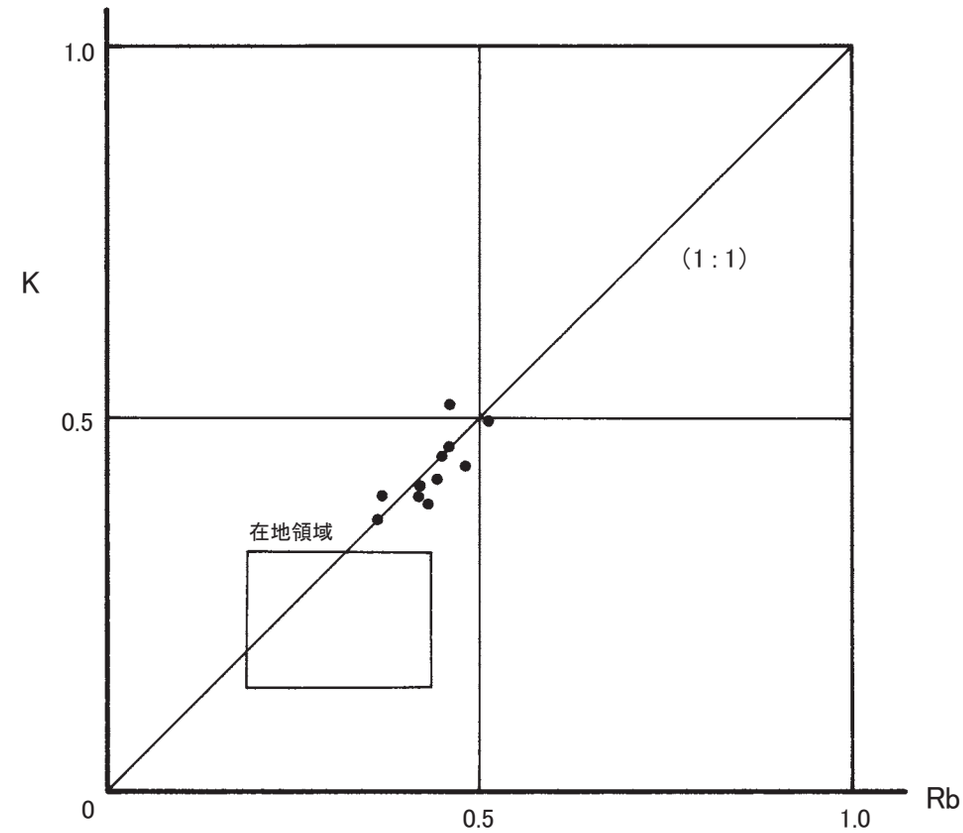


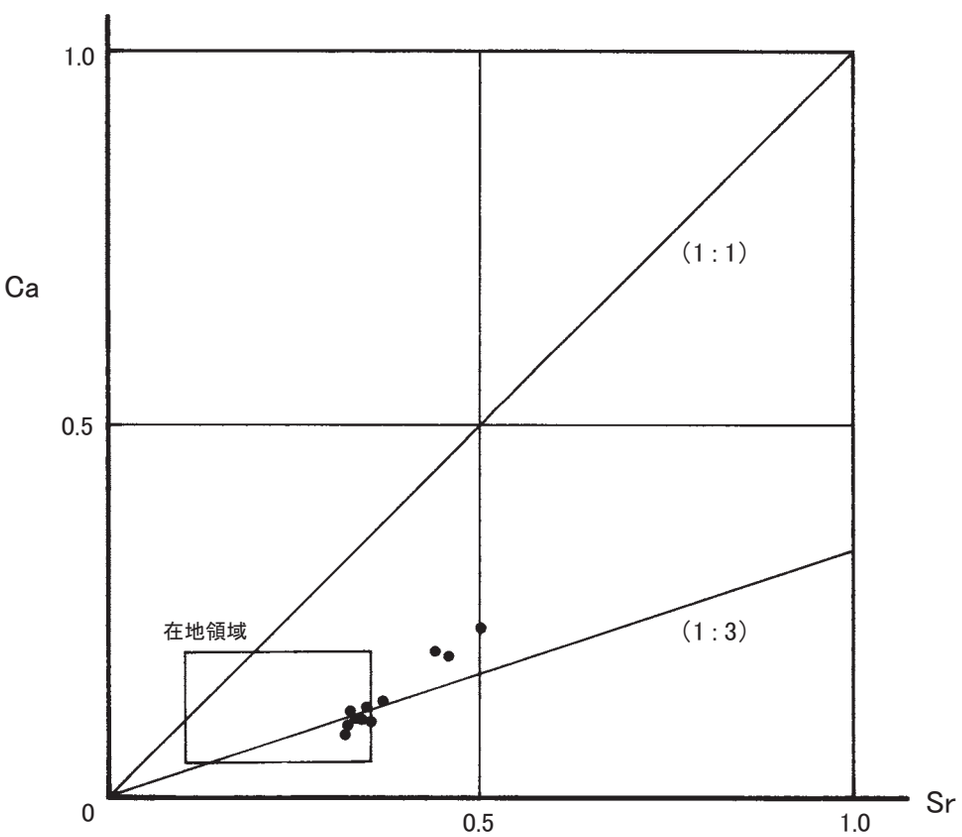
第88図　在地産と推定される須恵器のＫ−Ca、Ｒb−Ｓr相関図





第89図　在地産ではないと推定される須恵器のＫ−Ca、Ｒb−Ｓr相関図





第90図　岡田１、３号窯出土須恵器のＫ−Ca、Ｒb−Ｓr相関図

第２節　上佐野1号墳出土石材付着赤色顔料の蛍光Ｘ線分析

１　はじめに

上佐野1号墳から出土した石室石材に付着する赤色顔料について蛍光Ｘ線分析を行い、顔料の種類を検討した。

２　試料

対象となる赤色顔料は天井石に付着しているもので、現地で採取したものである。採取方法はメスを用いて石材表面からこそぎ取った。また、比較のために調査区内の地山の土も採取した。（第10表・第91図～第94図）

３　試料の観察と分析

実体顕微鏡による観察

最初に実体顕微鏡で観察し、デジタルカメラで記録を取った。使用した装置は（株）ニコン製ＳＭＺ－1500である。

蛍光Ｘ線分析装置による分析

蛍光Ｘ線分析はスペクトロ社製エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置ＭＩＤＥＸ－Ｍを用いて行った。分析の条件は電圧45ｋＶ、電流0.25ｍＡ、測定時間180秒、コリメータ径は1.0㎜で軽元素側は電圧19ｋＶ、電流0.3ｍＡ、測定時間300秒でコリメータ径は2.0㎜で測定した。検出器はペルチェ冷却ＳＤＤ（液体窒素不要）。測定雰囲気は、大気中で測定した。

試料はメノウ製乳鉢で破砕し調整したものを１試料あたり４回測定し、その検出強度の平均値で比較した。

４　結果

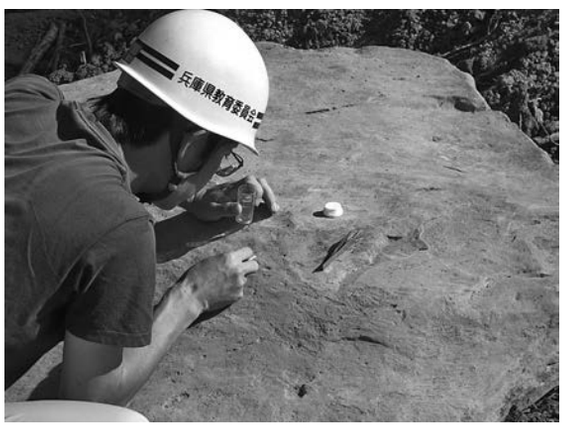
分析の結果、試料１と試料２より採取した顔料からはマグネシウム（Mg）、アルミニウム（Al）、ケイ素（Si）と鉄（Fe）が顕著に検出された。マグネシウム、アルミニウム、ケイ素は土由来の元素と考えられる。鉄の検出強度は、比較のため測定した地山の土からのサンプルよりも強く出ている（第75図）。

赤色顔料には主に硫化水銀（HgS）を用いた水銀朱と鉄系のベンガラがある。今回の分析では水銀（Hg）は検出されなかったため、鉄系のベンガラが用いられていた可能性が高い。

第 91 図　天井石１

第 92 図　サンプル採取状況

第 93 図　天井石２



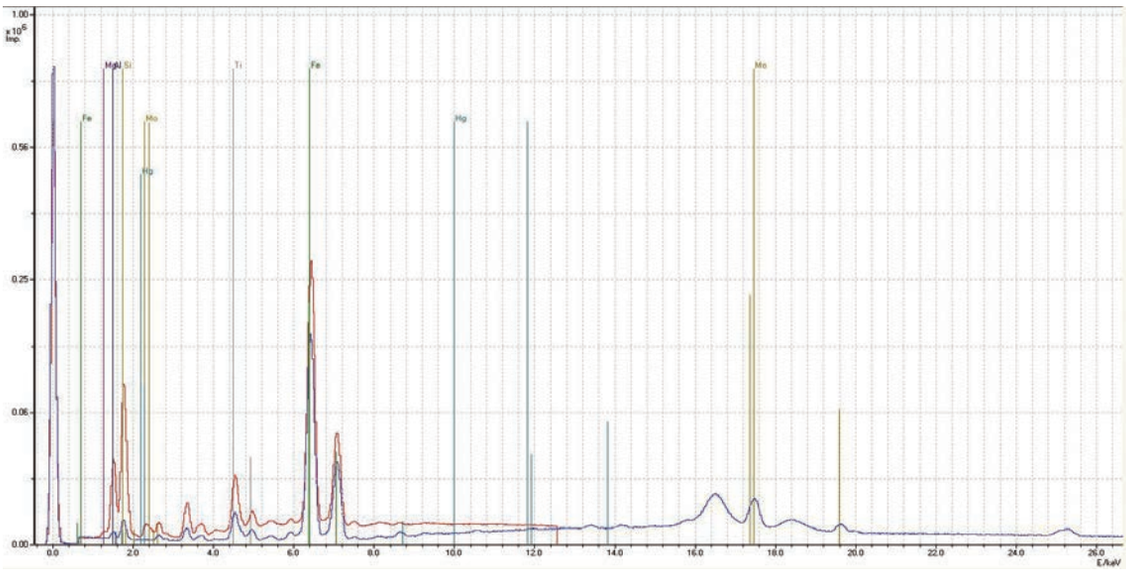
第 94 図　サンプル採取状況

第 10 表　分析試料

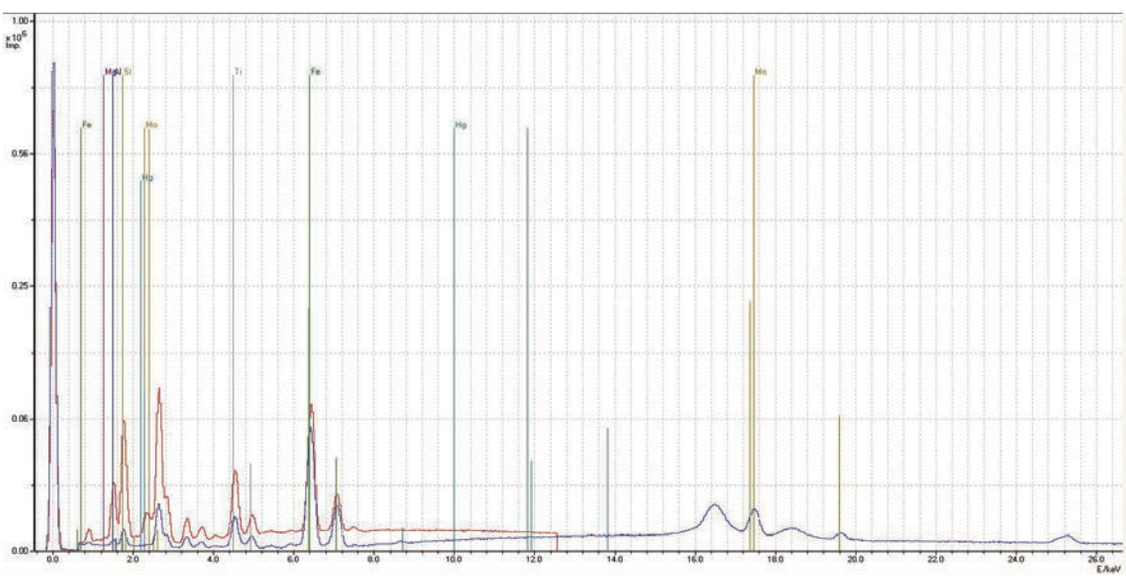
試料番号	1	2	3
備考1	天井石１	天井石２	地山土
備考2			比較試料

第 11 表　分析値

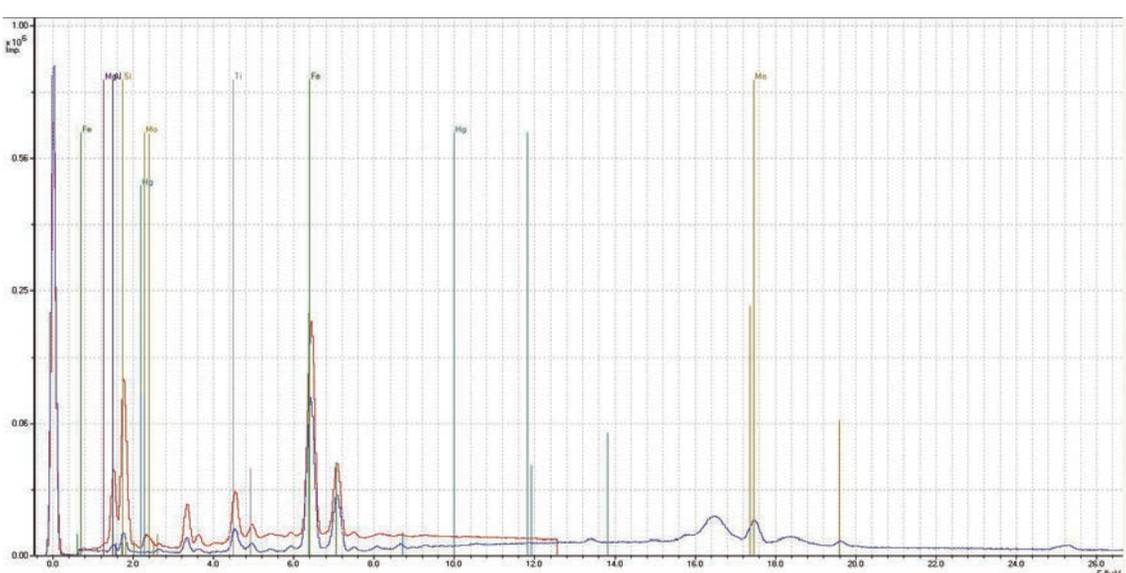
		Mg	Al	Si	Ti	Fe
1	1	1.45	16.66	24.79	1.03	9.59
	2	1.55	17.52	26.22	1.05	9.23
	3	1.50	17.37	26.04	0.98	9.28
	4	1.50	17.48	25.72	1.00	9.35
平均値		1.50	17.26	25.69	1.02	9.36
2	1	1.82	11.66	16.08	0.01	2.70
	2	1.85	12.10	16.77	1.11	2.60
	3	1.96	12.16	17.27	1.41	2.65
	4	1.63	9.38	12.84	0.99	1.45
平均値		1.82	11.33	15.74	0.88	2.35
地山土	1	1.15	16.80	28.14	0.76	5.01
	2	1.25	16.42	26.35	0.71	3.78
	3	1.12	16.03	28.70	0.72	4.86
	4	1.20	16.36	26.49	1.23	5.23
平均値		1.18	16.40	27.42	0.86	4.72



試料１



試料２



地山土

第95図　スペクトル図

第５章　遺物のまとめ

第１節　土器

１．概　要

須恵器と土師器が出土しているが、土師器の出土はわずかで、須恵器を模倣したと考えられる個体が中心である。このため、本節では須恵器を中心にまとめていく。須恵器については、時期的特徴を主眼に検討を加えていくことにする。

２．須恵器

⑴ 器種分類

杯・杯蓋・高杯・高杯蓋・壺・瑠・甕が出土している（第96図・第97図）。

杯　杯Ｈ・杯Ｇ・杯Ｂが出土している。

杯Ｈ　大きく２タイプに細分できる（杯Ｈａ・杯Ｈｂ）。

杯Ｈａ：口縁部の立ち上がりが直立傾向にあるもの(５)。底部の調整は、ヘラ削りが施されている。

杯Ｈｂ：杯Ｈａ以外のもの。法量から、口径が14㎝を超えるもの(杯ＨｂⅠ：４・27～29・44)と、口径が14㎝を超えなく器高も4.20㎝以下と浅いもの(杯ＨｂⅡ：31・48・50・74～76)、口径が14㎝を超えなく器高は4.20㎝以上と深いもの(杯ＨｂⅢ：６～12・30・45～47・49・51)、に細分可能である。杯ＨｂⅠは、器高も4.6㎝以上と杯ＨｂⅡと比べて、全体的に大型である。底部の調整は、４・５・８～12・29・31・47・74がヘラ削り、27・28・30・44～46・48～51・75・76がヘラ切により仕上げられている。

杯Ｈ蓋　杯Ｈに対応する蓋である。形態的特徴から、大きく２タイプに分類できる。

杯Ｈ蓋ａ：口縁部内端部に内傾する端面の痕跡が認められるもの(１・２)。天井部の調整は、回転ヘラ削りにより仕上げられている。

杯Ｈ蓋ｂ：口縁部内端部に端面の痕跡が認められないもの。法量から４タイプ(杯Ｈ蓋ｂⅠ～Ⅳ)に細分できる。

杯Ｈ蓋ｂⅠは、口径が16㎝を超えるもの(18・19)。器高についても５㎝を超え、全体的に大型である。

杯Ｈ蓋ｂⅡは、口径が13㎝以上で16㎝未満、器高が４㎝以上のもの。杯Ｈ蓋の大半が、当タイプに分類されるものである。

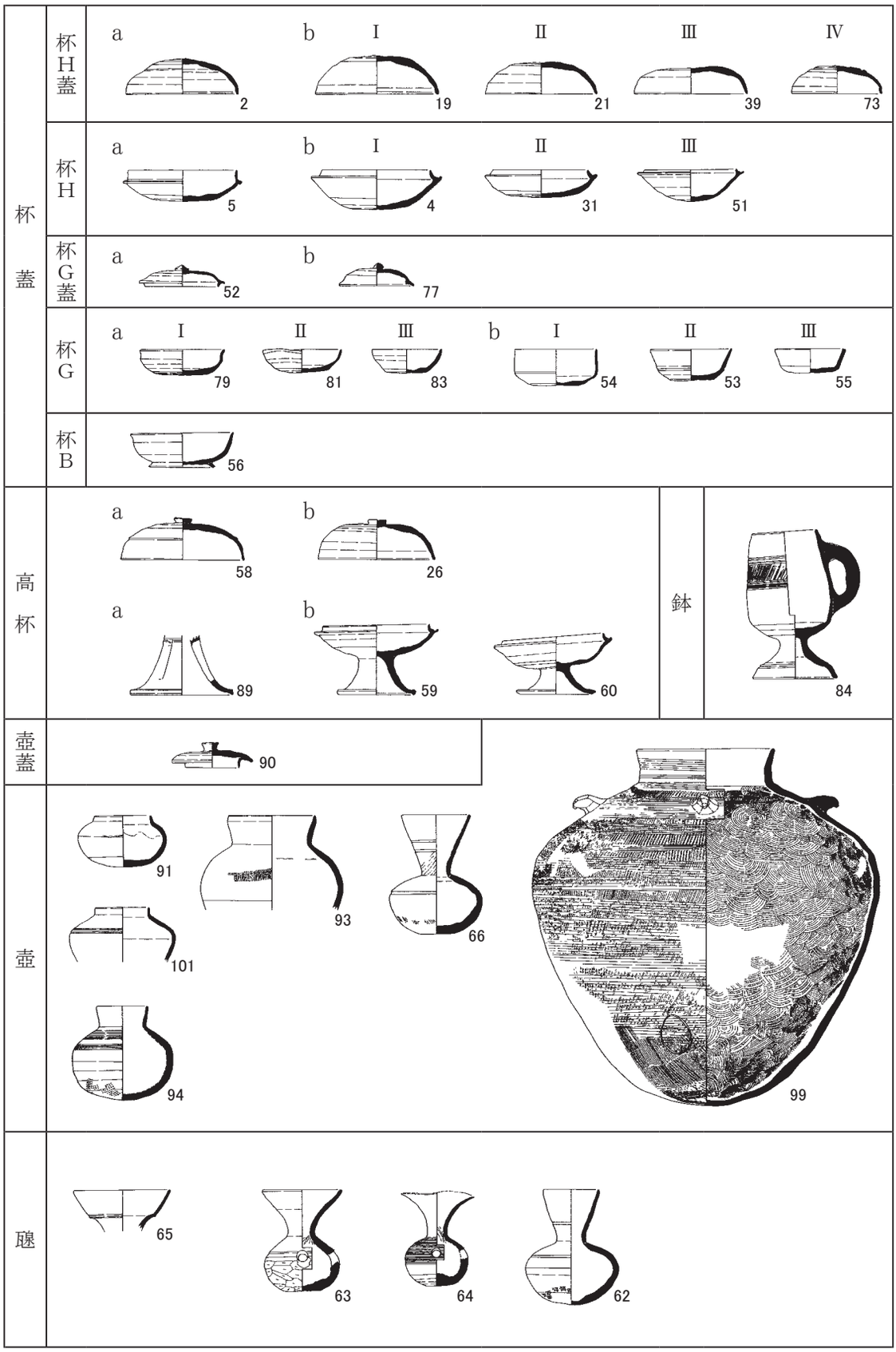
杯Ｈ蓋ｂⅢは、口径が15㎝前後と杯Ｈ蓋ｂと同規模であるが、器高が3.5㎝前後と低い傾向にあるもの(38・39)。器高についても５㎝を超え、全体的に大型である。

杯Ｈ蓋ｂⅣは、口径が12㎝未満のもの(73)。器高についても４㎝以下と、全体的に小型である。天井部の調整は、回転ヘラ削りにより仕上げられている。

杯Ｇ蓋　杯Ｇに対応する蓋である。口径が大きく返りが顕著な52(杯Ｇ蓋ａ)と、口径が小さく返りがわずかな77(杯Ｇ蓋ｂ)の、２タイプに分類できる。

杯Ｇ　法量から２タイプに細分できる（杯Ｇａ・杯Ｇｂ）。

杯Ｇａ：体部が内湾傾向にあるもの。さらに、口縁部が外反するタイプ(杯ＧａⅠ：79・80)と外反し



第96図　上佐野1号墳出土須恵器の分類(1)

ないタイプ(杯ＧａⅡ：78・81～83)に細分可能である。さらに、杯ＧａⅡについては、大型のタイプ(78・81)と小型のタイプ(82・83)が認められる。底部の調整は、83の一部を除いて、ヘラ削りは認められない。

杯Ｇｂ：明確な平底を有し、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるもの。さらに、法量から、口径に対して器高の高いタイプ(杯ＧｂⅠ：54)、器高・口径ともに小型のタイプ(杯ＧｂⅢ：55)、両者の中間タイプ(杯ＧｂⅡ：14・53)、に細分できる。杯ＧｂⅠの54については、椀に分類される可能性も考えられる。底部の調整は、53がナデ調整、54と55が回転ヘラ削りにより仕上げられている。

杯Ｂ　56と57の２個体が出土している。体部から口縁部にかけ直線的な57と、体部が内湾傾向にある56と、形態的に差が認められる。

高杯　有蓋高杯(ｂ)と無蓋高杯(ａ)が出土している。無蓋高杯は89の１個体に限られ、脚部が残存するのみである。有蓋高杯については、８個体（59～61・85～88・100)出土しているが、脚が高いタイプ(59・85・86)と短いタイプ(87・88・60・61)に細分可能である。100については、脚部が残存しないため、細分はできない。

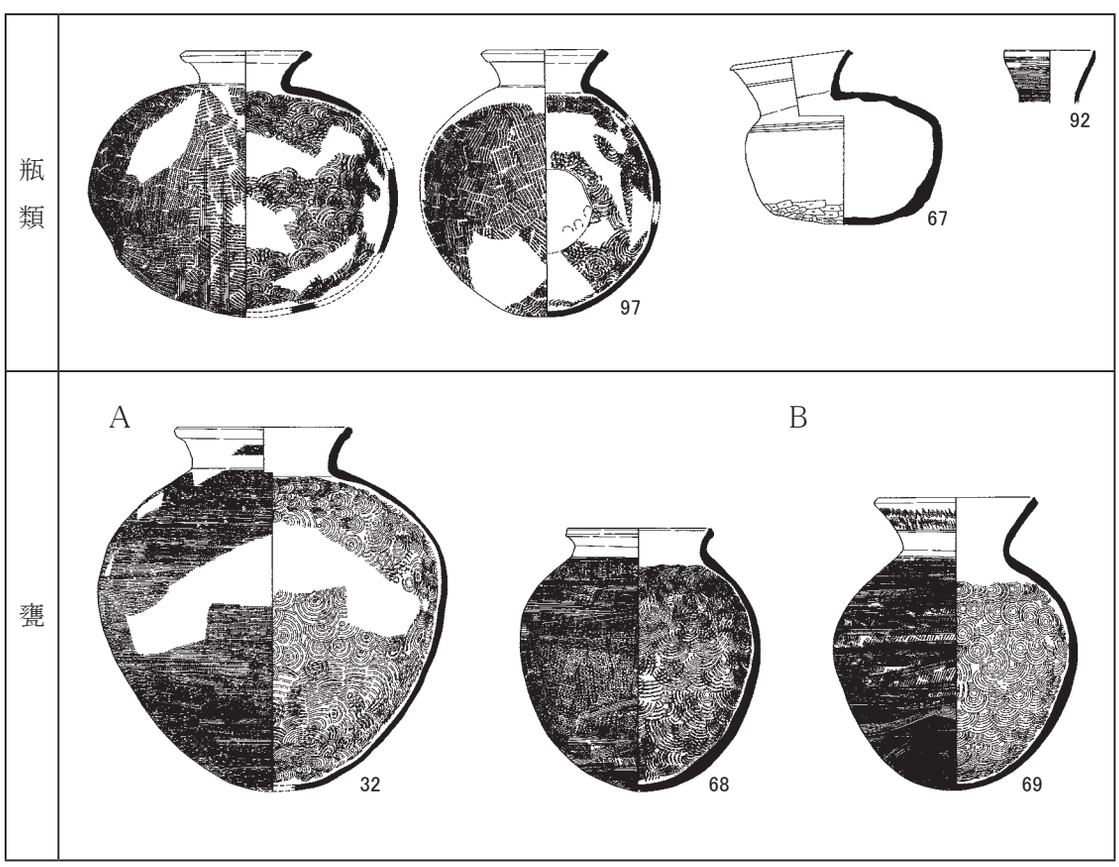
高杯蓋　有蓋高杯の蓋であるが、26と58の２個体に限られる。両者は、天井部と口縁部境の段の有無に差が認められる(高杯蓋ａ・高杯蓋ｂ)。

鉢　84の１個体に限られる。脚付の鉢で、体部には半環状の取手が貼り付けられている。

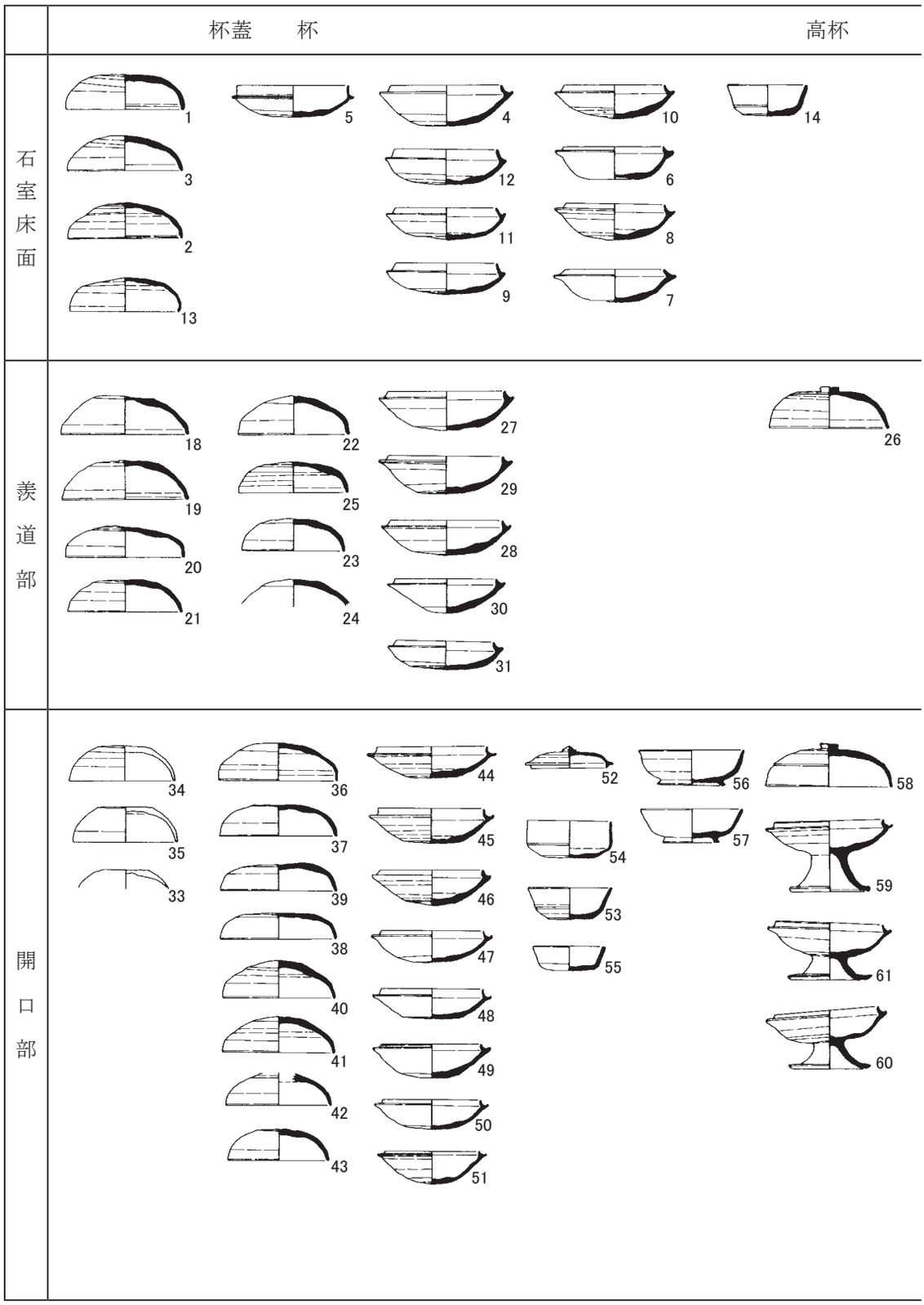
壺蓋　90の１個体に限られる。

壺　短頸壺・細頸壺・四耳壺が出土している。

短頸壺：５個体出土している(15・91・93・94・101)。これら５個体については、個体差が顕著で、



第97図　上佐野1号墳出土須恵器の分類(2)



第98図　地区別出土土器(1)

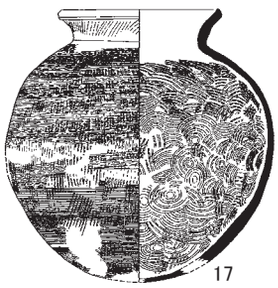
形態的に分類することは困難である。

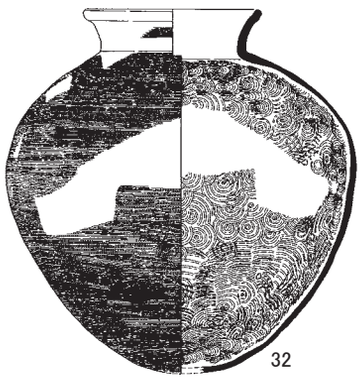
細頸壺：66の１個体が出土している。

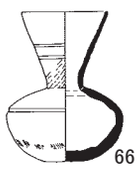
四耳壺：99の１個体が出土している。

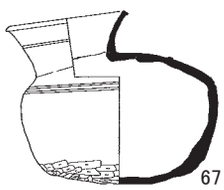
瑕　大きく、口縁部が形態において２タイプ(瑕Ａ・Ｂ)に分類できる。

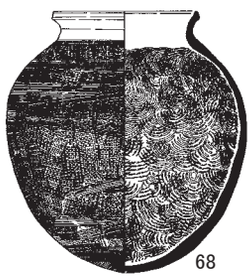
壺　　甕

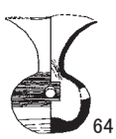


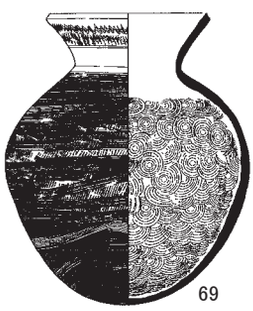






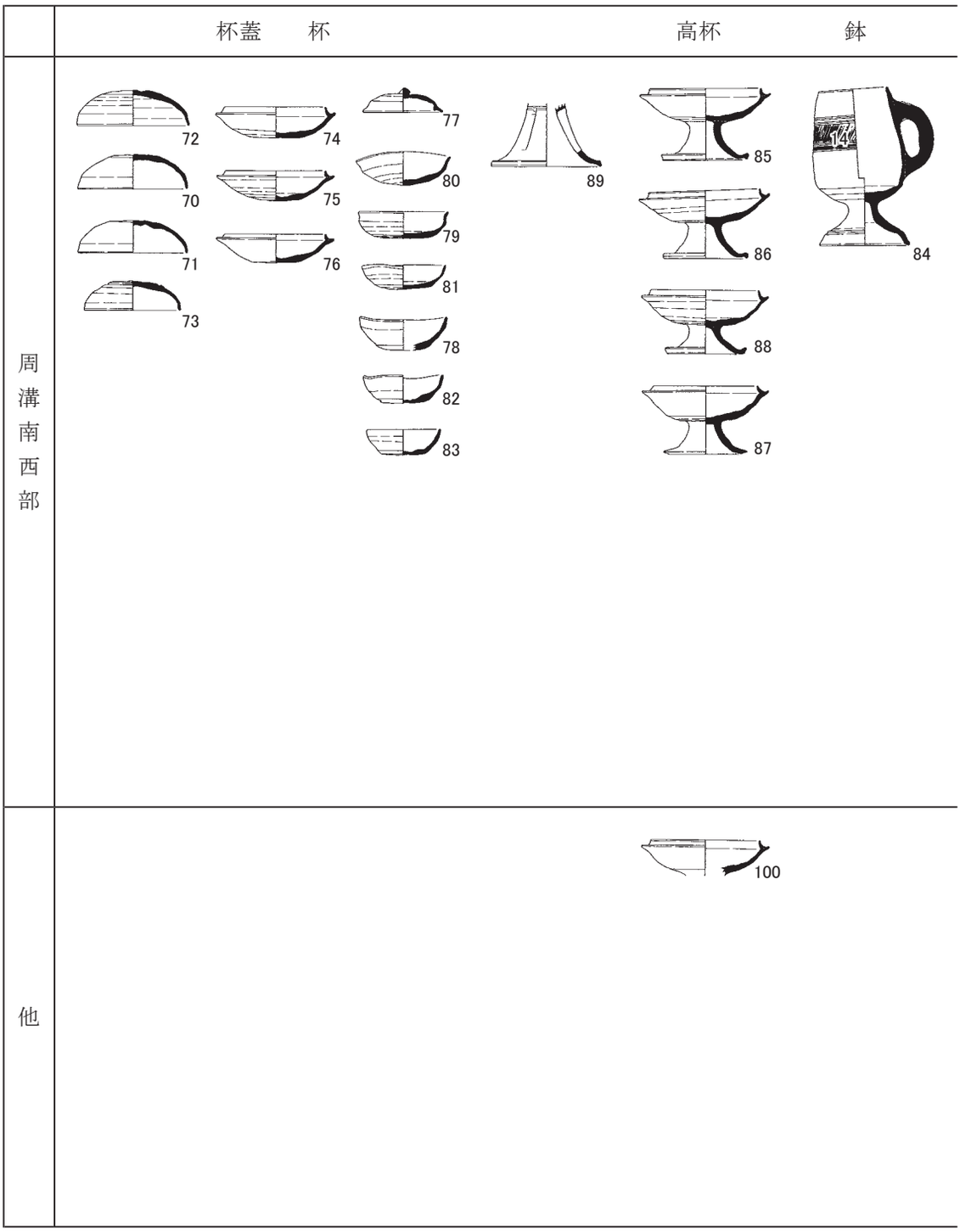






瓹Ａ：口縁部が二重口縁をなすものである。65の１個体に限られる。

瓹Ｂ：口縁部が単純口縁をなすものである。底部の仕上げにより、静止ヘラ削りによるもの(瓹Ｂａ：63)、回転ヘラ削りによるもの(瓹Ｂｂ：62・64)、ナデ調整によるもの(瓹Ｂｃ：95・96)、の３タイプに細分できる。



第99図　地区別出土土器(2)

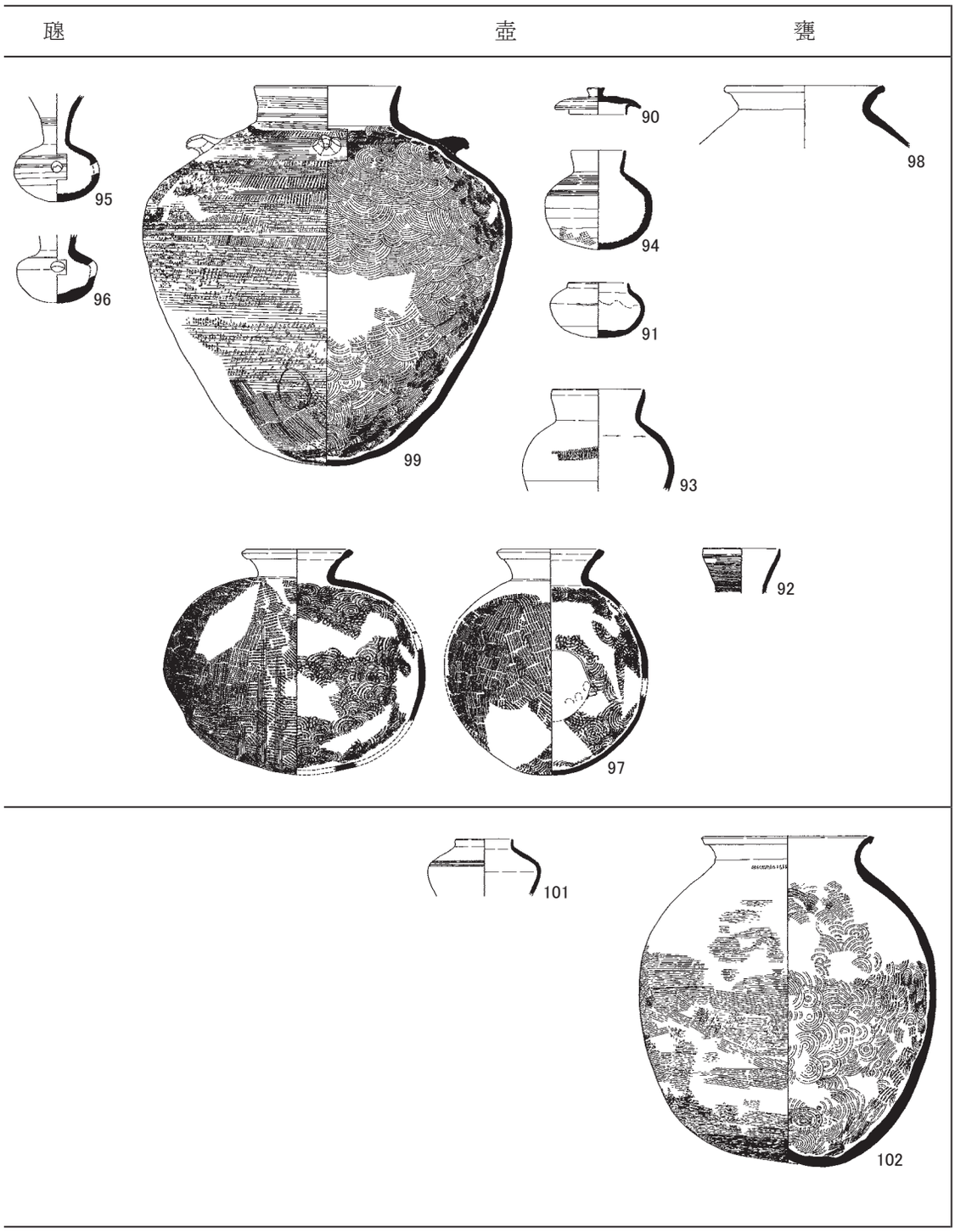
瓶類　横瓶・提瓶・平瓶の３タイプが出土している。いずれも１個体である。

横瓶　97の１個体が出土している。

提瓶　92の１個体が出土している。残存するのは口縁部に限られる。

平瓶　67の１個体が出土している。把手は、浮文として痕跡のみ認められる。

甕　７個体が出土している。98を除いては口縁部から底部まで復元されている。口縁部が外反傾向にあるタイプ(甕Ａ：16・17・32・68・98・102)と口縁部が直線的なタイプ(甕Ｂ：69)の２タイプに分類できる。甕Ａについては、法量的に器高35㎝を超える大型品(32・102)と、31㎝以下の小型品(16・17・68)に



細分可能である。また、甕Ｂの69については、口縁部外面に波状文が施されている。

⑵ 時期の検討

上記器種分類のなかで、時期を検討していく上で最も基準となるのが、杯・杯蓋と考えられる。以下、両器種を中心に検討していく。対象となるのは、杯Ｈ蓋・杯Ｈ・杯Ｇ蓋・杯Ｇ・杯Ｂである。ここでは佐藤　隆の須恵器編年[1]を基に検討していく。

杯Ｈ蓋　杯Ｈ蓋ａについては、口縁端部内面の段から、「難波編年Ⅱ新段階」に位置付けられる。杯Ｈ

ａ・高杯ｂ・高杯蓋についても同様に考えられる。

杯Ｈ蓋ｂⅠおよび杯ＨｂⅠについては、「難波編年Ⅲ古段階」に位置付けられる。さらに、杯Ｈ蓋ｂⅣおよび杯ＨｂⅢについては、「難波編年Ⅲ古段階～中段階」に位置付けられる。杯Ｇ蓋および杯Ｇについても、「難波編年Ⅲ古段階～中段階」に位置付けられる。瑟についても、当段階まで存在するようである。

杯Ｂについては、「難波編年Ⅳ古段階」以降と考えられる。この他、鉢については、脚部を欠く類例が裾谷遺跡(京都府京丹後市)ＳＢ04柱穴出土例に認められ、ＴＫ209～ＴＫ217(古)に位置付けられている[2]。

以上から、上佐野1号墳に伴う土器は、「難波編年Ⅱ新段階」から「難波編年Ⅳ古段階」までと、時期幅が顕著である。後述するように、少なくとも「難波編年Ⅲ古段階～中段階」以前(ＴＫ209型式)と以後(ＴＫ217型式)との大きく２時期に分けることが可能である。前者を初葬時、後者を追葬時に伴う土器と考えたい。

⑶ 地区別出土土器の検討

第３章では、出土地区単位で出土土器を報告してきた。以下、この地区単位で出土土器の時期について検討してみたい(第98図・第99図)。

玄室内からは、杯Ｈ蓋ａ・同ｂ・杯Ｈａ・同ｂ・杯Ｇ・壺・甕が出土している。杯Ｈ蓋ａと杯Ｈａが認められ杯Ｈ蓋ｂと杯Ｈｂが主体を占めることから、上佐野1号墳出土土器のなかでは最も古い一群と位置付けられる。先の検討結果から、「難波編年Ⅱ新段階」まで遡る土器も認められるが、全体の様相として「難波編年Ⅲ古段階～中段階」に位置付けられるものと考えられる。

このなかで、杯Ｇ(14)については、明らかに新しい様相を示すもので、これらの一群と同時期のものとして扱うことは困難である。何らかの要因で上記の一群に混入したものと考えられる。後述するように、追葬時の副葬品を攪乱した際に、初葬面に落ち込んだ可能性も考えられる。

羨道部からは、杯Ｈ蓋・杯Ｈ・高杯蓋が出土している。石室内出土土器と比べて、杯Ｈにおいて口縁部の立ち上がりが短く、新しい傾向を伺うことができる。また、杯Ｈ蓋においても、口径のやや小さい個体(22・23)も認められる。玄室内出土土器と比較すると、全体的に新しい傾向を看取することができる。したがって、当初は玄室内の土器とともに副葬されていた一群ではなく、追葬に伴う一群の可能性が考えられる。

開口部からは、杯Ｈ蓋・杯Ｈ・杯Ｇ蓋・杯Ｇ・杯Ｂ・高杯蓋・高杯が出土している。このなかで、杯Ｇ蓋・杯Ｇ・杯Ｂなど、石室内出土土器には認められなかった新しく位置付けられる土器が含まれている。一方で、石室内と同時期としての位置付けが可能な土器も認められる。したがって、開口部から出土した土器は、初葬時と追葬時の土器が混在しているものと考えられる。

周溝南西部から出土した一群からは、杯Ｈ蓋・杯Ｈ・杯Ｇ蓋・杯Ｇ・高杯蓋・高杯が出土している。基本的には、開口部出土土器と同様の内容である。

以上から、玄室内出土土器については、初葬時に副葬されたものと考えられる。一方、羨道部出土土器については、追葬に伴う土器と考えられる。さらに、開口部および周溝内から出土した土器については、羨道部出土土器よりさらに新しい傾向を伺うことができる。よって、２次追葬に伴う土器が主体と考えられる。つまり、石室内から出土した土器は、初葬時及び１次追葬に伴う土器が大半で、石室外

から出土した土器は、一部初葬時の土器も含まれるが、２次追葬に伴う土器が中心と考えられる。後者は、後世に石室内から掻き出されたものと考えられる。

具体的な時期については、初葬は「難波編年Ⅲ古段階～中段階」以前、２次追葬は「難波編年Ⅲ古段階～中段階」以降と考えられる。そして、１次追葬は両者の中間に位置付けられるものと考えられる。傾向としては、初葬時により近い時期と考えられる。佐藤　隆の年代観から、初葬は６世紀第４四半期紀末から７世紀第１四半期、１次追葬は７世紀第２四半期、２次追葬は７世紀第３四半期～第４四半期と位置付けられるものと考えられる。特に、追葬時期については、杯Ｂの存在を重視するならば、７世紀第４四半期まで下る可能性も否定できない。

〔註〕

⑴佐藤　隆「７・８世紀陶邑編年の再構築と都城出土資料の様相」『2005年度　(財)大阪府文化財センター・近つ飛鳥博物館共同研究発表会　須恵器生産の成立と展開』(財)大阪府文化財センター　2006

⑵筒井崇史「裾谷横穴・遺跡」『京都府遺跡調査概報　第65冊』財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター　1995

第２節　金属製品・玉類

１．金属製品

⑴ 概　要

武器類・工具類・装飾具が計38点出土しているが、いずれも石室内から出土している。出土位置を記録できたものはわずかであるが、土器との関連から、これらについては初葬時に副葬されたものと考えられる。したがって、６世紀第４四半期に位置付けられる一群と理解することができる。出土位置が確実なのは、立柱石の北側東壁際から出土した直刀(Ｍ１）・刀子(M35)と、玄室のほぼ中央部から出土した耳環(M36)に限られる。

出土位置を記録できなかった金属製品についても、玄室内から出土していることから、多くは初葬時に副葬されたものと考えられる。

以下、各種類別にみていくことにする。

⑵ 武器類

直刀と鉄鏃が出土している。直刀については、６点図化しているが、切先を中心に残存するＭ４が他の直刀の一部である可能性が考えられることから、確実な本数は５本である。いずれの個体においても、Ｘ線透過撮影を行ったが、象嵌等は認められなかった。

鉄鏃については、Ｍ７の無頸鏃を除いては、長頸鏃に分類されるものである。いずれも、時期的には土器の示す時期と齟齬はないものである。

⑶ 工具類

刀子が出土している。７点(M29～M35)として図化しているが、確実にカウントできる数は６点である。

⑷ 装飾具

耳環が３点(M36～M38)出土している。２点がセットとなることから、１点については追葬時に伴う可能性が考えられる。遺存状況から判断して、M37とM38がセットの可能性が考えられる。M36が玄室床面上から出土していることから、M37とM38は追葬に伴う可能性が考えられる。

２．玉類

土製の丸玉が370点出土している。全て石室内から出土している。出土位置を特定できた個体は限られるが、基本的には追葬に伴うものと考えられる。石室内の羨道部から出土した個体についても、追葬時に伴うものと考えられる。また、玄室内の出土地点が、大きく２箇所に集中していることから、追葬時に２体が並行して安置されていた可能性も考えられる。

第６章　上佐野1号墳のまとめ

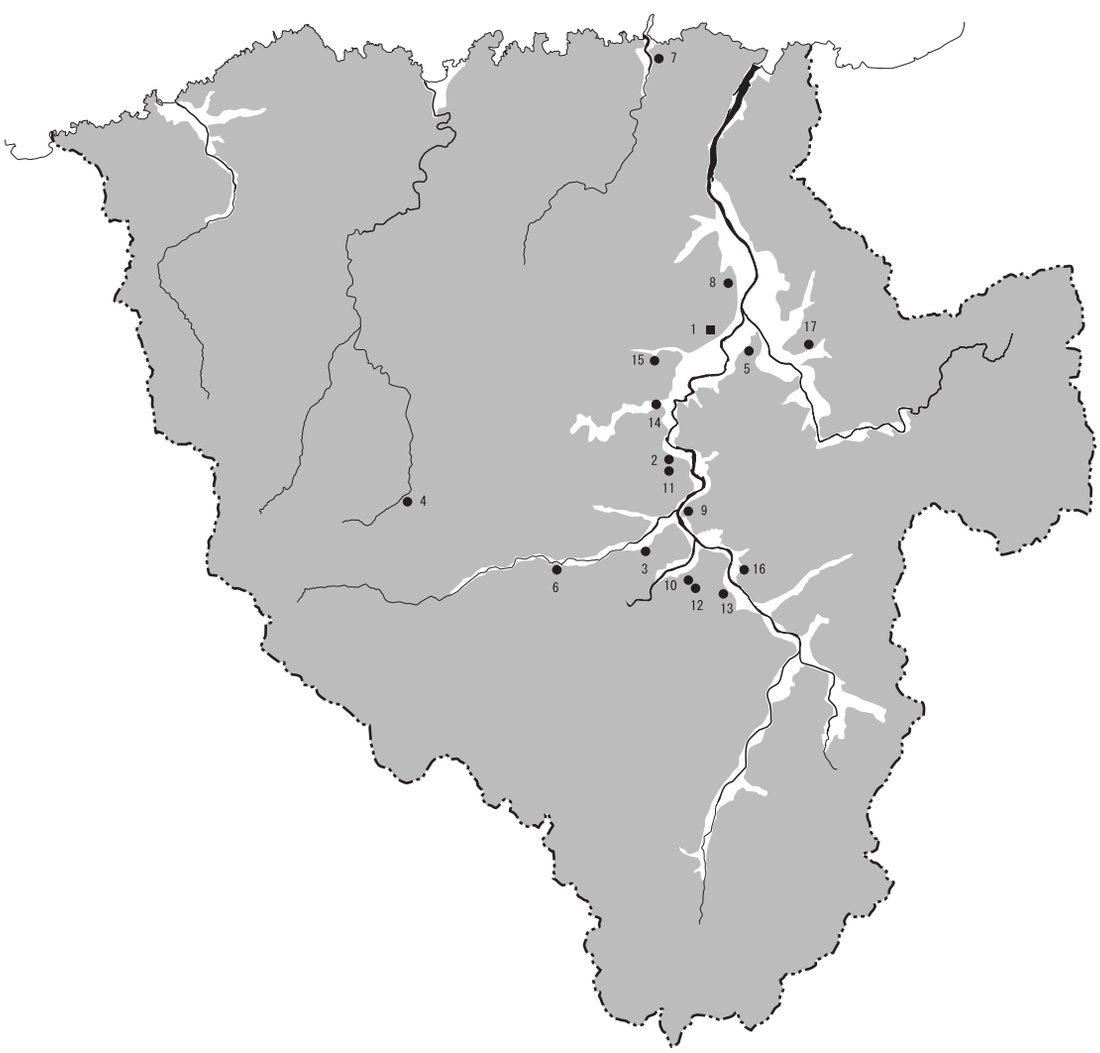
第１節　石室

１．石室の特徴

石室については、以下の特徴を指摘することができる。

①床のレベルにおいて、羨道部において明確な段差が認められる。②石材が、開口部と玄室で明らかに異なる。玄室側では横穴式石室と同様の石積み傾向であるのに対して、開口部側は小口積み傾向にある。③袖部において立柱石が認められる。④玄室側壁が持ち送り傾向にある。⑤開口部が山側にあり、天井石の架構はなかったものと考えられる。⑥遺体が直置きと考えられる。⑦石室の平面形が、幅の狭い長方形をなしている。

これらの特徴から、上佐野1号墳の石室は、竪穴系横口式石室に分類されるタイプと判断される。



第100図　但馬における竪穴系横口式石室の分布

第12表　但馬における竪穴系横口式石室

№.	古　墳　名	所　在　地	時　　期	入　口	開口方向
1	上佐野1号墳	豊岡市上佐野		60㎝の段差	山側
2	びくに古墳	養父市八鹿町宿南	６世紀中頃	90㎝の段差	山側
3	米里７号墳	養父市八鹿町米里	６世紀前半		
4	八幡山３号墳	新温泉町村岡区福岡	６世紀前半	段差あり	山側？
	八幡山５号墳	新温泉町村岡区福岡	６世紀前半	段差あり	山側
	八幡山６号墳	新温泉町村岡区福岡	６世紀前半		山側
5	大師山１号墳	豊岡市引野	６世紀中頃～７世紀中頃	80㎝の段差	山側
	大師山２号墳	豊岡市引野	６世紀中頃～後葉		山側
	大師山５号墳	豊岡市引野	６世紀中頃～後葉	70㎝の段差	山側
	大師山６号墳	豊岡市引野	６世紀後半		山側
	大師山９号墳	豊岡市引野	６世紀後半		山側
	大師山10号墳	豊岡市引野	６世紀後半	50㎝の段差	山側
	大師山11号墳	豊岡市引野	６世紀後半	30～40㎝の段差	山側
	大師山13号墳	豊岡市引野	６世紀後半	50㎝の段差	山側
	大師山15号墳	豊岡市引野			山側
6	八木西宮古墳	養父市八鹿町八木	６世紀前半～中頃		山側
7	見蔵岡１号墳	豊岡市竹野町竹野	６世紀中頃		尾根直交方向
8	見手山１号墳	豊岡市妙楽寺	６世紀中頃		山側
9	夕垣７号墳	養父市八鹿町下網場	６世紀前葉～中頃		尾根直交方向
10	観音塚古墳	養父市養父町上野	６世紀前半		山側
11	見谷３号墳	養父市八鹿町宿南			
	見谷４号墳	養父市八鹿町宿南			
12	上野１号墳	養父市養父町			
13	ユウ山１号墳	養父市養父町堀畑	６世紀中頃		
14	１号石室	豊岡市日高町久斗	６世紀後半		
	２号石室	豊岡市日高町久斗	６世紀後半		
	３号石室	豊岡市日高町久斗	６世紀後半		
	４号石室	豊岡市日高町久斗	６世紀後半		
	５号石室	豊岡市日高町久斗	６世紀後半		
	６号石室	豊岡市日高町久斗	６世紀後半		
	７号石室	豊岡市日高町久斗	６世紀後半		
	８号石室	豊岡市日高町久斗	６世紀後半		
	９号石室	豊岡市日高町久斗	６世紀後半		
	12号石室	豊岡市日高町久斗	６世紀後半		
15	馬塚古墳	豊岡市日高町中	６世紀前半～中頃		山側
16	三月野10号墳	養父市養父町大塚	６世紀中頃		斜面平行方向
17	カヤガ谷１号墳	豊岡市出石町袴狭		60㎝の段差	山側

石室規模	閉塞石	袖	石積み	床面	土器枕	追　葬	文献
3.55m×1.55m	有	右片袖	石室積み	礫床		２回	本書
1.35m×6.70m	有	無袖		礫床	有	３回	1
3.45m×0.95m			小口積み				2
2.7m×1.5m	有	有	横積み	礫床			3
3.8m×1.0m	有	無袖					3
	有	両袖	横積み				3
3.85m×1.2m		無袖	横積み	礫床			4
4.8m×2.1m		片袖		礫床			4
4.3m×1.65m	板石	無袖	横積み	なし			4
3.4m×1.４m		片袖		礫床			4
4.15×1.4m	有	無袖	石室積み	河原石礫床			5
5.0m×1.3m	有	無袖	石室積み	山石礫床			5
3.4m×1.15m	有	無袖	石室積み	山石散在			5
3.8m×1.1m		無袖	石室積み	礫床			5
4.5m×1.5m	有	左片袖	石室積み				5
8.4m×1.55m				礫床			6
3.8m×1.4m			小口積み	礫床	有	２回	7
４m×1.28m	有	無袖					8
4.7m×1.3m		有	２段目以上小口積み			有	9
5.4m×1.2m		無袖	小口積み				10
							14
×1.15m			こぶりな石材				14
3.8m×1.4m		無袖	石室積み	礫床			11
(0.95)m×0.7m		無袖	石室積み	礫床	有		11
(1.0)m×0.9m		無袖	石室積み	礫床			11
3.3m×1.4m		無袖	石室積み	礫床			11
4.2m×1.3m		無袖	石室積み	礫床			11
1.5m×0.6m		無袖	石室積み	礫床			11
3.1m×1.1m		無袖	石室積み	礫床		有	11
(2.1)m×1.0m		無袖	石室積み	礫床			11
2.8m×1.3m		無袖	石室積み	礫床		有	11
		無袖	石室積み	礫床			11
			小口積み				12
3.7m×1.4m			小口積み	玉砂			13
		両袖	横積み				

２．竪穴系横口式石室

竪穴系横口式石室については、但馬地域において少なからず明らかとなっている(第100図・第12表)。そこで、これらの例と比較して、上佐野1号墳の特徴を明らかにしていきたい。

但馬の竪穴系横口式石室については、田畑　基の考察がある[1]。これによると、上佐野1号墳の石室は大師山タイプに分類されるものである。当タイプの石室は、ＴＫ10型式段階以降とされている。上佐野1号墳の初葬時期はこれより後出と考えられ、上記の傾向に合致するものである。大師山古墳群とは円山川を挟んで約２㎞強と比較的近い距離にあり、当該古墳群との関係が考えられる。正式な調査報告が刊行されていないため、詳細な検討は困難であるが、開口部が山側にある点、羨道部において明確な段差が認められる点、石材の用石法において類似点が認められる。また、開口部に天井石の架構が認められない点も特徴を同じくするものである[2]。

また、但馬における竪穴系横口式石室の分布(第100図)をみると、円山川水系に分布が集中する傾向を伺うことができる。竹野川最下流域右岸の見蔵岡１号墳と矢田川水系大谷川右岸の段丘上に立地する八幡山３号墳・５号墳・６号墳が、例外である。特に、円山川水系においても、その中流域に分布が集中している。また、円山川上流域、いわゆる南但地域において分布が全く認められない特徴は、田畑基が1993年に指摘[3]して以来、同じである。

上佐野1号墳についても、上記の分布集中域内に位置するものである。円山川をルートとして竪穴系横口式石室が伝播したものと考えられ、上佐野1号墳についても、そのルート上に位置するものと言える。

３．古墳構築過程の復元

調査を通じ、上佐野1号墳の構築過程のある程度の復元が可能となった。最後に、その概要を簡単にまとめ、本節の総括としたい。

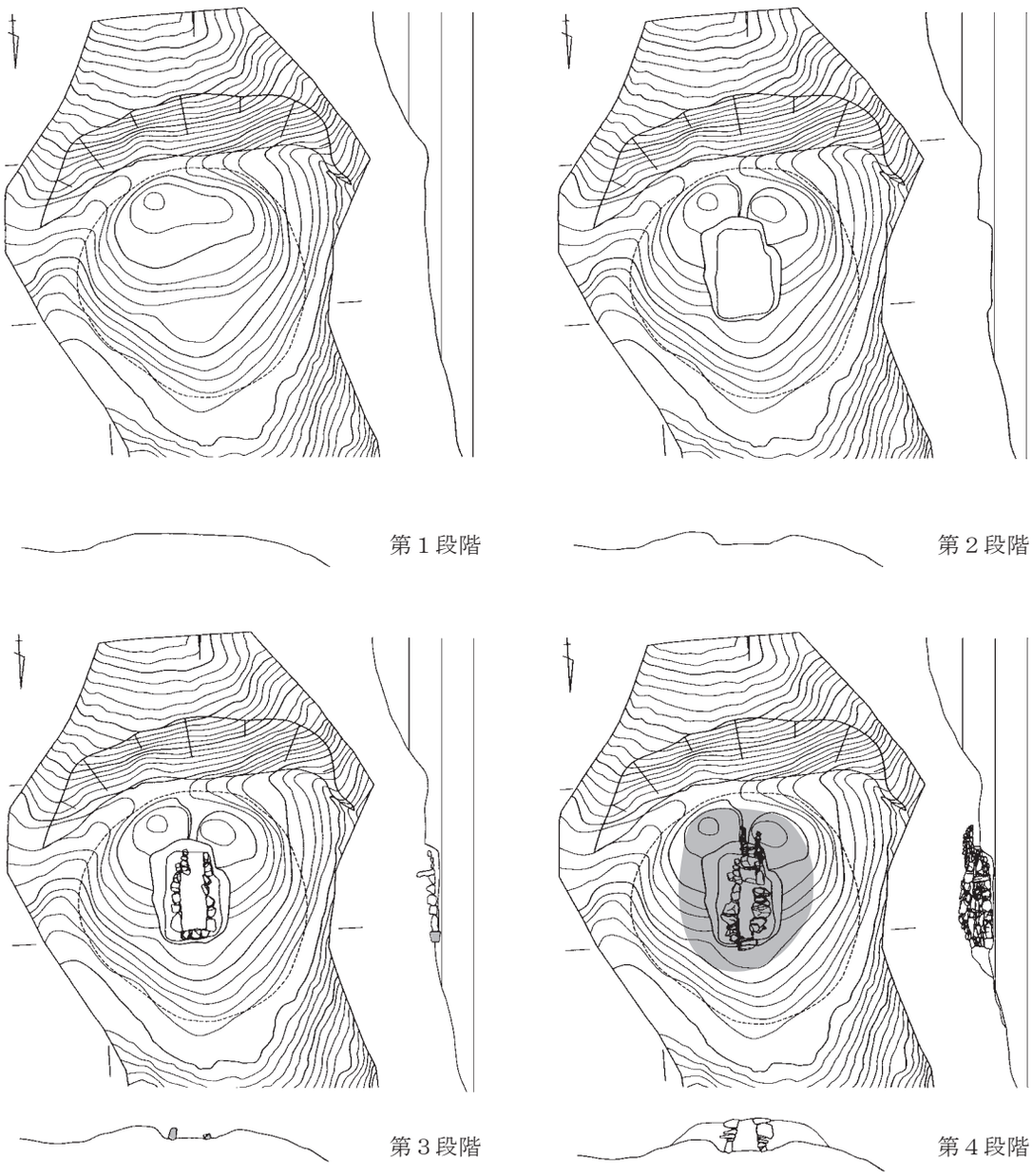
上佐野1号墳の構築過程は、大きく６段階からなる(第101図・第102図)。その概要は以下のとおりである。

第１段階　古墳築造地を中心とした造成段階である。尾根筋山側をカットし、墳丘築造箇所を中心に平坦地が造成されている。

第２段階　前段階で造成された平坦地の中央部、石室構築箇所に墓壙が掘り込まれる。墓壙は隅丸長方形をなし、底部が水平となるように掘られている。このため、南側ほど深くなる傾向にある。なお、開口部の掘削については、当段階に行われたのかについては明確にできない。

第３段階　墓壙内に、基底石が設置される。基底石の設置は、溝の掘削を伴うものではなく、墓壙底に直接置かれている。

第４段階　石室の構築過程である。この過程においては、石室周囲の盛土と並行して行われている。盛土は、先にみた第１工程に対応するものである。盛土は、石材を積上げる作業と並行し、数回に及んで行われている。このため、盛土は、最終的な墳丘規模に及ぶものではない。天井石の下側まで盛土がなされている。



第101図　築造過程の復元(1)

第５段階　天井石の架構段階である。この段階においても、盛土と並行して行われている。墳丘西側・東側の第２工程、墳丘北側の第３工程・第４工程が対応する。この盛土は、天井石を曳き上げるに際し、その傾斜を緩くすることも目途としていたものと考えられる。この段階において、墳丘の平面的な規模(墳裾)が確定するものと考えられる。

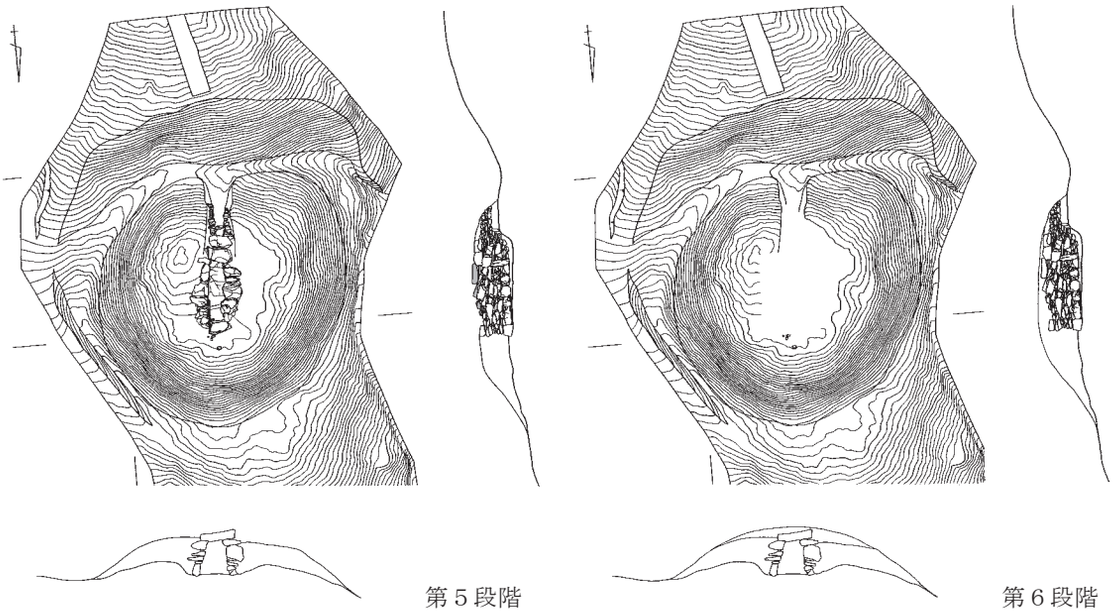
第６段階　天井石の被覆段階である。これにより墳丘が完成する。

〔註〕

(1)田畑　基「後期群集墳への画期」『但馬考古学』第７集　1993

(2)潮崎　誠「特異な構造の石室群－大師山古墳群の調査から－」『歴史と神戸』144　1987

(3)前掲(1)



第102図　築造過程の復元⑵

〔第12表　文献〕

１．谷本　進「６世紀の墓制からみた宿南びくに古墳」『但馬考古学　第７集』但馬考古学研究会　1993

２．谷本　進『米里古墳群・米里窯跡』八鹿町教育委員会　1989

３．村岡町教育委員会・武庫川女子大学考古学研究会「但馬　村岡の古墳」1980『文堂古墳』大手前大学史学研究所・香美町教育委員会　2014

４．潮崎　誠「特異な構造の石室群－大師山古墳群の調査から－」『歴史と神戸』144　神戸史学会　1987

５．潮崎　誠「豊岡市引野・大師山古墳群発掘調査概要」『豊岡市文化財調査概報集　185年度』豊岡市教育委員会　1986

６．谷本　進『八木西宮遺跡・大山田遺跡』八鹿町教育委員会　1988

７．松井敬代『見蔵岡遺跡　其の二』竹野町教育委員会　1997

８．瀬戸谷晧『見手山古墳群発掘調査概要－再調査の記録－』豊岡市教育委員会　1983

９．吉識雅仁『有垣古墳群・有垣遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会　1983

10．渡辺　昇『養父・観音塚古墳』養父町教育委員会　1980

11．平成25年度～平成27年度（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部調査

12．「竪穴系横口式石室と金銅装の馬具等を発見―日高町中－「馬塚」古墳発掘調査」『広報ひだか』№430　1991

豊岡市教育委員会　前岡孝彰・仲田周平両氏の御教示による。

13．藤原弘幸「三月野古墳群の調査」『徹底討論大藪古墳群』養父町教育委員会　1994

14．田畑　基「後期群集墳への画期」『但馬考古学』第７集　1993

第２節　総括

上佐野１号墳の調査成果について箇条書きし、本報告のまとめとしたい。

１．上佐野１号墳は、南北方向に延びる小尾根上に立地する円墳である。

２．埋葬施設は１基で、その特徴から竪穴系横口式石室に分類されるものである。その特徴として、以下の特徴を指摘することができる。

①床のレベルにおいて、羨道部において明確な段差が認められる。②石材が、開口部と玄室で明らかに異なる。玄室側では横穴式石室と同様の石積み傾向であるのに対して、開口部側は小口積み傾向にある。③袖部において立柱石が認められる。④玄室側壁が持ち送り傾向にある。⑤開口部が山側にあり、天井石の架構はなかったものと考えられる。⑥遺体が直置きと考えられる。⑦石室の平面形が、幅の狭い長方形をなしている。

３．石室内および羨道部、さらには開口部・周溝部から土器が出土している。出土した土器は須恵器がほとんどで、これらの土器から大きく２時期にわけることができ、追葬が行われたことを伺うことができる。初葬の時期は６世紀第４四半期、追葬時は７世紀第３四半期～第４四半期と考えられる。また、追葬については、２回行われた可能性も考えられる。

４．土器以外に、金属製品と玉類が出土している。金属製品は、武器類・工具類からなる鉄製品と、青銅製の耳環が出土している。玉類は、土製の丸玉で、計370点出土している。

報告書抄録

ふりがな	かみさのいちごうふん
書名	上佐野１号墳
副書名	一般国道４８３号北近畿豊岡自動車道八鹿豊岡南道路に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第 480 冊
編著者名	山田清朝・仁尾一人・三辻利一・岡本秀一
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号（兵庫県立考古博物館内）　TEL 079-437-5561
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650-8567　兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号　TEL 078-362-3784
発行年月日	平成 28（2016）年３月 18 日
資料保管機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号　TEL 079-437-5589

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間（遺跡調査番号）	調査面積（㎡）	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
上佐野１号墳	豊岡市上佐野	28209	109724	35° 50′ 58″	134° 80′ 14″	平成24年６月13日～平成24年12月27日（2012101）	553 ㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上佐野１号墳	墳　墓	古墳時代	円　墳	須恵器・土師器・直刀・鉄鏃・刀子・耳環・土製丸玉	竪穴系横口式石室 石材への線刻

要約

上佐野１号墳は、南北方向に延びる小尾根上に立地する円墳である。埋葬施設は１基である。この埋葬施設は、①床のレベルにおいて、羨道部において明確な段差が認められる。②石材が、開口部と玄室で明らかに異なる。玄室側では横穴式石室と同様の石積み傾向であるのに対して、開口部側は小口積み傾向にある。③袖部において立柱石が認められる。④玄室側壁が持ち送り傾向にある。⑤開口部が山側にあり、天井石の架構はなかったものと考えられる。⑥遺体が直置きと考えられる。⑦石室の平面形が、幅の狭い長方形をなしている、等の特徴からその特徴から竪穴系横口式石室に分類されるものである。

石室内および羨道部、さらには開口部・周溝部から土器が出土している。出土した土器は須恵器がほとんどで、これらの土器から３時期にわけることができ、２度の追葬が行われたことを伺うことができる。初葬の時期は６世紀第４四半期、最終追葬は７世紀第３四半期～第４四半期、第１次追葬はその中間と考えられる。

土器以外に、金属製品と玉類が出土している。金属製品は、武器類・工具類からなる鉄製品と、青銅製品の耳環が出土している。玉類は、土製の丸玉で、計 370 点出土している。

写　真　図　版

墳丘　調査前（南から）

墳丘　調査前（南東から）

墳丘　調査前（北から）

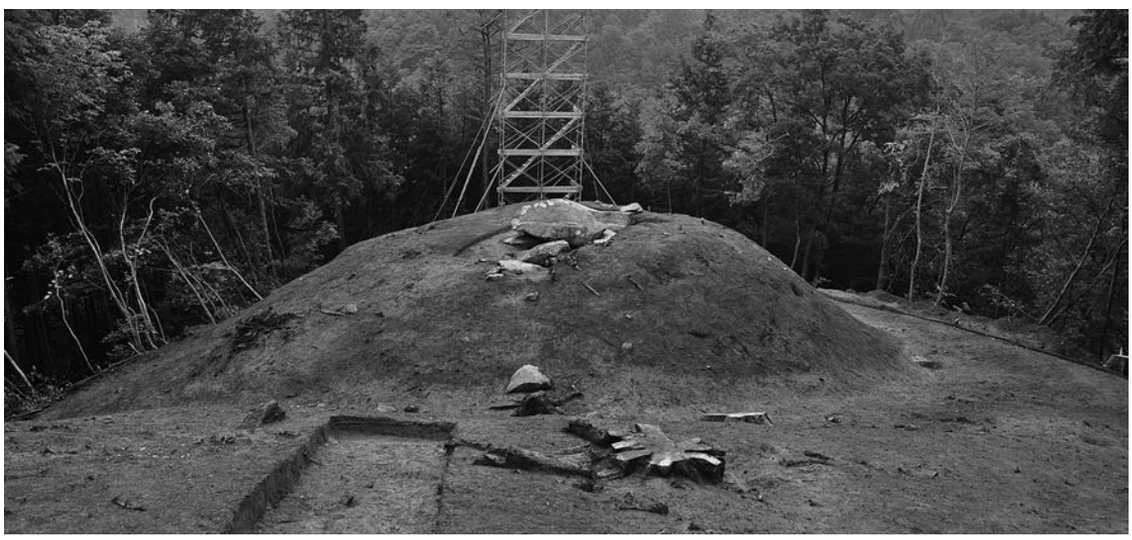
写真図版２　上佐野１号墳

天井石　確認状況（西から）

天井石　確認状況（南東から）

天井石　確認状況（北東から）

墳丘検出状況（北から）



墳丘検出状況（南から）

墳丘検出状況（南西から）

写真図版４　上佐野１号墳

天井石検出状況（南から）

天井石検出状況（西から）

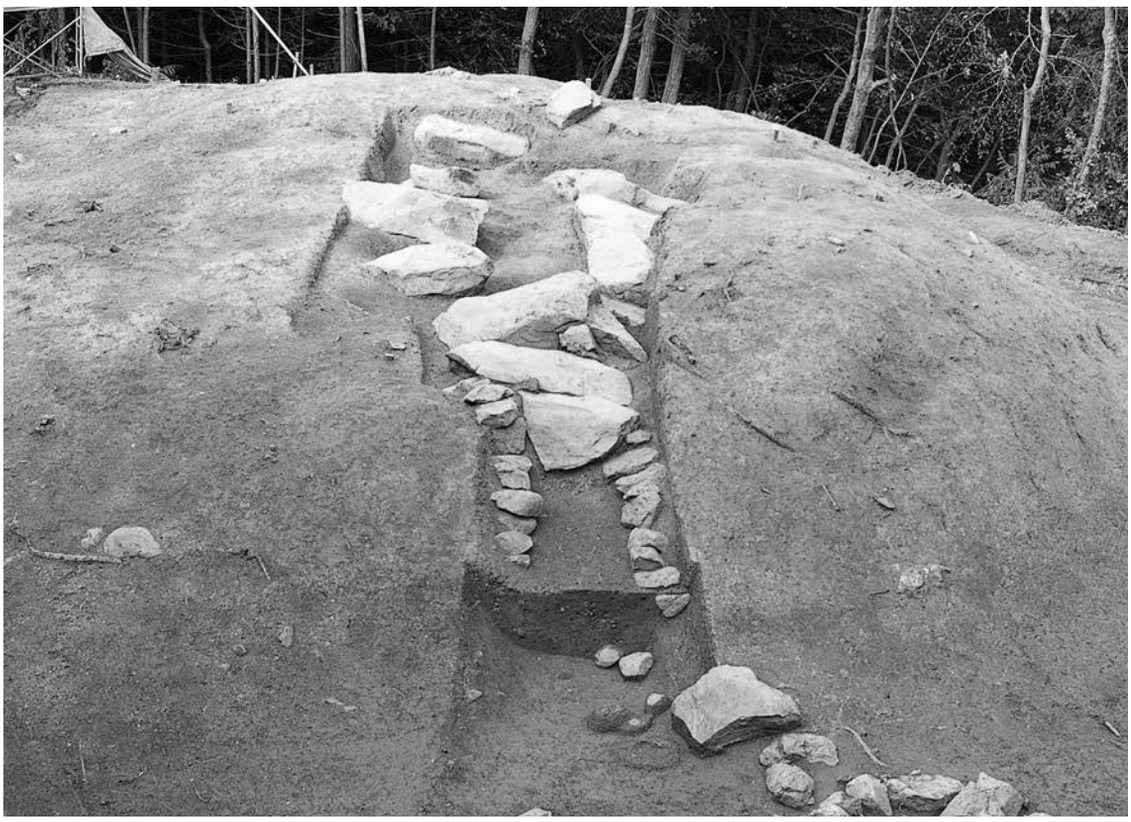
天井石検出状況（北東から）

天井石検出状況（南東から）

石室上部　天井石除去後（南から）

石室上部　天井石除去後（北西から）

写真図版６　上佐野１号墳



羨道部天井石検出状況（南から）

羨道部天井石検出状況（南東から）

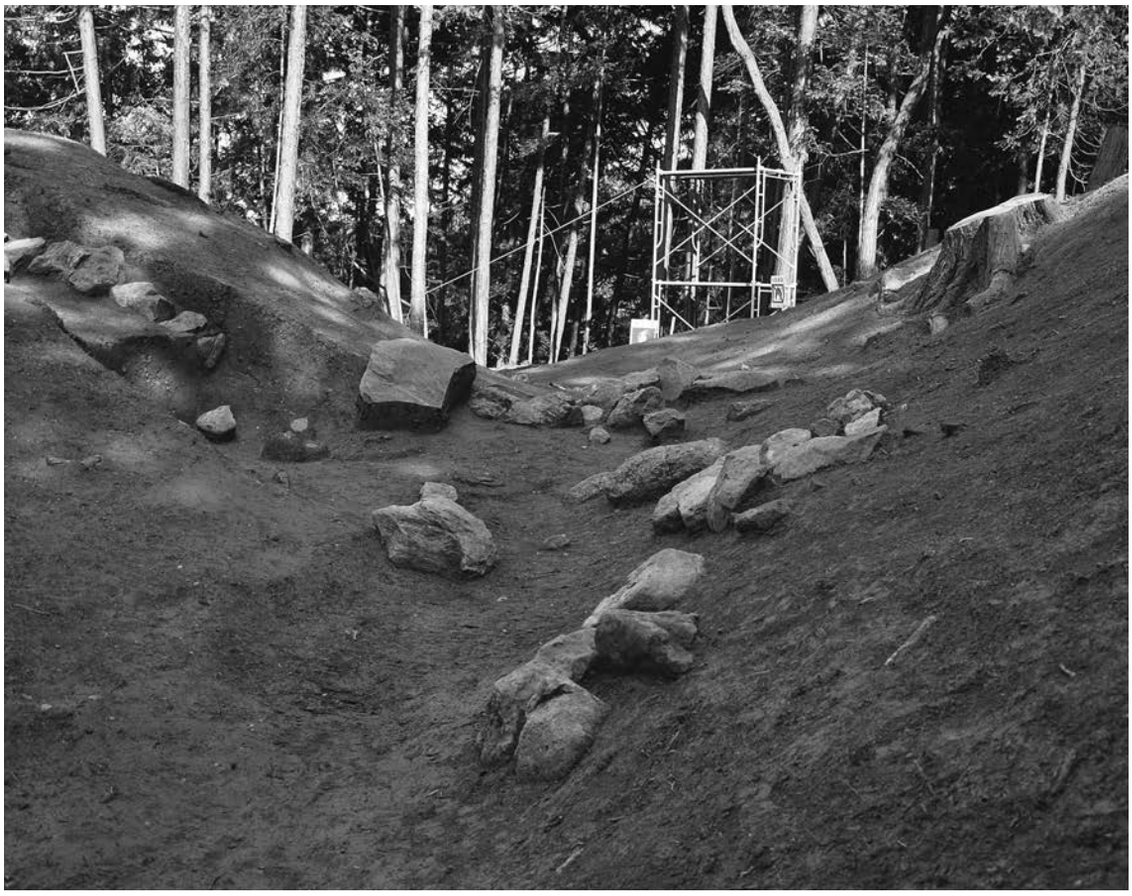
羨道部天井石検出状況（西から）

羨道部天井石検出状況（南から）

周溝内　閉塞石出土状況（南から）

周溝内　閉塞石出土状況（北から）

周溝内　閉塞石出土状況（東から）



周溝内　閉塞石出土状況（西から）

墳丘南西部周溝　土器出土状況（南西から）

墳丘南西部周溝　土器出土状況（西から）

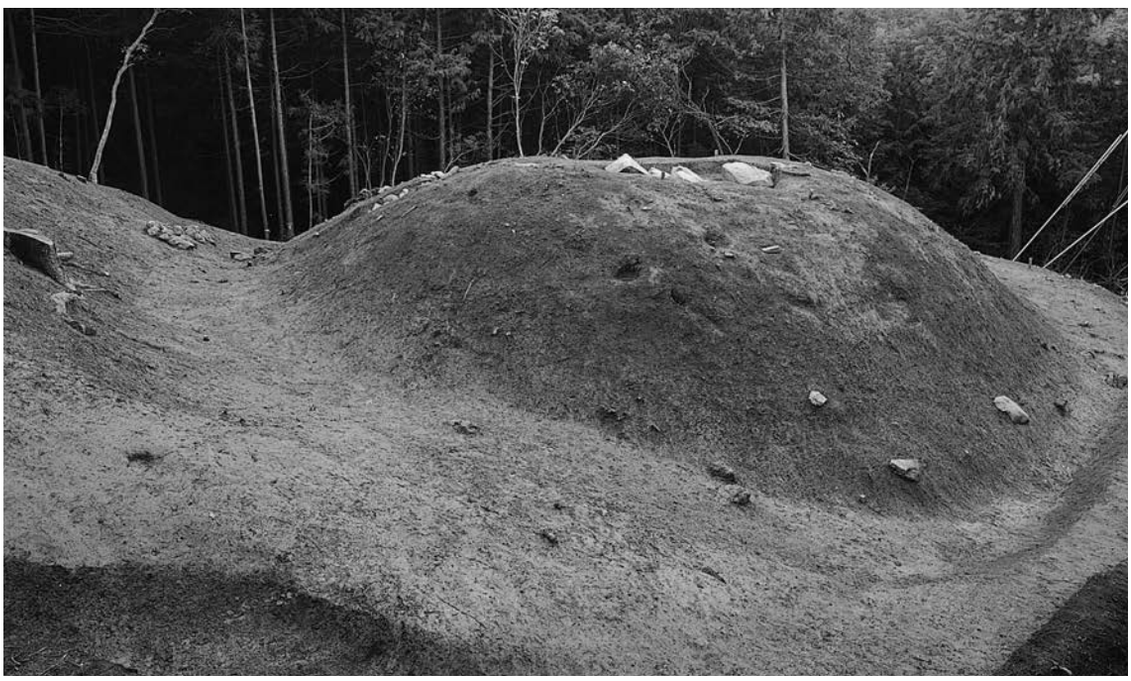
墳丘南西部周溝　土器出土状況（南東から）

墳丘南西部周溝　土器出土状況（南西から）

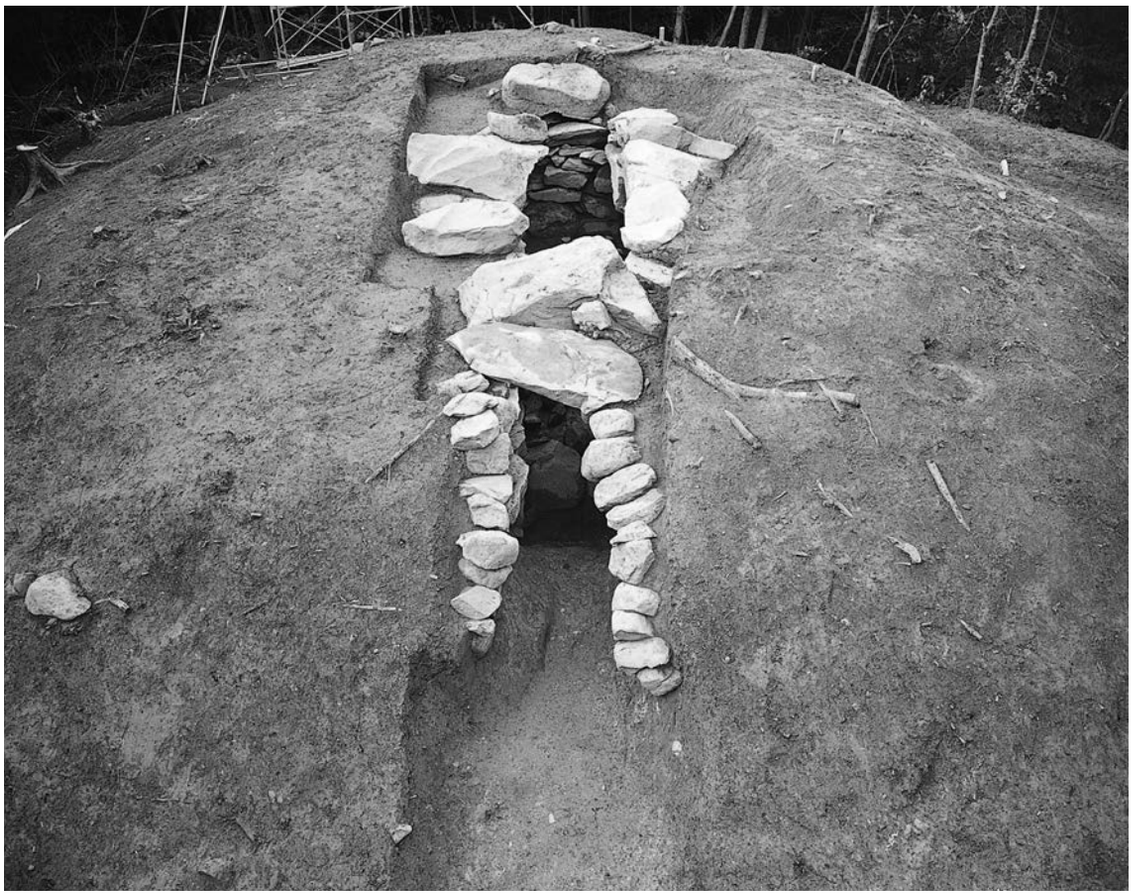
写真図版 12　上佐野１号墳

墳丘全景（南から）

墳丘全景（北から）

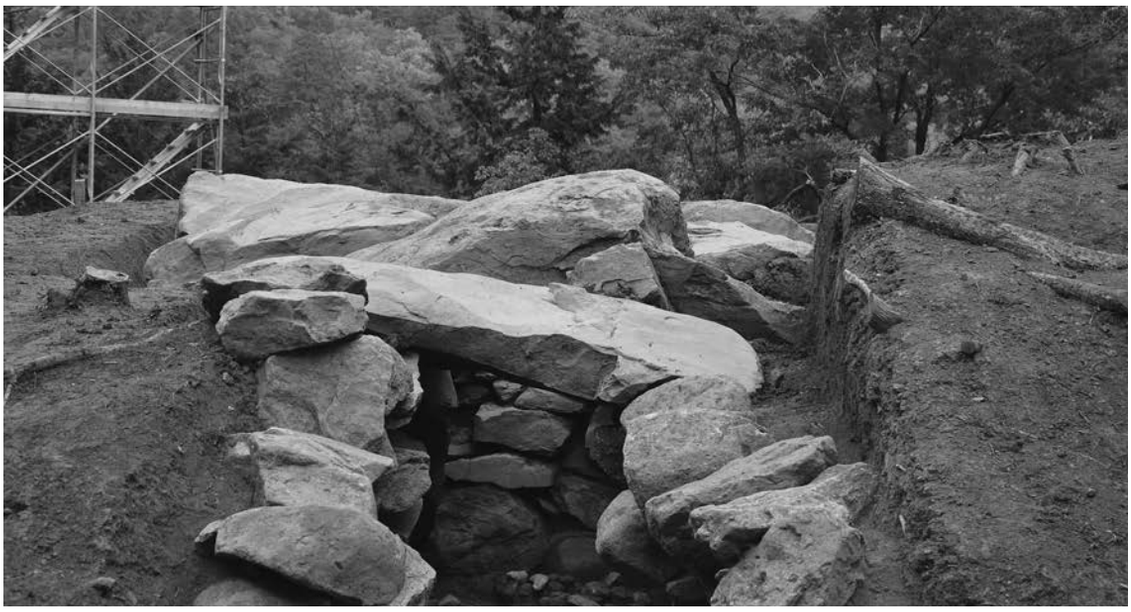


墳丘全景（東から）



石室検出状況（南から）

石室検出状況（北から）



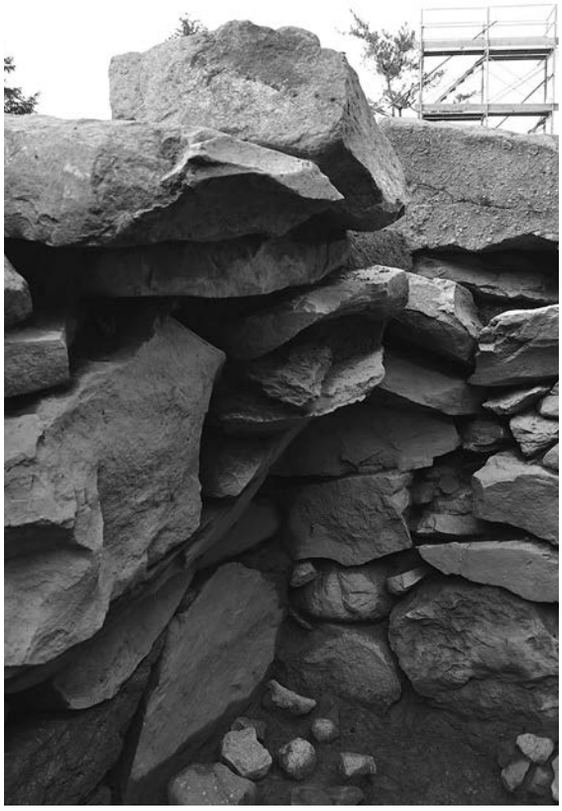
天井石検出状況（南から）

天井石下面（北から）

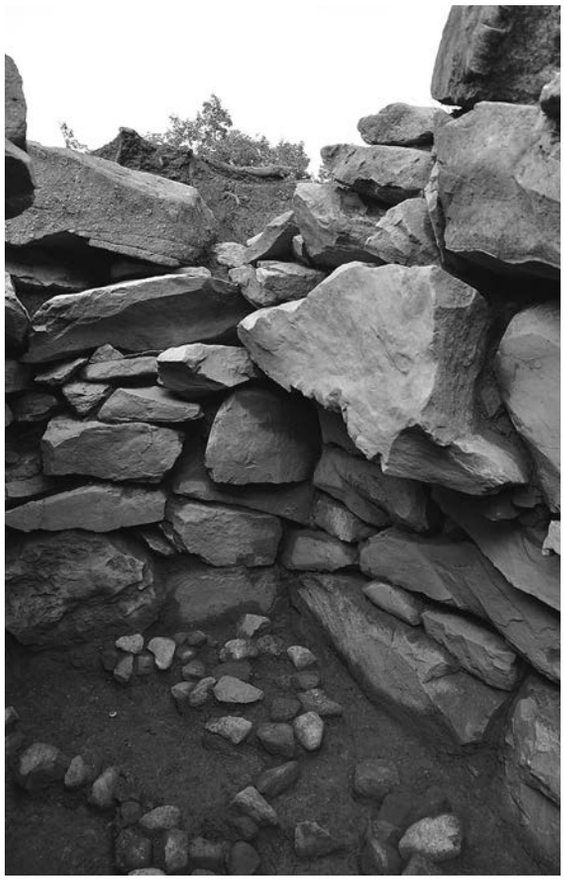
天井石と右側壁（北西から）

天井石と左側壁（北東から）

奥壁全景（南から）



石室北西隅（南東から）



石室北東隅（南西から）

西側壁全景（南東から）

西側壁全景（北東から）

西側壁全景（西から）

西側壁北半（南東から）

西側壁南半（北から）

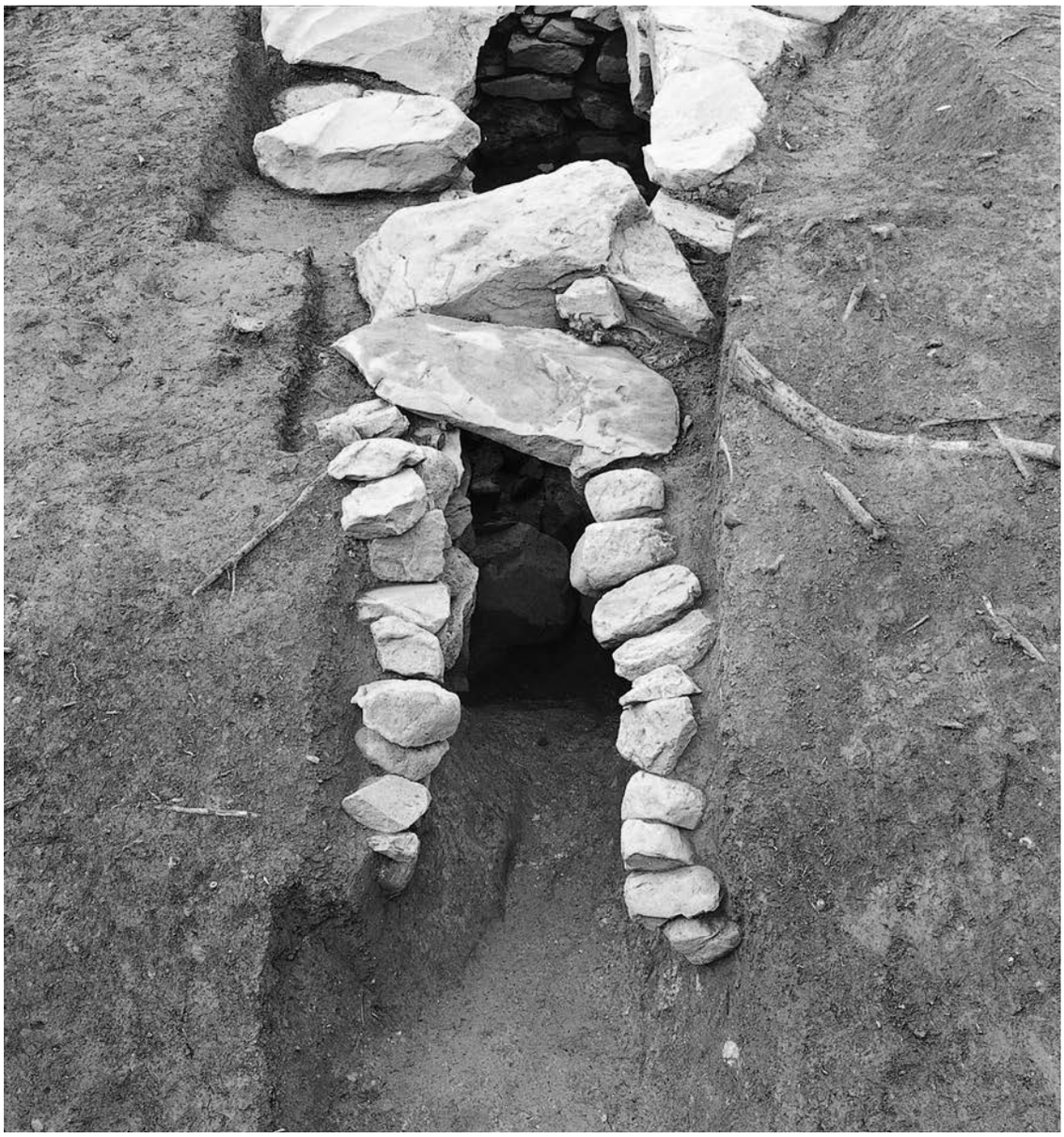
西側壁中央部下側（東から）

東側壁全景（西から）

東側壁全景（南西から）

東側壁近景（南西から）

東側壁南半（北西から）

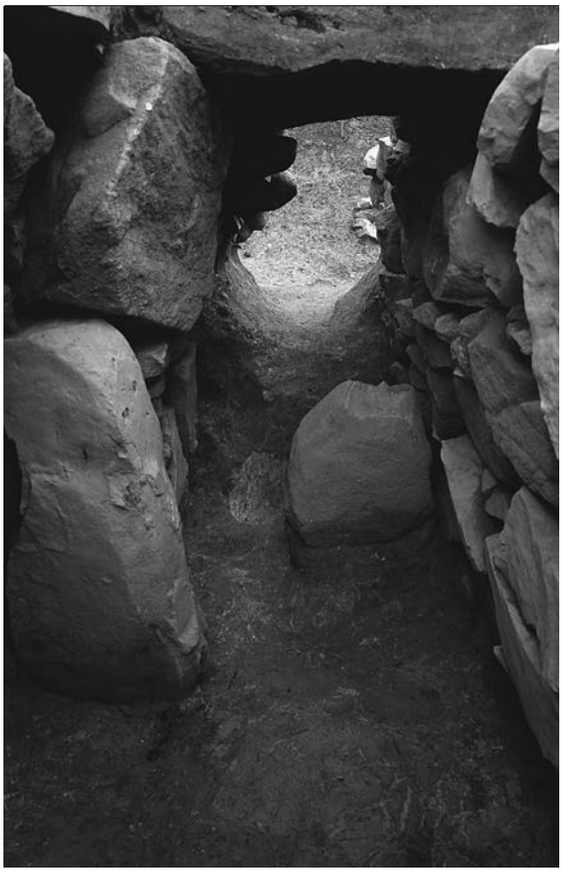


開口部全景（南から）

開口部近景（南から）

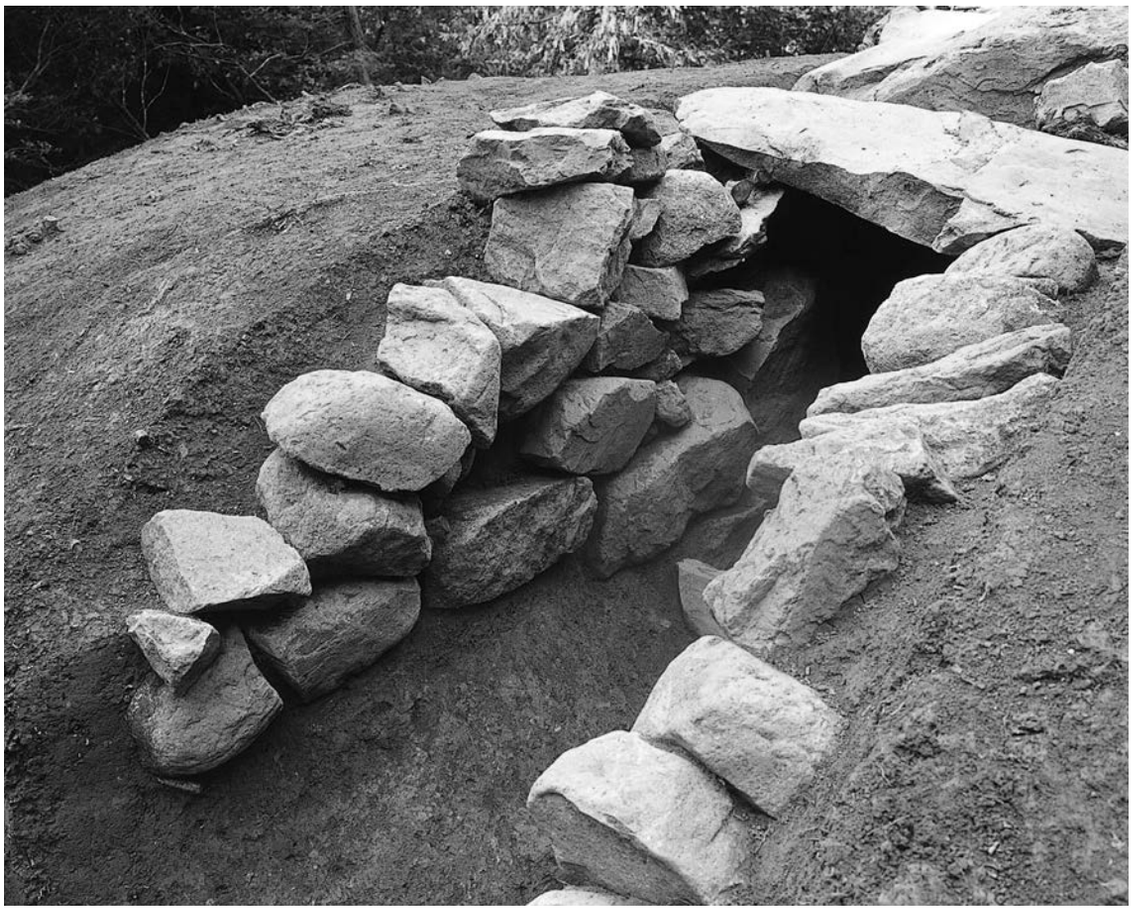
開口部近景（北から）

開口部全景（南東から）



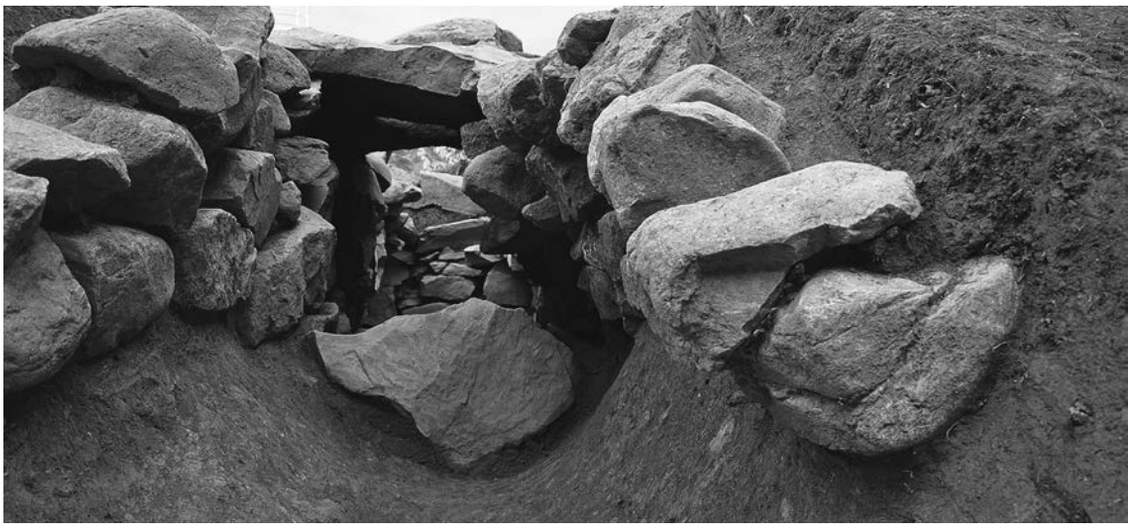
玄室側から見た開口部（北から）

開口部付近　土器出土状況（南から）



開口部西側壁全景（南東から）

開口部東側壁全景（南西から）



開口部と閉塞石（南から）

玄室側から見た閉塞石（北から）

閉塞石俯瞰（西から）

東側壁袖部（西から）

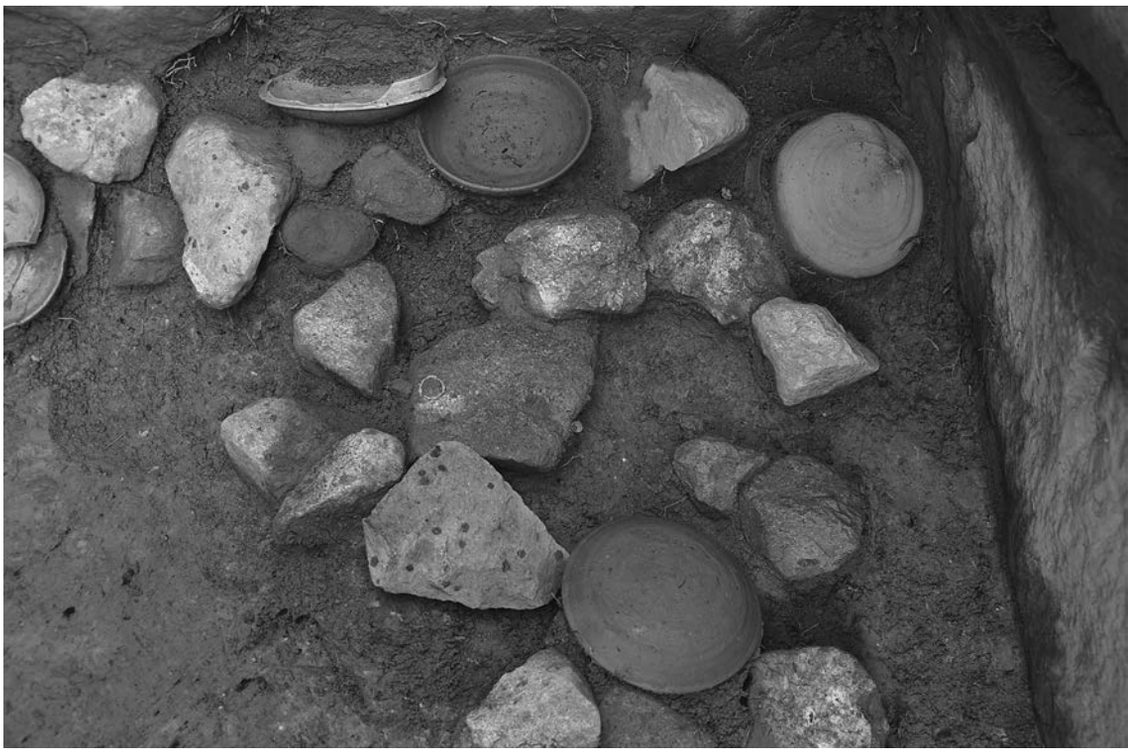
東側壁袖部　立柱石（北西から）

玄室内遺物出土状況（南から）

玄室内遺物出土状況（西から）

玄室内遺物出土状況（東から）

玄室内奥壁付近遺物出土状況（東から）



玄室内北東隅遺物出土状況（南から）

玄室内北東隅遺物出土状況（西から）

玄室内中央部東側壁付近遺物出土状況（西から）

玄室内鉄刀出土状況（西から）

玄室内鉄刀出土状況（北から）

玄室内耳環出土状況（南から）

羨道内土器出土状況（北から）

羨道内土器出土状況（南から）

玄室内 18・19・23・25・27 ～ 29 出土状況（東から）

玄室内 20 ～ 22・24・26 出土状況（北西から）

墳内列石検出状況（南東から）

南側列石（東から）

北側列石（北東から）

墳丘断割り状況（北から）

墳丘南北断面（西から）

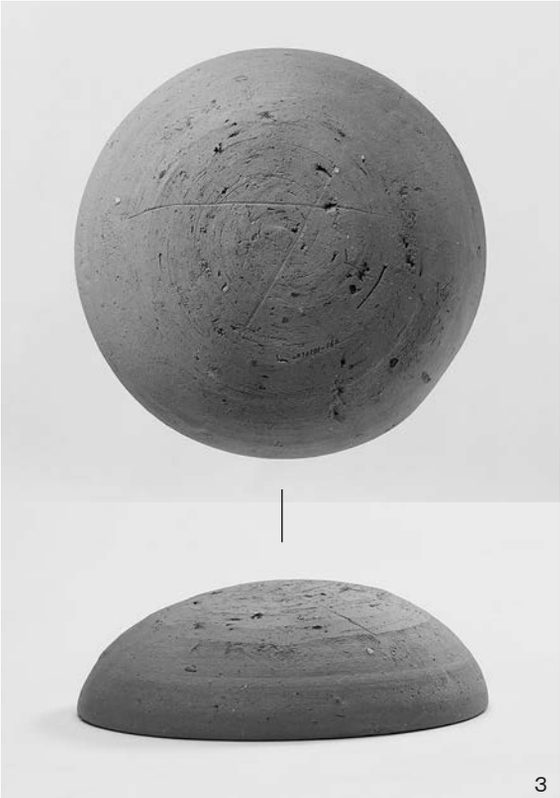
墳丘北側断面（西から）

基底石検出状況（南から）

開口部・羨道部基底石検出状況（西から）

石室掘り方検出状況（南から）

石室掘り方基底部横断面（西から）



1～9：石室内出土土器

10

13

12

11

14

16

17

10 ～ 14・16・17：石室内出土土器

18

19

20

21

27

22

23

25

26

28

18 ～ 23・25 ～ 28：羨道内出土土器

29

30

31

32

34

35

36

37

39

29 ～ 32・34 ～ 37・39：羨道内出土土器

40

42

41

43

44

48

45

49

46

50

47

51

40 ～ 51：開口部出土土器

52

53

54

55

56

57

58

59

60

61

52 ～ 61：開口部出土土器

62 ～ 64・66：開口部出土土器

70

71

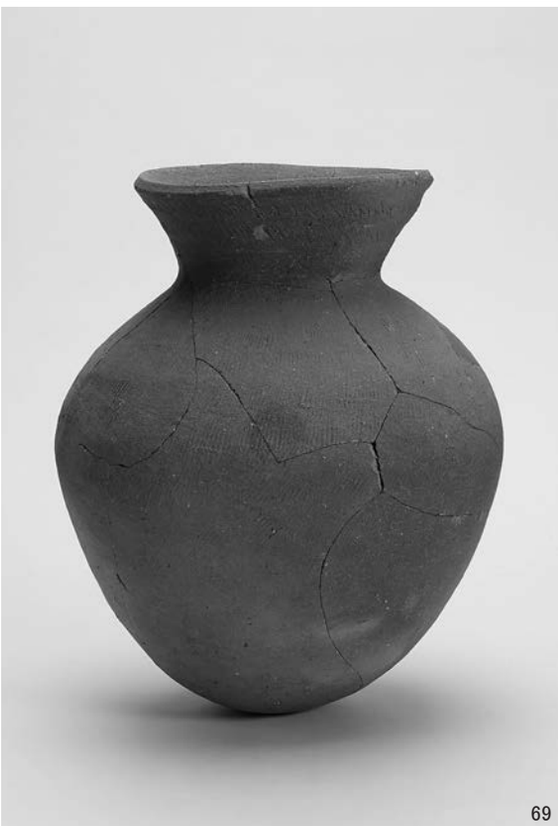
67

68

72

73

74


69

67 ～ 69：開口部出土土器　70 ～ 74：墳丘南西部出土土器

75

76

78

79

80

77

81

82

83

85

75 ～ 83・85：墳丘南西部出土土器

84

86

88

90

93

91

94

84・86・88・90・91・93・94：墳丘南西部出土土器

95

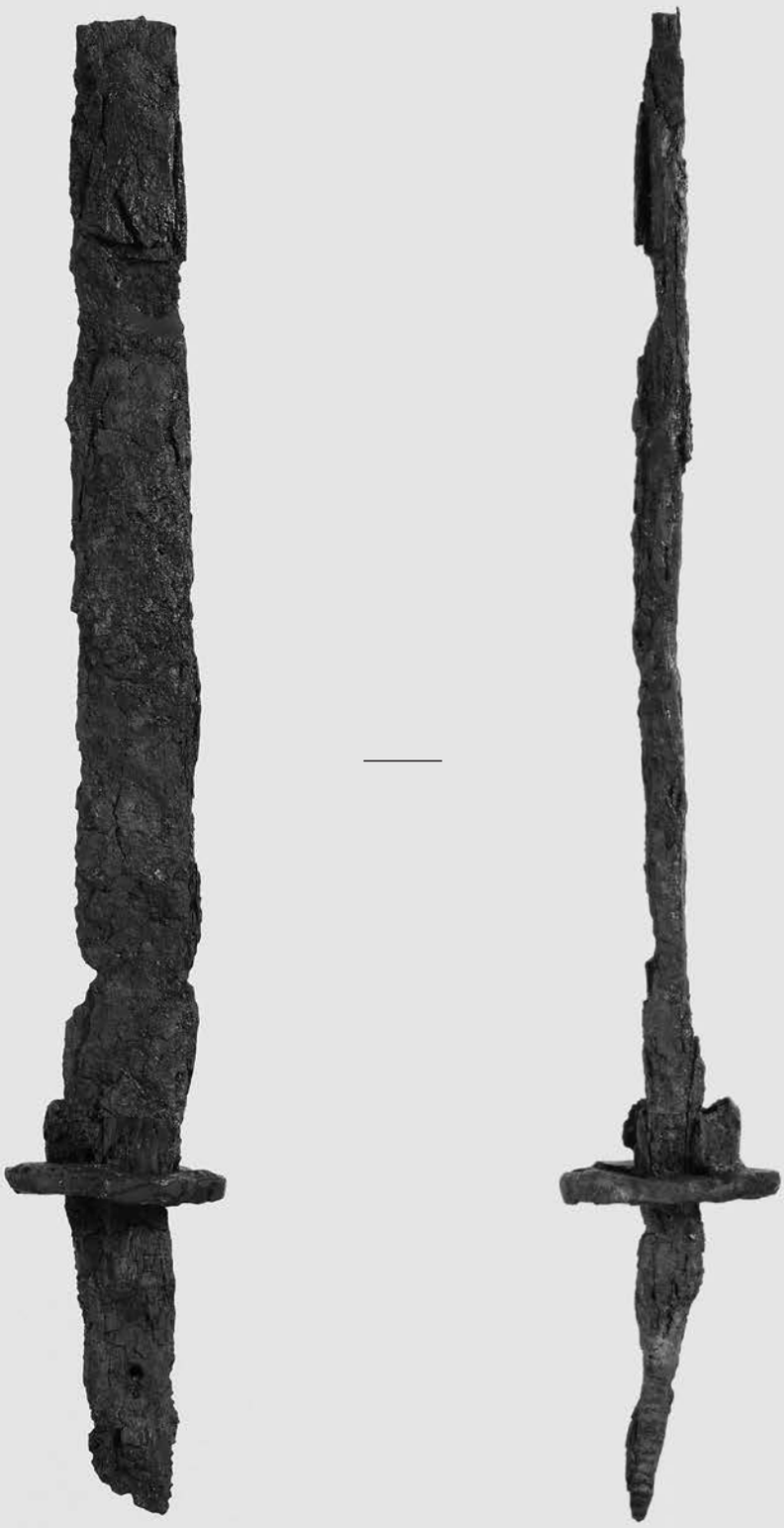
99

96

102

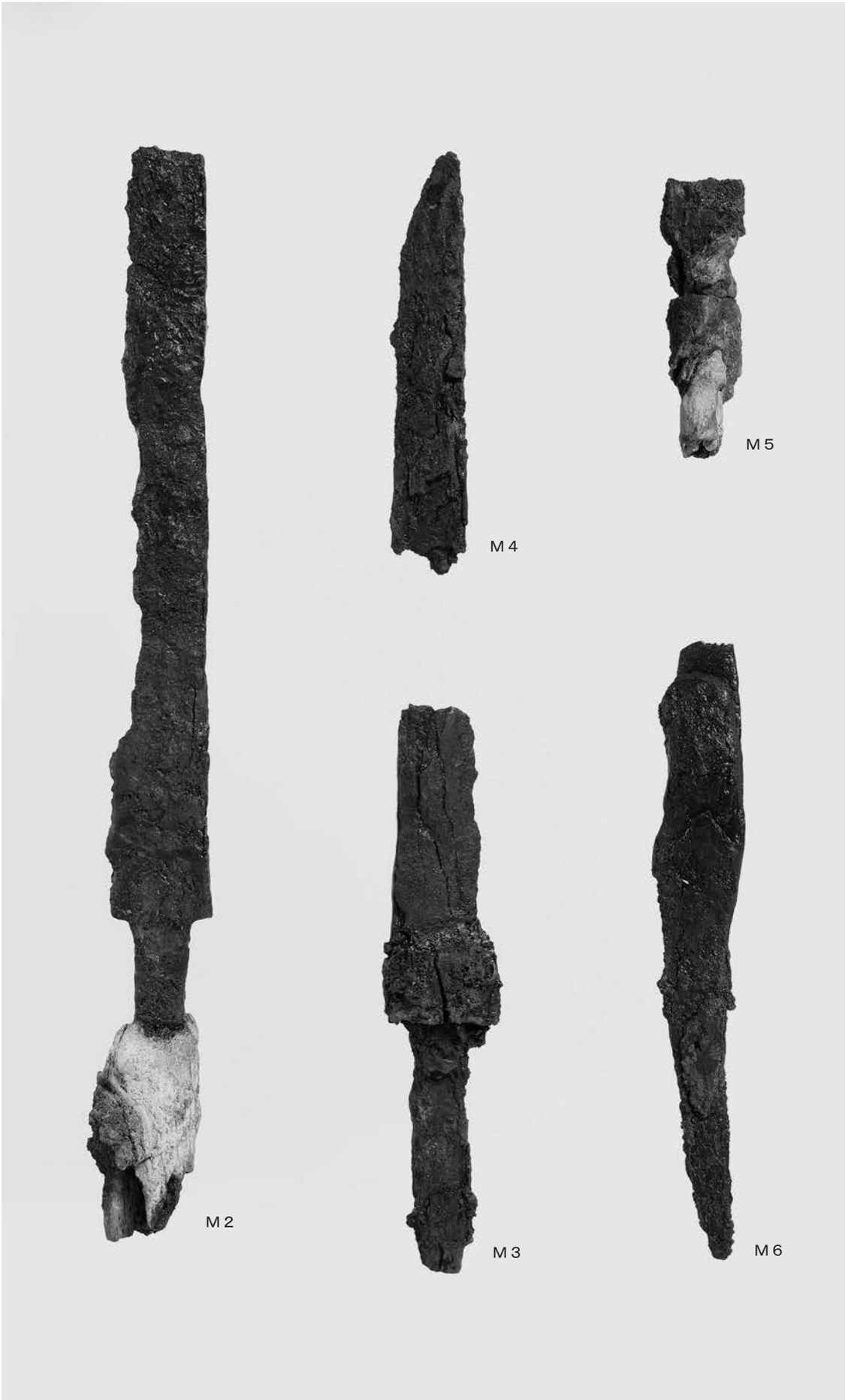
97

95 ～ 97・99：墳丘南西部出土土器　102：石室上層出土土器

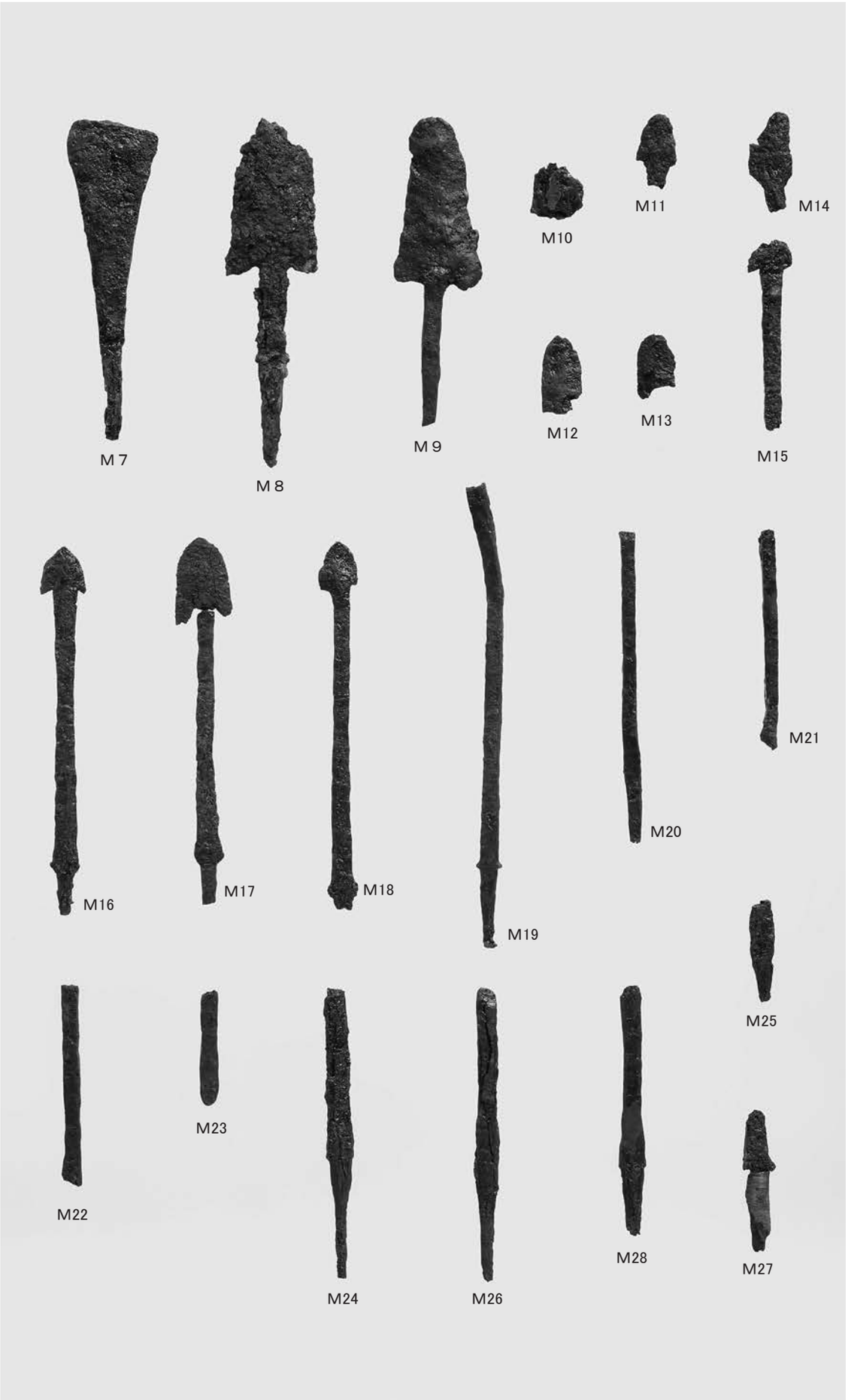


M１

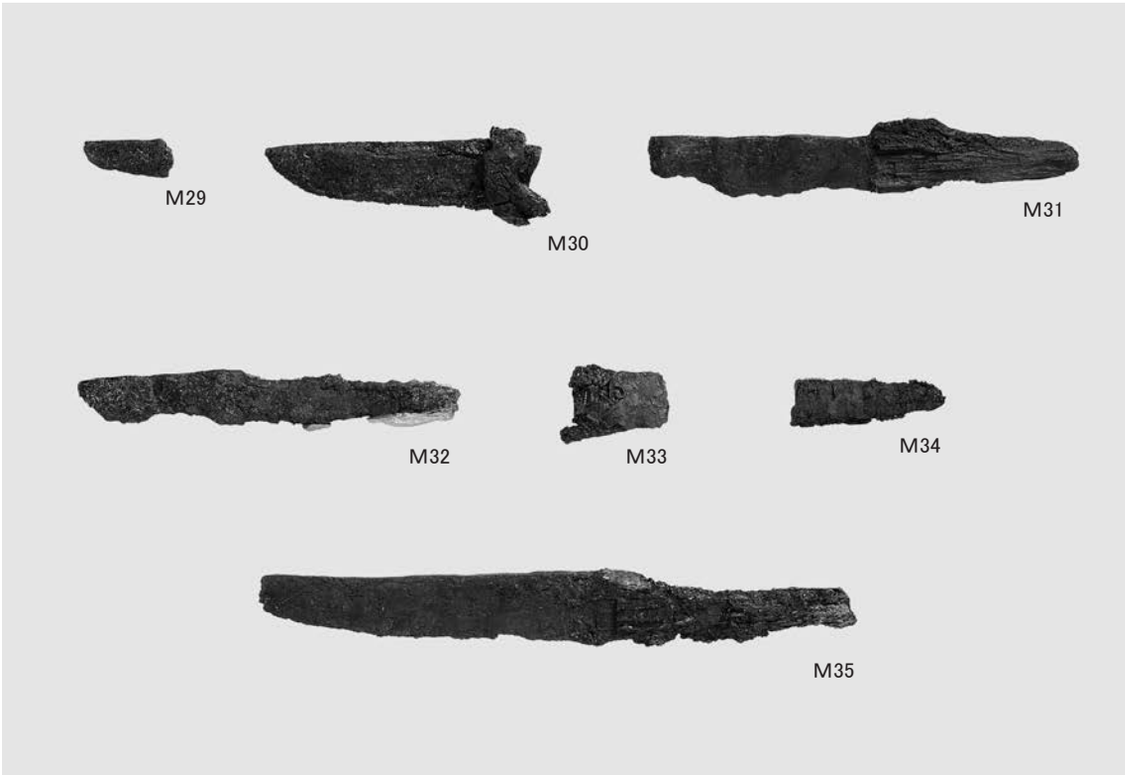
M１：玄室内出土金属製品

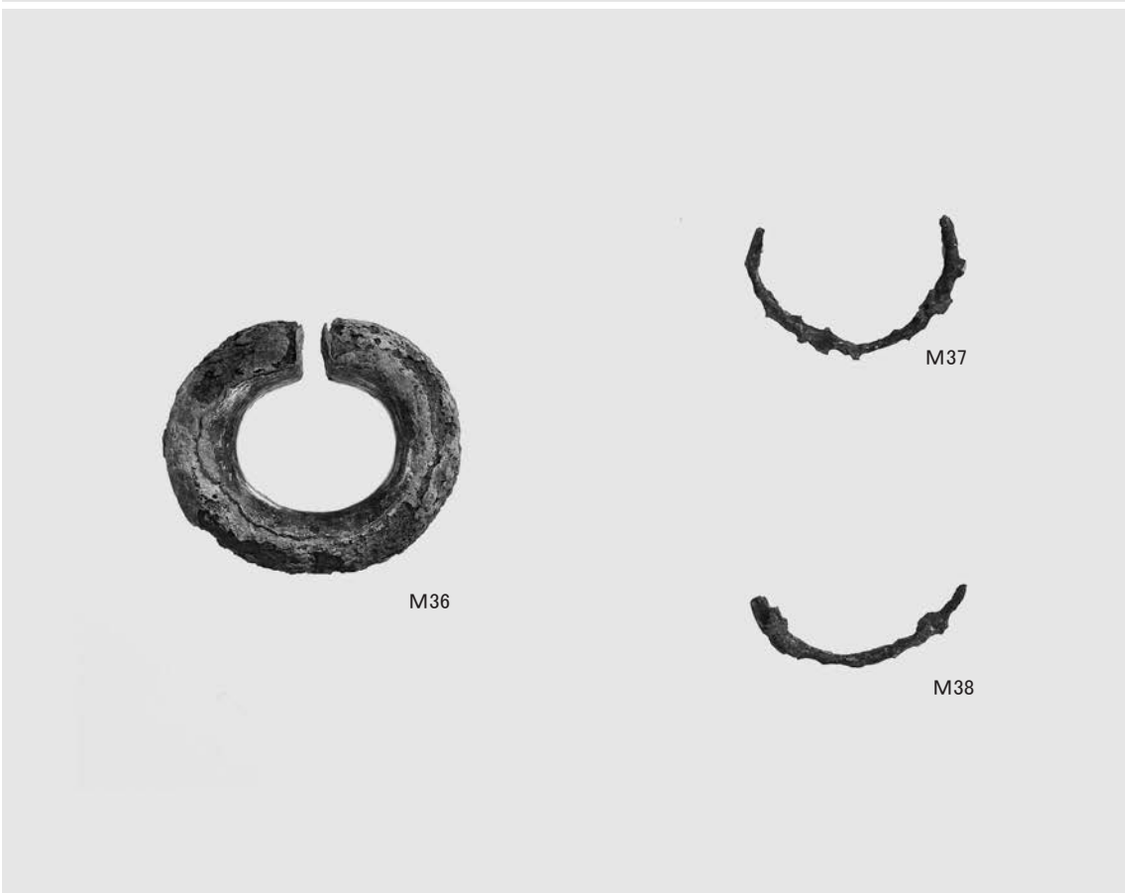


M２～M６：玄室内出土金属製品

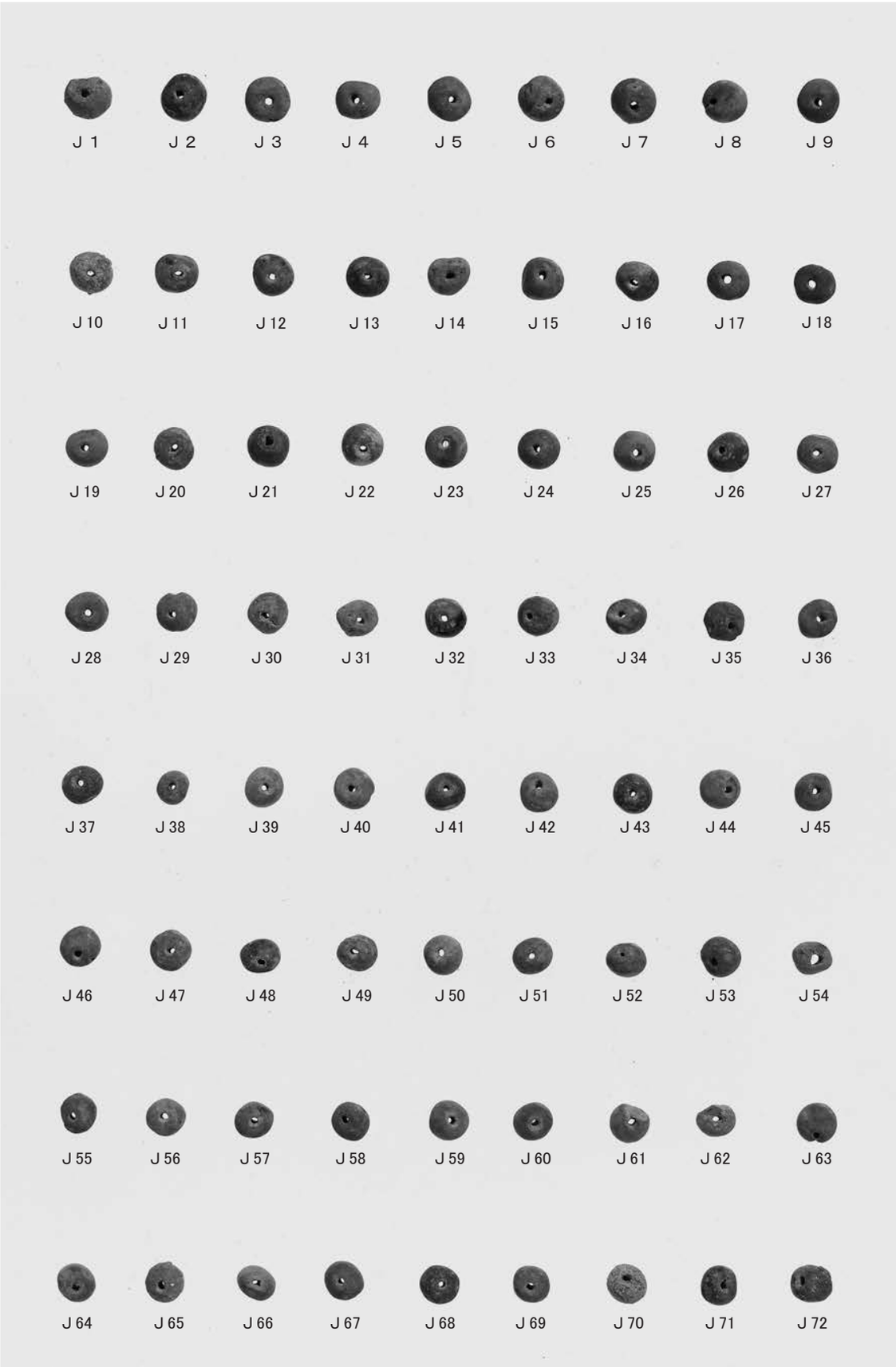


M 7 ～M 28：玄室内出土金属製品

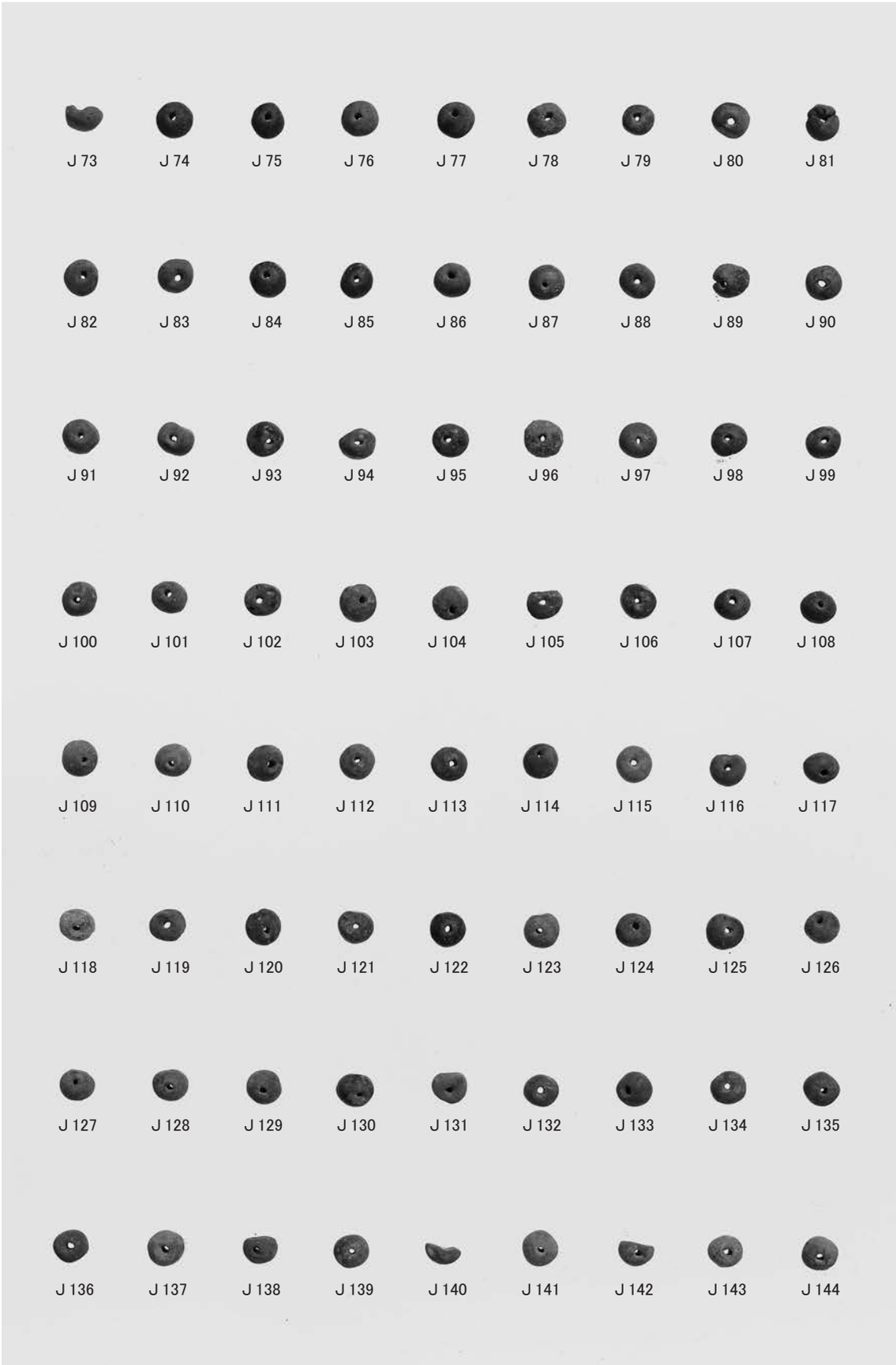




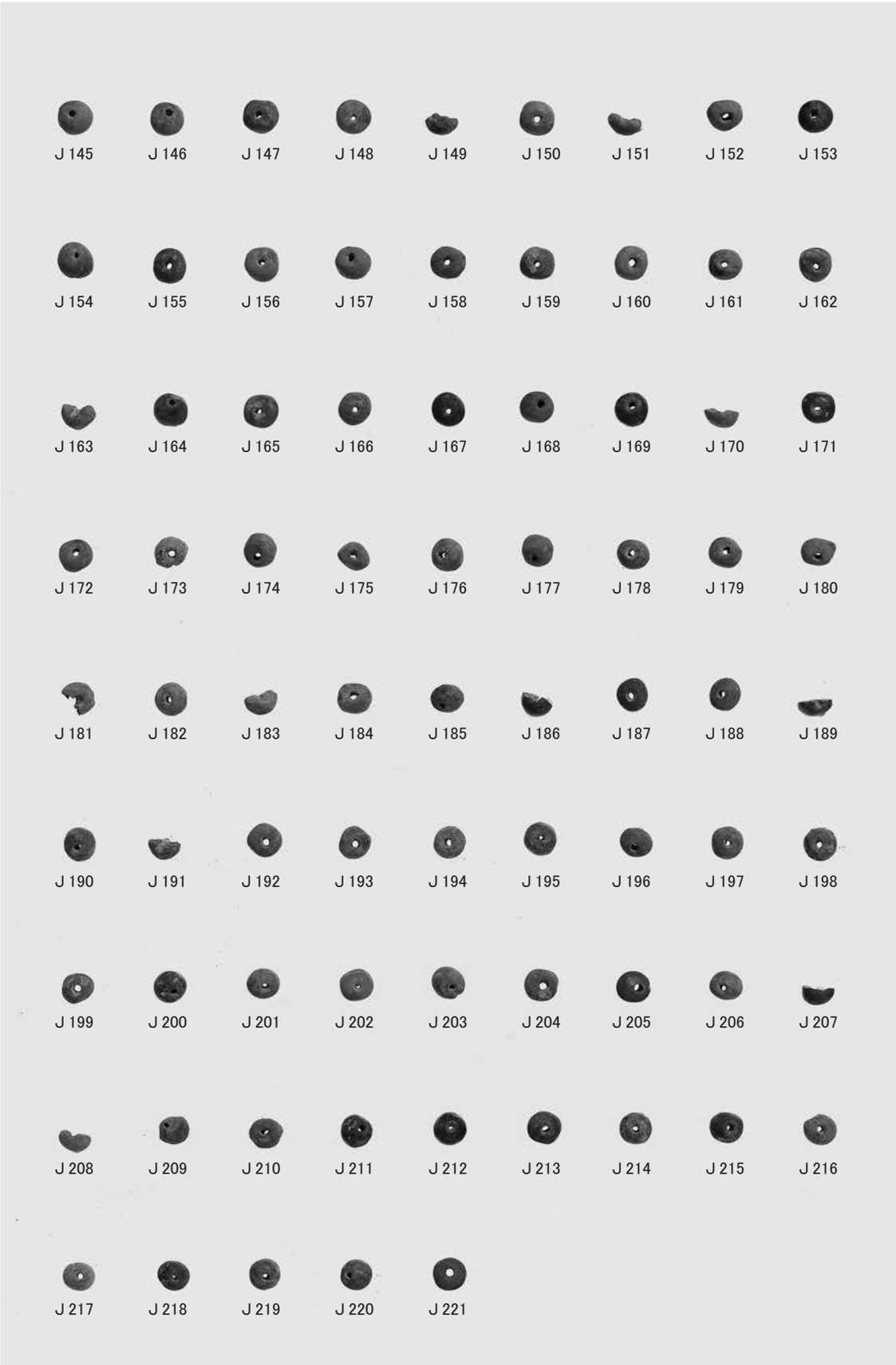
M 29 ～M 38：玄室内出土金属製品



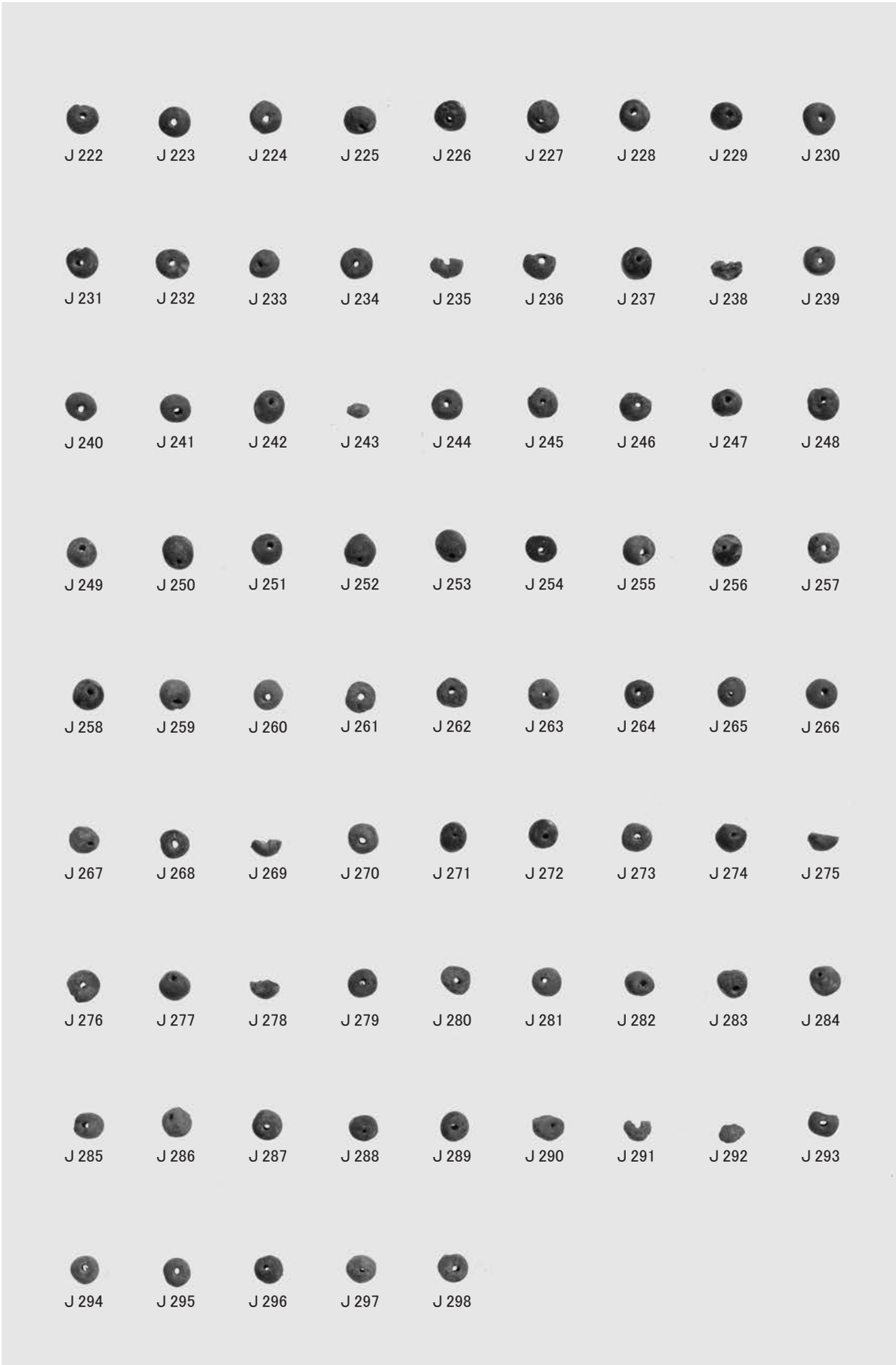
Ｊ１～Ｊ72：玄室内出土土製丸玉



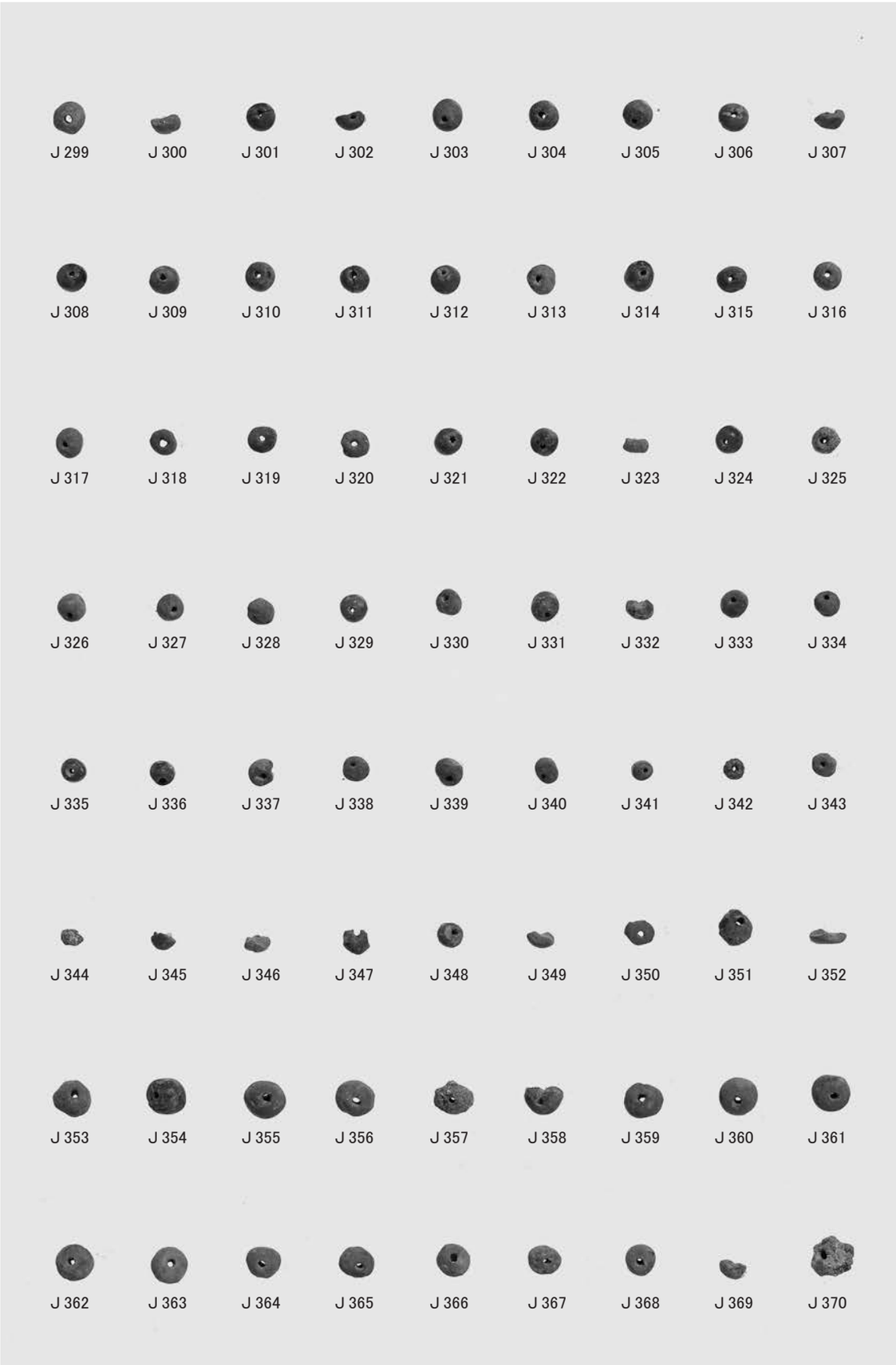
J 73～ J 144：玄室内出土土製丸玉



J 145～J 221：玄室内出土土製丸玉



J 222～J 298：玄室内出土土製丸玉



J 299～J 370：玄室内出土土製丸玉

兵庫県文化財調査報告　第 480 冊

豊岡市

上佐野１号墳

― 一般国道４８３号北近畿豊岡自動車道八鹿豊岡南道路に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

平成 28（2016）年３月 18 日発行

編 集　公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
〒 675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中 1 丁目 1 番 1 号（兵庫県立考古博物館内）

発 行　兵 庫 県 教 育 委 員 会
〒 650-8567　兵庫県神戸市中央区下山手通 5 丁目 10 番 1 号

印 刷　㈱　メ ディ ッ ク ス
〒 676-0805　兵庫県高砂市米田町米田 410 － 1